【キセキ＝シリーズ】

神無月によ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【キセキ＝シリーズ】

【Ｎコード】
Ｎ６１３２Ｚ

【作者名】
神無月によ

【あらすじ】
『不治の病』を患った吸血鬼の少年は、世界列車に乗って余命の旅に出ることにした。
『科学の街』製特殊部隊所属の少年は、日常的に対バンライブを行っていた。
『神秘の体』を有する殺し屋の少年は、息苦しい世界で死に場所を求めていた。
『殺しの罪』を背負った囚人の少年は、地図には載らない監獄の島で生涯を収めようと決めていた。

それぞれの日常は境界の合図もなく壊れ始め、終焉の物語、その渦中へと吸い込まれて行く。

そして……

※この物語は現代風異世界ファンタジーです。つまりは、フィクション。実在する人物、団体、事件、その他、一切関係ありません。

？？？（前書き）

※この物語はモダンチック異世界ファンタジーです。つまりは、フィクション。実在する人物、団体、事件、その他、一切関係ありません。

???

あなたが軌跡を望むなら
歌はいつでも赤く集束して紡がれる
だって　私もソレを陰から望んでいたから

あなたが奇跡を祈るなら
唄はどこでも黒い理由で塗り潰される
だって　私もソレを裏から祈っていたから

あなたが輝石を願うなら
詩は誰からでも白き群像で惑わされる
だって　私もソレを闇から願っていたから

そして　ここは■■■に至る物語
されど　ご覧の通り　始まりではなく
だからと言って　終わりでもない
ただ　ただ　過去と未来に直結した現在

なにしろ　むしろ
真相を知るのは　やっぱり
私と■■■だけなのだろうから

1

とくん、と。

左手の小指に微かな鼓動を感じた。

見ると、そこに燐光のように淡くて儚い輝きを放つ『赤い糸』がある。

幻覚にも似たその現象を目にし、少女は一瞬だけ呼吸を忘れるくらいに驚いた。

瞳を閉じて深呼吸。

瞼の裏に映る不完全な暗闇に身をゆだねると、胸が異常に高鳴っていることに気がついた。

高揚しているのか緊張しているのか、感情の置き場所さえ把握していないのに、自然と握る両手に力が入る。

その手のひらは妙に汗ばんでいた。

再び目を開けるのには、多少の時間が必要だった。

それは何も育まれていないがらんどうの心より、まばらな勇気を一ヶ所に掻き集めるための時間だ。

瞼の奥に視認する広大な闇の中、星屑のように散らばる光を手当たり次第手元に寄せる。

そんなイメージで集まった灯は、少女の小さな両手に収まるくらいちっぽけなものだった。

それでも、彼女が自身の背を後押しするのに、十分な光量が宿っている。

――願わくは、今の『赤い糸』が幻想ではありませんように。

懇願にも等しい想いを抱いて、少女は瞳をそっと開く。

――あった。

左手の小指。

その第一関節に一巻きだけ結びついた『赤い糸』。
それは生まれたばかりの赤ん坊みたいに、たどたどしい脈動を打ちながら少女の指先より虚空に浮遊し、どこかへと流れている。
糸が出現する条件や理屈は分からない。
だが、これまで不吉を象徴とする『黒い糸』ならば、度々発見していた。
覚えている限りでは一六回ほどだ。
その糸がどの方向に繋がっているのかを、『彼ら』に案内するのが彼女の役割だった。
もっとも、せっかく見えた『黒い糸』は、『彼ら』に教えると決まって数時間後に消失してしまう。
だから、『黒い糸』の意味を深く考えたことはない。
また考えてはいけない気がした。
しかし今回、唐突に現れたのは『赤い糸』。
そんな福音の象徴を目で追うのは初めての経験だった。
おそらく劣悪な生活環境のせいだろう。
成分不明の黒いシミがこびりつく灰色の壁と、壊れかけの豆電球。
取ってつけたような洗面所。
天井近くに設けられている、空気を循環するには心もとない小さな鉄格子。
いわゆる独房と呼ばれる場所。
湿気と閉塞感ばかりを孕むこんな粗末な空間にいれば、温色を示す『赤い糸』を拝めない理論も頷けた。
なぜなら『彼女の右眼でしか可視できないその糸』は、彼女と他者を紡ぐ運命的な数字および『血』を素材としているからだ。
そういうルールである以上、『彼ら』に独房で管理されている少女が、外の世界の誰かと繋がるきっかけなど無に等しい。
『彼ら』の目的に沿って偶発的に目撃している『黒い糸』ならまだしも、本来なら赤など有り得ないはずだった。
なのに、どういう因果かこうして奇跡は起きた。

少女の細い小指に巻きつく糸の先には、彼女と『赤で結ばれるべき誰か』がいるのだ。

けれども今次、少女が見取った『赤い糸』はあまりにか細くて頼りない。

横から微風が掠めただけで切れてしまいそうだ。

その上、少女が我が目を疑うように糸を視線でなぞっているうちに、純粋な赤だった色は定期的な明滅を始め、徐々に黒に歩み寄る朱へと変色しつつある。

まるで彼女を急かすみたいに。

ふいに、少女は錯覚に襲われた。

重たい石が腹部に腕を伸ばして、しがみついてきたかのような感覚。

原因はきっと彼女の思考が、大きな逡巡に行き当たったせいだろう。

この小指に絡まる『赤い糸』の先を手繰り寄せたい、という葛藤。

それはある種、成長の兆しなのかもしれなかった。

一〇年間、『糸を感知するための道具』として多くの時間を不衛生な独房で呼吸してきた彼女は、一度だって『彼ら』に逆らった例がない。

反旗を翻すという思想そのものに至らなかったのだ。

これが異常ではなく普通。

常識的な、極めて一般的な生活なのだと徹底的に調教され、少女は灰色の壁の向こう側に広がる世界に、さほど興味を抱けなかった。

ゆえに、『何か行動を起こすにあたって、迷いや戸惑いが生じることもある』といった心理を、道具として生きていた少女が知るはずもなかった。

道具は利用されて当然。

むしろ誰かに使ってもらえなければ存在意義そのものが崩壊する。

だとしたら行動することに疑問なんて感じている場合ではないのだ。

そう頭では理解しているのに、少女はどうしても慣れ親しんだ行動を実行に移せなかった。

今すぐ『彼ら』を呼んで、黒ではなく赤が見えたことを報告しなければならないのに、あたかも前触れもなく現れた『赤い糸』が、彼女の歪んだ常識を内側から打ち砕いたかのように、できない。

そう、少女はすでに決断しかけていた。

『ここから逃げて自由を手に入れよう』という結論を。

もちろん恐い気持ちも強かった。

逃げ切れる算段だってない。

捕まった後のことを想像すると、やはり恐ろしくて足が震えてしまう。

ここから逃亡したりすれば厳しい罰が待っていると、『彼ら』に実体験で教え込まれたせいだ。

恐怖に対抗するために要する勇気の量は、先程用意した分の比では到底足りない。

それに、たとえこの場を奇跡的に凌いだとしても、『彼ら』は地の果てまで追いかけてくるだろう。

無機質な壁の外に寄る辺ない少女には、勝算が少なかった。

この四角い世界で大人しくしていれば自由はないが、安全はある。

待遇は悪いが、生きていられる。

下手なことをしない限り、恐い目や痛い目に遭遇することもない。

そんな選択の前に佇んだ少女は浅く下唇を噛み、しばし利潤とリスクを天秤にかけた。

吟味した上で、決意した。

この『赤い糸』の先にいる、名前も顔も知らない誰かに会いに行くことを。

ふと、これが自由を手に入れるための、最後のチャンスのような気がした。

直感だ。

思い過ごしかもしれない。

だったら、それはそれで構わない。
どうせ後づけのような理由なのだから。
そうして。
生まれて初めて漠然とした自由に恋焦がれた少女は立ち上がり、
施錠部分が腐りかけている独房の扉と向かい合った。
一本道だった未来を自ら切り開くために。
『赤い糸』の先に一筋の希望を願って。

2

目の前で数え切れないほどの群衆と化した人間が、巣に向かってせっせとエサを運ぶ働きアリみたいにごった返していた。

しかし、混雑の流れに秩序はなく、複雑な放射状を描いている。縦横無尽に際限なく入り乱れる人々の動きは、途切れる気配など微塵も垣間見せてくれない。

もしも人間と羽虫くらい極端に大きさに違いのある巨人が、この混沌とした群れを雲の上から見下ろしたら、無数の昆虫が蠢いているようで気持ち悪く思うのだろうか。

そんな取り留めもない皮肉を、ハイク＝R＝セカンドは胸の中だけで述懐した。

「参ったな。人混みは苦手だ」

眉間に不快混じりのシワを寄せながら、ほとんど唇を動かさずに独り言つ。

その囁きさえ自分の耳には届かずに周囲の雑踏に埋もれるのだから、ハイクが不服に顔をしかめるのも頷けた。

真昼の『世界鉄道』駅前は不慣れな者が歩くと、ものの一秒で他人と肩がぶつかる。

それほど多種多様な国籍が、駅構内の界隈には行き交っているのだ。

彼らは一様に携帯端末やら小説やら音楽プレイヤーやら何やら、自ら視覚と聴覚を遮断して前方不注意な状態で進軍しているのに、まるで第三の瞳が額に付属しているかのように人混みの濁流を巧みにすり抜けている。

その闊歩技術は慣れで培ったものなのだろうか。

流れに棹さす彼らを俯瞰的に眼球で追っているだけでも、ハイク

は酔ってしまいそうだった。
（どうして連中は、あんなにも上手く進めるんだろうな）
そこでハイクは切符売り場の方に非難がましい目線を移した。
そこには並ぶ気が星の彼方まで遠のく長蛇の列が展開している。
販売機は何十台も横並びに設置されているが、需要と供給のバランスがまるで一致していない。
誰一人として、しかるべき改善を施すように国に推奨しないのは、この時間帯が限定的に集中して混み合うピーク時だと理解しているからだろう。
ハイクは肩で溜息を吐き、そっと右手を握り締める。
手中に求めたのは、『世界鉄道』の中で最も値段が高い切符の感触だ。
『永久切符』。
どこで下車しても構わないという宿泊ルームつきの無期限切符である。
恐ろしく長い行列の最後尾から、心を折ることなく辛抱強く並び続けた成果。
手に入れるのに苦労した。
あの貴重な経験はできれば二度と味わいたくない。
最初くらい行き当たりばったりではなく調査するべきだったかもしれない、と猛省しても後の祭りである。
（さて、気力もチャージしたことだ。そろそろ行くか）
ハイクは切符を握ったまま前方を見据えた。
いつまでも現実逃避気味に立ち止まっているわけにいかない。
切符を購入した次には、第二の試練が待っている。
駅前のスクランブル式交差点と駅構内の境界線上に、一時的避難をしていたハイクは意を決して一歩前へと踏み出した。
たちまち携帯電話で取引先かどこかと通話中のサラリーマンと肩が接触し、外へ弾かれそうになる。
サラリーマンはハイクに一瞥もくれず、キャリーバックをごろご

ろと引きながら人の波を海水魚のように泳いで消えて行った。
早速、出端を挫かれた気分を味わった。
しかし、ここで膝をついたら負けだ。
ハイクは気を取り直して人々の生け垣へと潜り込む。
目的の改札がどこかにあるはずなのだが、渦の中心では東西南北さえ怪しかった。
さながら樹海の奥地にでもさ迷い込んだ心境である。
コンパスの代用として駅員に訊ねようにも、目にするのは忙しげに擦れ違う人々の頭ばかりで、もはやどこにいるのか見当もつかない。
となれば頼みの綱は案内の矢印だ。
ハイクは人と人の脇を縫うように、『世界鉄道・東大陸南行き』のプラットホームを示す矢印をひたすら追いかけた。
濁流を構築する人の密集度は奥に進むに伴って、いっそう濃厚になっていく。
全神経を鋭敏に働かせ、ゆっくりとではあるが着実に前進する。
急がば回れ、だ。
やがて拙くはあるが、前後左右の不規則な流れでも前進する要領を得てきた。
スタートラインから目的の改札まで、ようやく半分近く進んだところである程度のコツを掴み、ハイクの心にも余裕が生じる。
そんなおり、化粧室のマークが目に留まった。
集中力を限界まで引き上げていたハイクはこれ幸いに、一休みという名目で男子トイレに立ち寄った。
中には誰もいなかった。
外ではあれだけの人間が溢れているのに、青いタイル張りの空間だけが時流に乗り遅れたかのように乖離していて、奇妙な感覚に陥る。
（まあ、そういうものなんだろう）
諸事情によって少しばかり『一般常識』に疎いハイクは勝手にそ

う納得してから、洗面所の鏡に顔を向けた。
そこでやや疲弊した様相の自分と目が合う。
くせっぽいが、清潔を保つように整えた黒髪。
くっきりとした二重瞼。
漆黒の眼球。
色は白くても健康さを伴う肌。
年齢は一七だが、顔立ちはそれより若干大人びている。
中肉中背がまとう衣服はとても身軽だ。
赤と黒の細かいボーダーラインが入った半端袖のTシャツの上に、ダークブルーのフードつきパーカー。
下はグレーのサルエルパンツとショートブーツ。
装飾品は素朴さが意外とお洒落な風味を醸し出している腕時計のみ。
これから『世界鉄道』に乗って目的のない、さすらいの旅に出るというのに手荷物のバッグ一つ持っていない。
旅行に必要な日用品くらいなら『列車内の設備』で購入できるとは言っても、ここまで手ぶらな乗客も珍しいだろう。
ハイクがこれから乗車する予定の『世界鉄道』という路線は、基本的に庶民が乗れるような交通機関ではなかった。
政府のお偉いさんや世界的な著名人しか乗車できないとか、そういう地位の格差を内包する嫌な話ではない。
もっと単純に金銭的な面で一般人が手を伸ばしにくいのだ。
その代わり、切符を購入できるだけの金さえあれば誰でも乗れる。
――この惑星の六割を占める海域を分かつ、東大陸と西大陸。
そんな空と海と陸の領域を持つ世界を、国境に関係なくレールで繋いでいるのが『世界鉄道』だ。
街から街、国内から国内単位の移動ではなく、国内から国外への有意義な移動を旨とする旅客のための列車。
ただし歴史はまだ浅い。
現時点では東大陸にしか路線も展開されておらず、西大陸とは結

びついていない。
しかし、噂によれば海の上を線路が走る科学技術も、すぐそこまで完成しているらしい。
いずれ『世界鉄道』が世界を結ぶのも時間の問題なのかもしれない。
ハイクが与り知らない大人の事情が解決されれば、の話だが。
ハイクは鏡の中の自身から視線を逸らし、腕時計を確認する。
乗車予定の列車が出発するまで、しばしの猶予がある。
昼時ということもあって空腹は感じていた。
情報によれば列車内には、有名なシェフが運営する高級レストランも多く導入されているようで、味も一流なのだそうだ。
上級なご馳走にありつくには、まず改札である。
目下の懸案は命の次くらいに大切な手元の切符を失くさないよう、そこへ辿り着くこと。
あの荒波のような人の流れに戻るのはいささか憂鬱だったが、その後に待つ世界の想像が眼前に立ち塞がるデメリットさえ中和してくれる。
（踏ん張り時だな。ここさえ乗り越えれば天国が待っている）
天国が、待っている。
意図せず思ったその例えに、ハイクは僅かな苦笑をもらした。
（確かにおよそ一年後に待っているのは天国……いいや、地獄だろうな……）
そんな考えを拭い捨てるように軽く頭を振る。
ハイクは両手を握り締めながら、一念発起して手洗い所から出た。
そして――
「何、だ……？」
人間たちは消えていた。
静寂である。
互いの足りない部分を補完し合うみたいに、あれだけせめぎ合っていた人々の姿が、駅構内から忽然と消失していた。

駅員もいない。
改札も電光掲示板も駆動していない。
人混みを苦労して進んでいた自分の姿が馬鹿馬鹿しくなるほど、目の前は空虚で異様なしじまに塗り変わっていた。
それこそ数百人単位の大規模な神隠しが発生したかのような光景。
いや、むしろこれはハイクの方が神隠しの対象となったのか。
どちらにせよ、絶句ものの非現実的な状況に遭遇したハイクは、
「……はあ、巻き込まれるのは苦手だ」
重い溜息と共にそう呟いた。
彼の淡泊な反応は、多くの人間が駅から消えた異常事態にも劣らないくらい、現実味に乏しかった。
つまり、
「貴様……何だ」
「なぜ我らの結界内に部外者がいる？」
「その上、明らかに同胞ではない。何者だ。唱えよ」
つまり、完璧な無人ではなかったのだ。
あくまでも『人がいない』という観点を詭弁の主軸にするなら、確かにこの場に人間は不在している。
そう。
ハイク自身を含めて、彼の視界に人はいない。
「ナキ＝エクイルド」
名乗ったのは、『彼ら』に対して敵意の類を抱いていないと伝えるための表明だった。
もっとも、口にしたものは適当に思いついた偽名だが。
ハイクはパーカーのポケットに両手を突っ込み、片足重心という締まりのない体勢で構えていたが、視線だけは注意深く『彼ら』に注いでいた。
数は七体。
全員が全員、昨今の近代的な人間社会の模様に対して、ひどく浮いた出で立ちだ。

ポンチョに近似した布を繋ぎ合わせることで独特加工した民族的衣装は、世代、時代の違いというよりも、種族、生きている世界観の相違を印象づけ、人工物ばかりのこの場にはどうしても馴染めない異質の雰囲気を押し出していた。

そして、ハイクの私見は正鵠を射ている。

とは言え、外見はハイク同様、人のフォルムに準じたものだ。

頭と髪があり、肌色の顔と表情があり、胴体に付属する手足があり、言葉を話し、言葉を理解するだけの思考と思想を持つ。

だが、肉食獣にも似た獰猛な瞳と銀髪が、決定的に彼らが人ではなく『彼ら』であることを明かしている。

「個を識別するための呼称など訊いていない」

一番手前にいた男が威圧的な口調で言った。

リーダー格だろうか、人間の外見を基準にするならば二〇代後半頃に値する容貌。

尖った目つきの内部に獣のそれが潜んでいる。

「我らが回答として貴様に望んだのは、貴様個人の無価値な名称ではなく、所属名だ」

もはや『人間だ』と言って押し通せる空気でもない、とハイクは判断した。

「別に故意的に割り込んだわけではないんだが。俺はたまたま居合わせただけだ。お前たちが界隈の探索を怠ったせいだろう」

「はぐらかさず素直に質問に答えたらどうだ、吸血鬼」

ハイクごと空間を蹂躙する勢いで一気に肥大した殺気。

視認できない無数の刃物が全方位から飛来したかのように、ハイクの全身がぴりぴりと痛んだ。

視覚や触覚を介した情報として、痛覚にまで影響を及ぼすほどの圧力。

単なる霊長類では放出も容易ではない超自然的な殺意。

だが、七つ分の重厚な敵意を照準され、針のむしろに座ったはずのハイク当人は臆する風でもなく、相手を小馬鹿にするように肩を

すくめた。
「穏やかではないな。これだから『略奪者』は苦手だ」
「貴様、我らを愚弄するつもりか」
「いいや、そんなつもりはない。気分を害したなら謝る。悪かった」
ちょっとした挑発に反応して手前の男が双眸を凄めたので、殊勝な態度とは言い難いが、ハイクは素直に謝罪を口にした。
「というわけで、ここから早急に出してくれないか。俺はお前たちの儀式だの規律だの血生臭い前時代的な掟だの戒律だの、そういうのに干渉するつもりはないんだ。また詮索するつもりもない。そもそも興味がないからな」
嘘ではない。
ゆえに、彼らの射抜くような眼差しからハイクは目線を逸らさなかった。
「つまるところ単なる旅鳥なんだ。無所属のな」
「なるほど、流れの吸血鬼か」
ハイクの様相から納得したのか小さく頷く男だったが、彼の口からハイクが期待した通りの言葉は返ってこなかった。
「しかし、残念ながら見逃すわけにはいかない」
「ああ……もしかして、この状況は部外者が目撃したらまずいシーンだったのか。ちなみに俺は口が堅い方だ」
「この場は我らにとって誇りを取り戻すための計画、その一端だ」
その単純かつ自己中心的な返答に対し、ハイクは呆れ気味に鼻で笑った。
七つ分の視線が鋭さを増すことにもお構いなしに、吸血鬼の少年は粋なジョークでも言い出しそうな口調で、
「おいおい、よしてくれ。この場面に俺が居合わせたのは、そっちの不備だろう。それはお前たちの責任だ。自分たちの失態によって生じた不利益を、他人に押しつけないで欲しいものだが？」
「ごもっともだ。非はこちらにある。正論だ。弁解するつもりは毛頭ない」

「だろう？」
ハイクは表面上友好的な笑みを浮かべたが、内心では渋面を作り舌打ちをしていた。
（開き直ったか。だから、言葉で解決できないことは苦手だ）
男は一歩前に踏み出して言う。
「だが、あいにく我々は自らの非を認めた上で、貴様を糾弾できる権利がある」
「やっぱり、そうなるのか」
「囲め」
男の端的な指示に、周りの同胞たちが動き出した。
獲物を追い詰める獣のような挙措で、扇状に陣形を組んでハイクを包囲する。
「問答無用、か。今の俺は争いとか好まない平和主義者なんだが」
ハイクはまたぞろ溜息をこぼした。
同時に自身が置かれた状況を把握するべく、視界から有益な情報を汲み取ろうと抜け目なく周囲に視線を配る。
伏兵の存在を確信していたからだ。
それも、おそらく目の前の集団よりも厄介なのが、最低でも一人。
（しかし、人狼がこんな都会にまで出っ張って一体何をやってたんだ？）
そこで初めて疑念を抱いたハイクの目に留る物体があった。
（あれは……）
一〇歳前後の小柄な少女が地べたに横たわっている。
その身長と同等まで伸び切った黒髪が特徴的で目を引いたが、容姿ははっきりと見えない。
人狼たちがハイクの視線を憚るように、立ち塞がっているからだ。
意識があるのかないのかも、ハイクの位置からでは確認できなかった。
（ますます面倒そうな場面に出くわしたな。仲間割れか？　どうせ規律だの何だの絡んでいるんだろうが）

「なあ、その子、ケガをしているようだが手当はしなくていいのか」
ハイクは適当に思いついた可能性を脳裏に並べてから、憶測でそう発言してみた。
実際に負傷しているかどうかは分からない。
しかし、手前の人狼はさらに憎悪を込めた目つきでハイクを射抜き、警戒と威嚇を含んだ低い声をあげた。
「貴様には関係のないことだ」
「そうか。まあ同感だ。内部事情をどこの馬の骨とも知れない吸血鬼に、おいそれと言うわけにはいかないだろう。……なあ、どうせならこのまま互いに無関心を貫かないか？」
「それとこれとでは話が別だ」
人狼側は断固として意見の姿勢を変えないつもりらしい。
ハイクはやれやれと言わんばかりに、かぶりを振って嘆息した。
「人狼部族には民族的な価値観から、頑固者が多い印象を持っていたが、その偏見はあながち的外れでもなかったみたいだな。まさか、ここまで融通が利かないとは予想以上だ」
「黙れ、無法者。衝動のまま人の血を無差別に食い散らかすバケモノが」
「大昔のことを言ってくれるなよ、四足獣。現代の吸血鬼は穏健だ。人の血なんて吸わなくても正常に生きていける」
ハイクの言葉を最後に、それ以上の言い合いは交わされなかった。
本当は双方ともに最初から――相手の正体に気づいたその瞬間から――理解していたのだ。
吸血鬼が放つ言葉は。
人狼が放つ言葉は。
両者の耳には届いても心には響かないことを。
人々が唐突に消えた無音の駅構内で、ただ人外の存在同士が正面から睨み合う。
互いに合図など待つような間柄ではない。
そんな義理など相手に持たない。

好きなタイミングで攻撃に移る。
（動く）
そう予兆したハイクはパーカーのポケットから両手を出し、躊躇なく瞼を閉ざした。
刹那の暗闇を体感し――開ける。
瞬きという一瞬で、ハイクの瞳の色は変わっていた。
漆黒から血が滲むかのような朱眼へと。
同時、ハイクを囲む形で三日月型の陣営を展開する人狼たちが、凶暴な牙を剥いた。
最も前線にいた人狼が姿勢を低く落とし、爪を立てる要領で五本の指を開く。
極限まで縮めたバネを解放したような瞬発力で、地面を蹴り飛ばし跳躍する。
その人狼に引き続き、五体の狼が同じ構えから一斉にハイクに飛びかかった。
彼らは空中で器用に身を捻り、恐るべき回転速度を得たドリルと化して突貫してくる。
それに応じるハイクは無言のまま、パーカーの内側に右手を滑り込ませた。
（――人狼、か）
驚異的な身体能力を有し、五感は獣以上の感知力を備えている彼らは、けれど人間が映画や小説で描写するように、あからさまな銀狼化現象（イカンスロープ）を起こさない。
せいぜい臨戦態勢時に瞳孔が縦のスリット型に変じたり、もともとは黒の髪が銀に変色する程度のもの。
その外見の変態（シフト）から別名『銀狼（ラ）』とも呼ばれたりする。
彼ら人狼の特徴は『人型』という見かけに寄らない身体能力だ。
コンクリートの壁を片腕で粉砕する圧倒的な怪力と、自らの残像すら置き去りにする移動速度。
その両方を兼ね備えた人外種族相手に、生身で立ち向かえば人間

だろうと吸血鬼だろうと、まず勝ち目はない。
（だからと言って、それが無敵というわけでもないが）
吸血鬼ハイク＝R＝セカンド。
彼が『血のような朱色に塗り替わった両目』で視認している現在進行形の世界は、その全ての速度がスローモーション化していた。
理由は開眼した血色の双眸。
吸血鬼の特殊能力――瞳術だ。
吸血鬼という人外種族は、人狼と違って身体面は人のそれと大差がない。
寿命や外見の老い方さえも、現代の吸血鬼は人間とほぼ同等である。
古代では、二〇〇の年月を生きる吸血鬼も『若者』という評価が吸血鬼たちの共通認識だったが、今では一〇〇歳生きたら長命とまで言われるくらいだ。
これは、彼ら吸血鬼が『過去の事件』を経て教訓を活かし、人類社会に適応するために、独自の種族的な進化――あるいは退化――を年月をかけてゆっくりと遂げた結果である。
伝承によると、ハイクたち吸血鬼は十字架や日光に弱く、鏡にも映らないバケモノとしてセンセーショナルな要素で語られているが、実際は異なる。
古今東西の吸血鬼は日中も堂々と街中を出歩くし、先程のハイクのように鏡にだって姿が映る。
無論、不死身でもない。
聖別された銀の弾丸だろうと、軍人が扱う量産品の弾薬だろうと、銃火器で心臓を撃たれれば吸血鬼だって死ぬのだ。
見た目だけではなく、細胞レベルで人に近づくような種族単位の変化を続けている吸血鬼は、それでも過程で失わなかった能力がある。
それが吸血鬼を吸血鬼たらしめている『吸血による同胞の量産』と、瞳術だ。

その二種類の特殊能力だけが、現代吸血鬼のＤＮＡ内部に色濃く残っている。

おそらく、この特異点は次世代の吸血鬼たちにも受け継がれて行くのだろう。

そして、そんな吸血鬼の遺伝子情報を有するハイクが開花した瞳術は、『可視する世界をスロー再生する』というものだった。

現実世界（リアルタイム）そのものに物理的干渉を引き起こしているのではない。

時間が流れる速度はあくまでも一定だ。

吸血鬼の目が朱に染まった程度で、科学者がさじを投げるような自然法則の崩壊が発生しているわけではなかった。

ハイクの瞳術で変化するのは、彼の動体視力と言えば分かりやすいだろうか。

ハイクの視認する世界の動作が緩慢になって見えるのは、彼の体感的な問題であり、時間が引き延ばされているように感じるのは錯覚に過ぎないのだ。

現象的にはスポーツ選手などが体験するという、ゾーンやフローに近いかもしれない。

その証拠に、六体の人狼が銀色の風となって突撃してくる速度だけではなく、ハイク自身の所作もスロー世界の中ではゆったりとしている。

思考の回転速度だけが、スローモーション化した世界に追尾できるのだ。

この瞳術は行使すると目の色が朱に塗り替わる影響なのか、ハイクが知覚する光景の色彩を透明な赤にする。

視界は血の色に曇ってしまい良好とは言えないのだ。

それに、いくら眼球の動きと思考が人狼のスピードを追い抜いていても、体がついてこなければ力は意味をなくすだろう。

だが、そこは人間サイドの進化に傾向した人外種族。

足りない速度は人類の武器で補う。

ハイクはパーカーの下に装備するショルダーホルスターから抜き

出した、黒金の回転式拳銃――リボルバーを右手のみで構え、亜音速で肉薄してくる人狼に向けて容赦なく撃った。

機構はダブルアクション。

引き金を絞ることで撃鉄が自動的に起き上がり、銃口から銀色の鉛が飛び出す。

人狼の移動速度は脅威だが、ハイクのリボルバーから発射される弾丸の飛翔速度には劣る。

対敵時の距離が一〇メートル以上離れていたことも幸いした。

どれほどリボルバーから放つ銃弾が人狼の速度を凌駕していても、引き金を絞らなければ当然ながら火は吹かない。

戦闘開始時の距離が近すぎたら、発砲以前に彼らの強靱な体当たりを食らって、体がばらばらになっているところだった。

レンコン状のシリンダーに装填できる弾薬の数は、六つ。

現段階でハイクに突撃してきている人狼の数は、六体。

そして、ハイクが人差し指で引き金を操作した回数と、手首に軽い反動を受けた回数も、六回。

くぐもった発砲音がスロー映像の中で炸裂し、遅延する空気を震わせた。

銃口から虚空にのびた六つの弾道はハイクの思惑通り、忠実な直線を描く。

その軌跡の全てがハイクを裏切らないまま、竜巻じみた回転で向かいくる人狼の肉体へと綺麗に吸い込まれる。

銃器の扱いを一通り訓練したハイクにとって、目で追える標的に銃弾を撃ち込むことなど造作もないのだった。

（しかし、相も変わらず気味が悪い世界の見え方だな。この瞳術による恩恵は苦手だ）

あまり自身の瞳術効果を好んでいないハイクはこれ以上、能力を使い続けるのは無意味だと判断した。

無意識に行っている瞬きよりも、少しだけ長い意識的な瞬き。

すると、朱に染まっていた世界の映像があらゆる色彩を取り戻し、

本来の時間速度が彼の体感に回帰した。
見れば、一発ずつ急所を撃たれた人狼たちが、ちょうど空中で大きくバランスを崩したところだった。
摩擦による慣性停止は期待できず、彼らは地面で激しくきりもみしながらハイクを巻き込む軌道で転がり出す。
しかし、ハイクはスロー世界でその被害に遭わない位置を見極め、すでに移動を完了していた。
山の上から急角度で転がり落ちてきたかのような勢いで、地べたを何度もバウンドする六体の人狼が、吸血鬼の両サイドを通り抜けた。
鎮静。
ハイクはそれらの惨状を涼しげな表情で一瞥し、銃のラッチを引いてシリンダーのロックを解除した。
スイングアウトで空薬莢を排出する。
内ポケットから予備の弾薬を取り出し、慣れた手つきで再装填完了。
「人狼は現代の吸血鬼をなめすぎだ」
数メートル後方で苦しみうめく人狼たちを無視し、ハイクは前方に銃口を向けた。
照準した先に中性的な風貌の人狼がいた。
少年か少女か分からない。
長身で落ち着いた佇まい。
慎重派なのか、その人狼だけが一斉襲撃に加わらなかった。
「あなたも知らないわけではないのでしょう？」
人狼はどこか人形的な口調で唇を動かした。
声質からして少女かもしれない。
「私たち銀狼が、あなたたち吸血鬼に持つ感情を」
ハイクはリボルバーの引き金に人差し指をかけたまま、相手を疑わしそうに観察する視線を送り、小さく顎を引いた。
「もちろんだ。お前たちからしたら散々だった話だろう。同情はす

る。だが、大昔のことで俺に因縁をつけられても困る。これは八つ当たりだ。俺自身はお前たち人狼に何も危害を加えていないんだからな。売られた喧嘩なら正当防衛のため甘んじて買うが、こちらから売る気は毛頭なかった」

「平行線ですね。それなら、誰が責任を取ってくれると？」

「責任？」

ハイクは首を傾げた。

「私たちは、もうこういう風にしか生きられないんです」

何を言っているんだ、こいつは。

ハイクがいよいよ胡乱に目つきを細めた時、

「皆さん、まだ動けますね？」

後ろで人狼たちが体を起こす気配があった。

ハイクは無意識に舌打ちする。

立ち位置が悪かった。

前方と後方を、リボルバー一丁では対応し切れない。

両サイドを視界に入れるようにハイクが体の向きを変えると、

「撤退です。ここは出直しましょう」

と、人狼の少女が言った。

賢明な判断だ。

人狼は個より集団を優先する特性がある。

手負いの仲間をこれ以上、戦闘させるわけにはいかないのだろう。

向こうもハイクの射撃技術に気づいている。

いかに人狼と言えども、不死ではないのだ。

ハイクとしても彼らが引き下がる姿勢を見せてくれたのは、ありがたかった。

のだが、ハイクは人狼の少女をわざわざ引き止めて、

「おい、荷物を忘れていないか？」

顎をしゃくって言った。

吸血鬼の視線に注がれているモノを、人狼の彼女も視界に収めた。

その眼差しには憎悪と侮蔑が籠っている。

まるで吸血鬼を目にしている時と同じ眼光。
「ああ、ソレならあなたに差し上げます。腐ってもこれが流儀ですから。戦利品ですよ。一旦、あなたに預けておきますから」
作り物めいた薄い微笑み。
その裏に抱く黒い感情を、一瞬後にはおくびにも出さず、人狼の少女は高く跳躍した。
瞳術を行使していない今では、目で追うのも一苦労だ。
七つの影が駅の構内からあっという間に去って行く。
「戦利品って……」
ハイクはパーカーの下に仕込んでいるショルダーホルスターに愛銃を戻しつつ、迷惑そうな表情を露骨に表した。
「別にいらないんだが……」
地べたにうつ伏せになり、浅い呼吸を続けている黒髪の少女。
人狼の民族的な衣装を着ているが、生地が薄い上に継ぎ接ぎだらけでぼろぼろだ。
「おい、起きろ」
近寄りながら呼びかけると、少女は朦朧とした目を開いてハイクの顔を見上げた。
その右眼はくすんだ朱、左目は宝石のような碧を湛えていた。
小さな切り傷や汚れが目立つが、オッドアイの少女は思ったよりも愛らしい顔つきをしている。
「いつまでもこんなところで寝ていると、色々と面倒なことになる。せめて人目につかないところに移動したらどうだ」
事務的にそう告げて、ハイクは踵を返した。
彼女の正体や境遇についても一切関心を示さない。
厄介事の中心に、少女が携わっていることなど考察するまでもないからだ。
先程の人狼は去り際に『この少女を預ける』と言った。
そう宣言したからには、遅かれ早かれ取り返しにくるつもりなのだろう。

奪取するだけの戦力を拵えて。
しかしハイクとしては、少女の身柄などどうでも良い。
これ以上、人狼のいざこざに付き合う理由はないのだ。
「じゃあ、俺は行くからな」
感情のない声を発し、この場を早々に離れようとしたハイクだったが――
「おわっ、な、何だ！？」
ハイクのリアクションは大袈裟ではなかっただろう。
うつ伏せに倒れていた少女が、恐怖にでも抗うかのように呻きながら起き上がるまではよかった。
けれど、何を血迷ったのか背後からハイクに抱きついたのだ。
オッドアイの少女はハイクのパーカーを小さな両手でぎゅっと掴み、今にも泣き出しそうな表情で、
「……っ！」
唇をぱくぱくと開閉させた。
声が出ていない。
それなのに、いや、そんなことは百も承知なのだろう、少女はまるで何かを訴えかけるようにハイクに向かって音なき言葉を続けた。
ハイクの顔つきは驚きから困惑、やがては――苛立ちへと変遷し、
「あのな」
眉間にシワを寄せて、腰の辺りにある少女の幼い顔を睨む。
「お前、なんのつもりだ。慣れ慣れしいその手を離せ」
ハイクはパーカーを握る少女の両手を、冷淡に引き剥がした。
その反動で彼女の小さな体が後方によろめく。
しかし、それくらいでは少女も屈しなかった。
朱と碧の瞳に涙を溜めながらハイクに縋りつき、懸命に口を動かす。
「何だ、俺に助けて欲しいのか」
そう訊ねると、少女は肯定とも否定とも取れない曖昧な頷き方をした。

「まあ俺みたいな部外者でも、お前が連中に関する重大なトラブルを抱えているのは察せる。けどな、それなら他を当たった方が得策だ。吸血鬼に解決を頼むなんて、余計にこじれるだけだからな」
「……っ！」
「悪いが俺は人狼のトラブルメーカーを匿えるほど大らかではないし、クレーマー処理の心得もない。大体、どんな義理があって見ず知らずのお前を俺が助けなくてはならない。俺にメリットはあるのか。お前がそれ相応の利益をもたらすのか」
そこで少女は唇を引き結び、俯いた。
「分かったな？　ほら、もう行け。じきに、ここの空間も正常に入れ替わり、元に戻って人目につくはずだ」
ハイクは忌々しげに言い捨てて歩き出す。
けれど、いざ一歩前に踏み出すとパーカーの袖がクイッと後ろに引っ張られて、全然前に進めなかった。
（はあ……子供は聞きわけがないから苦手だ）
少女はなおも執拗にハイクに縋った。
よほど諦められないらしい。
何度きつい態度であしらっても少女はめげなかった。
「いい加減にしろ」
ついに痺れを切らしたハイクが、相手の本能的な恐怖心を誘うトーンの声を発すると、少女の肩がビクッと小さく怯えた。
はっきり言って武力行使はハイクの趣味ではない。
対話や金銭で平和的な解決が図れるのなら、それに越したことはないのだ。
相手はまだ外見上、一〇前後の幼い少女。
そんな彼女に暴力の象徴とも言えるリボルバーの銃口をチラつかせて脅すのは、かなり良心が痛むところではあった。
「それ以上、俺に近づくな」
それでもハイクは涙目の少女に告げた。
そこから先、一歩でも進めば容赦なく引き金を絞ると。

少女は僅かの間、戸惑った様子でおろおろとした後、やっぱり前へ踏み出した。
瞬間、がらんとした駅構内に乾いた銃声が一発、反響した。
ささやかな鮮血が虚空に飛散する。
なのに、悲鳴どころか嗚咽さえハイクの耳朶には触れなかった。
しかし、痛みを感じていないわけではないらしい。
少女は鉛玉が貫通した膝を押さえ込みながら、地面へ惨めに倒れ込んだ。
これまで必死にこぼさないように我慢していた涙も、激痛を引き金にとうとう決壊した。
ハイクは特に表情を作らないまま、リボルバーを懐に仕舞う。
少女は震える体を殻に閉じ込めるように丸め、額に嫌な汗をびっしりと浮かべて苦しんでいる。
ハイクはそんな彼女に歩み寄る。
少女は苦悶の面様を怪訝に歪め、片膝をついて覗き込んでくるハイクを見上げた。
何かを期待している彼女の眼差しに、けれどハイクが答える声はなかった。
ハイクは少女の右膝、リボルバーで打ち抜いた患部に目線を移す。
少女が痛みのあまり傷口を押さえている。
血に濡れた彼女の両手を強引にどかし、ハイクは自身の人差し指をそこへ無造作に当てた。
ぬるっ、と指先に湿った感覚が伝う。
それだけで形容しがたい激痛が走ったのだろう。
少女は瞼をきつく閉じて小刻みに体を震わせると、ついに失神してしまった。
「胸糞が悪い予感しかしないな、これは」
ハイクは気を失った少女に構わず、そのまま彼女の血が付着する人差し指を舌先で慎重に舐めとった。
直後、ハイクは少女の置かれている状況の大半を察する。

人間社会にひっそりと同化し、人と同様の生活を送っている人外種族。

その代表が現代の吸血鬼だ。

今も昔も彼らは大雑把に言って、三種類に分けることができる。

他種族――例えば人間や人狼の血液情報や遺伝子情報、細胞などを有していない純粋な吸血鬼を『純血』。

他種族が吸血鬼の吸血によって血液間で交わった結果、生まれた吸血鬼を『混血』。

吸血鬼と他種族が肉体的に交わった結果、母胎から生まれた吸血鬼を『劣血』。

そしてハイクの推測通り、少女はハーフだった。

摂取した血から得た情報によると、『劣血』だ。

それは吸血鬼サイドの呼び方で、人狼サイドの呼称を尊重するならば『原罪』か。

これで合点がいく。

先刻交戦した人狼の集団は、もしかすると『原罪』の少女を抹殺したかったのかもしれない。

人狼が吸血鬼に対して友好的でないのは自明の理。

それくらい昔から争ってきた種族なのだ。

それなのに吸血鬼と人狼が交わった結晶を、人狼が寛容に受け入れるはずがない。

（秘境に住む民族の中には、奇形を間引く習いが現在も残っている。人為淘汰か。いや、……あるいは『道具』にされていたのかもしれないな）

どんな能力かは知らないが、この少女も吸血鬼特有の瞳術を保有しているはずだ。

オッドアイの片方、右眼の朱が怪しい。

その瞳が人狼にとって何かしらの利益を与える力だとしたら、彼女を殺すのも惜しいと考える可能性だってあるはずだ。

（どんな経緯かは分からないが、自分の宿命を察したこの『劣血』

は、おおかた連中から逃亡してこんな都会まで逃げ出してきたんだろう）

だが、それにしたって妙だった。

思い過ごせない点が一つだけある。

駅から人が消えた、この状況だ。

仮想異世界を擬似的に現実の空間に倒置して構築する、神隠しに近い結界。

それは、あらかじめ『結界内部に閉じ込める対象』を設定できる便利な魔術の類だ。

人が己の生命力を削ってまで物理法則に抗い、人工的に起こす奇跡。

ハイクも詳しいわけではないが、吸血鬼や人狼が魔術を行使できないことくらいは知っている。

前述の通り吸血鬼の種類は大まかに三つある。

中には人間から吸血鬼になった者もいる。

だがしかし、『吸血鬼』という枠組みになった以上は、『純血』だろうと『混血』だろうと、決して人ではない定義になるのだ。

人狼も外見こそ人間だが、ハイクたちと同じ人外種族である。

魔力は人の生命力からしか生まれない。

魔術は人の身でしか扱えない。

また、今日び高度な科学技術が発展した現代の人間社会では、魔術というオカルトチックな概念は、もっぱらファンタジーといったフィクション世界でしか受け入れられておらず、一般では実在するものとは認識されていない。

吸血鬼も人狼も魔術も、これほどポピュラーな存在が、しかし信じられていないと言うのは少々、当人としては奇妙な思いだった。

ともあれ、魔術師が現実に実在することを知っているハイクとしては、先程の一件に引っかかりを覚えるのだ。

（人間、それも魔術を扱える人間が、一枚噛んでいるのか？）

たかが『劣血』の少女一体を抹消するのに、人間の手を借りるな

ど人狼らしくない行動だ。
らしくないと表現するのは、もちろん断言できないからだ。
人狼は過去の『吸血鬼狩り』で、人間という種族に対しては少なからず敵意を抱いていないのだから。
「いや、俺なんかが気にしても始まらないか。こういうことはシリカに連絡するのが一番だろう」
誰かに聞かせるわけでもなく、そう呟いてハイクは静まり返った駅構内から退場した。
ぐったりと気を失っている『劣血』の少女に、振り返ることもなく。

3

〈レッドアウトファミリー〉の三代目頭領は、今日も事務所で多忙な時間を過ごしていた。

荘厳な黒檀の執務机に組んだ両足を投げ出しつつ、赤いレザーの肘かけ椅子に座って、ぷかぷかと煙管で紫煙を吹かしている様子は気楽なものだが、その実、取り巻きの部下たちから殺到する報告に対して目まぐるしく頭を回転させている。

そんなボスの前に並ぶ黒服の男たちのうち、一人が口を開いた。

「ボス、例の金融企業から投資額の件について最終確認の書類メールが届いています」

「ああ、分かった。後でチェックしておくから、私のコンピュータにリンクしておけ。返信の文章内容はお前に一任する。粗相のないようにな」

「ボス、北の工場跡地を拠点に、素人に対して薬をさばいていた密売グループの元締めを捕縛しました」

「ご苦労。適当に痛めつけて情報を吐かせろ。そいつから関係のあるグループを芋づる式に炙り出せ。手段は問わん。ただし、硬派にな」

「ボス、先日下町に三号店をオープンした居酒屋〈ランデブー〉がみかじめ料を払ってくれません」

「情けない言い方はよせ。自分が誰なのかもっと自覚を持って発言しろ。……とは言え、上納金は任意なわけだし、あそこの親父は頑固だからな。ま、構わんさ。用心棒が必要ないってことだろう。放っておけ」

「ボス、東町に拠点を置く〈レナードファミリー〉の構成員が度々、我々の縄張りで目撃されています。今月にいたっては一二件」

「ケッ、ぽっと出が一丁前にちょっかいだけはかけてきやがる。だが、向こうも派手には動かんだろうさ。こっちはトップが変わって大事な時期だと知っての偵察だろう。しょせん軟派なチンピラ風情の寄せ集めだ。当面、泳がせておけばいい。だが目は離すなよ。下町の連中にも警戒するよう忠告してやれ」

「ボス、変態です。〈バベルズファミリー〉がガサ入れにあったようです」

「ああ知ってるよ。硬派だった連中が一体何をしくじったんだかな。こっちまで飛び火してこなけりゃ良いが……。それと私は変態じゃない。大変な、大変」

「ボス、ナイトクラブ〈チェリー〉のオーナーから是非ボスに猫耳メイド服着用の上ご来店ください、との熱い伝言を預かりました。ボスのファンクラブ会員の方々が待望しているようです」

滞りなく部下に指示を与えていた〈レッドアウトファミリー〉三代目頭領の少女――シリカ＝R＝サードの整った顔が一瞬にして引き攣った。

そう、誰がどう見てもそのマフィアのボスは少女だった。

年齢は一五。

お嬢様風の顔立ちには年相応の幼さと、まだ成熟し切っていない凛々しさが同居している。

しかし小動物のように愛鏡のある大きな瞳と、平均よりも低い背のせいでシリカは一二、三歳の女の子にも見えた。

全体的にゆるくウエーブするセミロングの髪色は、染めた明るめのベージュで、前髪だけ両サイドにふんわりと流している。

着ている私服は、ネイビーブルーを基調とする薄い生地のオーバーオールのショート一枚だけ。

丈が短く、机の上に投げ出した足や太ももが無防備なことになっているが、マフィアンズボスな彼女は周りの目を全然気にしていない。

「あの変態ロリコンじじぃどもが……」

右頬をぴくぴくと痙攣させ、シリカは忌々しそうに悪態を吐き捨てた。

「そりゃあ確かに、私の見てくれがマスコットやストラップ、八分の一スケールフィギュアなどにして誰もが常時側に置いておきたくなるくらいキュートであることや、その手の企業からグッズ化の依頼が怒涛のように押し寄せないのを疑問に思うことには十分に理解を示せる。だが、どれだけ可愛かろうと私は〈レッドアウトファミリー〉の頭だぞ。似合うと分かっていても誰が軟派な猫耳メイド服なんぞ纏うか。断固として断っておけ。良いな、絶対だぞ」

満更ではないのか本当に嫌なのか、いまいち不明な反応をシリカが示すと、メイド服の件を報告してきた部下は残念そうに肩を落とし、

「ボス、私的にボスの猫耳メイドは拝見したい所思をここに固く表明――」

「黙れ、殺すぞ」

少女の一睨みで、いかつい顔をした大の男がしょんぼりと黙り込んだ。

「ボス」

「ああ、もう次から次へと……今度は何だ」

「ハイク様からお電話でございます」

シリカの側近である老紳士ヒカゲが、慇懃な動作で手のひらの携帯端末を差し出す。

シリカは訝しむように片眉を跳ね上げて、

「むふっ」

「ボス」

ヒカゲに一言でたしなめられ、緩んだ頬を慌てて引き締める。

「ふ、ふむだ。ふむ、の間違いだ。さっさと携帯をよこせ」

∞　∞　∞

ハイクは公衆電話を求め、駅前から離れた表通りにいた。
目的の電話ボックスを見つけて、四角い箱の中へと潜り込む。
マネーカードを機械にスキャンし、液晶画面に浮かんだ数字を覚えている番号順に押す。
受話器を手に取り、コール音を三回耳にしたところで相手が出た。
しかし、応じた声は妹のものではなく、彼女の側近兼教育係を務めている老紳士ヒカゲのものだった。
妹をトップにするマフィア組織からしてみれば、実の兄とは言え完全なる部外者なのだ。
連絡が直結しないのも仕方がない。
むしろ、まだまだ新任の彼女がそういう回線の段階処置を施していたこと――ヒカゲのアドバイスだろうが――を褒めてやるべきだろう。
『もしもし』
それでも、ハイクとヒカゲは旧知の仲なので、電話はつつがなく妹へと繋がった。
「よう。シリカか、俺――」
『ちょっとちょっと、旅路の前に一体全体どうしちゃったの、お兄ぃ。え？　急に妹が恋しくなって、ついつい電話しちゃったって？　もう、どれだけシスコンなんだよっ。相思相愛じゃん。こんなことなら、やっぱりシリカの萌える声一〇〇選を収録したボイスレコーダーを持たせるべきだったかな。実は密かに用意してたんだ。お兄ぃが寂しくならないようにね。今から取りにくる？』
いつも通り人の話を最後まで聞かず元気なマシンガントークをかましてくれたシリカの浮ついた言葉が終わるまで、受話器を数センチばかり耳元から離していたハイクは苦笑いをもらし、
「……いや、遠慮しておく。そんなことより電話しても大丈夫だったか？」
『大丈夫大丈夫！　万が一に備えて、お兄ぃのために使用できる時間を一日のどこかに五分は作れるようにスケジュール組んでるから。

そのシステムのおかげで五分貯金も溜まってるし。べ、別にシリカの声が聞きたくなった時は、いつだって電話してくれたって良いんだからねっ』

「素人一個人を優先するマフィアのボスとか心配になるんだが」

そうツッコミを入れると、シリカは快活な声で笑った。

『シリカ的には最後のツンデレ台詞かと思いきや、ストレートなデレデレ台詞だったっていう部分で萌えて欲しかったんだけど、まあいいや。それで、どうしたの？　まさか愛する妹の声を聞いて狂い悶えるためだけに電話してきたわけじゃないんでしょ？』

それが主な要件だとしても、とシリカは自信満々につけ加えた。

ハイクは少し感心した様子で、

「流石シリカ、大きく勘違いしながらも空気だけは読めるな」

『てへっ。一応はボスなので。五感は敏感に働かせとかなきゃね』

向上心があるのは何よりだが、おっちょこちょいな思い込みの激しさはボスとしての欠陥になり得る。

今度こっそりとヒカゲに注意を促しておこう、とハイクは頭の片隅に書き留めた。

『で、シリカに何の用だったの？』

「ああ、それがな。実は列車に乗る直前にトラブルに巻き込まれたんだ。今、駅前の公衆電話のボックスからかけているんだが」

『トラブルって、もしかして暴力沙汰？　それなら戦闘員でも送ろうか？　いや、ここはむしろこのシリカちゃんが直々に――』

「その必要は皆無だ。俺が片付けたからな。でなければ、呑気に電話なんかしていられないだろう」

『はわぁ、シリカしびれちゃうよ、お兄ぃのそういうところに』

「……実の妹に変態的な声を出された俺は、実の兄としてどんな返答をすべきなんだ？」

『あはは、せめて色っぽい声って言ってよっ』

シリカは愉快そうに笑った延長で、上機嫌に言葉を続けた。

『でもさぁ、お兄ぃに絡んだチンピラも不幸だったね。勝てるわけ

ないのに』
「いや、相手はチンピラではないんだが」
『へ？　そうなの？』
「大体そんじょそこらの人間ともめたくらいで、わざわざ多忙なお前に連絡なんかすると思うか？」
『……と言いますと？』
シリカも鈍感ではない。
ハイクの言い回しから不穏な響きを覚えたのか、彼女の声音が若干硬くなった。
そこに〈レッドアウトファミリー〉を率いるボスの影を感じ取ったハイクは、さらに声の温度を落として答えた。
「相手は人狼だ」
『――――！？』
「とは言っても、俺が狙いだったわけではないみたいだが。たんにタイミングが悪かったんだろう。連中のトラブルに対して俺が巻き込まれる形だった。向こうとしてもイレギュラーだったように思う。……まあ、結果的に俺が吸血鬼だと分かった途端、連中が目の色を変えて襲いかかってきたことには間違いないんだがな」
あの時、人狼たちはそもそもの目的さえひとまず横に置いて、ハイクに攻撃をしかけてきた。
身に覚えこそないが、吸血鬼という種はよほど人狼に恨まれているらしい。
ひょっとすると、怨念を現代に持ち越すくらい彼ら人狼は、大昔の吸血鬼に酷いことをされていたのかもしれない。
ハイクさえ知らない残酷な仕打ちを。
『人狼がこの街に……ケガとかしなかった？』
シリカの落ち着いた声を受話器が唱えた。
「俺は無傷だ。血の一滴もついていない」
『ホッ、それなら一先ず安心だよ』
「それよりシリカ、ここからが本題だ。あの場では運良く追っ払え

たが、連中はまだ街に滞在していると考えていい」
『お兄ぃが吸血鬼ってバレちゃったしね』
「それもある。だが、それだけでもない」
『どういうこと？』
ハイクの脳裏に、黒髪の少女が地べたに転がり、苦しそうに泣いている姿がフラッシュバックする。
「見たままの状況から察するに、奴らの目的はどうも『劣血』らしい」
『吸血鬼と他種族の肉体的交配によって生まれた吸血鬼……だよね？』
訊ねあぐねるシリカの物言い。
受話器の向こう側では小首の一つでも傾げているだろう。
ハイクは電話ボックスの外に最低限の警戒心を払いつつ、
「人狼サイドからしたら『原罪』。人狼と他種族の肉体的交配によって生まれた人狼だ」
『ああ、なるほどねっ』
シリカは深々と得心した口調で、
『つまるところ、目的不明の人狼集団に狙われてるらしいその「劣血」さんは、世にも珍しい「吸血鬼と人狼の結果（ハーフ）」なんだね？　で、その子は今どうしてるの？』
「さあな」
肩をすくめ、ハイクはどうでも良さそうに言った。
「目立った負傷が見当たらなかったから、俺が一発だけ膝に撃ち込んでおいた」
『わお、過激だねっ』
「致命傷にならず、かつ他人が目視して見過ごせない程度の傷だ。今頃、街の総合病院にでも運ばれてるんじゃないか。一応は、その手配をしておいた。入院費一年分に相当する金額データを取得しているマネーカードを、手に握らせておいたしな。……今じゃ『不自然な結界』は消えて、駅構内にはすでに人間たちが行き交っている。

見た目通りなら日常の光景に戻っているし、血を流している少女を見て見ぬふりをするほど人間も冷たい生物ではないだろう」

『むぅ、お兄ぃが赤の他人を無償で助けるなんてシリカ、ちょっぴりジャラシー』

そうは言うがハイクも無血ではない。

後味が悪いのだってごめんだ。

金ならそこそこ持っているし、自身の良心が痛まない程度の偽善活動に精を出すくらいは問題ない。

『でもさ、その「劣血」さんが吸血鬼と人狼のハーフなら、人狼の治癒能力も備わってるだろうから、お医者さんは傷の異常な回復力にビックリするんじゃない？』

「俺がそこまで心配してやる義理はないな」

きっぱり未練なくそう言い放つと、シリカは苦笑気味に『中途半端なんだか、線引きが上手いんだか……』と呟いた。

『てゆーか、人狼はどうしてお兄ぃが吸血鬼って分かったんだろうね。お兄ぃ、人混みに紛れてたんじゃないの？　それに結界って？』

「連中を中心にトラップ形式の結界魔術が展開されていた。おそらく、内容は『人間以外の生命体を擬似的な位相空間に閉じ込める』ようなものだろう」

『ははー、にゃるほど。それでお兄ぃが人間じゃないってバレたんだ。だとしても――』

「注目すべきはそこじゃない、だろ？」

シリカの思考を先回りして陳ずると、マフィアのボスは満足げに鼻を鳴らした。

『ふふん、流石はお兄ぃ。シリカの考えなんてお見通しだね。以心伝心だっ』

ハイクは大通りに向けていた視線を、少しだけ足元付近に落とす。その仕種には僅かばかりの哀愁が漂っていた。

「……嬉しそうだな、シリカ」

『お兄ぃが心配してくれてるからね』

「お前こそお見通しじゃないか」
『あったりまえっ』
胸の前で勇ましく右手をグーに握るシリカの姿を思い浮かべ、ハイクは柄にもなく何の含みも持たない微笑みをこぼした。
これまで誰にも、おそらくシリカにさえ見せたことがない、子供みたいな表情だ。
照れ隠しの部分からシリカに勘づかれないよう、ハイクは喉を引き締めて話を再開した。
「シリカ、お前のシマに勢力不明の人狼が山奥から上京してきたのは事実だ。奴らの目的は『劣血』であって、俺たち吸血鬼とは直接の関連はなさそうだが――」
『だからと言って楽観視するのは良くない、でしょ？』
今度はハイクが先回りされる番だった。
「そうだ。結界魔術なんて代物は人間だけが扱える聖域だ。俺たち吸血鬼や人狼は、人の起こす人工的な奇跡は使えない」
『うーん、例えばさっ、人狼が都会にやってきたのは、彼らにとって汚点である「原罪」さんを消すためっていうのが、最も納得しやすいシナリオなんだけど……。腑に落ちないのは、その背後関係に見え隠れしてる魔術師の影だねー』
「そういうことだ」
『りょーかい。ちょっと探り入れてみるよ。皆にも警戒するように言っとくしっ』
皆とはファミリーやファミリー関係者たちのことだろう。
「深追いはよせよ。調べた上で無関係そうなら俯瞰しろ。やり過ごせそうなら、やり過ごせ。魔術師をバックにした人狼なんかに目をつけられたら厄介だ。可能な限り接点なんか持たない方がいい。特に俺たち吸血鬼はな」
そう口やかましく忠告し切ってしまった後で、ハイクはこめかみの辺りをぽりぽりと掻きながら悔いた。
シリカは仮にも〈レッドアウトファミリー〉を束ねるボスである。

吸血鬼のみを構成員とするマフィアの女王。
そんな彼女に対し、部外者の自分が兄という権限だけで、ファミリーのことを横から口出しするのは、流石に過保護がすぎるのではないか。
ハイクはそのように危惧したが、それはまったくの杞憂だった。
『うん、分かった。ありがとうね、お兄ぃ。わざわざ教えてくれてっ』
そして、ハイクは返すべき言葉を見失ってしまった。
そのせいで躊躇を思わせる無言が発生し、会話の間隙に不自然な空白が生まれる。
『あれ、もしもし？　お兄ぃ？』
「いや、なんでもない。その……礼を言うのは、俺の方……だと、思ってな……」
受話器の向こうで息を呑む気配。
『……えっと、ごめん。聞こえにくかった。もう一回言って？』
瞬間、ハイクは電話ボックスの窓ガラスに、もたれかかるように頭を押しつけた。
「お前は優しいな、シリカ」
『き、急に何なのさ。いきなり甘い言葉を囁いても何も出ないぞ。何も出ないぞっ。……出して欲しいなら出すけどさ……』
「いや、何が出るんだよ」
普段はあからさまな甘言や賛辞を控えているハイクが、しみじみとした調子で『優しい』などと言うものだから、さしものシリカも驚いてテンパった様子だった。
それからシリカといくつか他愛ない言葉を交わし、ハイクはそろそろ切り上げることにした。
腹も空っぽであることを抗議するように鳴りっぱなしだ。
「奴らのおかげで列車内のレストランで食事する予定が、大幅に狂ってしまった」
『お兄ぃ、楽しみにしてたのにねー』

「その辺りのファストフード店で適当に満たすしかないな」
『あ、そう言えばお兄ぃって携帯も持って行ってないんだっけ？　たまには生存報告ちょうだいよ？　じゃないとシリカは寂しくて死んじゃうから』
「うさぎ発言はよせ。お前が孤独で死ぬタマか」
茶化すように返す。
だが、ハイクの予想に反してシリカから間の手はすぐになかった。
ハイクが受話器を握りしめながら不審に思っていると、
『……嫌だよ』
シリカの声は、それまでの陽気さが嘘のように萎み、震えていた。
『シリカのこと忘れちゃ嫌だよ……』
完全な不意打ちだった。
何か言い返さなくてはいけない。
そう焦る度にハイクの頭の中は真っ白になり、有効的な語彙など一つも浮かばなかった。
その無言こそが本当の失言であると気づきながら、自身の情けなさに落胆する。
おそらく沈黙は五秒もなかっただろう。
ふぅ、と溜息にも似た吐息が聞こえた。
『だーかーら、一日の間で一回でも良いからシリカのこと思い出してね？　どんな妄想にも脳内シリカを使って良いから。酒池肉林の限りを尽くして良いから。あ、でもリアルシリカが脳内シリカにやきもち焼かない程度にねっ』
結局、言葉はハイクの中で見つからず、シリカが先に口を開いていた。
あれが演技だったのか、それとも一瞬だけ見せた彼女の脆い部分だったのか。
ハイクはそれを全て見抜いた上で、
「……なあ、今お前の周りには皆がいるんじゃないのか」
と詰問気味に訊ねた。

それが精一杯だった。
『ギクッ。い、いないヨ？　シリカ一人だお？』
「……だよな。お前との健全な関係が勘違いされるもんな。冗談はほどほどにしておけよ」
『（い、言えない。すでにシリカが重度のブラコンであることをファミリーの皆にカミングアウトしてるなんて……絶対に言えない……！！）』
「……なぜだか今、強烈な悪寒が走ったんだが」
『か、風邪の引き始めじゃない？　くれぐれも体には気をつけてよ。それじゃあ、またね。お兄ぃ！』
プツッ、と通信が途絶える。
ハイクは受話器を戻し、電話ボックスの窓ガラスに背を預けて項垂れた。

∞　∞　∞

「最悪だ……」
側近の老紳士ヒカゲに携帯電話を手渡した〈レッドアウトファミリー〉三代目頭領は、沈痛な面持ちで嘆きながら黒檀の執務机に全力で突っ伏した。
他の組員が席を外し、室内にいるのがシリカとヒカゲだけでなければ、こんな醜態は晒せないところだ。
「体に気をつけて、なんて皮肉以外の何ものでもございませんからな」
深みのある声。
ヒカゲは顎の下に蓄えている上品な白ひげをゆすりながら、シリカを慰めるように言った。
「しかしながらボス。本当にお見送りしなくても良かったので？　てっきり仕事をサボってでもハイク様を送り出しに行くと予想し、実はボスが逃亡しないように事務所の出入り口に下の連中を展開し

ていたのでございますが」
　年季の入った朗らかな笑みを湛える側近の老紳士。
　シリカは机の上に上半身を預けたまま、不満を灯した三白眼の目つきでヒカゲを睨み上げた。
「ふん、私が行ったところで兄上に『負い目』を感じさせてしまうだけさ。後一年なら無理して会おうと思えばいつだって会える。それに私たち吸血鬼は血で繋がっているんだ。肉体的な距離の遠さなど些末に過ぎん」
「人間で言うところの絆。それとも赤い糸でございますか？」
「赤い糸。ロマンチックな話だが、私たちの場合その赤は血の赤だよ」
　重苦しい溜息をこぼし、シリカはふざけた調子をやめて椅子に座り直した。
　それからぼんやりと天井を仰ぎ、手の甲を額に置く。
　まるで太陽を眩しがる吸血鬼のように。
「だから、見送りなど不要。これで正解だったんだよ。兄上に残された時間は少ない。それなのに、それが分かっているのに、どうして私が彼を見送ることができる？　私が見送りの場にいたら、それこそ兄上は自由な旅に行きづらくなってしまうじゃないか」
「どうして、そう思われるので？」
　ヒカゲは事務所に置いてあるコーヒーメーカーに歩み寄り、淹れておいたノンシュガーのコーヒーをシリカ専用マグカップに注いで差し出した。
　シリカは湯気をのぼらせるマグカップをヒカゲから受け取り、
「ハッ、愚問だな。一年前まで一般人同様の生活を送っていたのが、この私だぞ？　そこらの阿呆な女子中学生が、いきなりマフィアの頭になったんだ。それまでの交友関係も捨て、一年間マフィアのボスとして生きるためのノウハウを徹底的に叩き込まれた。もはや今ではこの堅苦しい喋り方が完全に定着している。素に戻れるのは、いや――昔の私に戻れるのは兄上と言葉を交わす時くらいだ。そし

て、そうなってしまったのも、兄上は自分のせいだと考えている。ま、当然の思考回路だろう」

ズズッ、と苦い液体をすする。

舌の上に甘みのカケラもない味が拡散し、甘党シリカの顔がしかめっ面に変わる。

『純血』の吸血鬼だろうとマフィアのボスだろうと、シリカの外見は一五歳の小娘だ。

事情を知らない他の人間組織に舐められないよう、せめて威厳と風格を維持するために、嗜好品までボスらしい振る舞いを普段から心がけているシリカだが、やはり慣れないものは慣れないし、嫌いなものは嫌いなままだった。

服装だって表に出る時は、正装を心がけなければならない。

女性が好む『可愛い要素』など片鱗も含有していないブラックコーヒーのせいで、シリカが兄の癖と同様、不服に対して無意識のうちに眉間にシワを寄せていると、

「ボス、不躾な質問をしても？」

「あん？　私の教育係を実直に務めてきたお前が、そんな質問をするのか。別に構わんが」

「恨んでいますか、ハイク様を含め私どもを」

その問いにシリカは動揺しなかった。

老紳士の視線を真っ直ぐに見つめ返し、シリカは淀みなく答える。

――当然だ、と。

「私は『純血』の吸血鬼だが、マフィアのボスなんぞになる前の生活を気に入っていたんだ。普通の人間になり済まし、人間らしい自由を謳歌して生きていたかった。こんな硝煙と血と金と悪意の臭いで充満するきな臭いアンダーグラウンドの世界なんかとは、一生無縁でいたかったさ」

シリカは手に持ったままのマグカップに目線を落とし、寂寥の滲む微笑みを浮かべた。

「だが、そうもいかないだろう。兄上は『黒血病』で余命が一年だ。

二代目頭領の座から下りるのは当然。誰かがその後を継がないといけないことも分かる。そして、初代頭領ラスト＝R＝ファーストの実子である『純血』が、三代目の有力候補に選ばれるのは言及するべくもない。私たち吸血鬼の繋がりは、何よりも『血』を重んじるからな。能力や資質よりも、血。となれば、父の実子である『純血』の私が、三代目（サード）になるしかないわけだ」

「……ハイク様は僅か七歳で二代目頭領の座につきました。あの方は二代目を受け継いだ瞬間から、ボスをマフィアの世界から遠ざけるように、懸命に計らっていたのでございます。ボスが一年前まで遠縁の親戚の家に預けられていたのは、そのため」

だろうな、とシリカは相槌を打ちながら、自虐めいた形に唇を歪め、

「兄上なりに私を慮ってくれていたんだろう。そのせいか、私は彼に対してどうしても惹かれてしまう。彼が実兄という実感がわかないのも離れて生活していたせいだろう。一年に一度、親戚が集う時だって彼は私に近づこうとしなかった。当時は嫌われているのだと思い込んで、ひどく悲しかったが……」

今同じ境遇に至って振り返れば、あれが不器用な優しさであったことを理解できる。

立場が逆だったら、きっとシリカも同じことをするはずだから。

ヒカゲは吐息にも等しい愁嘆を白髭の上から落とし、

「……余命一年。あまりにも残り少ない自由。ボスはハイク様の貴重な余生を邪魔したくないのでございますな」

側近の表情とは対照的に、シリカは意地の悪そうな笑みを表出して、椅子の背もたれを軋ませた。

「ああ、そうさ。私は兄上が大好きだからな。世界中の何よりも。教育係のお前にはファミリー一筋のボスになるような指導を一年間ずっと受けてきたが……悪いな、私の心の置き場所は一ミリも動いていない。私は彼を心から愛している。恨んでもいるが、愛してもいるんだよ。この相反するはずの感情が同居する根拠を、お前は答

えられるか？」
「はい。夢のない見解でございますが、おそらくボスが憎んでいるのはハイク様の『体と血』。そして、愛しているのはハイク様の『心』なのでございしょう」
「はは、お前には隠し事ができんな」
「お互い様です」
シリカは冗談半分、嫌味半分で言ったのだが、ヒカゲの面様はこちらの心を見透かしたように涼しげなものだった。
人生経験の違いから『この老紳士には敵わないな』と内心で述べても、絶対に音にはしてやらない。
そんな負けず嫌いの精神を発動した代わりに、シリカは穏やかに舌を回し始めた。
「だがな、私は正真正銘の吸血鬼だ。『血の繋がり』というものに、どうしようもなく愛着を抱く。ゆえに、私は父の『混血（こどう）』であるお前たちを憎んでいるが、同時にそれ以上に愛してもいるんだよ」
「この上なく光栄でございます」
折り目正しいお辞儀をするヒカゲを一瞥し、シリカは落ち着いた微笑を瞳に湛えて、
「憎悪と愛情の混在。これは私たち吸血鬼特有の思想回路なんだろうか。それとも、人間もこんな心境を持つことがあるんだろうか」
「どうでございましょう」
「ふん。それが把握できていない時点で、結局のところ私たちは人間の猿真似ばかりするシミったれた吸血鬼風情ってことだ」
言い捨て、マグカップを傾けて一気に中身を飲み干す。
「ところでボス、本当にハイク様を放置なさるおつもりでございますか？」
ヒカゲは言外に『そんなわけがないから白状しろ』と言っている。
「聡いな。無論、保険はかけておいたぞ」
「どのような」
「秘密だ」

「ボス」
ヒカゲが一歩前に詰め寄ると、シリカはうっとうしそうに手をひらひらさせて、
「ああ、もう心配するな。ファミリーのパイプラインを利用したわけじゃない。それに、兄上の旅路の邪魔はしないよう釘をさした保険だ。備えあれば憂いなしって言うだろう？」

4

ハイク＝R＝セカンドはかつての地位を捨てた旅鳥だ。
世捨て人ならぬ世捨て吸血鬼。
彼が暮らしていた街で勢力を展開していたマフィア組織〈レッドアウトファミリー〉。
その創始者にして初代頭領の吸血鬼ラスト＝R＝ファーストと、彼の妻レイニィ＝ガーデンの間に生まれた『純血』の第一子。
そんなハイクが僅か七歳でファミリーの二代目を継いだのは、ラストが原因不明の失踪で行方知れずになったからに他ならない。
しかしながら、一癖二癖もある吸血鬼集団のボスを九年間務めてきたハイクも、およそ一年前に吸血鬼特有の病を患ってしまい、その座を下りることになった。
どんな運命のイタズラか、一〇年も前に病死した母レイニィと同じ『黒血病』を。
『黒血病』とは死に至る不治の病である。
血管を巡る血が時を重ねるにつれてドス黒く変色していき、終いには硬化してしまうというもの。
現在、その治療法は見つかっていない。
本来の身分を偽ったまま人間界に医者として活躍する吸血鬼も多々いるが、これぱっかりは打つ手がないという見解で概ね一致していた。
病死した母レイニィと同じ『黒血病』にかかったと発覚した当初は、ハイクも随分と落ち込んだものだが、今では逆に開き直っている。
どうせ治らないのだから、うじうじと悩んだりすることをやめて前向きに考えてみたのだ。

これはマフィアの世界から足を洗うチャンスなのではないか、と。
そうして、ハイクは残り少ない余世を自由気ままに過ごすためにファミリーを捨て、終着点のない旅を始めようとしていたのだ。
けれども、心残りや気がかりがないと語るならば、それは嘘になる。
常に心のどこかに引っかかりを覚えている。
まるで喉に刺さった魚の小骨のように、あるいは喧嘩の後のシコリみたいに、それはふとした瞬間に鎌首をもたげ、ハイクを憂鬱の海に誘おうとするのだ。
理由は誰でもない――実の妹シリカ＝R＝サードだ。
ハイクは『黒血病』をていの良い言い訳の材料にして、シリカにボスの座を明け渡した。
両肩に積もっていた荷がごっそりと下りたことを、ハイクが心の底から安堵したのは刹那だった。
直後、ハイクの内側に押し寄せたのは、これでもかと言うくらいシンプルで、それゆえに分かりやすく、重たい失望だった。
ハイクの瞳には、善と悪の区別すらできないのではないかと思えるほど純心に映っていた妹が――両親がいなくなったことで、この世で最後の『純血』の肉親となってしまった妹が――これから悪意に汚れた世界に足を踏み入れようとしているのに、ハイクは一瞬でも喜んでしまったのだから。
無論、シリカが後を継ぐのは必然だっただろう。
組織の頭がいずれ病でくたばると判明しているのに、ボスの後継者を選ばず育てないはずがない。
シリカが三代目になるのは血統的序列による宿命で、ハイクの意思に関係なく決まったことだったのだ。
理解は可能。
吸血鬼の観点からすれば実に合理的な選別。
だがしかし、だからと言ってそう簡単に割り切れるほど、感情論は単純ではなかった。

予防策も処置する術も見出せない『黒血病』。
不可抗力とは言え、そんな悪質な病を患ったせいで、一般人同然だったシリカに背負わせてしまったのだから。
本来は彼女が知る必要すらなかった道を。
ずっとハイクが責任を持って進むはずだった世界を。
『人間的な日常を送り続けたい』という、シリカのささやかな願いまで食い潰して。
シリカの教育は、ハイクの『黒血病』が発覚した瞬間から始まった。
一年が経った今ではボスとしての頭角を現し始めている。
皮肉なことにハイクよりも素質があった。
人の上に立つ才覚があり、頭の回転も速い。
こんな表現は慎むべきなのだろうが、シリカは紛れもなく向いていたのだ。
けれど、彼女は本当にこれで良かったのだろうか。
シリカは文句の一つも言わず、己の運命を受け入れた。
普通の一五歳の少女として過ごす人生が、家族の勝手な事情で唐突に打ち切られたのに。
彼女自身は人の日常を望んでいたはずなのに。
（クソ、いい加減気持ちを切り替えないとな）
この一年間、堂々巡りした思考を払拭するように、ハイクはかぶりを振った。
こんな陰鬱な心境のまま列車に乗るのは、逆にシリカに対して失礼にあたる。
（あいつ、電話に出たということは、やっぱり見送りにくるつもりはなかったんだな）
下手をすれば二度と会えないかもしれないのに、見送りの一つもなかったのは、きっと彼女なりの気遣いだったのだろう。
『こっちのことは気にせず、一人旅を存分に楽しめ』というメッセージ。

（こっちから電話をして、勝手にネガティブになっているのだから世話がないな……）

ハイクは苦笑した。

少しだけ想像してみる。

シリカに背を向けて颯爽と列車に乗り込む自分を。

確かに無理があった。

ハイクが味わってきた世界を、これから先ずっと代わりに舐め続けることになる妹に、無神経にも『行ってきます』など言えるわけがないのだ。

自責の念に捉われ、一歩も前進できなくなるに違いない。

だから、これで良かったのかもしれない。

体が列車に揺れていても、心があの事務所に残ったままでは快適な旅なんて望めない。

（快適な旅。いや……宛てのない旅、か）

果たして、その意義を死ぬまでに見つけられるだろうか。

残された時間を費やしてまで、世界を旅する価値を見出せるだろうか。

そもそも、この旅こそ単なる現実逃避の象徴なのではないか。

シリカから、あのファミリーから、この病から、遠い世界まで逃げ出したい気持ちの裏返し。

そう問い詰められても言い返せる自信はなかった。

心も体も色々なことがあって摩耗し、ガタがきている。

ほとんど顔も思い出せない母は不治の病で死に、凛々しかった父が謎の失踪を遂げ、そこから急激に変化した日常が始まり、約九年間、組織の利益のためにノンストップで走り続けた挙句、死の病に囚われた。

その疲労がここにきて、ほとんどのことをどうでも良く感じさせているのだ。

「はあ……俺の一生って何だったんだろうな」

そんな物憂げな言葉と溜息を吐くハイクは今、駅の地下街で見つ

けたファストフード店にいた。
スモークガラスに面したカウンター席に座り、ハンバーガーとフライドポテトを齧っている。
店内に居座る客の数は多く、若者と家族連れ、サラリーマンが多い。
昼時の影響か、ほぼ満席状態で普段は人気のないカウンター席でさえ空いておらず、ハイクの両隣も女性客で埋まっていた。
そして、先刻の呟きは独りごとである。
店内は『世界鉄道』の駅構内ほどではないが、それなりに騒がしいため、ハイクの神妙な台詞は誰の耳にも留らない。
はずだった。
「ふへ？　あなたの人生ですか？　そんなの決まってますよう。私ことサティ＝ループに討伐されるための人生です」
トレイの上にあるフライドポテトの減る量がやたら速いなと思ったら、原因が分かった。
右隣の席に座る見知らぬ少女が、沈思黙考中のハイクの隙をついて横から手を伸ばしていたのだ。
通りで食べる回数とポテトの減り具合が比例しないわけである。
その犯人は一五、六歳の人間だった。
紫がかったショートボブの黒髪に、野暮ったい丸眼鏡。
顔立ちはなかなか整頓されている綺麗めな感じなのだが、何をどう勘違いしたのか工事用の黄色いヘルメットを首に引っかけている。
コスプレ（東大陸極東の小さな平和国で流行っているサブカルチャー？）とかいう文化の一種なのだろうか、各所に謎のプロテクターを着装し、かと思えばピンクのビキニの上に、渋い黒の革ジャンを羽織るだけの格好。
支離滅裂な世界観に、何をどうしたいのかさっぱり理解できない。
謎の元ネタ不明コスプレ少女は、トレイの上に展開するハイクのフライドポテトで口周りを塩だらけにしながら、不敵な笑みを浮かべた。

可能な限り関わり合いになりたくなかったのだが、話しかけられた以上、スルーは難しそうだ。
「ふふ。聡明なあなたなら、もうお分かりでしょう？　私の正体は、泣きじゃくる吸血鬼もさらに泣きじゃくる――吸血鬼ハンターです」
「お前が誰だろうと構わないが、俺の食い物には手を出すな」
「あっ、ちょっ、取り上げないでくださいよう。けちっ！」
「やかましい。俺に何の用だ。要件を述べろ。五秒以内に一万文字以上でな」
「一万文字！？　物理的に不可能――」
「を可能にするのがお前の職業だ。肝に銘じておけ」
吸血鬼ハンターを自称する少女サティ＝ループの手からフライドポテトを取り上げると、彼女はいじけた子供のように唇を尖らせ、なおも視線でフライドポテトを追ってきた。
「だから私は吸血鬼ハンターだって自己紹介したばかりじゃないですか。吸血鬼ハンターは、吸血鬼をハントすることを主に――」
「さしずめシリカの差し金ってところか？」
「ぶふっ、なぜバレた！？」
「おお、かまかけてみるものだな」
「はわーっ！？　卑怯です卑怯です！」
ぽかぽかと肩叩きの要領で殴りつけて抗議してくるサティを、ハイクは右腕で鬱陶しそうに跳ね退け、
「初対面の相手にいきなり吸血鬼だの何だのといった、危ない単語を持ち出して自己紹介してくる奴ともなると、シリカ路線の息がかかっているとしか考えられないからな」
「うぅ……私は泣きじゃくる吸血鬼も刹那のうちに照れさせる可能性を秘めた将来有望な吸血鬼ハンターなのに……数多の吸血鬼を統べる吸血鬼女王のシリカさんにさえ素質を認められたのに……」
サティはよよよとハンカチを取り出して泣き崩れているが、ハイクは彼女に一瞥もくれず退屈そうに欠伸を噛み殺し、
「なんだ、シリカが吸血鬼ということは知っているのか」

「もちろんですよう」
「吸血鬼に雇われる吸血鬼ハンターとは滑稽だな。お前、頭弱いだろ」
ハイクが気だるげにそう言うと、蛇口でも捻ったみたいに涙を止めたサティはニタリと笑って、得意げに両手の人差し指を左右に振った。
「ちっちっちぃ。これは潜入捜査の一環ですよう。吸血鬼に与すると見せかけ、その内部事情を把握する。吸血鬼の習慣や生態データの採取を主な任務とする諜報員なのです」
サティが自慢たらしい顔でふんぞり返る。
けれどハイクはやっぱり無関心のまま、食べかけのハンバーガーを口の中に放り込み、素っ気なく答えた。
あっそう、と。
「み、見事な精神攻撃です。私の鉄壁の心に深い傷がつきました。もう少し私に興味を持ってくださいよう。スルーしないでくださいよう。絡んでくださいよう」
「断る」
ハイクは不快に細めた目を右隣に向け、大袈裟なくらい大きな溜息をついた。
「大体な、お前の夢を壊すようで悪いが……吸血鬼なんて実在するわけないだろう」
「え？」
「あれは妄想の産物だ。人が生み出した架空のイキモノ。本来なら、こんな場所でこんな解説をしていること自体がすでにナンセンスなんだ。それに……」
サティに言葉を挟ませる隙も与えず、ハイクはやや早口で言葉を続ける。
「ついでに言っておくと、シリカは俺の妹だからな？　あいつは口だけは達者だから、お前みたいなのは絶好のカモだったんだろう。つまり結論を言及すると、お前はからかわれただけなんだ。俺もシ

リカも単なる人間で吸血鬼ではないし、お前もハンターではない」
「えぇ、そうなんですか！？」
サティは両頬に手を当てて、ショックポーズをキメる。
もはや仕込みのような気がしてきたハイクは、彼女にそもそもの疑問をぶつけてみた。
「お前、シリカに何て言いくるめられたんだ」
いわゆる変顔というやつだろうか、サティは頬に両手を押し込んだブサイク状態のまま、聞き取りにくい声で答える。
「えっと、三日くらい前でしたかね。私が駅前で『仕事なんでもします』のプラカードをラウンドガールのごとく掲げていたら、その色香にやられたシリカさんが、あたかも蜘蛛の巣にかかる寸前の蝶のようにひらひらと寄ってきたんですよう」
「あいつのために弁明しておくが、シリカは同性愛者ではないからな」
「シリカさんは訊いてもないのに軽く自己紹介してきた後に、『お前には吸血鬼を狩るハンターとしての素質がある。おそらく情報収集方面の才能だろう。先程、言及したように私は本物の吸血鬼だが、お前を一人前の吸血鬼ハンターにしてやっても良い。まずその修行の手始めとして、この写真に写っている男を尾行するんだ。そして逐一、私の携帯に近況を報告しろ。フフ……そうすれば、お前は気づいたらすでに、どこに出しても恥ずかしくない立派な吸血鬼ハンターになっているはずだ。ま、信じる信じないはお前次第だが？』」
「信じたのか」
「信じました」
「……」
「……」
「ああ、お前のダメなところは熟知できた。致命的な例を挙げてやる。まず依頼主に尾行を命じられているのに、ターゲットである俺に接触している時点でアウトだ」
しかも能動的に。

「はっ、確かに！　ここ最近ろくに食事を摂ってなかったので、この店の甘美な匂いに誘われて、ついつい……」
サティはしょんぼりと首を垂れた。
喜怒哀楽の起伏が激しいのは結構だが、それも度が過ぎると情緒不安定な奇人だと思われるだろう。
（完全なるチョイスミスだな、これは。シリカの奴、人を見る目はまだ養い切れてないようだ）
「うぅ、せっかく仕事がもらえたと思ったのにぃ……天職が見つかったと思ったのにぃ」
しくしくと涙を流す元吸血鬼ハンターを放置して、ハイクは黙々とハンバーガーを口に詰め込み、それが終了すると席を立った。
「あ、あれ？　どこに行くんですか？　私を置いて行くんですか？」
うるうると捨てられた子犬のような瞳を、野暮ったい眼鏡のレンズ越しに向けてくるサティ。
それにしても下手くそな上目遣いだ。
同情したくてもできない。
「どこに行こうと俺の勝手だろう。赤の他人に教える必要はないはずだが？」
「でも、まだフライドポテトとジュースがたくさん残ってますよう」
「俺は小食でな。悪いが、勿体ないから処理しておいてくれないか」
すると、サティはきょとんとした顔で自身を指差し、
「私が？　良いんですか？」
「腹、減っているんだろ？　せっかくの食糧だ。無駄に捨てるのも環境に申し訳ない。人の食いかけで良ければ、後はお前が自由にしろよ。じゃあな」
「い、いただきます！　必ずや完食します！」
食糧代くらい経費で落としてやれよ、我が妹よ。
などと思いながらハイクはファストフード店を後にする。
出る前にちらりと見たが、本物の吸血鬼であるシリカに『吸血鬼はいる』と信じさせられ、その挙句に本物の吸血鬼であるハイクに

『吸血鬼はいない』と否定され、ころっとその説に寝返ったサティは目下の目的など忘却し、フライドポテトに夢中になっていた。
実のところ、ハイクの腹は八分目にも至っていない。
しかし、深入りすると厄介なことになりそうな相手だったので、今のうちに退散することにしたのだ。
きっと二度と会うことはないだろう。

そして、ハイクの予想は早々に外れた。
「いやはや経費で落とせるのは『永久切符』と電話代だけで、その他は自腹という条件でした。食いぶちはこれまで通り断食や盗みで何とか繋げますし、寝床はあなたのベッドに潜り込めば、ある程度の問題は解決できるという算段でしてね」
「前提からお前の計画は破綻していたわけか。いや、違う。何を俺は冷静に分析しているんだ。俺が問い詰めたいのは、何でお前が俺についてきているのかってことだ」
「あなたの尾行が任務なので」
当然のように、したり顔で胸を張るサティ＝ループ。
「あ、そうだ。ポテトごちそうさまでした。ちゃんと完食しましたよう。有言実行という座右の銘の下に」
彼女は早食い女だった。
そのため店内で別れた後、ハイクが駅に向かって雑多な雰囲気の地下街を歩いていたら、一分もしないうちに口周りを塩々しくするサティに後ろから追いつかれてしまったのだ。
「どうせ任務は失敗しているんだ。シリカから報酬は出ないはずだが？」
「じゃあ、あなたが雇ってくださいよう。こう見えても私、武術に長けてるんです。身辺警護から索敵、人肌恋しい夜の添い寝までお任せあれ」
華麗なウインクをキメたかったのだろう。だがサティはしっかり

両目を閉じていた。
「もう、ほんと冗談抜きで帰ったらどうだ」
なおも金魚のフンみたいに付きまとうサティとの押し問答が続く。
周囲に人がいなければ、駅での一件のように脅してでも遠ざけるが、それは叶わなかった。
シリカに目をつけられたとは言ってもサティは人間っぽいので、まさか撃つわけにもいかない。
「良いじゃないですか。男の一人旅なんてつまらないですよう。私みたいな美しい異性を連れて歩くだけで視界は鮮やかに彩ります。味気ないあなたの道中を私という存在が、お花満開に咲かせてあげましょうぞ」
「なんのセールストークだ、それは。お前みたいなコスプレイヤーが同伴しているだけで、奇異の視線を浴びている俺の身にもなれ」
事実、擦れ違う人々の視線が痛かった。
正直言ってシャベルで地面に穴を作ってでも、入り込みたいくらいのレベルで恥ずかしい。
だが、サティはさして動じる風でもなく、真っ直ぐ前だけを見て競歩を開始する。
「ささ、行きましょう行きましょう。すでに『永久切符』は手に入れてます。しかもあなたと同室する予定なのです！」
ハイクは思いっ切り双眸を剥いた。
「今、何て言った！？」
「ささ、行きましょう行きましょう。有言実行です」
「ふ、ふざけるな！　おい！　おーい！」
どこまでもアグレッシブなサティに右腕を引っ張られて、ハイクは地下街から太陽の下へと出るのだった。

∞　∞　∞

途中で人狼の邪魔が入ったことによって断念したあの人混みを苦

労して泳ぎ切り、目的の改札を切り抜け、なんとかプラットホームまで辿り着いたハイクとサティ。

端から端までが異様に長い近代的なホームには、フロントデスクがいくつか設けられていて、それぞれ二人の受付嬢が涼しげな顔で構えている。

ハイクとサティはそれぞれに購入した『永久切符』を受付嬢に差し出し、次にやってくる列車の宿泊手続きを行った。

『永久切符』の裏面に泊まる部屋番号が刻印され、それがそのまま部屋に取りつけられている電子ロックのキーになるのだ。

「私たちは二両目の一〇七号室ですね。いやー、楽しみですよう」

「おい、何ごともなかったかのように言うな。一波乱あったおかげで、また一本逃しただろうが」

プラットホームに設備されている休憩ハウスに入るや否や、ハイクは一番手前のベンチに腰かけ、うんざりした面様でサティに文句をぶつけた。

「俺一人だったら、面倒な書類手続きなんて必要なかったはずだ。普通『永久切符』とパスポートを手にしていたら、それだけでパスされるんだからな。見るからに怪しい格好をしてる奴でさえだ。……お前みたいに」

非難されているサティは、けれど澄ました顔つきでハイクの隣に座り、

「確かに性を自覚しつつある思春期真っ盛りな年頃の若い男女が、二人だけで同じ部屋に泊まって旅行だなんて、社会人という名の汚れてしまった大人たちの立場からしてみれば、不謹慎で破廉恥で卑猥で良からぬ営みを看過できない部分があるでしょうからね。ストレートに忠告はできなくても。……いや、あるいはあなたが大量の書類を書かされたのは、私たち若いカップルに対する、受付嬢（独身）たちの遠回しなひがみだったのかもしれませんよう」

「被害妄想が過ぎるんだが。受付嬢はお前と違って仕事に私情を挟まない。それと彼女たちを独身と断定するのは失礼にして早計では

ないか」
　フライドポテトにそういう効果があるのか、出会った時よりも饒舌になっているサティをジト目で睨むハイク。
　吸血鬼の少年は、息子の嫁に対する姑よろしくグチグチと嫌味っぽく不満を垂らし続ける。
「念のためにパスポートの他にも、身分証明書を持参しといて正解だったな。今回は俺一人だけが責任者として書類を書かされたが、二人とも書かされる羽目になったらお前はどうするつもりだったんだ」
「心配には及びませんよう。偽造パスポートの他にも、色々とシリカさんに用意してもらいましたから。革ジャンのポケットに突っ込んであります。架空ですが身分なら証明できます」
　ふふん、とサティはドヤ顔でそれを自分の功績のように語る。
「しかし、ちょろいもんですね。偽造かどうかも分からないなんて、確認する意味あるんですか？」
　シリカも一応は裏社会に生きる吸血鬼だ。
　偽造が一目でバレるような抜かりはしないだろう、と傍らのサティには聞こえないよう呟く。
「しかもボディチェックもしないなんて。私、一応は護身用の得物を隠し持ってるんですけどね」
「それなら俺もだが。このパーカーの下にリボルバーを携帯している。ライフルだのショットガンだの所持していたら完全にアウトだが、護身用の自動拳銃はセーフだ。サイズの規定もあったはずだ。持ち込めることができる得物のな」
「へー、そうなんですか」
「このご時世だ。反政府の旗を掲げる組織やテロ屋、大なり小なり人の世には危険が常に飽和している。自分の身くらい自分で守れということだろう。この列車だって、いつジャックされるか分かったものではないしな」
「よく分からないですけど、国も色々と大変なんですね。私は一日

一日を生きるので精一杯ですから、国の心配までしてる余裕なんかありませんよう」

「そうだな……」

ハイクはうわごとのように相槌を打った。

「皆、それぞれが大変なんだよな、きっと」

5

中規模都市のビル群。

その一角に事務所を置く〈レッドアウトファミリー〉は、人間社会でいうところの『金融マフィア』にカテゴライズされる組織だ。

貨幣の信用取引、金銭の融通を主な業務とする銀行や保険会社など、金融機関に介入することで利益を得ている企業的マフィア。

もちろん密輸や密売、麻薬取引など非合法ビジネスにも目を光らせてはいるが、そちらが活動の主体ではなかった。

近隣の組織に比べれば歴史も浅い方で、構成員はさほど多くない。

しかしながら、彼らファミリーには『吸血鬼の集団』というさらなる裏の顔がある。

それは常識を持った人間からしたら、眉唾物だと言って深く考えもせずに切り捨てる情報だろう。

それに彼らは『吸血鬼らしい行動』を取ったりせず、変な言い方ではあるが、ごく平凡に人間の中に溶け込んでいるのだ。

疑う余地がないくらいに。

それでも、〈レッドアウトファミリー〉の全員が全員例外なく吸血鬼であるのは事実。

他種族の血液情報やＤＮＡが混じっていない純粋な吸血鬼、『純血』。

吸血鬼と血液的に交わった結果、彼らの同胞となった元他種族、『混血』。

吸血鬼と他種族が肉体的に交わった結果、母胎から生まれたハーフの吸血鬼、『劣血』。

呼称の区別はあれど、彼らファミリーの間に差別は存在しない。

その証拠に、構成員には全員、『Ｒ』のファミリーネームが与え

られていた。
実態はそんなアットホームかつ硬派なマフィアのボスにして、『純血』の吸血鬼シリカ＝R＝サードは組織の幹部たちと暗闇で会合していた。
会議室の窓とカーテンを閉め切り、電灯は全て落としている。会議用の円卓の上に灯る一本のろうそくだけが室内唯一の光源だった。
適切に空調を効かせている会議室には、まるでこれから黒魔術の儀式でも開始するかのような、不穏な緊張が立ち込めている。
「そう、あれは私がまだ人間だった頃の話です」
黒服を着る幹部の一人、強面の『混血』がドスの強い声で口火を切った。
「とある地下鉄の駅でのことでした。当時、ファンクな音楽を愛するバンドマンだった私は、ナイロン製のギターケースを背負い、片手にはエフェクターやシールドなど機材類を詰め込んだケースを携え、ホームに立っていました。スタジオ練習が終わった帰り道。終電も近い夜でしたので、人気もまばらでした」
円卓を囲むシリカや幹部たちはしかつめらしく眉間にシワを寄せ、真剣な眼差しで彼の話に聞き入っている。
ろうそくの明かりに照らされて不気味な陰影が浮かぶまま、幹部の男は低い声で続けた。
「腕時計を見ると、電車がくるまで数分ほど余裕がありました。足元に重たい機材ケースを置き、私がぼんやりと電車を待っていると、一分もしないうちに私の左隣に七〇代後半と思しき老婦が一人やってきました。気品さえ窺える見事な白髪に、年相応のシワが刻まれている肌。それなりに折れ曲がった背。着ている衣服も見るからに上等そうで、特に変わった風貌ではありませんでした」
しかし、と彼は言い含めるように言葉を区切り、
「私は怪訝に思わずにはいられませんでした。なぜなら、その見知らぬ老婦は私のほとんど真横に並んだのです。距離などゼロにさえ

等しかったように思います。私が心の中で首を捻った、その直後でした」

ふわっ、と生温い風が全身を舐めるように吹き抜けた。

「地下鉄のホームでは電車が訪れる前に突風が巻き起こったりしますが、その現象ではありません。なぜなら予定の電車が到着するまでに、まだ二分ほど時間があったからです。まるで氷の指が私のうなじを這ったかのように、ぞくりと背筋が粟立ちました。妙な違和感にも襲われましたが、愚鈍な私では瞬時にその正体を掴めることはできませんでした」

話はいよいよ佳境に突入するのだろう。

起承転結で言ったら、三番目辺りだ。

「老婦は私に関心など示さず、無表情で前方を眺めていました。左側には機材ケースも置いていたので、気味が悪くなった私はそれとなくその老婦から離れようと思い、足元の機材ケースに手を伸ばしました。そこで、です。想像してみて下さい。私が前傾姿勢になる動作に伴って、背負ったギターケースの下部は後方に持ち上がり、突き出してしまいます。前屈みになると体は腰の部分で折れてくれますが、ギターケースやエレキギターはそうなってくれません。その際、私は真横の奇妙な老婦に気を取られていたせいか後方不注意でした。そして――」

トン、と。

軽く押し返される感覚があった。

それは持ち上がったギターケースの下部が、彼の後方に並んでいた誰かに当たってしまった感触だった。

「機材のケースを手に取る拍子に、私は見ました。両足の間から、私の後ろに並ぶ赤いハイヒールと青白い女性の足が。私は条件反射のように振り返り、相手の顔を見るよりも先に謝罪の言葉を述べました。しかし……そこには誰もいなかったのです」

心なしか風もないのに、ろうそうの炎が一瞬だけ強く揺らめいた気がした。

「私の思考は空白になり、隣には相も変わらず『距離が近いだけの老婦』がいて、数分後に問題なく電車は到着しました。ただ、帰り道で思い出したのですが、その駅のホームで一ヶ月前ほど前に女性が斬殺された事件がありました。ニュースにもなっていました。その事件と私が体験し、見たものに関係があるかどうかは、いまなお分かりませんが……」

重々しい口調で締めくくり、彼はろうそくに息を吹きかけた。

刹那、完全なる闇と沈黙が室内を支配する。

寒気をもよおす余韻を味わったところで、部屋の電気が部下の手によってつけられた。

「ふ、ふむ。な、なななななかなかにきょっ、興味深いははは話だたぞ」

額に冷や汗を滲ませているシリカが、ひどく引きつった微笑で怪談を語った幹部を賞賛した。

「ありがとうございます、ボス」

「ま、まままままあ、幽霊だの何だのはににににに人間の妄想にす、過ぎん。い、いるかいないかという『不確かさ』が恐怖心を駆り立てるのであって、わ、わたっ、私にとっては下らんあれだ。脳みそが個人にだけ見せる幻想なのだ。ふはははははははは！」

その時、音もなく会議室にやってきた側近の老紳士ヒカゲがシリカの背後に忍び寄り、彼女の耳元で故意的に囁いた。

「ボス」

「ぎょわあああああああああああああああああ！！」

シリカは椅子の上で数センチほど飛び上がった。

「予想以上のリアクションを……恐縮でございます、ボス」

「貴様っ……机の下で両膝を打ったではないか！」

心身ともにダメージを負ったシリカは、しってやたり顔のヒカゲを涙目で睨み上げた。

一方、羞恥に顔と耳を赤らめるボスに対し、周りの幹部たちは小声でひそひそ話を始めていた。

「冷血の暴君と恐れられるボスが幽霊を苦手とするとは……メモメモ」

「相反する意味で、弱点はトマトジュースとハイク様だけではなかった、ということだ。メモメモ」

「しかしそのギャップに萌えたのは、俺だけではないはず」

「激しく同意。弱点があってこそ輝く強さってものがある」

「よし、週に一回は怪談会を開催しようじゃないか」

「週に一回、シリカたんの恥ずかしげな涙目を目撃できるとか、すごいご褒美……」

口々に好き勝手を言うミーハーな幹部たちの声は、しっかりとシリカの耳に届いていた。

シリカは右眉をヒクヒクと上下させつつ、この場にいる全員に対して後で別件から引っ張り出し、折檻することを心に誓った。

「よし、これで全員そろったな。では始めるぞ」

弛緩する空気を改めるように咳払いし、シリカは年齢に似合わない厳格な声音で口火を切った。

彼ら〈レッドアウトファミリー〉の上層部が会議室に集まったのは、何も怪談話をするためではない。

「一度、話を整理して情報を共有しておこうか。吸血鬼と人狼の歴史ついて、私を含めてまだ疎い新参者もいるだろうしな」

シリカは会議用の円卓に放置していた煙管を手に取り、一口たっぷりと吸ってから、側に控えている側近に命令する。

「ヒカゲ、人狼のステータスを再構築しろ。再確認のレベルで良い」

「かしこまりました、ボス」

老紳士は朗読するような口調で唱えた。

「人狼。別名、銀狼。民族として山の奥や秘境など、世俗と切り離れた自然の聖地で今なお生き延びている、私ども吸血鬼と同じ人外種族の一つ。民族的思想、常に個より種全体を優先する傾向にある種族でございます。驚異的な身体能力に、卓越した五感は獣以上の情報感知力を備えておりますが、人間がフィクションに描くほど彼

らの肉体があからさまな銀狼化現象（ライカンスロープ）を起こすことはございません。目つきが獣のように据わり、髪の色が銀に変色する程度のもの。なお、現存する人狼は世界規模に視野を広げても、一〇〇〇に満たないと予想されております」

「オーケー、それくらいで良い」

淀みなく人狼のデータについて述べるヒカゲを片手で制止し、後の言葉はシリカが継いだ。

「私たちの先祖、と表現するくらい昔の話だ。何を勘違いしたのか、高潔貴族を気取った一部の吸血鬼が人狼を奴隷にしていた歴史がある。何も知らない人間から見れば、ただ身分の高い人間が身分の低い人間を下僕にしていたようにも見えただろう。ま、悪意の根本は同類だがな」

過去の事実を下らなそうに、あるいは自身の汚点を自嘲するかのように、シリカは小さく鼻で笑った。

「吸血鬼という存在の概念が、人間社会で広まったそもそもの起源。それは、高位の貴族を気取ったとある吸血鬼の一族に囚われていた人狼たちが、反乱を起こして逃げ出した後からだと言われている。当時にしては珍しい下克上を完遂したその人狼たちは、世界中に散らばった同胞を吸血鬼の檻から解放するべく、情報戦を図った。彼らはなかなかに狡猾だった。直接的な武力で吸血鬼に挑んでも、勢力的な問題から敗戦になるのは火を見るより明らかだったからだ」

そこで彼ら人狼が着目したのは、人間の恐怖心だった。

人の心理を巧みに利用した集団ヒステリーを起こすのである。

『吸血鬼』というイキモノが人間社会に隠れ潜み、人の生命を脅かす恐ろしい存在であることを誇張した民謡から、あらゆる情報を流すのだ。

「現代のようなメディアが普及していない時代だ。どれだけ貧乏でも一家に一台はあるテレビや、携帯電話やノートパソコンでお手軽に繋がるネット回線の構築など言及するまでもない。人から人へ、国境まで超越する情報の伝達方法は印刷術か、地道に民衆の間に噂

を流して広げるくらいしか伝播の手段はなかった」

しかし、人狼が作り上げた『吸血鬼の民謡』は効果的だった。

当時、西大陸では魔女と告発された人間を断罪する、『魔女狩り』なる風潮が広まっていたのだ。

こちらの東大陸にもその趨勢は伝染し、吸血鬼の畏怖と相まって思想の浸透を加速させた。

「やがて吸血鬼という生き物のイメージが固まり始め、書物にも『夜な夜な人の生き血を吸っては殺すか同胞に変える恐ろしいバケモノ』として描かれ始めた。マイナスの意味で吸血鬼は一大ブームになったそうだ。そうして絶頂期を迎えた頃に人狼たちは、最高のタイミングで人を襲った。人間たちが抱く吸血鬼のイメージを殺さないように、吸血鬼に襲われたのだと一目で連想できる『忠実な死体』を作って、な」

人狼も多くの人間を襲ったわけではない。

記録が正しければ全体でせいぜい一〇人くらいだ。

それも、死亡すると必ず世間で話題になるような身分の高い者ばかり。

波紋を洪水に変えるのはそれだけで十分だった。

西大陸で広まっていた『魔女狩り』を参考に、東大陸にもやがて民衆法廷で吸血鬼を断罪する考えが確立したのだ。

「あとは簡単だ。人の疑心暗鬼の勢いを活かし、『夜の象徴、貴族風なイメージを持つ吸血鬼』に当てはまる吸血鬼を告発すれば良い。……人狼が企てたこの作戦において、たくさんの吸血鬼が殺された。何の罪もない人間も合わせれば、犠牲者は約四万人に及ぶ。『吸血鬼狩り』や『吸血鬼裁判』は一時的なもので、知識人や裁判の在り方の傾向がより近代的に変遷したことから、衰退のいっとを辿ったが」

吸血鬼が日光に当たると灰になるだの何だのといった諸所の説は、人狼が人間に広めた『民謡や童話』の名残に過ぎない。

説得力を持たせるための人狼が作った設定だ。

詳細を書き連ね、多くの情報を添えるだけで不思議と真実味が帯びたように錯覚させる印象操作である。

「その『吸血鬼狩り』を経て、多くの吸血鬼は変わった。そもそも人狼を奴隷にしていた一部の馬鹿どもが、それで根こそぎ殺された。現代の吸血鬼はその歴史を猛省した上で、人間社会に適応する傾向が強い。共存の道を選んだわけさ。人狼は今なおその歴史に囚われたままだが、話が通じないというわけでもない」

「ボス、それはどういうことですか」

先程、怪談を語っていた幹部の男が挙手して訊ねた。

すると、シリカは隣に控えているヒカゲにちらりと視線を送り、

「中にはこちらに歩み寄ってくれる人狼もいる。そうだろう、ヒカゲ？」

「ええ、知り合いを伝って彼らとコンタクトが取れました」

「会議前にヒカゲには、ちょっとした情報交換を頼んでおいたんだよ。そして、交渉は成立したようだ」

シリカは口角を上げ、小悪魔じみた微笑を湛えた。

「連中の長と繋がった」

∞　∞　∞

七二両編成の旅客用列車『世界鉄道』の真髄は、連結する車両のでたらめな長さではなく、天井の高さや横幅といった内装のゆとりにある。

一両一両がとにかく規格外に巨大な様は、高層ビルそのものが横倒しになって走行している以上のインパクトを、見る者に与えた。

車窓から外を望めば、それなりの速度で走っていることが窺えるのに、民間の普通列車による雑多な揺れは感じない。

おそらく下を向いて活字を目にしていても酔わないだろう。

どんな技術かは知らないが、素晴らしく快適な旅になる予感だった。

――言うまでもなく、隣で喜びにうち震えているサティがいなければの話だが。

「数多の娯楽施設に世界各国の名物料理を網羅したバイキング、さらにはデパートも完備。……おお、ここは女性専用のマッサージルーム。おや、あそこは美容院ですか。エステティックサロン、岩盤浴もありますね。美術館。博物館。図書館。健康ランド。室内プール。若者やカップルにはシアタールーム。ゲームセンター。カラオケ。なんと小規模なライブハウスまで。至れり尽くせりですね。全部、制覇しましょう。有言実行の名のもとに」

「黙れ。取り合えず俺たちの部屋に行く。扉の機械とやらに切符を通さないことには、チェックインしたことにならないらしいからな」

「ああ、うっとりしちゃいますよう。まるで夢の国のようです。絶対に網羅しましょうね。有言実行の名の下に」

夢の国の住人となりつつあるサティの主張を受けて、ハイクは格車両に一つずつ溜息を落としていく。

乗車する車両を間違った二人（慣れないことだったのでちょっと緊張していたのだ）は、六〇両目の『多目的車両』に乗り込んでしまっていた。

どういう仕様なのか瞳を一番星みたいにランランと輝かせて、いちいち脇道をしまくろうとするサティの首根っこを掴み、ずるずるとみっともなく引きずったまま、ハイクは車両の幅広い回廊を行く。

「言っておくが、ああいう施設の料金は別だからな。『永久切符』は単なる乗車券だ。貧乏なお前にあれら全てを遊び尽くす財力があるのか甚だ疑問なんだが」

「？　何を言ってるんですか。私のお財布さん」

「良いだろう。心優しい俺はお前に二つの運命を選ばせてやる。銃弾を一発だけ装填した俺のリボルバーを受け取り、自分のこめかみに銃口を向けて引き金を絞るか、今すぐ列車の連結部分から外に飛び降りて大地のシミになるか。さあ、好きな方を選択しろ」

「どっちみち私、死んじゃうこと間違いなしじゃないですか！」

「ああ、絶命してくれとオブラートに包んで頼んだつもりだが？あまり無遠慮に言えた言葉ではないからな。もしかして上手く伝わらなかったか？」

「あなたSですね！　オブラートで包むどころかデンプンで膜を作る気もなかったでしょう！？　そんなに私を一人占めしたいんですか！　私を殺したって、あなたの物にはなりませんよ。私は皆の私だから！」

ぷりぷりと肩を怒らせるサティとそんなこんな不毛な言い合いを交わしながら、ハイクは宿泊専用の車両に乗り込んだ。

レジャー施設が密集している後方車両に比べ、こちらはやはり雰囲気が落ち着いている。

左側は外に面していて、間隔をあけて配置されている窓からは、流れ消える景色を目にすることもできた。

反対の右側は宿泊室で、部屋番号が振られた扉が等間隔に設けられている。

「えっと、私たちの部屋は二両目ですよね。うへー、ちょっと遠すぎません？　ここまだ五〇両目ですよ？　あっち側のエスカレータに乗って楽しましょうよう」

「それもそうだな」

一両につき部屋の数は九。

その中間地点、一〇五号室と一〇六号室の間には通路が横に割って入っている。

ハイクたちが歩いている通路は歩行用の通路で、宿泊室を挟んだ反対側にはエスカレータ式の通路が走っているのだ。

食堂車や娯楽施設が後方の車両に集積しているので、不人気な一両目に泊まることになった旅客や足腰の弱い高齢者への、設計者からの配慮である。

「やっぱり人気なんですね、後方側の車両が」

「当然そうなるだろう。五〇両目の一〇九号室なんて立地条件が最高ランクだ」

「一両目と二両目しか空白なかったですもんね。どうしてこうなってしまったのでしょう。私たち完全に時代に取り残されてますよう」
「原因はおま――いや、もう突っ込まないからな」
書類手続きのごたごたがなければ、望んだ部屋も取れたかもしれない。
けれど、それについて言及しても失ったものは取り戻せないだろう。
「そんなこと言わずにどんどん突っ込んでくださいよう、ほらほら。ここは無言実行で」
「喜べ。たった今、お前の望みと俺の望みが共鳴した」
「――って、銃弾なんか無理ですよう！」
お尻をふりふりと振ってハイクを蠱惑的に挑発するサティが、リボルバーの銃口を見て慌てて佇まいを直した。

二両目に到着した。
右舷側のエスカレータ式通路から左舷側の歩行通路に移動し、一〇七号室を目指す。
二人はそのまま誰とも擦れ違うことなく部屋の前に辿り着いた。
『永久切符』の裏面に刻印されている宿泊コード。
その下に記載してある車両番号と部屋番号が、目の前の扉の数字と同じ値を示しているかどうか確認して、
「ここだな」
「ここですね」
ドアノブの上にカードリーダー用の機械が設置されてある。切手の裏面に刻まれた宿泊コードの情報を読み取るための施錠システムだ。
ハイクはパーカーのポケットから切符を取り出して、その機械に裏面のコードを照合させる。
ピッと簡素な電子音がしてロックがいとも簡単に解除された。

取っ手を回し、扉を向こう側に押す。
これでチェックインは完了だ。
まずハイクたちの視界に飛び込んできたのは、二メートルほどの短い廊下だった。
薄暗かったので、入り口の壁に手を這わせて照明スイッチをつけると、足元から上質な絨毯が奥のリビングまで敷かれているのが窺えた。
リビングにはソファやダイニングテーブル、大型の液晶テレビ、クローゼット、その奥にキッチンが設えられ、いずれの空間も白と黒を基調に、落ち着いた色調のインテリアでまとめられている。
リビングに隣接するベッドルームを覗くと、真っ白いシーツに包まれたツインベッドが置かれていた。
多少、寝相が悪くても転げ落ちることはなさそうだ。
パンフレットに記載されていた情報によると、バスルームには小型の防水テレビや音楽スピーカーまであるらしい。
日々忙しい時間を忘れて、癒しだけを追求する内装になっているようだ。
ユニットバスでないところも評価できた。
部屋全体のデザインは上品なシンプルかつモダンを主体にしているが、機能性や利便性を重視しており、細部にわたって心が休まるような配慮ある装飾になっている。
総評、はっきり言って非の打ちどころがない。
「ほへー、すごい贅沢ですねー」
サティがリビングの真ん中に突っ立って感嘆の声を上げた。
「旅の生活には不自由しないだろうな。下手に上質にこだわったホテルよりも快適だ。行きすぎた高級感は庶民には場違いな気がして、くつろげない。バランスが大事なんだ、バランスが」
「その点、この部屋はどの客層にも受けそうですね。ふむふむ、壁も防音仕様のようですし、ふふ……夜に大きな声を上げても問題はなさそうですよ？」

ベッドの上で意味ありげにシナを作るサティ。
聞きようによっては、異性の自由な想像力を良からぬ方向へ刺激しかねない言動だが、ハイクは右から左に流した。
「取り合えず、シャワーを浴びてきても良いでしょうか」
ハイクは無言でリボルバーを手にした。
「ち、違います違います！　たんに私が入りたいだけです！　他意はありませんよう！」
サティは血相を変えて両手をぶんぶんと左右に振る。
「三日ほど川で裸になって水浴びした記憶がないので、体臭が気になるんです！」
確かに彼女からは、ゴミ捨て場を彷彿とさせる悪臭を感じていた。近くに寄らなければ分からないレベルだが、ささやかに異臭がするのだ。
相手が人間とは言え、一応は異性なので口にしないでおいたが（異性の鼻から毛が飛び出しているのを発見してしまい、指摘しようかどうか迷う心境に近いだろう）。
「それなら、さっさと入ってこい。お前が出たらデパートの方に買い出し行くぞ」
ハイクはリボルバーをパーカーの下に戻し、何気に公然わいせつ罪に抵触した過去を持つサティに対して、憐れみの視線を投げかけながら告げた。
「デパート？　日用品でも買いに？」
「それもあるが、お前の服装があまりにも不憫だからな」
「？」
「自覚ないのか」
「よく分かりませんよう」
サティは演技でも何でもなく本当に分かっていない様子で首を捻り、バスルームに向かった。
彼女は半開きにした扉から顔だけをリビングに突き出し、
「覗かないで下さいね？」

絶対に言うと思った。
だから無視した。
「では」
バスルームの扉が閉まる。
脱衣所からサティの鼻歌が聞こえ始めた。
ハイクは小さな溜息をついてから、ソファの上にだらしなく寝そべる。
(先が思いやられるな。これだから他人といるのは苦手だ……)
どうしてこうなったのか。
脈絡のない平穏な一人旅のはずが、スタート時からすでに珍道中になっている。
それも初見の相手をパートナーにした二人旅だ。
(次の駅で一度、途中下車して逃げるのも手だが……)
このままサティと同じ部屋で旅行を続けるのは、勘弁願いたかった。
『永久切符』の特異なシステムを利用すれば、頭の弱い彼女をなんとか騙すことも可能だろう。
気休めに目を閉じ、サティから逃げる計画を頭の中で企てていると、
「うきゃあああああああああああああああああああああああああ!!」
突如、敵を威嚇するサルみたいな咆哮が室内に炸裂した。
それとほぼ同時に物凄い勢いでバスルームの扉が開き、そこから涙目のサティが見苦しく飛び出してきた。
――全裸で。
「中に! 中に! 幽霊!」
取り乱す、という動詞を体を張って分かりやすく実演するサティが、バスルームの方を必死に指差す。
――一糸まとわぬ、あられもない姿で。
「長い髪の、黒いのが、もじゃーって、ゆらーって!」

「落ち着け。そして、自分の格好を確認してみろ」
ソファに横たわったままのハイクはそちらを見もせず、実に冷静な声で唱えた。
しかしながら、その指摘はサティの混乱という火に油を注ぐ行為そのものだった。
何か大事なことを想起したかのようにサティは急停止し、装備状態〇になっている自身をゆっくりと見下ろす。
青ざめていたサティの顔色が、一息に赤くなった。
「いやあああああああああああああああああああああああああああああ！！」
赤面するサティは甲高い悲鳴を撒き散らしながら、速攻でバスルームに駆け込んでしまった。
エロチズムな発言を繰り返すわりには、裸は恥ずかしいらしい。
両耳に指を突っ込んで鼓膜を守っていたハイクは瞳を開き、呆れと疲弊の混じった表情で、やおら身を起こす。
「年中無休で騒がしい奴だな。ていうか――」
「うきゃあああああああああああああああああああああああああああああ！！」
「やっぱりな」
再び青ざめてリビングに転び逃げてきたサティに向かい、ハイクは辟易しながらも自身のパーカーを無造作に投げかけた。
演技なら大したものだが、彼女はどうも素の混乱を起こしているようなので、ハイクは仕方なくソファから立ち上がった。
床にへたれこむサティの横を素通りし、ショルダーホルスターに収まるリボルバーを構え、警戒しながらバスルームに向かう。
そこで微かに『第三者』の気配を悟った。
脱衣所に踏み込むと、気配はより濃くなる。
しかし、ハイクは静かな違和感を拭えなかった。
（これは……寝息か？）
殺気を感じない。

何者かは知らないが、侵入者にしても無防備すぎないか。
余計に用心する。
意に介さずリボルバーの引き金に触れている指先に神経が集った。
「そこに誰かいるのか」
スモークのかかった扉越しに声をかけるが、もちろん返答はない。
ハイクは息を止めて三秒数えると、バスルームの中へ一息に飛び込んだ。
全方位に素早く銃口を向ける。
「なっ」
気づいた時には、もう遅い。
ハイクは驚きの声を発していた。
彼の視線と銃口が、湯を張っていないバスタブに釘づけになる。
大人が四人同時に入っても（そのようなシチュエーションはちょっと不可解だけれども）窮屈を感じることはないであろう浴槽の中身は、けれど空っぽではなかったのだ。
その中に丸まって寝ている一〇歳前後の少女がいる。
彼女の全身を覆う長い黒髪を、ハイクはそう簡単に忘れたりはしない。
「どうしてここにお前がいる……？」
自問にも似た言葉。
それに呼応するかのように、少女は寝返りを打った拍子に目を覚ました。
上体を起こして寝ぼけ眼をこすりながら、双眸を丸くするハイクとリボルバーの銃口を見上げる。
くすんだ朱色と、宝石のような碧。
そして――オッドアイの少女は微笑みを咲かせた。
まるで安息の地を見つけた天使のように。
泉の都に辿り着いた砂漠の漂流者のように。

∞　∞　∞

微かに端っこが欠けた月が、雲一つない夜空に円光を放って浮かんでいる。
淀んだ空気が循環する地上に銀色の光がこぼれ落ちる、そんな静かな夜だった。
現時刻より早朝の八時間後まで列車が停まる予定がない『世界鉄道』の、広大なプラットホーム。
そこに夜間警備員の姿はなく、代わりに不穏な人影が複数蠢いていた。
民族を思わせる凝った衣装を羽織り、一様に木製の仮面をつけている者たち。
――銀狼の青年チェスター＝セドリックを筆頭とする一派。
ここにいる者だけでも二〇体以上。
けれど、それだけがチェスターの率いている全勢力ではない。
彼が束ねているのは、およそ五〇体の若い銀狼たちだ。
「どうだ。匂いは読めたか」
チェスターが仮面をしているとは思えないほど、よく通った声で訊ねた。
それに仮面を外して答えたのは、昼間ハイクと交戦した銀狼の少女――スカリーだった。
「残留している匂いの鮮度から推測し、すでに『原罪』がこの場から離陸して半日が経過している模様です。今から追いつくのは困難かと」
チェスターは淡々と応じるスカリーを仮面の下から一瞥し、
「たくっ。しかるべき準備を整えて姫様を迎えにきたってのに、これじゃあ肩すかしだ」
「しかし、追跡が不可能というわけでもありません。『世界鉄道』は世界最速ではありませんので」
人々の間では、『世界鉄道』は異国への移動手段というよりも、

『列車による旅そのものを楽しむ乗り物』として認識されている。
おまけに料金上、乗客はおのずと資産家が多くなってしまう。
そのため列車は安全性も含めて徐行運転を心掛けているのだ。
「んで、俺たちの移動手段の手配は？」
「すでに」
「けっこう。お前はいつも仕事が速くて助かる。だが……」
チェスターはやや右斜め上に顎を傾げて、仮面の内部で鼻をひくつかせた。
「嗅ぎつかれたな」
「？」
スカリーが怪訝な顔をした直後、彼女の後頭部を狙って飛来したナイフが突き刺さった。
否、月明かりを反射する銀色の切っ先が貫通したのは、スカリーの頭部ではなく彼女の後頭部に素早く腕を回した、チェスターの右手の甲だった。
チェスターは痛がる様子もなく右腕を戻し、缶ジュースの栓でも抜くような気軽さで手に突き立ったナイフを抜き取る。
スカリーは少し驚いた様相で目を見開き、振り返った。
そこに対峙するのは、闇に溶け込む黒服の男たち。
この街を縄張りとして生きるマフィア風情の吸血鬼たち。
「宣戦布告もなしに凶器を投擲して闇討ちたぁ、とんだご挨拶じゃねぇか。おかげで今、大切な同胞を失いかけたぜ？」
チェスターは自身の鮮血が付着するナイフを手中で弄びながら、あくまでも冷静な声で挑発した。
けれど、仮面に隠された表情までは、獰猛に彩らずにはいられなかった。
チェスターの背後に集結した二〇体の銀狼たちも同じ形相をしている。
「犬もどきが、こそこそと私たちの土地で何を嗅ぎ回っている」
先頭に立つ黒服の吸血鬼が温度のない口調で訊ねた。

対話する相手が人間だろうが吸血鬼だろうが、ここで仮面を外すのがチェスターの流儀だったが、向こうが何の予告もなしに攻撃をしかけてきたので、わざわざ顔を晒す義理もないと彼は判断した。

「いやいや、あんたらには無関係な事情さ。こっち側のトラブルでな。なに、心配しなくても吸血鬼様に迷惑をかけるつもりはねぇよ。捜しモノをしてるだけなんだしよ」

「ほう、それならこの時間帯にプラットホームを巡回する予定だった警備員数名が、どこに行ったか言えるのか？」

「別に殺しちゃいねぇさ。一般の人間だったし、俺たちも無益な殺生は好かねぇからな」

「利益になる殺生は積極的になるのか」

チェスターは面白い冗談でも聞いたかのように、肩を揺らして低く笑った。

「そう揚げ足を取ってくれるなよ。見逃してくれねぇかな。この街の空気、わりと嫌いじゃねぇんだ」

「『原罪』を捜しているんだろう？　チェスター＝セドリック」

チェスターは感心したように口笛を吹いた。

「情報が漏洩してんじゃねぇか。俺の名前までバレてらぁ」

「おそらく私たちが取り逃がした吸血鬼の少年が、彼らと通じていたのでしょう。不覚です。『原罪』を奪われたばかりか、この行動段階で吸血鬼に干渉されてしまうとは。……チェスター、全て私の責任です。申し訳ありません」

自責の念に重く言葉を吐くスカリーだったが、それとは対照的にチェスターは仮面の下で無邪気に笑った。

「はは、良いって良いって。気にするなよ、スカリー。ここで吸血鬼の集団が一斉に湧いてきたってことは、紫色の魔女（ミリーズ＝メリー）の『予言』通りにシナリオが進んでるって証拠だ。ま、少し早いご登場のような気もするが、俺たちの計画に支障はない」

紫色の魔女ミリーズ＝メリー。

その名を聞いた瞬間、めったに表情も変えず、口応えも不満も唱

えないスカリーの顔色が不服そうなものに変じた。
　チェスターは彼女の微細な感情の変化に気づいていたが、あえて触れることはせず言葉を続けた。
「それによ、俺らみてぇな『部族を抜けた銀狼集団』でも、流儀は通さずにいられねぇタチだろ？　戦をするからにはリスクと報酬をかける天秤がある。勝者に戦利品が与えられんのは当然の摂理だ。あの場で撤退し、『原罪』を置いて行かなきゃ俺は逆にお前を許せなかったかもしれねぇ。まったくもって面倒な思想とプライドだが、もはやＤＮＡレベルで染みついてんだから、どうしようもねぇさ」
「……ありがとうございます」
　さて、と区切りをつけて、チェスターは改めて吸血鬼たちと睨み合った。
「マフィアもどきの吸血鬼の皆さん。俺たちに要件……つーか言いたいことがあんだろ？」
「お前たち全員を拘束する」
「それでそちらさんに何の利益が出るのか知らねぇが、嫌だと言ったら？」
　チェスターが下から探るように訊ねると、
「殺害も辞さない」
「おいおい、あまりにも冷たい態度じゃねぇか。吸血鬼はいつの時代も俺たちに対して差別的だ。ただ単に銀狼だからって理由で、俺たちを蔑む」
「お前たち全員が同胞から指名手配を受けていることは知っている」
「……じじぃども、吸血鬼に情報を売りやがったな。そこまでして俺たちを捕まえたいのかね、まったく」
　チェスターが舌打ちをするのと同時、彼の後方から前方に向けて空気が圧縮するように張り詰めた。
　同胞たちが吸血鬼を目の前にして殺気立っているのだ。
　いや、チェスターからしてみれば、今の今まで『衝動』を押し殺していた方が不自然なくらいである。

銀狼から殺意を受け取った黒服の吸血鬼たちも、一斉に懐へ手を差し込んだ。
こちらが攻撃性のある挙措を示した途端、そこから物騒な獲物が飛び出してくるのだろう。
「抗争か。それも一興だが……」
チェスターの言葉に対応するように人狼側が姿勢を屈める。
しかし、
「残念ながら、人間の真似ごとに現をぬかす連中に構ってる暇はねぇんだ」
こんなところで戦力を減らすのは非合理的だ、とチェスターは仮面の中だけで呟く。
「それじゃあな、吸血鬼の皆さん。俺たちがこの街にくることは二度とねぇだろうよ」
言い残し、強靱的な脚力でもって跳躍するチェスター一派。
闇夜に紛れるように散開し、駅のホームを去る。
チェスターの後ろから、すぐに銃声や風を切る音が追いかけてくるが、すでに弾丸の射程内から離脱しているためヒットはしない。
（そうだ。マフィアを気取る連中と対敵するのは、この街なんかじゃねぇ）
ミリーズ＝メリー。
あの紫色の魔女の『予言』によれば。

6

「女性の買い物に付き合うのは苦手だ……」

苦手分野がまたもや発覚してしまった吸血鬼ハイク＝Ｒ＝セカンドは、手持ち無沙汰な様子で試着コーナーの隅に突っ立っていた。

故郷を旅立ってから一日目の朝。

『世界鉄道』の後部車両で運営されているレストランのモーニングで軽く腹を満たした後、さらに後方の車両にある百貨店で、ハイクは取り合えず『三人分』の生活必需品を購入した。

こうして恥ずかしげもなく外出できるのも、列車内にハイテクなオンラインモールのシステムがあったおかげである。

ここには『世界鉄道』専用のインターネット回線が構築されており、部屋に支給されているパソコンからサイトにアクセスして注文すると、商品を自室まで無料配送してくれるのだ。

何度も言うようだが、『世界鉄道』は東大陸各国を横断する列車である。

となれば必然、車両内は常に他国の文化で混沌になる。

いちいちカルチャーショックを受けていたら身が持たないだろう。

ゆえに、奇抜な民族衣装なら異国文化として受け入れてもらえる。

ラフな格好だって全くもって許容範囲内である。

おそらく若者ならジャージ姿でぶらつこうと、スウェットでほっつこうと、お咎めは食らわない。

せいぜい呆れ半分の眼差しを浴びるくらいだ。

だが、ベクトル不明なコスプレ衣装（ほとんど半裸）だけは駄目だった。

決して車掌に注意をもらったわけではないが、昨日、他の旅客と通路で擦れ違ったところ、

「見て見て、あの女の子。すっごい格好」
「ほんと、いわゆるコスプレってやつ？　ちょっと恥ずかしくて一緒には歩けないよね。特にこんな場所では」
「だよねー。ほら、隣を歩いてる男の子の顔も見てよ。すっごく涼しげな表情だよ。あそこまで神経が図太くならないと、きっとコスプレの相棒は務まらないんだね。羞恥心とかないのかな？」
「ないんじゃない？　真横に半裸同然の異性がいるのに、まるでそれが当然のように……むしろ胸を張って歩いてない？」
「言われてみれば、自慢げな顔にさえ見えてきたよ。もしかすると、実は男の子の方がそういう趣味なのかな。彼女に無理やりああいうのを着させて、正装する大人が多い場所を威風堂々と一緒に歩いてもらうとかいう、そんな危険なプレイなのかも」
「きっと、あの衣装も男の子が作ってるに違いないね。異国文化、恐るべし」
……などという許されざるヒソヒソ声が聞こえてきてしまったら、もうハイクとしては黙認するわけにはいかない。
なぜか最終的にサティからこちらに注目が向くのも腑に落ちなかった。
悪目立ちしたところで得なことにはならないというわけで、昨夜のうちにインターネットを利用して、サティ＝ループと『ララ』の服装をまともなものに強制転換した。
旅行列車とは言えど圧倒的に正装する成金の割合が多い『世界鉄道』列車内でも、せめて不審がられずに歩ける衣類を身繕ったのだ。
いくら正々堂々と切符を購入して正規ルートをパスしていると言っても、外見が変人奇人ならそいつは変人奇人としての眼差しを投射されるからである。
そうした白い目線に晒されないためにも、ハイクは二人にサイズや形状などを無視した衣服一式を与えた。
のだが、そこでアクシデントが起きた。
サティがその服にケチをつけ出したのだ。

やれ可愛くないだの、やれ美しくないだの、やれこんなダサいのは私には似合わないだの。

サティのファッションセンスには首を捻るしかないのだが、彼女には彼女なりのこだわりがあるらしい。

再び工事用ヘルメットをかぶり直そうとしたコスプレイヤーに、ハイクは渋々『後で好きな服を買ってやるから、それまでは頼むからそいつで我慢してくれ。いや、我慢して下さい』という契約を申し出て、交渉成立。

試着している女性二名を、ショップの隅っこで待っている次第である。

「お客様、とってもお似合いですよ」

「そ、そうですか？　へへ、私にはちょっと大人過ぎる気がしないでもないですけど」

「いえいえ、そんなことはありません。もうばっちりです。お客様はシンプルな方が映えるタイプなので、変に気張ったりせずこういう薄いピンクのカットソーにショートパンツ、さらには当店オリジナルのこちら！　カーディガン風味のダークグレー系ジャケットを肩に引っかける感じで足すと、ほら、三六〇度完璧です。ついでに、この野暮ったいメガネも除装しちゃいましょう」

「おお、確かに私じゃないみたいですよう！　新たな局面！」

「でしょう？　これで振り向かない異性はいませんよ」

「へへ、そうですかねー。でも今まではオスだけではなく、万人の目を惹きつけていた私からしたら、少しだけ地味な気もするんですが」

サティの興奮気味の声が届く。

工事用ヘルメットに革ジャン水着の変態時代からすれば、普通の格好をするだけでも見栄えは良くなるだろう。

もともとは素材が良いのだから。

というか、サティが感じていたのは万人の『珍妙なイキモノを見るような目』の間違いだ、間違いなく。

「……流されるまま、もう取り返しのつかないところまできてしまった気がする」

鉛みたいな重い溜息をつく。

昨日と今日で吐きすぎて、不幸も不幸を恐れてそろそろ寄ってこないかもしれない。

そんなことを嘆かわしく思いながら、ハイクは遠巻きに彼女たちの様子を眺めつつ、昨夜の出来事を回想した。

∞　∞　∞

ゆるやかに後方へと流れ続ける車窓に映る風景は、すっかり陽が落ちて暗くなっていた。

もし今が明るい時間帯ならば、窓の外に雄大な青い海と地平線も望めただろう。

「と、いうわけだ」

『世界鉄道』二両目一〇七号室のリビング。

ソファに腰かけるハイク＝R＝セカンドは、自身の歴史について淡泊に言い終えた。

もう色々と面倒臭かったのでサティに自身と妹が、本物の吸血鬼であることを打ち明けたのだ。

そして、サティの反応はハイクの予想以上に予想通りだった。

ハイクに騙されていたことよりも、新事実に対する驚きで一杯一杯のようで糾弾してこなかったのだ。

ここでハイクの言葉を安易に鵜呑みにせず、それ相応の怒りでも覚えれば、まだ学習能力の向上も見込めるだろうが、もはや期待はない。

コントロールする側としては楽で良いのだが。

ソファの差し向かいに座るサティ（装備品バスローブ）は、未確認飛行物体の群れを満天の夜空の中に発見した子供のようなはしゃぎ具合で、声を張り上げた。

「つまりつまりつまり、あなたとシリカさんはやっぱり私が睨んだ通り吸血鬼で、さっきのオッドアイの子は、あなたたち吸血鬼と人狼のハーフだというわけですね！？」

「理解してもらえて何よりだ」

「ああ、なんてステキファンタジック！」

恍惚とした表情を浮かべるサティの不謹慎さにハイクは渋面を作りつつ、ベッドルームの扉を一瞥した。

今頃ツインベッドの片方で眠りについているであろう、名前も知らない『劣血』の少女。

バスタブで再会した瞬間、彼女はオッドアイの瞳でハイクの顔を認めるなり、こと切れたように意識を閉ざしてしまったのだ。

精神面と肉体面の疲労によるものだろう。

詳しい事情など知る由もないが、あの人狼たちからの逃亡生活を送っているのならば、心身にかかるストレスはどれほどのものか。

「あの子の傷を確認してきたんだろう？　どうだったんだ」

「あなたの言う通り、彼女の体に傷なんて一つも見当たりませんでしたよう。あなたが罪もなき一〇歳の幼女に対して無慈悲に銃を発砲したという絶対無二の証拠も」

「……事実だから言い訳するつもりはないが、たった今話を聞いただけのお前にそこまで言われると腹が立つな」

「正論だけに？」

論破したぜと言わんばかりにニヤつくサティ。

今度こそ銃弾をかましてやろうかと思ったが、ハイクは極限の理性でもって、それを自重した。

このまま衝動に駆られて死体を生まないように、熱くなった思考を冷やしつつ、

（吸血鬼と人狼のハーフ。やはり人狼の治癒能力も備わっていたようだな）

女性であるサティに確認してもらったことだが、昼にハイクが銃弾で穿った彼女の右膝の銃創は、すでに癒えているようだった。

メンタル面はともかく、身体的な傷の治癒力は言うに及ばない。
あの程度の軽傷ならば、一〇時間もしないうちに皮膚が生まれ変わって消えるだろう。
（だが……）
それとは無関係に不自然だ、とハイクは思う。
（何だって俺に向かって、あそこまで心の底から安心した表情をする？）
先程の邂逅だけではない。
『世界鉄道』の駅構内でも、彼女はまるで行き別れた肉親と再会でもしたかのように、過剰なまでにハイクに縋りついてきた。
ハイクは彼女がより安全に、より速く病院に運ばれ匿われるようにリボルバーの引き金を絞った。
けれど撃たれた側としては、あれほどの横暴は堪ったものではないだろう。
治癒能力の高さと痛覚は全く別物なのだ。
ハイクを憎んだとしても不思議ではない。
なのに、彼女はハイクに膝を撃ち抜かれてもなお、瞳の中の希望を捨てなかった。
気づいたからだ。
彼女は。
あの状況で。
ハイクの良心に。
（異常なのは、それだけではないが）
ここでまたもや彼女に会ったことを、偶然と言って思い過ごすには無理がある。
なにせハイクが部屋を予約する際、ここは空白だったのだ。
ハイクはわざわざ相部屋などしない。
だというのに、蓋を開けると先客に彼女がいて、しかもなぜかバスタブの中（狭いところが好きなのだろうか、あるいは安心しないとか？）、小さな手に切符を握りしめていた。

この部屋番号のコードが刻印された『永久切符』を。
さらに、サティに頼んで彼女の衣服を漁ってもらったところ、内側のポケットから残高の減ったマネーカードと彼女の――おそらく偽造――パスポートが出てきた。
ハイクが治療費や入院費として無償で渡した、あのマネーカードと共に。
彼女も幼いとは言え人狼の特性を持っている。
意図的に気配を消すのはお手の物だろう。
ついでに優れた視力と聴覚があれば、ハイクたちの会話ややり取りから、この部屋番号も割り出せる。
あの厳重な書類チェックはハイク一人で済んでいたので、パスポートさえ所持していれば受付は突破できる。
一年分の入院費という巨額が登録されたマネーカードを『永久切符』発行に投資すれば、彼女がここにいること自体に矛盾はないのだ。
だが、そこで新たな疑問にぶつかる。
それは動機。
ここまでして、彼女がハイクを追い掛けてきた理由が分からないのだ。

∞　∞　∞

そうして、目覚めたのが今朝。
ここまできたら追い返すのも不可能だと諦めたハイクは、他人の貯蓄を食い潰す気満々のサティと共にレストランで朝食を摂りながら、『劣血』の少女にイエスかノーで質問に答えてもらった。
まずは名前を訊ねた。
なんとなく予測はしていたが、返答はノーだった。
言葉も話せず文字も書けないから『答えられない』という意味で、少女がかぶりを振った。

――とサティは思ったらしいが、そうではない。
ないのだ、名前が。
そこで便宜上、パスポートに記載されている『ララ』という名で呼ぶことになった。
次に年齢。
外見は一〇歳前後だが、実年齢は定かではないという。
ララは小首を捻りながら、自信なさげに小さな十指を全て広げて答えた。
それから気分が重くなる質問を繰り返していると、ララの自覚が確認できた。
無論、彼女自身が吸血鬼と人狼の間に生まれた『劣血』であることを、だ。
もしかすると、ララが言葉を話せなかったり文字が書けないのは、血の交わりではなく肉体面の異種結合による弊害なのかもしれない。
なお吸血鬼としての能力、つまりハイクと同じく何かしらの瞳術を有しているらしいのだが、彼女のジェスチャーだけでは要領を得ず、意味を捉え切れなかった。
一体、小指の先がどうしたというのか。
他にも、これまで人狼たちに監禁生活を強いられていたこと。
何かのきっかけで、ここまで逃亡してきたらしいことが判明した。
ララの意思表示が体の動きだけに限定されていても、質問の仕方によっては、もっと詳しい事情を浮き彫りにできるだろう。
『人狼たちによる監禁生活』という情報を得たハイクは、そこで推論する。
ララは人狼の遺伝子情報を得ていながら、吸血鬼の血液情報も合わせ持つハーフだ。
人狼側としては『原罪』と呼称するほどに汚らわしく忌々しい存在。
けれどハイクの中では、一つの考えが浮上していた。
昨日、交戦した人狼たちはララを『抹殺』ではなく、『拘束』し

ようとしていたのではないか、と。
それは吸血鬼を誘い出す囮、もしくは人狼たちにとって利用価値のある瞳術を所持する彼女を連れ戻しにきたとも推測できるからだ。
人狼にはない、吸血鬼専用の瞳術。
ララの能力がいかなるものか、今のところハイクに知る術はない。
だが、人狼にとって利益の出る瞳術があるのなら、彼らがララを殺さずに重宝するのも手だろう。
手元に置いておきたいララが自分たちの檻から逃げ出したともなれば、追うのも当然の行動だ。
（もし……昨日あの駅に俺がいなければ、あいつは……）
また監禁生活に戻っていたのだろうか。
ララはそこで一体、どのような暮らしを送っていたのだろう。
不自由はなかったのか。
寂しくはなかったのか。
辛くはなかったのか。
外の世界を望まなかったのか。
いや、それらは愚問だ。
だからこそ彼女はここにいるというのに。
「ララちゃんの方は、こんな感じのコーディネイトでどうでしょうか？」
と、いきなり店員に声をかけられ、精神的タイムスリップを果たしていたハイクは、目の前に意識の焦点を合わせて現在に回帰した。
そこに物腰の柔らかい二〇代後半頃の女性店員と、例の少女がいた。
吸血鬼か人狼か人間か外見では区別がつかないため、店員もララを人間の女の子と見て接している。
しかし、口がきけないことを事前に教えておいたので、保護者扱いされているハイクに一応訊ねにきたのだろう。
ハイクは店員に軽く会釈をして、何やらもじもじと下を向いて照れ臭そうにする黒髪の少女に目をやった。

店員に勇気づけられるように背を押された彼女の服装は、わりとカジュアルだった。

ベージュ系のシンプルなハンチング帽。

編み目が強調されているUネックのグレーニットの下に、控えめなレース地がフェミニンな印象をプラスしている白いブラウス。

ひざ丈スカートはトレンチコート風味で、そよ風に吹かれているかのような、ふんわりとしたシルエットを浮き彫りにしている。

薄めのキャラメルカラーだ。

他にもソックスやブーツ、おまけにネックレスまで。

一〇歳前後の小娘が、ませている気もするが清潔感があって全体的にバランスの良い服装に仕上がっている。

ハイクは作り笑顔を浮かべて言う。

「ええ、とても似合っていると思います」

半分は社交辞令みたいなものだったが、それでもララは嬉しそうな顔で店員を見上げた。

店員はそんな彼女に上手なウインクを返していた。

しかしながら女性の買い物というものは、まったくもって恐ろしい。

初日から手酷い出費を食らってしまった。

二人分の衣類一式が、一週間分の食料代を軽く凌駕するのだから戦慄せずにはいられない。

「こ、これが常識なのか？　シリカも衣服にこれほどの額を投入しているのか？　そう言えば、あいつはいつもお洒落だった気がするな……」

ハイクはこの世界旅行を実現するために蓄えた莫大な資金を所持している。

しかし、財布の紐を解いた奥は決して無限大ではない。

この調子で後先考えずにバンバン使い続ければ、一年後にハイク

の用意した旅行費は底を尽きてしまうだろう。
かつてはマフィアのボスとして、父が作り上げた吸血鬼の組織を束ねる立ち位置に君臨し、甘い汁を頂いていたわけだが、今は単なる旅鳥。
働いているわけでもないので、ハイクの口座にある金額が全てなのだ。
（まあ、一年後の『その時』がくるまでの問題だ。上手いことやりくりすれば、タイムリミットまで維持できるだろう）
その時。
タイムリミット。
聞く者に焦りを抱かせるそんな言葉が示唆しているのは、言うまでもなくハイクが血液中に患った不治の病――『黒血病』である。
血管を流れる血がドス黒く変色していき、やがてはコンクリートのように硬化してしまうという、吸血鬼特有の死に至る病。
治療法もなければ予防策の糸口すら見出せていない、薬剤投与による延命さえ望めない奇病。
人間の医師をやっている傍ら、密かに『黒血病』の処方研究を独学で進めているという知り合いの吸血鬼によれば、ハイクの余命は現在からたったの一年らしい。
発覚したのは一年前。
医師会に籍を置く知り合いの吸血鬼の自宅で――こういう言い方をすると滑稽かもしれないが――吸血鬼専用の健康診断を組織全体で受けた結果、『残り二年』と告知されたのだ。
初期段階（ファーストステージ）で早期発見しようとも、一度血液の内部で発症したらお終いと恐れられる死神のような病に対し、ハイクは諦めを含めた『妥協』に達するまで相当に苦悩した。
それでも、今は何とか達観できていると自負している。
それはなりたくもなかったマフィアのボスという肩書が消え、晴れて『時間制限つきの自由』を手に入れた旅鳥となれたからかもしれないし、死期段階（フォースステージ）まで吐血などの自覚症状が出ない特性のおかげ

なのかもしれない。
それに些細ながらも、救いがなかったわけではない。
発病者を絶対的死に追いやる『黒血病』は、遺伝病や感染症の類ではないと判明しているのだ。
それは吸血鬼の歴史も微力ながら証明してくれている。
よって同じ親から血を分けた妹や、同じ空間で長く過ごした同胞の吸血鬼たちが、自力で発症しない限り、この恐ろしい病に苦しむことはないのである。
少なくともハイクから彼女たちの生命に迷惑をかけることはない。
（不幸中の幸いだな。すでに一年後の未来を失っている吸血鬼なんかのせいで、これ以上妹たちの手を煩わすのだけは、ごめんだ……）
発症する原因がいまだ未知数なのは不安だが、もはや非力なハイクにできることは、妹やファミリーに負担をかけないよう、彼女らの未来を食い潰さないよう、街を離れて世界中を旅しながら、ひたすら静かに息を引き取ることくらいだった。
そう、波風が立たない湖水のように穏やかでゆっくりとした一人旅を。
「しかし面白いですよね」
そんなハイクの儚い願望を粉々に打ち砕いた人物が、眼前でマルゲリータピザを両の頬に目一杯詰めて、もふもふと摂取していた。
日用品の買い出しが終わり、ちょうど昼に差しかかったのでハイクたち一行は、両手に下げる買い物袋を部屋へ置きに帰ってから、ランチを食べにレストランが密集する後方車両に遠征し直したのだ。
そこでランチサービスをやっているバイキング形式の店に（サティが一目散に）突入し、円卓を三人で囲みながら昼食にありつく運びとなった。
店内は随分と開放的だった。
四〇卓ほど等間隔で配置されている席はほとんど埋まっていて、活気づいている。
客層は旅行列車ということもあり家族連れが多いが、子供たちの

教育が良いのか全体的に落ち着いていた。
天窓から差し込む温かな陽光を取り入れたエコ照明と、モダン風味の小奇麗な内装。
天井では白いファンがゆっくりと回転している。
店側の小粋な計らいで、ちょっとしたステージにてジャズバンドがＢＧＭを演奏してくれている。
ミドルテンポの耳触りが良いインストルメンタルが、店内をほどよい賑わいに包み込んでいた。
なかなかに洒落た演出だ。
良心的な料金も含め、ハイクとしては決して嫌いではない雰囲気のレストランである。
「いや、ずっと私なりに考えていたんですけどね」
「行儀が悪い。食うか喋るかリボルバーの銃弾を食らうか、どれかにしろ」
早食い女は慌てて口に含んだピザを飲み込んだ。
サティは隣に座るララがサンドイッチを矯めつ眇めつ不思議そうに眺め、恐る恐る頬張ってから電撃に撃たれたみたいに双眸を見開いて、もぐもぐと美味しそうに咀嚼する様子を横目で一瞥し、
「ざっくり整理しますと、つまり吸血鬼は私たち人間社会の流れやシステムを模倣した上で、その中に潜伏するように溶け込んで生きている人外の種族ってわけですよね。それって今、どれくらいいるんです？」
「全体の数なんて俺にも分からないが、現存している数はそう多くないだろうな」
ハイクはスプーンとフォークで絡め取ったカルボナーラを口に運んでから、答えるのも億劫そうな調子で応じた。
「吸血鬼から嫌味で『絶滅危惧種』なんて揶揄される人狼のように、極端に少ないわけではないが、それでも人類の繁栄した数には遠く及ばないだろう」
ハイクはサンドイッチがお気に召したらしい『劣血』少女の横顔

を盗み見てから、すぐに視線をサティの方に戻し、声を潜めて言葉をつけ加えた。

「生き残り、という表現が過言ではないくらいにはな」

「要するに、人間や人狼に正体がバレないように巧妙な工作で、上手く周りを騙して世に紛れ込んでいるのが現代の吸血鬼だ、と」

「人間にとって吸血鬼は、非現実的な世界に生きるファンタジーのバケモノだからな。昨今の創作物がその概念を肯定している。証拠と共に吸血鬼の存在を公表しても、社会に余計な混乱を招くだけだ」

吸血鬼は夜を統べる負の象徴。

人類の間ではその固定観念が強い。

吸血鬼の実在を受け入れさせた上で、そのイメージを覆すのは、ちょっとやそっとの活動では不可能に近いだろう。

ゆえに現状が最善なのだ。

現代の吸血鬼が人間になりすましている状態が。

そのせいで医師を務める吸血鬼たちが医学界で表立てず、『黒血病』の研究が滞っているのだとしても。

「俺たち吸血鬼は一見、人間そのものだ。見分けなんてつかない。お前もシリカに告白されたりしなければ、俺が吸血鬼だなんて思いもしなかったはずだ」

「はい、間違いありません」

「いや、『俺は吸血鬼だ』とカミングアウトされたからといって、それを真正直に信じるのも大きく間違っているんだが」

「あなたは、どこからどう見ても普通の人間ですよう。昨晩なんか吸血される気満々で全裸待機してたのに、あなたは一向に襲ってきませんでしたし」

こういう言動にいちいち反応するのもそろそろ疲れてきたので、ハイクは半眼でサティを見やり、軽い溜息をつくだけに留めておいた。

「……で、実際に吸血鬼を証明してしまうと、昨日は調味料を分けた隣人を今日は吸血鬼なのではないか、と疑う事態が発生するわけ

だ。疑心暗鬼による『吸血鬼狩り』の二の舞になる。いや、近代化した今ならもっと複雑で最悪なことにもなりかねない」

「複雑な？」

「ジェノサイドとかな。だから、俺たち吸血鬼はこういう生活に行き着いたんだろう」

ふーむ、とサティが深く考え込むような仕種をしていると、ふいに彼女の服の袖をララが横から遠慮がちに摘まんだ。

見るとララのトレイが空っぽになっている。

ハーフの少女は、サティに負けず劣らず食欲旺盛のようだ。

サティはララの所作だけで理解し、食事と会話を中断して席を立った。

ララの小さな手を姉のように引いて料理の並ぶ方へ向かう。

人狼の間でどういう扱いを受けながら監禁されていたかは定かではないが、どうポジティブに思考しても、ララの待遇が良かったとはどうしても思えない。

このような場所で食事をするのも、初めての経験だったかもしれないのだ。

勝手が分からなくて、サティを頼るのも無理はない。

……基本的に人狼は吸血鬼を呪っている。

個人個人が抱いている恨みつらみではなく、種族単位の怨恨だ。

そして、ララがいくら人狼の遺伝子情報を有しているとは言え、その中には吸血鬼の血が混ざっているのだ。

古来、自分たちの細胞が神聖なものだと信じてやまない人狼の種族は、吸血鬼の憎い血をその身に宿すララに対し、同胞並みの良い感情は抱かないだろう。

だとすれば監禁を強いられていたララにとって、この環境は不慣れなもの、と考えるのが自然だ。

例えば、生粋の田舎者が何の予備知識もなしに大都会に無一文のまま解き放たれた状況より酷いかもしれない。

そんなことを考えながら野菜たっぷりのミネストローネを飲み干

しているうちに、彼女たちが席に戻ってきた。
「しかし、おかしいですね」
席に着くなり、脈絡なく怪訝そうに首を捻るサティ。
「何がだ」
「どうして私の色仕掛けが、あなたには通用しないんでしょう」
「残念ながら俺は吸血鬼だからな」
いつもは呆れながら適当にあしらう種類のサティの疑問に、ハイクは珍しく取り合って回答を提示した。
「どういう意味です？」
サティは身を乗り出して興味津津といった体で訊ねた。
ハイクはこめかみの辺りを人差し指でポリポリと掻きつつ、間の抜けた表情で応じる。
「人間には興味ないんだ」
当然のようにそう答えると、サティはぱちぱちと何度か瞬きし、やけに得心した様子でポンと縦に拳を叩いた。
「なるほど。あれですか、それは三次元には興味がない的な言い分と同類ですか？」
「は？　三次元？」
人間は三次元以外にも『そういう興味』を示す対象があるのだろうか。
そう言えばオタクとかいう特殊な職業（？）のカテゴリーに属する人間は、二次元や一次元とかにも発情するとかしないとか耳にした覚えがある。
少し理解しがたい。
あれを対象にどうやって繁殖するつもりなのか。
「奥が深いな、人間の心理は」
「ちょっと勘違いしてるようですね……」
「しかし、俺の場合はあくまでも三次元の話だ。例えば……」
ハイクは比喩を用いようとして空中に視線をさ迷わせる。
すると一瞬だけ、サンドイッチに小さな口で齧りつきながら、二

種類の目でこちらを見つめる小動物じみたララと視線が合った。
「お前には好きな動物がいるか？」
「いますよう。猫より犬派なんです。飼ってたこともありますし」
「その飼っていた犬のことをお前は恋愛対象として見れるか？」
無理ですね、とサティは即答した。
「メスでしたから」
「おい、問題視するべきところを大きく間違っているんだが」
「冗談ですよう、チャッピーはオスです」
「いや、どの部分が冗談になっているのか理解できないんだが……」
俺の例え話が悪かったのだろうか？
ハイクがそんな風に思っていると、
「嘘ですよう。私はチャッピーを家族あるいは友達として見ていました」
「まあ、要はそういうことだ。ペットに愛情は注げるが、それは恋愛感情の類ではない。……世の中は広いし、オタクなんていう職人もいるくらいだから、『神様の証明』論理で否定はできないが、それでも特殊だろう。べつに人間をペットとか下等生物とか言って、見下しているわけではない。ただ、とにかく俺は他種族主義ではないんだ。人間の血肉には性的な魅力をこれっぽちも感じない」
「むう、ということは……ひょっとして私よりもララちゃんの方が一歩リードしてる？」
言葉を向けられたララは無邪気に小首を傾げた。
「その一歩は絶対に縮まらないがな。絶対越えられない一線は、なにせ種族の壁だ」
「世の中には幼女にしか興味を見出せない男性もいますからね。残念ながら私は美しく熟してしまった……」
「だから、種族の違いだと言っているだろうがっ」
自分の罪深さを無為に猛省しているサティに対し、ハイクは三白眼を向けて突っ込んだ。
と、何かを閃いたかのようにサティははっとして顔を上げる。

「あれ？　てことは何ですか。やっぱり私も吸血鬼さんに血を吸われれば、同じステージに上がれるという理屈では？」

ハイクは苦虫を噛み潰したかのような顔つきで、小さく舌打ちし、

「そこに気づきやがったか。だが、人間を捨てるのはやめておけ、と親切心で忠告はしておく。お前には恋愛感情を抱かない自信があるから、無駄骨に終わるだけだ」

「それにしても、人間だから欲情しない、ですか。こんな食べ頃な美少女がいるのに、道理で見向きもしないわけですよう」

「異性に無関心なわけでもないが、俺は人間の男ではないんだ。価値観も少し違う。判断材料は容姿や性格だけではなく、血の相性もあるからな。それに……」

「それに？」

「いや」

俺には後一年しかないから、と言ったらサティはどんな顔をするのだろう。

「そうですか。ま、私は血液型占いには詳しくないんで、割愛っと。次の駅はどれくらいで到着するんです？」

「切り替え早いな。お前のそういうマイペースなところは尊敬に値する」

ハイクはまたぞろ嘆息を落とし、

「次は明後日だな」

明後日、この列車は国境を越えて次の駅に停まる。

そこが大きなチャンスだ。

一人旅に連れは必要ない。

サティは貯蓄を食い荒らすだけの身元不明な他人だし、ララにいたっては危険そのものを孕んでいる。

騙すようで二人には悪いが、次の駅で共に下車してもらうつもりだった。

停車駅は、ちょうど有名な観光地なのである。

誘導するのには十分すぎる響きだ。

「明後日、ということは、まだまだ時間はたっぷりあるわけですね」
「舌舐めずりをするな。何が言いたい」
「この『世界鉄道』には暇を作れないくらいの娯楽施設があるじゃないですか。有言実行、しましょう？」
どうやら、サティはハイクを『金のなる木』とでも思っているらしい。
まだまだ集られる予感がし、ハイクの片眉が痙攣気味に引きつっていると、
「……」
ふいに、ララが拙い手つきでフォークとスプーンを駆使し、厚めにスライスされたローストビーフを自身のトレイから、ハイクのトレイの上に移動させた。
それはタイムサービスで一人一枚しかもらえない貴重なものだ。
「ローストビーフ嫌いなのか？」
そう訊ねると、ララは『分からない』とでも言いたそうな困った顔で俯いた。
サンドイッチさえ物珍しそうに食べていた彼女だ。
ローストビーフも口にしたことがないのかもしれない。
「鈍感ですね、あなたは」
「？」
「ローストビーフ、大好物なんでしょう？」
ガタッ、とハイクの椅子が狼狽する音を発した。
「ま、待て。何故そのことを知っている。はっ、まさか寝言か？寝言なのか？」
「いや、あなたが夢に見るほどローストビーフ好きだったなんて、それこそ夢にも思いませんでしたけど、いつも仏頂面のあなたがローストビーフを食べている時だけは、表情をほくほくと綻ばせていましたから」
「顔に出ていた、だと？」
「ええ、それはもう気持ち悪いくらい幸せそうな顔でしたよう。頭

がおかしくなっちゃったのかと思いました」
「無意識だ……」
自分の癖や表情とは、得てして他人に指摘されて初めて分かる時があるものだ。
「それでこれを俺にくれるってわけか」
ララは小刻みに頭を縦に振って肯定した。
不安そうな上目遣い。
まるで親切心をハイクに煙たがられるのではないかと心配しているみたいだ。
「そうか。それなら、ありがたくもらっておく」
我ながら子供相手に不器用な物言いだな、とハイクは自身の大人げない内面を毒づきながら、ほっと胸を撫で下ろしているララに厳しめの口調で、
「だが、小さいうちから食わず嫌いになるのは、良くない傾向だ。せっかくの食糧を粗末にしてはならない。命の資源は有限なんだからな。それに、そうやって他人の顔色を窺ってばかりで、責任転嫁する癖がついたら厄介だ。世の中はお前に対して甘くない。それは身をもって経験しているはずだ」
「あ、あの、ララちゃんもそういうつもりで、やったわけじゃ――」
「だから、俺もお前のためにならない甘やかしはしないつもりだ。肝に銘じておけ」
サティが間に入って助け舟を出そうとしたが、ハイクは彼女に一瞥すら与えなかった。
途端、ララは親から叱られた子供みたいに肩幅を狭めて落ち込む。
（たくっ、一〇歳児の気遣いなんか苦手だ）
間一髪入れず、ハイクは何食わぬ顔でフォークとナイフを手に取り、ララからもらったローストビーフを半分に切り分けた。
「これ、食べるのは初めてなんだろう？　上手いから食ってみろ。俺のオススメだ。そして現実を知るんだ。でなければ、お前は生涯そのものを後悔する」

一七年も生きたとは思えないくらい下手くそな言葉だったが、それでもララはトレイの上に戻ってきたローストビーフ二分の一を見つめ、

「……」

ハイクの目には確かに、その唇の動きが『ありがとう』と聞こえた。

7

自動ドアが左右に開けた瞬間、音と振動が雪崩のように溢れ出してきた。

圧迫感のある騒音に、ハイクは思わず両耳を塞いで顔をしかめる。

大量のコインが衝突する高音や、腹の底を震わせるリズミカルな低音、荷電粒子砲を連想するビームの電子音など、耳をつんざく様々な種類の音源が一面の壁となって押し寄せ、ハイクの聴覚をひどく摩耗させた。

「これが、ゲーセンか……」

しかしながらハイクの心中では、不快感よりも新鮮な気持ちが辛勝していた。

マフィア時代にこのような遊戯場に出向いたことがないからだ。

照明は基本的に薄暗い。

けれど個々のゲーム機から赤や青や緑や紫など、色取り取りのネオンじみた光源が発せられていて、がやがやと全体的にまとまりのない印象になっている。

ハイクは少し繁華街の夜を思い出した。

安価で商品を獲得するプライズゲーム。

モニタの映像をカーソルで操作する対戦格闘ゲーム、シューティングゲーム、レースゲーム、音楽ゲームなど死角はない。

メダルを利用した大人向けのギャンブルコーナーも、プリクラなる写真シール自販機ゾーンも存在した。

「あれは何だ？」

室内を見て回っていたハイクが、ふとゲームコーナーの一角に目を留めて呟いた。

一行は立ち止まり、巨大スクリーンの前で他のゲームコーナーよりも圧倒的な盛り上がりを見せる若者の集団に注目した。

巨大スクリーンの前には異様な物体が設置されている。
それは黒い卵型の機械だった。
人一人が乗り込める程度の大きさで、横並びに一〇機並んでいる。
そのうち八機の外装には、蛍光灯のようなグリーンの紋様が浮かび上がっていた。
「このゲームセンターで一番の売りだそうですよう。西大陸の科学都市『理想郷（マリアリア）』の最先端科学技術と、催眠技術を応用し開発された体感型対戦格闘ゲーム。自身が創作上のキャラクターになって、格闘ゲームの世界を体感するといった内容らしいです」
入り口でバニーガールが配っていたパンフレットをぱらぱらとめくるサティが、ページに記載されている情報を読み上げて答えた。
「科学者の発想や追求心には際限がないな」
ハイクはサティの持っているパンフレットを横から覗き見た。
そこには黒い卵型の機械の写真と共に、ゲームの概要が綴られている。
専門用語が多すぎて脳科学に知識がないハイクには、熟読してもいまいち理解できそうになかった。
「要するに、あの機械の中に座って専用のヘッドセットを装備するだけで、リアルな異世界に飛べるというわけか」
「意図的に見させる白昼夢みたいなものですかね？　特殊な電極で搭乗者を催眠状態にし、脳波のチャンネルを科学的にリンクさせ、特殊な電波でパイロットたちの意識をオンライン接続する。科学的には安全が保障されているみたいです」
「……何でもかんでも先頭に『特殊な』だの『科学的』だのつければ、良いと思っているのか？　一見、説明になっているようだが、実は全然なっていないからな」
「だって意味不明なんですもん。科学は専門外なんですよう」
ハイクもサティのことを言えた義理ではないので、それ以上は突っ込まなかった。
「一応、私たち外野も搭乗者たちの戦闘模様を観戦できるみたいで

すね」

サティが巨大スクリーンを指差して言った。

画面は等間隔に八つで区切られていて、それぞれが違うキャラクターを映し出している。

いずれのカメラアングルもキャラクターの背後から、キャラの顔の向きに同期するようで、市街戦の３Ｄ展開だ。

現在、戦闘シミュレート中なのは、四対四のチーム戦のようだ。

完成度の高いＣＧで構築された街中で、八人のキャラクターが激しく熱い闘いを繰り広げている。

ある者は箒にまたがって黒煙が立ち上る空を自由飛行しながら、地上に魔力の塊を落として爆撃していたり、そんな魔法使いに対して右腕に搭載する地対空ミサイルを放つ汎用型のサイボーグがいたり、かと思えばそんなサイボーグの迎撃を邪魔しようと横合いから奇襲をかける屈強な人獣剣士がいたり。

「面白そうですね……ごくり」

「やりたかったらお前も最後尾に並べばいい」

スクリーン上を観戦する若者たちに目を向ける。

そこはあくまでも観戦区域のようだ。

あのゲームは人気らしいから、プレイするには順番待ちをしなくてはならないだろう。

だが、周囲に列をなしているところが見当たらない。

ハイクがきょろきょろしていると、傍らのララがパーカーの袖を引っ張って、目の前のポップ広告を指差した。

この脳内オンラインゲームのイメージキャラクターだろうか、魔法少女めいたアニメ調の女の子が等身大のディスプレイになっている。

ララは文字を書けないし読めない。

けれど、そこに情報があると判断してハイクに教えたのだ。

事実、その勘は冴えていて紙素材のポップには注意点が書かれている。

「一見さんお断りの、完全会員制？」
つまり、このゲームに登録しているユーザーに招待されなければ、会員登録の資格すらないというわけだ。
「しかも前もってインターネットで予約しておかなければ、プレイできないみたいですね。ちょっとやじ馬たちに紛れて盗み聞きしたんですが、どうやら一週間先まで予約がパンパンだそうですよう」
サティは不満そうに唇を尖らせた。
「大人気だな」
「それもそうじゃないですか？　あれを見てくださいよう。様々な呪文を駆使する魔法使いは、空だって飛べるんです。あのプレイヤーは今まさに擬似的に空を飛んでいるんです。あのデジタル世界ならファンタジーの設定を現実みたいに味わえるんですから」
「非日常への渇望か。ま、諦めて他のゲームで遊べよ。ほら、ララなんてもう他のに目星をつけている」
子供らしいというか、すでにララは脳内オンラインゲームの場から離脱して、見知らぬ親子が挑戦しているクレーンゲームを横から見守っていた。
「サティ。あれは、どうやるんだ？」
「簡単なボタン操作ですよう。クレーンを操作して、中の景品をキャッチするんです」
「……あいつは、あの中のぬいぐるみが欲しいのだろうか」
「とても欲しそうにしてますが。……いえ、もしかすると、そうじゃないのかもしれません」
「は？」
「観察力を駆使してください。ララちゃんの注意はケースの中の景品よりも、あの親子のやりとりに照準されてる気がしませんか？」
言われて気がついた。
確かにララは、彼女と同じ歳くらいの少年と父親が、協力してクレーンを操作している様子そのものを見つめている。
その瞳の奥に、彼女は何を感じているのだろうか。

ララは自身の家族の姿を知らないらしい。
親がどういった存在なのか分からないのだ。
生まれた時から人狼たちの監視下にあったララは、本当にこの世界のことを何も知らないのだろう。
むしろ、知っていることを数えていった方が数倍速い。
(無知。それは他者から見て悲惨なものだな)
その時、クレーンゲームに挑戦していた親子が歓喜の声をあげた。
どうやら目当てのぬいぐるみが取れたらしい。
子供は幸せそうにぬいぐるみを抱え、父親とともにその場を離れていった。
そして、ララの形容しがたい眼差しは、その親子の背を追いかけていた。
「なあ、サティ」
「なんです、ハイク?」
まるで相棒の呼びかけに応じるように、サティは芝居臭い返事をした。
「あのクレーンゲーム、やったことはあるか」
「残念ながらありません」
「そうか」
ハイクは相槌を打ちながら、ララに歩み寄る。
彼女はまだ見つめていた。
どこからかアイスクリームを買ってきたらしい母親の元に駆け寄る少年の背を。
「どれか、このケースの中に欲しいものがあるのか?」
いきなり背後から声をかけられて驚いたらしく、ララは僅かに肩を震わせて振り返った。
そして、小刻みに首を横に振って否定する。
「そうか。それなら、これがやってみたいのか?」
ハイクはララの目線に合わせて腰を落とし、そう訊ねてみた。
ララはちらりとクレーンゲームのケースに物欲しげな視線を送っ

たが、即座に同じ動作で否定する。
（まったく。人の部屋に押し掛けるほどの図々しさと行動力を持っているかと思えば、この程度のことに遠慮する。さっぱり傾向が掴めないな。子供は単純ゆえに複雑だ）
そんなつまらない感想を抱くハイクにとって、クレーンゲームとは未知の機械である。
しかし世界旅行の意義を見出すなら、こうした新しいものに触れることが一番だ。
「分かった。それなら俺がやってみるとしよう。ララ、あの黒い猫のぬいぐるみをターゲットにする。俺はボタン操作を担当するから、奥行きの距離が掴みにくい。そこでお前はケースの横からクレーンの動きを見張り、あのぬいぐるみの真上に到達する直前で、手を上げて合い図をくれ。できるな？」
すると、顔を俯かせていたララは打って変わり、表情を明るくして元気に頷いた。
「よし、作戦開始だ」
ハイクが立ち上がり、準備運動でもするかのように首の関節を鳴らしていると、
「私、アイスクリームでも買ってきましょうか？」
「お前にしては気が利くな。頼んだ。ちなみに俺の分は必要ない。甘いものは苦手だ」
財布から硬貨を取り出し、サティに握らせる。
「了解ですよう。有言実行してきまーす」
たたっと駆け足でアイスクリームを購入しに行ったサティを見送り、ハイクは珍しくニヤリと笑って、
「ララ、投資するからには何が何でも、あのぬいぐるみを取るから覚悟しろ」

二六回目の挑戦でようやく標的だった黒猫のぬいぐるみがクレー

ンに掴まり、開口部に落ちた。
ララには内緒だが、ハイクが『視界の映像を脳内でスローモーションに書き換える瞳術』を行使して、慎重にクレーンを操作したからこその結果だった。
それでもララは大喜びしてくれた。
ハイクは開口部から戦利品のぬいぐるみを取り出し、ララに手渡す。
「俺がこんなファンシーなぬいぐるみを持っていても似合わない。お前が抱いていた方が断然可愛らしいだろう」
ララは言外に『良いの？』とハイクを見上げた。
本当にハイクが欲しがっているのだと思っていたらしい。
その反応でハイクは理解した。
彼女が欲していたのは景品ではなく、誰かとの思い出だったのだと。
よく見るとブサイクな造形をしている黒猫のぬいぐるみを、ララはまるで宝物のように両手で抱く。　心の底から嬉しそうに。
ハイクはそれを大袈裟だと感じたが、彼女の気持ちを馬鹿らしいとは思わなかった。
「そう言えば、サティのやつ遅いな。どこまでアイスを買いに行っているんだ？」
一〇分は経過している。
アイスクリームの売店が外にあるのかもしれない。
サティを捜しに行くか、それともここで待つべきか、ハイクはしばし迷った。
携帯電話でも持っていれば容易に連絡がつくのだが、あいにく誰も所持していない。
この場を離れてしまった結果、擦れ違う可能性もある。
そうなると合流するのが面倒だ。
「ララ、少しサティを捜してくる。あそこのベンチに座って待っていてくれるか？」

ララはこくりと素直に頷いた。
「サティがここに帰ってきても、俺を捜しにこなくて良いからな。すぐに戻る」
そう言い残して、ハイクは早歩きで店内を見て回った。
ずっとララを一人にしておくわけにもいかない。
ところどころにガラの悪そうな連中もいる。
金持ちの層だろうと貧困層だろうと、ああいった種類の人間はどこの世界にもいるんだな、とハイクは思った。
(最悪、迷子の呼び出しをアナウンスするしかないか。部屋の鍵も三人分、俺が管理しているわけだしな)
舌打ちを鳴らしながらも、ハイクは休みなく前後左右に視線を配る。
『さあさあ、第八回「パーソナル・オンライン・ファンタジー」バトルロイヤルの参加者はまだまだ募集中です！　優勝者には賞金とトロティーの授与があります！　腕に自信のあるファンタジスト、今すぐエントリーを！』
通りすがら、例の脳内オンラインゲームの一角が熱狂的に盛り上がっていた。
その人だかりの中心に道化じみた格好のスタッフが、マイクを片手に民衆を煽っている。
「本日限定のイベントを開催してるみたいですよう。参加者を一〇〇人まで募ってバトルロイヤルをやるそうで」
「へー、そうなのか。――って、サティ！？」
「とは言っても搭乗できる機械は一〇機までしかありませんから、各ブロックに分けて一〇人ずつ試合を行って篩にかけるトーナメント方式ですね。最後まで生き残った一人だけが、次のステージに進めるんです。その厳しい闘いに勝ち抜いた一〇人のプレイヤーが、優勝の座を巡ってさらなる死闘を繰り広げるわけですよう」
熟練者のように訳知り顔で解説するサティの右頬に、ハイクは咎めの人差し指を突き刺してグリグリした。

「おい、ここで何をしてやがる。お前は一〇分以上も前にアイスを買いに行っただろうが。得意の有言実行はどうした」
「長引くと判断しましてね。初心者が一発で取れるほどクレーンゲームは甘くないんですよう」
「未経験者のお前がクレーンゲームの何を知っている？」
「すぐに買って持って帰ってもアイスが溶けてしまうだろうと賢明な判断をした、私がここにいます」
サティの言う通りララは熱中していたが、それでもアイスをほったらかしてまで続行する必要もなかっただろう。
休憩を挟めば良かっただけの話だ。
「まあ、いい。あっちの方でララを一人にして待たせているから、もう行くぞ」
ハイクはサティの手を引っ張ろうとしたが、ふと道化スタッフの容姿が目に留った。
「いや、待て。あいつは……」
双眸を細めて、イベントの進行役と思しき道化スタッフの青年を凝視する。
「どうかしたんですか？」
「ああ、やっぱりか。サティ、ちょっと待っていろ」
言うなりハイクは歩き出し、小指を立ててマイクを握る道化スタッフの青年に近づいた。
と、そのスタッフは驚いた顔でハイクを見返し、人懐っこい笑みも露に両手を広げた。
「あ、兄貴！？」
「よう、久しぶりだな。元気にしていたか？」
「ええ、それはもう！　ばりばり働いてるッス！」
明らかに歳下のハイクに対し、道化スタッフの青年は表面上だけではない、心の底から敬いと親しみを込めた口調で言った。
「お前、ここで働いているのか？」
「はい、一生懸命働かせてもらってるッス！」

その道化スタッフの青年は、ハイクがマフィア時代に関わった人間だった。

かつては悪徳な詐欺グループのリーダーをやっていたが、高齢者相手に金銭を略奪するその活動が徐々に派手になってきたので、〈レッドアウトファミリー〉に目をつけられたのだ。

彼の詐欺グループは解散を余儀なくされ、それぞれが地方に散った。

のだが、なぜか彼だけは当分の間ハイクに忠誠心めいたものを見せて街に留まった。

その後、田舎にいる両親の容態が悪くなったとかで、引っ越したのだが。

あれ以降も、彼は改心して真面目に働き出していたようだ。

「ところで兄貴は、どうしてこの列車に乗ってるんスか？」

「慰安旅行といったところか」

青年は小首を傾げたが、彼はハイクが吸血鬼である事実までは知らない一般の人間なのだ。

ついては『黒血病』のことを説明しても仕方ないと思い、言葉を濁したのである。

「それより、このゲームに参加するにはどうしたら良いんだ？　一見は駄目なんだろう？」

「あ、それなら俺が招待します。そうすれば兄貴も登録できるッスよ」

「ありがたい話だが、登録したいのは俺の連れの方なんだ。できるか？」

「お安いご用ッス」

ハイクの役に立てるのがよほど嬉しいのか、彼はこの場を一度他のスタッフに任せて、プレイヤー登録用の機械端末の前まで案内してくれた。

ハイクは待機中のサティを手招きする。

「サティ、こいつの説明を聞いて登録するといい」

「え!?　できるんですか!?」
「プレイヤー登録はできる。だが、予約制だから一週間は待たないといけないんだろう?」
機械のタッチパネルを操作する道化に訊ねると、
「もし良かったら、今回のバトルロイヤルに参戦するッスか?」
「そう言えば、参加者募集中とか言ってたな。一週間待ちがいるくらい人気なのに集まってないのか?」
「実はまだなんスよ。募集スタート時に、古参の実力派プレイヤーのみが参加する変な雰囲気になってしまって、まだ枠が空いてる状態なんス。こうなると、無駄に空気を読んだ中堅やルーキーは参加しにくいんスよね」
「そうか。それなら助力しよう。うちの空気読めない姫が参戦する」
「ありがたいッス」
「え、ちょ、……ひょっとして、空気読めない姫って私のことですか?」
「他に誰がいる」
「あのう……、やり込み度が半端なさそうな玄人たちの中心に、私はいきなり放り出されるんですか?　ゲームに飢えた野獣の檻へ?」
全裸に等しい可憐潔白な美少女の私が?」
「全裸だろうとフル装備だろうと構わないが、精一杯、孤軍奮闘してくれ。それじゃあ、サティを頼む。俺はもう一人の連れを迎えに行くから」
「了解ッス」
「ふ、ふふふ……い、いいでしょう。そこまで言うなら私は必ずや優勝して、あなたを見返してやりますよう。有言実行無言実行予言実行」
涙目になって意味不明な言葉を口走っているサティを無視して、ハイクは踵を返した。
ハイクが率先してサティのために働いたのは、彼女の信用を買うために他ならなかった。

信用とは金銭で会得できるものではない。
もしも金の力のみで誰かの信用を得たのだとしても、それは自分に付属する『財力の信用』を勝ち取ったに過ぎないのだ。
資本の失墜が到来した時に、痛いほど分かるだろう。
真心が介在しなければ、いくら大金を積んでも本当の意味で人の心は奪えないのだ。
だからハイクは、その信用を利用して、首尾良く次の駅で彼女たちを騙す。

∞　∞　∞

巨大スクリーン上で踊る白き魔法使いの少女――サティ。
ステージは天空に浮かぶ巨大な城。
意外や意外、優勝してやると大言壮語を吐いた初心者（ダークホース）が、決勝トーナメントに進出していた。
「あいつ、魔法の才能あるな」
観戦者たちの後方で、ハイクは苦笑いを湛えつつ呟いた。
空域はもはや、箒にまたがる新参者の支配下にあったのだ。
開戦早々古参者たちに目をつけられた、空気読めずの魔法少女サティは案の定、えげつない集中砲火を浴びて苦戦を強いられた。
体力ゲージも空になる寸前まで陥り、あわや万事休すかと誰もが思った。
ところがどっこい、天から与えられしサティの『呑み込みの早さ』が土壇場で覚醒し、恐ろしい勢いで挽回を始めた。
彼女はただ黙って攻撃を受けていたわけではないのだ。
あのゲームの闘い方を古参者たちの動きから次々と盗み、さらにアレンジを加えて自分のものにしている。
巨大スクリーンの前に群がる観客たちのボルテージがひと際強く、高く、大きく跳ね上がった。
一歩間違えれば阿鼻叫喚の絵図になりかねない熱気の理由は単純。

残りのプレイヤーが、ついに二人になったからだ。
サティの白き魔法使いと、謎の黒き魔法使い。
互いに体力ゲージは少ない。
魔法行使のためのポイントも、ほぼ同等の値を示している。
サティは天空を浮遊する城の庭園に下り立ち、黒き魔法使いと真正面から対敵した。
空を飛ぶのもタダではない。魔法行使ポイントを消費しなければならないのだ。
サティは懐から三〇センチ程度の白い杖を取り出して構えた。
同じく黒き魔法使いも黒い杖を構える。
『白き雪の妖精たちよ、我が声に応えてここに息吹け――ホワイトアウトエディション！』
サティが白魔法の呪文を高らかに唱えると、たちまち周囲の天候がぐずり始めた。
ぶ厚い雲が天空に浮かぶ城に向かって、明らかに不自然な流れ方で集結し、突如として猛烈な吹雪を撒き散らす。
視界は真横に吹き荒ぶ暴風と雪で白に満ちた。
二人の姿が激しく霞む。
あっという間に荒れ狂う雪が積もる。
サティは界隈を自身の属性に染め、自身の能力を強化しようとしているのだ。
だが、それには黒き魔法使いも黙ってはいない。
『黒き雷鳴の言霊よ、雷神となりてここに轟け――ブラックアウトエディション！』
黒き魔法使いが対抗呪文を詠唱すると、天空の城を囲む雪雲が、徐々に黒く変色していき、やがては稲光を内包し始めた。
狂ったように稲妻の閃光を生む黒い雲は、強烈な雪を降らせることをやめて――轟音と共に雷を放つ。
それはまさに電光石火のごとく勢いでサティの頭上に直撃し、彼女の残り少ない体力ゲージを瀕死一歩手前まで削り取った。

今まさに白と黒の決着がつく時。
黒き魔法使いは、奇跡的に生き残った白き魔法使いに引導を渡すため、雪の中で麻痺状態となって動けないサティに歩み寄った。
黒き魔法使いは、先程の大魔法で魔法行使ポイントを全て消費している。
近接格闘技でサティを仕留める気なのだろう。
と、そこでハイクは気がついた。
サティの魔法行使ポイントが減っている。
その値は、彼女が『吹雪の魔法』を使って消費した時点よりも、さらに減少しているのだ。
その視覚情報に黒き魔法使いも気がついたのか、途中で足を止めた。
プレイヤーには自身の体力ゲージの情報の他、対戦相手の体力ゲージなどのパラメータが視界に映るらしい。
そして――爆発は唐突に巻き起こった。
雪の中に埋もれるように横たわっていたサティの体が、風船みたいに膨れ上がって破裂したのだ。
同時、城のステージ全体を揺るがすほどの火力が、黒き魔法使いに襲いかかる。
ガードする間もない。
破壊の塊をまともに食らった黒き魔法使いは、進行方向とは逆に思いっ切り吹き飛ばされた。
そして雪の上をぶざまに転がった直後、黒き魔法使いの体力ゲージは底を尽き、その姿がエフェクト音と共に砕け散る。
数秒の間隙を挟み、爆心地から少し離れた雪の下より、ひょこっと頭を出した勝者の姿をスクリーン上に認めるなり、会場には怒涛の歓声が巻き起こった。
「自爆、だったのか？」
「……違うッスよ、兄貴」
巨大スクリーンに視線を射止めたまま、道化スタッフの青年は恐

れ戦慄きながら言う。
「あの吹雪はサティの姐さんが、自らの分身と入れ替わるため、そして相手の魔法行使ポイントを消費させるためのトラップだったんスよ。爆発したのは囮の分身だったんス」
「だが、体力ゲージは減った。分身がダメージを負っても本体にフィードバックするのか？」
「このゲームは、自分の攻撃でもダメージを食らうシステムになってるんス。たとえば間抜けな話なんスけど、自分が設置した罠でもひっかかるとダメージを負ったり」
「分身が雷撃を食らうタイミングに合わせ、自分で自分を殴ってダメージを負ったのか。確かにそうすることで、体力ゲージの減り具合は自身で調節できるな。相手の攻撃を食らうよりも安全だ」
相手の視界を一瞬だけ奪い、その隙に分身をその場に置いて、積もった雪の下に隠れる。
さらに相手が必殺技を使うように誘導し、魔法行使ポイントを使い果たさせる。
パラメータの視覚情報を利用して、相手に油断させたところを爆発。
「頭が弱そうに見えて実は策士か、あの女……」
「それでは兄貴、あっしは授賞式の進行がありますんで」
一礼して去って行く道化スタッフの先に、拍手喝采をもって外野から歓迎されるサティの姿があった。
彼女は卵型の機械から下りると、目を白黒させて周りを見渡したが、すぐにスター気取りになって、黄色い声に手を振っていた。
そんなサティの振る舞いを遠巻きに眺めながら、ハイクはララと苦笑を見合わせた。

ところ変わって、ゲームセンター内のアイスクリーム店。
賞金とトロフィーを抱えるサティは、上機嫌で列に並んでいた。

「はい、これどうぞ」
賞金が包まれた金一封を差し出されてもハイクは意味が分からず、サティの爽やかな瞳を見返した。
「お礼ですよう。この服とか、おいしいお食事とかの」
「もしかして、お前そのために？」
「単なる思いつきです。世話になりっぱなしなのは、社会人として情けませんよう」
ハイクは微苦笑をもらして肩をすくめた。
「案外、律儀なんだな。だが、それは受け取れない。それはお前のものだ。俺が受け取るのは野暮だろう。それが嫌なら当分は自分の生活資金にすればいい」
「それもそうですね。では、せめてここは私におごらせてください」
「だから、俺は甘いものは苦手だと言っただろう」
ハイクはうんざりとした様相で溜息をついて、
「その代わりに、自分とララの分を贅沢にすればいい。俺は少し手洗いに行ってくる」
「分かりました。あそこに座って食べてますからね」
サティは店に隣接するベンチを指差す。
ハイクは無言で頷き、そのまま列から外れてトイレに向かった。
（お礼、か）
歩きながらハイクは再び溜息を吐く。
（人の金を使いたいだけ使おうとする傲慢な奴かと思いきや、実はそうでもない……。頭が悪いかと思っていたが、悪知恵だけは働く……）
昼食の時はララの新たな一面を知ったが、今回はサティの新たな一面を垣間見た時間だった。
ハイクは化粧室マークを目で追いかけながら、二人の顔を想起する。
脳裏に思い出されるのは、どちらも無邪気な笑顔だった。
（まあ……悪い奴らではないが）

だからと言って、このままなし崩しに一緒に旅を続ける気はない。
今日を含めて、あと三日の付き合いだ。
それまでなら紳士に接してもバチは当たらないだろう。
情が移らない程度に。
「あ、兄貴兄貴！」
ふと後ろから声をかけられた。
あの道化スタッフの青年だった。
彼はハイクの前まで駆け寄ると、膝に手をついて荒い息を吐いた。
「どうした？　そんなに息を切らして」
「あの、さっきは舞い上がってて忠告するのを忘れてたんスけど……」
「忠告？」
青年は乱れた呼吸も整え切らないまま、若干血の気が失せた顔色でハイクにこう告げた。
「サティさんの最後の対戦相手、ちょっとタチの悪い財閥の息子でして――」

ララとサティの手には、ボリューム満点のアイスクリームが握られていた。
ワッフルコーンの上にはそれぞれ味の違う球体が四種類、四段重ねになっている。
それをバランスよく落とさないように慎重にベンチまで運ぶ。
「ララちゃん、気をつけて下さいね。落とすのはもったいないですよう」
ぬいぐるみも小脇に抱えているララは緊張した面持ちで頷き、そろそろと小幅歩調で進んだ。
しかし、そこで予想外の出来事が発生する。
人狼の細胞をひく持ち前の五感から、ララはその物陰に人がいることは知っていた。

しかしながら、彼らがその死角から出し抜けに姿を現すとは思っていなかったのだ。
ララはとっさに衝突を避けようとした。
だが、焦るあまり足元が絡まってしまった。
ララは前のめりになる形で転び、べちゃっという音に青ざめた。
「あーあー、これ、どうしてくれるのかな、君」
粘っこく野太い声に、ララは擦りむいた手のひらではなく、頭上に目線を向けた。
「見てよ、これ。新品の高級スーツがアイスでべっとべと」
そこには小太りした背の低い青年と、ガラの悪い金髪の男たちがいた。
小太りした青年は上質そうな白のスーツを着ている。
けれど、太い首から下げるスカルのアクセサリーや、脂っぽい十指に嵌め込むいかつい金の指輪が、衣服の高級感を台無しにしている。
そんな成金青年――ティーチ＝バーロックを取り巻く目つきの悪い者たちは、タンクトップにジーンズというラフな格好だった。
皆、剥き出しの腕に畏怖の入れ墨が走っている。
「おいおい、人様にぶつかっておいて謝罪の一つもないぜ、このガキ」
「こりゃ弁償だな、弁償」
「勘弁してやれよ、まだ子供だぜ？」
金髪の男たちが卑下た笑いを含みながら同調すると、
「いいや、ダメだね。僕は子供も大人も女も男も差別も区別もしない平等主義者なの」
ティーチはにやついた顔で、ララを見下した。
すかさずサティが間に割って入る。
彼女はティーチにおずおずと金一封を差し出しながら、こう申し出た。
「あの、これで勘弁してもらえないでしょうか。あと、彼女は口が

きけないんです」
「ああ、君は確かさっき僕と健闘した白い魔法使いさんかな？」
あたかも初めてサティの存在を認識したかのように、青年は下品な目つきで彼女の全身を舐めまわした。
「はい。その、この賞金で弁償は足りるでしょうか」
「はっ、そんなはした金で」
そう言いながらも、青年はサティの手から金一封を乱暴にぶんどり、封を破ってマネーカードを取り出した。
そのカードに記載されている金額を見て、彼は鼻で笑い、
「ああ、まあ良いよ。これで。大した額じゃないけど、僕は優しいからね」
中身が空になった金一封を手のひらから落として捨てる。
「でも、次は許さないからね」
まるでスーツを汚した件とは別のことに対して釘を刺すように、冷徹に言い残して彼らは去って行った。
果たして、ララが大粒の涙を流していた。
「し、仕方ありませんよう。ララちゃんだって、わざとぶつかったわけではないのですし、あれ以上を要求されなかっただけ良かったと思いましょう」
思いっ切りやせ我慢で捻り出した言葉だった。
サティだって内心は恐かった。
それでも、ララの方が恐い思いをしたに決まっている。
彼女を慰められるのは、この場では自分しかいないのだ。
（さっきの人、確か黒き魔法使いさんでした。私に倒されたのが、よっぽど悔しかったのでしょうか）
「大丈夫ですよう。私が迂闊だったんです。新参者の私が調子にのって、彼のプライドを傷つけてしまったんです。原因は私にあるんです。ララちゃんは何も気にすることはありませんから」
サティは精一杯の優しい声を操って、ララの頭を撫でた。
「ハイク（あの人）にはうっかりな私がどこかで落としちゃったことにして、

謝りますよう。このことは秘密にするんですよ？　女同士の約束です」

けれど、ララは首を横に振って強く否定した。

そのオッドアイがサティの背後に向けられる。

「何でお前が俺に謝る必要があるんだ？」

サティの背筋が固まる。

ぎこちなく振り返ると、そこにハイクがいた。

何故か両手にアイスクリームを持っている。

「え、えっと……あの、賞金のことなんですが……」

「落としたんだってな」

「うっ……」

ハイクは足元に落ちている金一封を堂々と無視して、

「だったら俺が拾いに行ってやる」

「え？」

「きっと心優しい誰かさんが拾ってくれているだろうからな。そんな優しい連中に、わざわざ遺失物届けの手間を取らせるのは忍びないだろう？」

ハイクはサティとララにアイスクリームを手渡してから、彼女たちの背を強引に押して、ベンチに座らせる。

「ここでアイスクリームでも舐めて待っていろ」

∞　∞　∞

「それにしても空気の読めない馬鹿もいたもんだよね。ルーキーのくせにさ。ま、僕が手加減してやったことにも気づかないくらい鈍感で、ヒーロー気取りなんだから救いようがないよ」

小太りの白スーツ青年ティーチの言動は、もはや誇りでも何でもない。

全力で闘い合った結果、たとえ負けたとしても相手に素直な賞賛を与えないばかりか、自身の未熟ささえ認めず、あろうことか現実

で報復を決行するなど、単なる甘えん坊だ。
虚栄で見た目を肥やした中身のない矜持。
取り巻きの者たちはそれを理解していたが、口に出さない。
ティーチが恐いからではなかった。
彼が財閥の御曹司で、吐いて捨てるほどの金を持っているからだ。
それ以外にティーチと一緒にいる理由があるはずもない。
そんな単純な論理にも至らず、ティーチは王様にでもなった気分でバッティングセンターの一帯を陣取っていた。
他の旅客たちは彼らを恐れてこの縄張りには近づかない。
はずなのに、
「おい、何だ、てめぇは」
仲間の一人が威圧的な声を入り口に向けて放った。
見ると、そこには一人の少年が立っていた。
くせっぽい黒髪に、漆黒の眼球。
色は白くても比較的健康な肌。
年齢は一七くらいだが、顔立ちはそれより若干大人びている。
「いや、何。ちょっと頭の悪そうなお前たちに確認したいことがあってな」
「ハァ？　てめぇ、ふざけてんのか」
「Mなの？　よーし、分かった。お兄さんたちがこれでもかってくらいボコってあげるよ」
取り巻きの連中が一斉に少年に歩み寄る。
数という暴力が鋭さをもって一点に集中する。
ところが、少年の顔に恐怖の色は浮かばなかった。
ティーチの期待した通りの、怖気づく気配は窺えなかった。
案に違い、あるべき反応がなく、ティーチが眉をひそめていると、
「……低俗だな。サティでももう少しマシな会話のキャッチボールくらいはできる」
「おい、聞いたか？　今コイツ明らかに俺たちのこと馬鹿にしたよな」

「ああ、したした。すっげー見下された気分」
「リンチだ、リンチ。暴力沙汰になっても、ティーチの親父さんが金と権力でものを言わせてもみ消してくれるからな」
そんな脅し文句を耳にしても少年は表情を波立てず、ポケットから『スタッフ専用』の黄色いシールが貼られた携帯電話を取り出して、ディスプレイを男たちに向けた。
「ここに監視カメラから映像データを転送した証拠がある。黒き魔法使いと、そのお仲間たちが、タイミングを見計らってとある少女にぶつかり、それに因縁をつけて白き魔法使いから賞金を略奪した映像がな」
「ああ、てめぇあの嬢ちゃんたちの……何だぁ、王子様でも気取って取り返しにきたってのかよ」
「マジで格好つけんなって、おい。半端な正義感出したってダサい結果に終わるだけだぜ」
言いながら、日に焼けた肌の金髪男が一歩前に踏み出して、少年に殴りかかった。
彼にはボクシング経験があり、この集団で最も喧嘩慣れしている男だ。
その男の見事な右フックが少年の顔面に叩き込まれる。
――その寸前。
「残念だが、俺の行動は正義感でもなければ偽善でもない」
ティーチ＝バーロックは確かに見た。
「真っ赤な悪意だ」
その少年の双眸が、妖しげな朱色に染まっているのを。

「「「「「ほんとっ、心の底からすみませんでしたッ！！」」」」」
これほど猛省する誠意の表れ方は他にないだろう、というくらいの金髪男たちによる渾身の土下座が、サティとララの目の前にずらりと並んだ。

他の客がなにごとかと視線を向けてくる。
顔面を腫らしたチンピラ風情の男たちの後頭部に、二人の少女は戸惑いながらハイクに目をやった。
「賞金を取り返した。見ての通り、こいつらも反省しているようだから許してやってくれないか？」
ハイクが眠たげに言うと、サティは自身の背中に隠れているララに、
「え、えっと、どうしますか、ララちゃん」
いきなり選択権をゆだねられたララは、許しを請う男たちの後頭部を見ながら、コクコクと小さく二度頷いた。
「ララちゃんがそういうのでしたら、私も許します」
「だそうだ。よかったな、お前ら」
ハイクが額を床につけたままのチンピラたちに言うと、ガバッと金髪たちは一斉に顔を上げて、滝のような涙を流しつつ、
「「「「はい！　お手数かけて申し訳ありませんっした！」」」」
「わたくし共も改心し、これから世のため人のため生きてゆこうと思います、兄貴！」
「良い心がけだ。陰ながら応援している」
「あざっす！　よーし、そうと決まれば早速ティーチの野郎にボランティア団体を結成させるぞ。つーか、あいつどこ行きやがった？」
「兄貴に恐れをなして『パパー』とか叫びながら半泣きで逃げてったぜ」
「あいつこそ姐さんたちに謝罪させるべきだ！　今すぐ拘束して頭を下げさせよう！」
結託した彼らを唖然と見つめるサティとララ。
ちなみに姐さんとは、この二人のことだ。
「「「「「では、兄貴！　わたくしどもはこれにて失礼いたしやす！　何かご用があれば、いつでも呼んで下さい！　微力ながら兄貴――」」」」」

「あー、もう分かったから行け」
しっしっ、とハイクは鬱陶しそうに手のひらを振る。
腰を綺麗な九〇度に折って去るチンピラたちを、サティは見送りつつ、
「激しい忠誠心でしたね。もしや吸血でもしたんですか？　彼らの頬とか腫れてましたけど、あんな痛々しい吸血マークが残るものなんでしょうか。てゆうか、普通首筋にするものじゃないんですか？　いや、それ以前にほっぺたって、もう吸血じゃなくて単なるキスじゃないですか。あれはキスマークですか」
何を想像しているのか、サティは自身の体を抱くように腕を回し青ざめていた。
「アホか。ちょっと現実の恐さを教え込んだだけだ」
「男が男の頬にキス。確かに恐ろしい現実です……。しかし！　私はあなたの趣味にとやかく言うつもりはありません。受け入れる努力もしてみましょう」
「あれは俺が殴った傷跡だっ。見ろ、お前が頭の悪い憶測なんかするから、ララの視線が痛いだろう」
ララはサティの本気かどうかも分からない勘違いを信じてしまったらしく、泣き出しそうな顔でハイクを見上げていた。
この子にはまだ真と偽を見破る力がないらしい。
ハイクはララの目線に合わせて膝を下り、言い含めるような口調で誤解を解きにかかった。
「あのな、ララ。あまりサティのでたらめな言葉を信じるな。俺は――」
なぜだろう。
そんなつもりはなかったのに、口は滑ってしまった。
「――お前みたいな美人が好みだ。決して同性愛者ではないから、そんな顔で俺を見つめないでくれ」
瞬間、ララの頬が紅潮した。
子供に対するお世辞のつもりで発言したつもりだったのだが、予

想以上に効き目があったらしく、彼女は照れて顔をぬいぐるみに埋めてしまった。
　ララは可愛らしいが、その意味は違うし、幼女に手を出すほどハイクも飢えていない。
「ロリコンだったんですね」
　心臓を突き刺すアイスピックのようなサティの一言。
　一難去ってまた一難。
　ハイクの同性愛者疑惑は、ロリコン疑惑へとシフトする。

∞　∞　∞

〈レッドアウトファミリー〉事務所。
「…ボス」
「これか、私宛てに届いたという謎の宅配物は。でかいな。中身は？　まさか時限式の爆弾じゃないだろうな」
「いえ、私の瞳術で透視したところ危険物ではありませんでしたですが……」
「配送元は？」
「不明です。〈レナードファミリー〉でしょうか？」
「さあな」
「中身、見ますか？」
「ま、臭いで分かるが、一応確認しておくか。どれ……」
「……」
「ハッ、なるほど。悪趣味なプレゼントだな。私を死体愛好者か何かと勘違いしてないか？　ご丁寧に折りたたみやがって」
「処理の方はどういたしますか」
「そうだな、手厚く埋葬してやれ。神父も手配しろ。こいつは私の知り合いなんだ」
「え？」
「野暮ったい眼鏡と、このイカれた服装。見間違えようがない」

「ボスのご友人、ですか？」
「そんなところだ。どこか憎めない奴だった。……ふん、気に食わないな。これで決まったよ。私はこれから兄上の列車を追いかける。留守の間、事務所はお前たち幹部に任せた」
「それは構いませんが、〈レナードファミリー〉のところではなく、ハイク様のところへですか？」
「ああ、そうだ。ヒカゲに手の空いてる連中を五〇人ばかり集めて、対人狼武装の準備を整えるように伝えろ。すぐに『赤煉瓦の街』に飛ぶぞ、とな」
「し、しかし」
「ボスの緊急絶対命令だと言えばいい。最優先事項だ」
「……了解」
「さて、兄上に迫る危険をさらっと華麗に排除するか」

8

ハイクが一人でベッドを占領（リビングのソファに追いやられるかと思っていた）し、サティがララを抱き枕のように抱擁して寝る構図が成立してから、三日目の朝。

国境を越え、駅に到着する一時間ほど前の一コマ。

「観光地だ。寄って行くか」

ソファに座ってリボルバーを簡易的に分解整備していたハイクが呟くように提案すると、鏡台の前でサティに長い黒髪をドライヤーで整えられるララの瞳が輝いた。

同様にサティも嬉しそうな声を上げる。

「良いんですか！？」

「ずっと室内にいるのも窮屈だしな。そろそろ気分転換に外の空気も吸いたい頃合いだろう。異国の文化に触れるのが、この旅の醍醐味だと俺は考えている。ここで降りないと、次に足が地面を踏み締めるチャンスは四日後だ」

列車内は高級ホテル並みに豪華絢爛で、娯楽施設も豊富。

老若男女外国人問わず、幅広い層の旅客を飽きさせない工夫が、ふんだんに組み込まれていることも周知の事実。

しかし、インドアばかりでは息が詰まるのも当然だ。

あまつさえ、三人は遊べるところをほぼ制覇しつつあった。

（まあ、このタイミングで『永久切符』の特権を利用しない手はないからな）

次の停車駅は、『赤煉瓦の街』と呼ばれる有名な観光地のド真ん中だ。

『永久切符』さえあれば、途中下車しても無賃で再乗車可能である。

受付で切符の裏面に日付と時刻を刻印してもらい、その時刻から一二時間以内にこの受付を通れば、『永久切符』は無効にならない

のだ。
つくづく旅客のためのシステムが考案されているわけだが、言わずもがな、それまで乗車していた列車は次の国に向けて出発するし、宿泊する部屋番号も変わる。
下手したら満室で部屋が空いている列車がくるまで、待ちぼうけになるリスクも伴う。
とは言っても、寝床の心配をする必要は皆無だとハイクは予想している。
部屋数の需要よりも供給の方が上回っているからだ。
列車内で集めた情報によると、ソールドアウトになることは滅多にないらしい。
「よっしゃ、行きましょう！　おいしいものを食べ尽くしましょう！」
「ララ、何か食いたいものがあったら遠慮なく指を差せ。ただし、サティ。お前はダメだ」
「なんだと！？」
ぱあっと昼間の太陽みたいな笑顔を咲かせるララの背中で、どよーんと夜の月のような雰囲気でサティが肩を落とす。
そんなサティをハイクは鼻で笑って、
「無欲の勝利という法則を知るがいい」
「うー、私だってララちゃんにお土産買ってあげるからいいですもん」
「お前、賞金はすでに使い果たしていたな？　資金源が気になるところだが。というか、お前の対抗心の燃やし方は右斜め上だな」
てっきりララにならって物欲のない純情な様を真似するかと思ったが、ララの好感度に対して競争心をたぎらすとは。
「朝食はどうします？　せっかくだから、腹ペコなところを少し我慢して『赤煉瓦の街』で食べたいと希望してるんですけど」
「俺は構わないが、ララもそれで良いか？」
少女から頷きが返ってくる。

その顔に観光を心待ちにしているオーラが溢れていた。
「オーケー。それじゃあ、朝食は現地で摂り、旅というものを満喫する。寝坊組はさっさと支度を済ませろ」
さり気なくハイクに窘められたサティとララは、慌てて朝の身支度を再開した。

レンタルの旅行用キャリーバックに日用品をまとめたハイクたち三人は、下車してすぐにプラットホームの受付で再乗車するための手続きを済ませ、街中に繰り出した。
手続きの際には三人ともパスポートの提示が求められ、ハイクはララとサティの偽造パスポートがバレはしないかと一瞬手に汗を握ったが、結局問題は何も起こらなかった。
（それにしても、ララの偽造パスポートは誰が用意したんだ……。まあ、今となってはどうでも良いか）
そんな疑問とは今日のうちに決別できるので、ハイクはそれ以上深く考えず、下り立った街を眺めた。
ド田舎のような不便さが目立つわけでもなく、けれど大都会のように近代的に栄えているわけでもない、至って平均的に便利が開発されている『赤煉瓦の街』。
宗教の影響を色濃く受けている外観こそ古風だが、趣深くて清潔感のあるノスタルジックな風情の街並みだ。
パンフレットに記載されていた情報によると、特に黄昏時になると街全体が風景画のように美しく画変わりするらしい。
国外からも高齢者の観光客がカメラを携えて毎年やってくるくらいには定評があり、綺麗で賑わいのある街衢だった。
一行は、まず空腹を満たすため、繁華街の露店であれやこれやと歩きながら買い食いし。
その後、世界遺産にも認定されている機械仕掛けの銀時計台の前で、現地の人にポラロイドカメラで写真を撮ってもらい。

誰が何のために建造したのかいまだ解明されていないというミステリーに挑むように、街中に巡らされている数々の宗教的および神秘的石造オブジェクトを、専門の現地ガイドを雇って見て周り。『赤煉瓦の街』を隅々まで見渡せるという、ひと際でかい予約制の観覧車を三名で予約し。

昼食に新鮮な魚介類や珍味を扱う三つ星レストランで舌鼓を打ちつつ、体力を回復させ。

古代の円型闘技場がそのまま残っている場所まで、バス移動で見物し。

パンダやライオン、キリンの絵が描かれている看板を発見したララが、めちゃくちゃ行きたそうな表情をしていたので、家族連れで活気立っている動物園に寄り道し。

園内の屋台でクレープを摘まみつつ、ゾウの名物パレードをほのぼのと見送って。

黄昏時になる頃には、予約していた観覧車に乗り込み、その頂点から一望したオレンジ色の街並みは圧巻だった。

最後は、道なりにずらりと並ぶ土産屋の有名な店に立ち寄り、そこで大量に買い込んだ菓子類の袋とキャリーバックをハイクが、遊び疲れて寝息を立てるララをサティが背中で担当した。

観光客で賑わう、その土産街道の帰りしな。

ララを背負うサティは片手でその小柄を器用に支えつつ、もう片方の手をポケットに突っ込んで銀時計台の前で撮影した写真を取り出し、これまでにハイクが見たことのない種類の笑みを浮かべていた。

「まるで家族写真ですね」

遠い日の宝物に思いを馳せる声音と眼差しを写真に落としながら、サティはとみにそんな言葉を口にした。

「ん？　俺が父親で、お前がララの姉か」

「えー、どう考えても私はあなたのお嫁さんポジションでしょうに」

サティが持つ写真を横から覗くと、銀時計台をバックにして右側

にハイク、左側にサティ、そして二人の手を握って真ん中を陣取るララの笑顔が写っていた。

「どれだけ若い夫婦だ。俺は一七で、お前は一六か。ララは推定でも一〇歳前後なんだが」

「七歳のあなたが、嫌がってる六歳の私を強引に押し倒し……というシナリオですね、分かります」

「聞け、サティ。俺はなるべくこの素晴らしい『赤煉瓦の街』の人たちを、物騒な銃声なんかで驚かせたくないんだ。分かるな？」

「わ、分かります」

「利口な奴は長生きができる」

そんな冗談を言い合いながら、駅まで一直線に続く道を行く。

擦れ違う人々は、やはり年齢層が高い。

皆が皆、手に思い出を包みながら笑っている。

（人混みは苦手だが、こういうのは悪くないかもしれないな）

ハイクが感慨深い思いに浸っていると、黄昏色に染まるサティの横顔が言った。

「でも、……いいですよね。こういうのって」

「？」

「家族って響きが、とても素敵じゃないですか」

しみじみとした面持ちで写真をしまうサティを横目で一瞥し、ハイクは訊ねようか少しだけ迷った挙句、それを口にした。

「お前、ひとりなのか？」

一瞬、サティは虚を突かれたように両目を丸くしてハイクの顔を見たが、すぐに柔和に微笑んだ。

彼女は夕日に焼ける空に視線を投じ、噛み締めるように首肯する。

「はい、ひとりですよう」

「家族は？」

「家族構成は五人でした」

でした。

強調的な過去形だ。

周囲は喧騒が飽和しているのに、サティの声は不思議と透き通ってハイクの耳朶に触れる。

「お父さん、お母さん、弟と妹、私。今はバラバラです。でも、いつか必ず『買い戻す』んです」

買い戻す。

そういう不穏の色が混じった言葉に疎いハイクではない。

彼もだてにマフィアの頭をやっていたわけではないのだ。

治安の悪い国では家族単位で拉致に遭い、そのまま人身売買の要領で海外に売り飛ばされることもある。

行き着く先は様々だが、大抵が『労働者』になるだろう。

ひょっとすると、サティの家族もその類なのかもしれない。

となれば莫大な資金が必要となるだろう。

相手はおそらくマフィアと同レベルかそれ以上に厄介な組織だ。

バラバラの意味が、距離の問題ではなく肉体的な意味ではないだけマシなのだろうか。

「無能な私ですけど、働いて働いて働いて、いっぱいお金を貯めるんです。そうして、必ず家族を取り戻すんです。そのためだったら、どんな汚れ仕事でもこなしてみせますよう。有言実行の下に」

『労働者』を買うシステムに正攻法で立ち向かう、ということだろう。

にひひ、と屈託ない笑みで、サティはそんな覚悟を明かす。

そこに悲壮な思いは見当たらない。

あるいはハイクが読み取れないだけなのか。

どちらにしても、サティの双眸はひたむきに前の道へと続いている。

過去に足を竦ませている暇があるのなら、己が望む未来を掴むための現在を精一杯前進しろ、と銘じるかのように。

未来があるとは、つまりそういうことなのだ。

およそ一年後から先のないハイクにとって、不謹慎と理解しながらもサティの野望は、ひたすら輝いて見えた。

どれだけ手を伸ばしても届かない夜空の星のように、きらきらと。
「家族、か」
「あなたの家族は？　シリカさんが妹だって言ってましたけど」
「母親は俺が七つの時に病死した。その後、父親は失踪した」
「そうなんですか……。お父さんの行方は捜さないんですか？」
サティは悲しげに目を伏せはしたが、中途半端な同情は向けてこなかった。
そのことに妙な居心地の良さを感じつつ、ハイクはかぶりを振る。
「父親はすでに死んでいる。捜索の意味はない」
「え？　それってどういう……」
「直感だがな」
ハイクは適当な態度で誤魔化したが、彼の中ではそんな直感よりもう少し根拠だった論法がある。
吸血鬼という種族は、『血の繋がり』を重んじる傾向が強い。
父ラスト＝R＝ファーストが消失した時は、ハイクもファミリー総出で血眼になり、彼を捜索した。
けれども、ある日ざらついた喪失感が喉から心臓まで流れ込み、胸に穴を空けるような感覚を覚えてから、パタリと父を捜す意欲が失せた。
前兆などない。
いきなりだった。
そして、その症状はハイクだけでなくファミリーの吸血鬼たち全員が訴えた。
『血の繋がり』が直結する父を捜さない。
捜す意味がどうしても見出せない。
つまり、捜すべき血が失われたのだとハイクたちは気づいた。
父が死んだのだと、証拠は一つもないのに確信した。
まるで相互に繋がる血縁の糸が断たれたかのように。
「なあ、サティ。お前はこれから先、どうするつもりなんだ」
ハイクは話題を変えた。

少々あからさまだったが、サティも気にしない。
良い意味でも悪い意味でも、彼女は基本的にがさつなのだ。
「そうですね」
サティは思案の仕種で答えた。
「取り合えずは、夕食をお腹一杯に詰め込んだら、ララちゃんとお風呂に入って、あなたを甘い誘惑で籠絡する算段でもしながら寝ます」
「そういう意味ではなくてだな」
いっそ自身の余命が残り一年なのだと、サティに伝えてしまおうかという考えがハイクの脳裏に浮上する寸前、
「分かってますよう、それくらい」
今度は、寂しげな微笑みだった。
彼女の横顔は黄昏時の淡い色に相まって、哀愁の漂う『赤煉瓦の街』と同化したみたいに美しい。
「知ってますか？　誰の干渉も受けないモノの末路は、自他共に認める『無価値』でしかないんですよう」
急に発音された無価値という言葉。
これ以上にないくらい寂しく、心を締めつける言葉。
サティは朗読にも似た口調で続ける。
「視野に入れてくる誰かがいないなら、結果的にソレは『他者の世界から隔離されたモノ』と化します。価値の有無は『思想を持つ生命体』にしか推し量れないですから。私たちは知らず知らずのうちに、『ソレに接触の価値は有るか否か』を判定してるわけですね。ある程度の価値が見出せないのなら、無用に近寄ることも良しとしない。無価値とは私たちにとって無利益以外の何モノでもないんです」
「……サティ？」
「あなたやララちゃんと過ごせる時間は楽しいですよう。でも、それがいつまでも続かと言うと、そうではありません。始まりの果てには終わりがある。そして、終わりの果てにはまた新しい始まりが

ある。これは私からの予言です。あなたが立ち止まらない限り、そのループは永遠に続くのです。だから――」

――私を『無価値』の海から救ってくれて、ありがとうございました。

「お前……」

そんな詩的な言い回しをする奴だったか？

ハイクがそう言いかけた直前、だった。

世界が一瞬の暗転に伴って様相を変えた。

パチッというスイッチの音さえ聞こえた気がして、視界の風景はハイクを裏切るように古臭い白黒へと切り替わる。

まるで突然の停電みたいに、あるいは一瞬の時間を写したモノクロ写真みたいに、あれほど美しかった茜空が、あれほど鮮やかだった街並みが、何の前触れもなく単調なモノクロームの色彩に塗り変わって――

街道から人々が消えていた。

「こんばんは。いきなり失礼しました。驚かせてしまいましたか？」

おどけて歌うような声に振り向くと、ハイクの視線は奇妙な少女の姿を認めた。

距離にして一五メートルほど先。

両サイドに大多数の土産屋が並ぶ大通りの中央に、陽炎めいた輪郭が佇んでいる。

奇妙、とハイクに思わせる要素の一つは、その少女が袖を通している修道服にもあった。

初対面の相手に好印象を与えるつもりが毛頭ないのか、装飾は暗澹とした紫色を基調にしている。

神聖な修道服とは言え、その形状は毒や刺を連想し、見る者に警戒心を植えつけた（どうやらこの奇想天外の空間では、風景のみが白黒の対象らしい）。

おまけに少女の体格と修道服のサイズは、まるで合っていない。

手先は見えないくらいぶかぶかだ。

小柄な子供が恰幅のいい大人の着る服を、無理して着衣したくらいのミスマッチ。
ただし、フードの方は意図的なのか、目深に被っている。
そのため正確な年齢や顔立ちは把握できなかった。
容姿の全体像が判然としない相手に、けれどハイクは嫌な胸騒ぎを覚えていた。
だぶだぶの修道服に隠された、あの体つき。（シルエット）
目深に覆うフードの影から僅かに覗く、あの口元。
そして、独特の甘ったるい声と言葉遣い。
（いや、考えすぎか？）
ハイクは横目でサティの様子を窺う。
彼女はこの異常事態にひどく驚愕しているのか、言葉もないまま全身を強張らせていた。
少なくとも冷静さを欠くようなパニック状態には陥っていない。
それがせめてもの救いだった。
ここで騒ぎ立てられても、ハイクにはフォローできる自信がないからだ。
もっとも、サティの頭の中だって収拾がつかないことになっているのだろう。
世界の時計が針を止めたみたいに、突然周囲の景色がモノクロ写真にも似た白と黒に統一され、あれだけ活気づいていた界隈から、忽然と人々の姿が消えたのだから。
これで動じない人間がいたら、そいつは明らかに『そっちの世界を暗躍する側の人間』だ。
ハイクは冷静に状況整理を進めた。
眉間にシワを寄せ、辺りに素早く視線を配ってから、再び少女の出で立ちを注視すると、
「ようこそ、私の固有結界へ」
ハイクの見間違いか、猛毒を彷彿とさせる紫色の修道服を纏う少女の姿が、瞬きの間隙で蜃気楼のように揺らめいたように見えた。

ハイクはいつでも出撃可能な状態で懐に収まっているリボルバーに意識を向けながらも、前触れもなく現れた謎の少女の所作、その一つも見逃すまいと睨むように双眸を細め、
「お前は魔術師か」
尖った口調でそう問いかけると、少女は修道服の裾を軽くつまんで愛嬌良くお辞儀した。
「正解。初めまして、吸血鬼さん。私の名前はミリーズ＝メリー。正真正銘の魔女です」
「魔法少女が俺たちに何の用だ」
それはハイクの単なる嫌味だった。
魔女を名乗るミリーズ＝メリーとやらの背丈や、幼さの残る声音から、魔女と呼ぶに足らないと判断した。
挨拶もなしに、このふざけた空間に誘われたのだから、それくらい言い返してやらなければハイクも気が済まなかったのだ。
「手厳しいですね、吸血鬼さんは。私が魔女だって言ってるんだから、そこは深く突っ込まずに魔女で良いじゃないですか」
「安いプライドが傷ついたか。これからは身の丈に合った自己紹介を口にすることだな」
「辛辣ですね。サディストですか？　まあ私も自称『魔女』と唱えてるからには、その呼称にそれなりの愛着と誇りを持ってましたけど、あなたの挑発にのるほど高価なものでもありません」
あっけらかんとした態度で、ミリーズはハイクの煽りを受け流した。
踊るような調子とは裏腹に、意外と自分を客観視できるらしい。
少女だと舐めて対話をしていたら足元を掬われそうだ。
ハイクは三日前の結界を作成した者と、目の前の魔女が同一犯だと断定しつつ、あえて訊ねる。
「で、俺たちに何の用があって、こんなけったいな空間に落としたんだ」
「はいはい。そこで私ミリーズ＝メリーから問題なのでーす」

「は？」
紫色の魔女は口元にあどけない微笑みを乗せて、
「この結界内に人間はいるでしょうか、いないでしょうか」
どういうわけか先程のささやかな胸騒ぎが、ぶり返した。
「あなたの観察眼と推理力なら、即答できるレベルのサービス問題なので。さあ、どうぞ！」
「……くだらないクイズに付き合うつもりはない。大人しく俺の質問に――」
「ぶっぶー。不正解でーす。残念ながら、前回と同じくこの結界内に人間はいません！」
ハイクは表情をいっそう険しくしかめた。
ミリーズの悪ふざけに苛立ちを覚えたから、という理由だけではない。
思考回路のごく一部に泥水のような焦燥が混じっていた。
（何の子供だましだ、それは）
魔女、と自称するくらいだから、ミリーズ本人は人間なのだろう。
魔術を扱えるのは、人間しかいない。
この結界が魔術により構築されているものならば、前提として術者であるミリーズは人間なのだ。
そして、ハイクの傍らには異常事態に対応し切れず、フリーズ状態で閉口するサティもいる。
彼女は吸血鬼でも人狼でもない。
「それでは第二問。知識問題です。ジャジャン♪　どちらがオリジナルかはさておき、ドッペルゲンガーに遭遇したら、当事者たちはどうなってしまうのが通説でしょうか？」
しかめっ面のままハイクが意地でも無言を貫いていると、フードで目元を隠している魔女は、にやりと唇の端を吊り上げて、
「ヒント、いります？」
と言った。
そこでハイクはピンときた。

居心地の悪かった予感が、確信に変わった瞬間だった。
「お前……、まさか」
「自己像幻視の応用魔術ですよう」
刹那、ハイクは悪夢から叩き起こされたかのように、体を真横に向けた。
彼は常に視界の隅にララを背で守るサティの姿を留めていた。
この常軌を逸した事態に身を置き、微動だにできなかったサティの姿を。
けれど、そうではなかったのだ。
サティが硬直していたのは、非現実的な現象に対して思考回路が焼き切れたせいではなかった。
ましてや、謎の魔女と表面上の会話を交わすハイクの邪魔にならないよう、大人しく口を閉ざしていたのではない。
（これが、魔術……）
どさり、と。
ララが地面に尻もちをつく音。
サティの背中で熟睡していたララは、いきなりの衝撃に寝ぼけ眼を開いた。
くすんだ朱と宝石のような碧を湛えるオッドアイを瞬かせながら、サティの背と若干青ざめるハイクの面様に視線を往復させる。
サティの真後ろで地べたに座り込んでいるララの位置からでは、確認できないだろう。
あらゆる感情の色が抜け落ちたサティの表情を。
無表情と表現することすら生温い、虚無の顔色を。
魔女に生命の水をあまねく吸い上げられた後の、抜け殻じみた彼女の様相を。
「種、もう分かっちゃいましたよね？」
唱える。
紫色のフードを無造作に後頭部へ取り払った魔女が、嬉しそうに唱える。

「ソレは――」
嗤う。
紫色の魔女ミリーズ＝メリーは、サティ＝ループと同じ形の顔を狂喜的な微笑みに歪めて、嗤う。
「あなたたちが三日間、共に過ごしたソレは、私の人格の一部を吹き込んだ粘土細工なんですよう」
ミリーズの嘲る言葉を耳にするまでもなく、ハイクは絶句していた。
「とは言え、ソレ自体はあなたを騙そうとしていたわけではありません。なぜならソレは、私というオリジナルに関する記憶は持っていませんし、リモコンによる遠隔操作で動いていたロボットでもありませんから。完全に自律制御の傀儡なのです。記憶に関しては、私が都合の良いように『世界一分前始発説』の応用で改竄してますし」
ハイクは魔女の囁きをほとんど処理していない。
その代わり、彼はひたすらに凝視した。
瞳孔が開いたまま停止しているサティを、その抜け殻みたいな姿を瞼に焼きつけるように。
「あなたの心の隙間につけ込むには、こうするしかなかったんですよう。聡いあなたのことですから、他人の悪意には敏感でしょう。私自身が良い子ちゃんの演技であなたに取り入ろうとしても、見破られていた可能性が高いです。そこで名案が浮かんだわけですね」
ミリーズはハイクの動揺を楽しみつつ、用意していた台詞でもなぞるように語り続けた。
「だったら、無邪気な私を代用すれば良いじゃんって。で、今日がソレの有効期限だったんですよう。粘土を魔術的に人の形にして、私の人格の一部を吹き込む。こんな都合のいい力が、ずっと維持できるわけありませんからね。あっ、ちなみにですが、私のこの姿は単なる幻想です。立体映像です。実体ではありません。私は私の作った結界内なら、外からでもある程度の干渉ができますから」

だから、この場に人間は不在。
いるのは死を待つ吸血鬼と。
吸血鬼と人狼のハーフと。
魔術で人間にかりそめられた粘土細工。
「さてさて、話が温まってきたところで第二問の答え合わせをしましょうか」
ミリーズが唇の両端を裂いて陰りのある笑みを表出した途端、ハイクの足元が微かに揺れた。
目眩か何かと思ったが、違う。
大型の獣が腹の底から唸るような地鳴りが聞こえたのだ。
何だ、と疑問を抱くよりも先に、ミリーズの背後に凄まじい異変が生じる。
地面を人工的に固めるアスファルトが、まるで地下に潜む大きな手のひらに押し上げられるように、山なりに膨れ上がった。
蜘蛛の巣状の亀裂が簡単に臨界点まで達すると、コンクリートは噴火さながらのスケールで弾け飛んだ。
四方八方全方位へ、大小問わずの破片や土くれが撒き散れる。
地中に眠っていた巨大生物が時を迎えて覚醒を果たしたかのように、圧倒的ゆえにチープな光景だったが、地中から姿を見せた現実はその通り不条理そのものだった。
「そんなに驚くようなことじゃないでしょう？　道端の雑草だってアスファルトの亀裂から生えてるじゃないですか」
いいや、もはやコンクリートに走る亀裂を縫って、道端に芽を出したという次元ではない。
舗装された硬い地面を紙くずのように突き破って現れたのは、紫色の巨大植物だ。
樹齢が千年単位に相当する神木めいた植物が、足元の地瀝青を砕いて地上に開花したのだ。
ただし、その植物を直視して畏怖を覚える者こそいれど、敬う者はいないだろう。

巨大植物の表皮は新鮮な緑ではなく、毒々しい紫色だった。
ところどころに桜色の細胞も混じっている。
高さは三〇メートル強。
地中に巡る根を含めたら、全長がどれほどになるかは見当もつかない。
葉は全部で八枚。
主軸となる太さ一五メートル強の直立茎から枝分かれしている側軸に、それぞれ一枚ずつ付属している。
そして茎の頂点に咲く禍々しい色彩の花。
紫色の分厚い花びらには、毛細血管のような筋が浮かび上がっている。
それら花弁に囲まれた中央には、腐った果実のような球体状のつぼみと、長さの異なる蔦がだらりと垂れていた。
基本構造の根、茎、葉の器官が見受けられる時点で、おそらく維管束植物なのだろう。
しかし、これほどまでに馬鹿でかい植物をハイクは見たことはないし、知識にもない。
（魔術で調整された植物か。厄介だな）
硬質な土瀝青を割って顕現した正体不明の巨大植物。
ミリーズはその自信作を満足げに眺めてから、
「この際どちらがオリジナルかは問題じゃないんですよう。生き残った方が本物、それで良いとは思いませんか。出くわした瞬間、互いの存在を認識した直後、どちらかが生き残れば良い。私という存在は、この世界に二人もいりませんからね」
――まあ、今回は単なる出来レースでしたけど。
緩慢な動作。
魔女は右腕をゆっくりと胸元まで上げて、目の前の虚空を掴むように水平に伸ばした。
サイズの合っていない修道服の袖に隠されていた、五本の指を露にする。

その指先を、物言わぬサティへと照準する。
「では答え合わせです。刮目して下さいね？」
ミリーズの言葉に反応し、彼女の背後に屹立する気味の悪い植物の茎が、生物的な動きで激しく蠢いた。
それとほぼ同時、茎の天辺に生る腐乱したつぼみが、透明の粘液を引きながらパクリと横に割れる。
つぼみの大きさは直径五メートルほど。
腐敗した果実を連想するそれが、まるでB級映画に登場するモンスターのように大きく口を開いた。
さらに、つぼみの内部組織から刺々しい桜色の蔓が十指、唾液じみた液体を垂らしながら不快な姿を見せる。
（あれは――まずい）
ゾクッ、とハイクの身の毛が超速度でよだった。
背筋は示し合わせたみたいに粟立つ。
仮に単身だったとしても魔女が操る謎の巨大植物に、無防備な背中を晒して逃げる勇気はない。
だからと言って、リボルバー一丁の火力で太刀打ちできるほど、あれも脆い細胞で構成されていないだろう。
おまけに、この空間はミリーズの結界（テリトリー）内なのだ。
圧倒的に不利な立場に膝から挫けそうになりながらも、ハイクは決して心の芯は折らず、思考を歯車のように回転させて打開策を求めた。
けれど、そうこうしているうちに事態は勝手に進展する。
ミリーズがぱちんと指を鳴らした。
それが、合い図だった。
生理的な嫌悪を抱かせるつぼみの口から、一〇本の蔓が生きた鞭のように伸長した。
蔓は脇見も触れず、ハイクの隣で石化したまま突っ立っているサティの抜け殻を乱暴に絡め取る。
そのまま二重、三重、四重にきつく締め上げて、サティの自由を

無慈悲に奪い、完全拘束した。
蔓に引き上げられて、サティの両足が地面から離れる。
それは大地との決別を意味する。
永遠の別れ。
ふいに、サティの虚ろな瞳とハイクの視線が無為に交わった。
その時、ハイクは彼女の目尻に雫のようなものを目にした気がした。
いまさらそれを確かめる術などなく、ハイクにできることは一つもなかった。
死神を待つ吸血鬼は、紫色の魔女の前では、どこまでも無力だったのだ。
手を伸ばしても届かない、彼我と彼岸の距離に気づいてしまったから。
――そうして、サティはつぼみの奥に飲み込まれた。
主人のため堅牢な扉をこなすべく、つぼみの大きな口は、桜色の蔓で絡み取ったサティの体を内部に放り込んで即座に閉じた。
つぼみに走っていた横の割れ目がすぅっと消えると、骨を噛み砕くような、肉を咀嚼するかのような、生物を顎で処理する濁音が響き始めた。
ハイクは耳を塞げなかった。
心臓の辺りに走った精神的な痛みのせいだ。
そして、悪循環は回る。
彼はさらなる急展開に対応し切れなかった。
「ありゃ、そっちのトリガーを引くつもりはなかったんですけどね」
ミリーズは後頭部をくしゃくしゃと掻きながら苦笑いで言った。
ハイクは魔女の視線の先を追う。
「ララ……？」
くすんだ朱、宝石のような碧、二種類の瞳が、獣のそれに。
足元まで揺らめく長い漆黒の髪が、月光を一〇〇年浴び続けたかのような銀髪に。

少女の銀狼化現象（ライカンスロープ）が始まっていた。

9

それは地獄の門と言い表すに相応しい扉だった。
一〇〇〇人近い大人が力を合わせてもビクともしないほどに分厚く、堅牢で、巨大な扉。
その鋼鉄の扉にはドアノブもなければ鍵穴もない。
施錠どころか、開くという機能を備えていないのだ。
もっぱら誰かを深くて冷たくて暗い世界に、永久に閉じ込めるための扉。
ゆえに鍵は最初から存在しないため、扉も二度と開かない。
まるで大罪人を一生、闇の藻屑に幽閉するゲートのよう。
少なくとも、ララの目にはそう映った。
それほど露骨な比喩を大袈裟に用いるくらいに、心のショックは大きかった。
（嫌……）
ララは全ての状況を把握したわけではない。
見る者に猜疑心を植えつける修道服の少女が誰なのか。
サティの容姿にも酷似する彼女の、後方に高くそびえる不気味な巨大植物は一体何なのか。
唐突すぎる出来事は全て、ララの理解の範疇から逸脱していた。
（いや……）
だが、たとえここにいる人物たちの関係図や、無機質な白と黒に塗り替わった奇妙な世界の理屈が分からなくても。
サティが巨大植物の頂点に咲く、毒々しいつぼみに食い殺された光景だけは、現実として脳が処理した。
そして、その納得だけで十二分だった。
（イヤ……ッ！！）
視界が急速に狭まり、頭の中は得体の知れない分泌液に満たされ

た。
全身が内側と外側から焼けるような高熱を発する。
しかしその反面、冷静に自身の異常を俯瞰考察している自分がいる。
己の心情を平穏なものにするために、殺戮を望むララと。
自身にどのような変化が起きているのか、観察するララ。
本能と理性が彼女の精神的な部分で激しく切り結び、均衡している。
――ああ、これは銀狼化現象（ライカンスロープ）だ。
そう理解した瞬間を最後に、理性は針で突かれた気泡みたいに弾けて消滅した。
あっと言う間に獣の本能がララの体と心を奪い、支配する。
許せない。
そんな想いだけがララの思考を無尽蔵に埋め尽くす。
今や感情はララの手元を離れ、本能と結びついた。
そもそも、ララは普通の人狼ではない。
その身の半分に吸血鬼の遺伝子情報が混ざっている。
そのため人狼の能力面は半減し、任意による銀狼化現象（ライカンスロープ）を引き起こせなかったのだ。
ララの銀狼化にはトリガーと火薬が必要だった。
恐怖と悲愁、憤り。
心身に溜め込んだ、あらゆるストレスが爆発するシチュエーション。
それらが今、サティの死をもって許容範囲を越えた。
吸血鬼と人狼の肉体的交配、という特殊過ぎるケースで生まれたララは、恐怖心や極度の悲痛など『マイナスに属する感情』を糧に銀狼化するため、変態の最中は『殺戮の衝動を消すための行動』以外の目的は眼中になくなる。
自身の生命や精神を脅かす存在を排除するための、過剰な正当防衛。

心の安定を望む防衛本能に従って突き進むララは、止まらない。
『銀狼化のトリガーを絞ったモノ』を消し、己が安全を確認するまで止まらない。
「ありゃ、そっちのトリガーを引くつもりはなかったんですけどね」
サティに似た偽物が何かを言っている。
どうでもいい。
話し合う余地も、和解し合う余地もない。
もうアレは単なる殺す対象だ。

機械のような冷たさとは違う。
ララの瞳には『冷たいという温度』すら宿っていない。
（銀狼化現象（ライカンスロープ）化か！！）
ハイクはとっさにララの肩へ右手を伸ばした。
考えがあっての行動ではない。
ただ反射的に、気づいたら勝手に腕が動いていた。
けれどハイクの指先は後一歩で届かず、ララのしなやかな銀髪を掠めるだけだった。
――跳躍。
ララの挙措には力強さこそなかった。
しかし、彼女の繊細な動作は、ハイクの瞬きが一回にすら及ばない速度で、自身の小柄な体を目標の位置まで運んでいた。
ララは五本の指に力を込めて爪を立てるように右の手のひらを開き、ミリーズ＝メリーの心臓めがけて杭のように鋭く右腕を突出する。
だが――
「カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ！！」
サティを吸収した、あのつぼみが人間の口を模倣した動きで不気味に開閉していた。

嘲笑である。
ララは銀色の残像を引きながらミリーズに飛びかかるが、その魔女は実体ではなく魔術による幻想なのだ。
本体は、おそらくこの白黒と化した結界の外にいる。
空間ごと引き裂くようなララのフルスイングが、盛大に空を切った。
彼女の右腕は魔女の体をいとも簡単にすり抜ける。
「知性は理性に属します。自身の銀狼化現象（ライカンスロープ）もコントロールできない半端者のあなたは、さしずめ本能の塊（コンバットハイ）にでもなってるんでしょう。なまじ力を得てしまった見苦しい生き物です。品性のカケラもない下等動物ですよう」
ミリーズは余裕の笑みを冷ややかに浮かべながら、呆れたようにかぶりを振った。
「同じ知的生命体とは思えません。そういうのは本人は良いかもしれませんけど、見ているこっちは恥ずかしいので、やめてもらいましょうか」
ミリーズは言葉の末尾も言い終わらないうちに合図を送り、魔女（誰も）のいない（いない）空間にポイントを絞って突貫したララの崩れた体勢の上へ、巨大植物の側軸を振り下ろした。
ズズン、と重い振動が一帯に響き渡る。
濃厚な土煙が虚空に乱流し、アスファルトは太い茎の形にそって亀裂と共にめくれ上がった。
ミリーズの幻影ごと地面に叩きつけられた側軸の茎が、ゆっくりと重たげに持ち上がる。
「へぇ、意外と硬いんですね。普通の人間なら潰れた肉塊に化けてるところなのに」
茎の下から現れたのは当然無傷のミリーズの幻影と、唇の端から血を垂らすララの姿。
衣服はぼろぼろになり、体中傷だらけになっているのが見受けられる。

無傷では済まなかったものの、致命傷は負っていないようだ。
銀狼化したララはターゲットを幻想のミリーズから、魔女の支配下にある禍々しい巨大植物に移行した。
それはララが目の前のミリーズを立体映像だと察したからではない。
殺戮の対象。
サティを食い殺した、破壊すべきモノ。
ララの心を様々な負の感情でかき乱す元凶。
きっと眼前の植物をばらばらにスライスすれば、どす黒い感情も晴れる。
銀狼化したララの本能は、その論法だけを指示しているのだ。
「復讐、いいですね。あなたのちっぽけな復讐心を見せて下さいよう」
勝てる勝てないの計算などしていないのだろう。
ララは紫色の巨大植物に向かって、躊躇いもなく直進した。
銀狼化によって得た彼女の怪力ならば、側軸の茎を本体から毟り取るのも可能かもしれない。
それともサティを直接取り込んだ、果実のつぼみをもぎ取りに行くつもりか。
「射的練習ー」
いたずらに間伸びした声。
魔女のふざけた発音に意識を留めることなく、ララは植物の主軸に爪を立てようと突貫した。
その直前、
「数撃てば当たるってね」
ぼこぼこぼこぼこっ、と茎の表面に直径一〇センチ程度の、粘液を纏った球体がいくつも浮かんだ。
そして次の瞬間、無数の球体が内側から爆ぜるように勢い良く飛び出す。
一個や二個の弾道ではない。

そんな生易しい数ではなく、もはや弾幕だ。
球体が茎の表層から一斉に発射され、ゼロ距離のララはかわしきれなかった。
被弾する。
鼓膜を突き破らんばかりの爆破音が、辺りの空気を蹂躙するように震わせる。
界隈はもうもうたる煙幕に覆われた。
「魔力というエネルギー源そのものを、ダイレクトに装填してましてね。ストレートな分、けっこう効くと思うんですけど」
むせ返るような煙幕が徐々に晴れていく。
分厚かった砂塵のカーテンの中に、ララのシルエットが浮かぶ。
服はほとんど焦げて、布切れ同然と化していた。
「しぶといですね。良いでしょう。それなら……」
言うなり、ミリーズは修道服の懐に右手を忍ばせた。
次にその手が出てきた時は、指先に紫色のバラを携えていた。
「『世界樹の杖（ユグドラシル）』でこらしめてあげます」
それは一輪のバラを咲かせた杖だった。
全長三〇センチにも及ばない短い杖。
実に魔女らしいアイテムである。
彼女の個性を誇張するように、杖の先端には毒の色を孕んだ八重咲きのバラが満開し、その花弁の下からは刺を生やした茎が杖全体に伸びて絡まっている。
ミリーズは『世界樹の杖（ユグドラシル）』を親指と人差し指で摘まみ、その先端を指揮者のように四拍子で躍らせた。
と、幻聴だろうか。
発信源不明、いくつもの楽器の音色で構成されるオーケストラ風の音楽が界隈に流れ始めた。
それに呼応して、巨大植物の側軸に広がる八枚の葉たちが、囁き歌うように揺れ出す。
やがて毒々しい葉と葉の間から、ほの暗い紫色の光がこぼれ落ち

た。
光は子供の握り拳程度の大きさだ。
妖精を彷彿とさせる光の雫は、自然落下をやめて重力に逆らい、地上二メートルの高さで停滞した。
妖しげな発行体の数は一〇に及び、全てが反重力の効果で虚空に浮遊する。
ミリーズによるリモートコントロールなのか、自律制御なのかは判然としない。
ふいに、洞窟の中に反響するような、大勢の子どもたちの笑い声がわいた。
壮大なバックミュージックと重なる子供たちの音色。
おそらく、妖精の光が発信しているものだ。
その木霊は無邪気な分、いっそ不気味なものだった。
「妖精のリンチを食らってください」
ミリーズによる鶴の一声さえあれば、妖精の光は誰にでも凶暴になるのだろう。
紫色の幻想的な軌跡を尾ひれに引きながら、一〇体の光が一斉に動き出す。
それらは高速で空中を飛び交い、無秩序にララへと襲いかかった。
あらゆる角度から三次元的に、緩急をつけた飛行速度の、次の軌道を予想させないランダムな体当たり。
ララはその全てを紙一重でかわしていた。
彼女も隙あらば反撃を繰り出して応戦しようとするが、いかんせん妖精は素早い上に縦横無尽の飛行能力を持っている。
急角度のUターンなどざらだ。
アスファルトの上を滑空する二体の妖精が、見事な紫紺の螺旋を描きながらララの両足を狙う。
それを目で追っていたララは最小限の動作で回避した。
間一髪入れず、後方と左方からそれぞれ一体ずつ、今度は異なる速度で飛翔してくる。

両方とも機敏で神経質な挙動。
飛行するスピードに開きがあるのは、ララに回避のタイミングを図らせないためだろう。
しかし、その程度の小細工で劣る銀狼化現象（ライカンスロープ）ではない。
ララは爪先で軽く地面を蹴り、空中に身を投げながらサイドロールで妖精の光をやり過ごした。
紫色の発行体は二体続け様に、すれすれの肉薄を果たし、ララの脇を通過していく。
だが、息をつく暇もない。
ララが柔らかく着地した時には、すでに眼前と頭上に新手が飛来していた。
前方からじぐざくと法則性皆無な軌道で差し迫る一体の妖精に対し、真上からは流星のごとく勢いで三体の光束が、直線軌道で落下する。
ララは前方の妖精を視界に収めつつ、三体立て続けに下降する光を順にアクロバチックなバックステップで避けた。
三体続けてアスファルトの上に激突した妖精は、鼓膜を揺さぶる爆発を起こし、クレーターの分量だけ土煙と土砂を宙へ躍らせた。
ララの視界が分厚く曇る。
狙っていたかのように、前方からフェイントを織り交ぜてララに近づいていた妖精の光が突然、その動きと飛行速度をキャンセルし、ややカーブを描くような軌道に変じた。
そのスピードこそが本来の機動力なのか、妖精は粉塵のカーテンを突っ切って加速する。
舞い上がる砂埃はララの回避行動を僅かに、されど致命的に阻害した。
鼻先に迫る紫色の妖精。
どこまでも無邪気な嗤い声を上げながら、妖精は母を求める赤子のように光の手をララに伸ばした。
――着弾。

肉眼でも可視できる球状の衝撃波が生じた。
眩い紫色の閃光がほとばしり、ララの体を小石のように上空へ吹き飛ばす。
だが、それ単体の攻撃では終わらなかった。
ララの移動先に三体の妖精が待機している。
宙に薙ぎ払われたララに成す術はなく、そのまま自ら地雷の上に足を運ぶがごとく、妖精の光に突っ込んだ。
空気を揺さぶる破滅的な余波が発生した。
三体の妖精が同時に爆破し、ララの小さな体は翼をもがれた鳥のように容赦なく地面に叩きつけられた。
アスファルトの上を何度も跳ね返りながら、二〇メートル以上も転がってようやく停止する。
衣服はほとんど残っておらず、ララの指先はピクリとも動かなかった。
残った弾の数は三つ。
三体の妖精は、あたかも獲物を捕食する狩人のように、力尽きて沈黙するララを集るため殺到した。
オーケストラ風の音楽が停止して、被弾する。
再び三つ分の波動が轟音を弾き出す。
だだし。
今回生じた衝撃の被害者にララは含まれていなかった。
「その辺にしておいたらどうだ」
朱色の双眸が、黒に回帰する。
ハイクがリボルバーの引き金を絞った状態で構えていた。
その銃口から硝煙が立ち上っている。
つまり、最後の爆破はハイクは銃弾で撃ち、誘発したもの。
「ふーん、やっぱりですか」
魔女はにやりと意味深げな笑みを湛えた。
「お前の目的は何だ。弱い者いじめか」
「いえいえ、そんな趣味は持ち合わせていませんよう。今回はあな

たの出方を窺っただけですから。私のサティ（分身）が分解された上で、その『原罪』がいたぶられる様を直視し、あなたが引き金を引くかどうか、知りたかった。それを確かめただけです」

「……」

「あっはっは。そんな恐い顔しないで下さいよう」

ミリーズは心の底から愉快そうに言葉を唱える。

「ま、短い間でしたけど、それなりに情が移ったようですし。彼女たちはほぼ理想通りの駒になってくれました」

ハイクは歯噛みした。

そこにいるミリーズが幻影でなければ、とっくにハイクの銃口は火を吹き、彼女の眉間に穴を穿っていたところだろう。

ここまでコケにされて平静を保っていられるほど、ハイクも寛容ではないのだ。

長らくマフィアの剣？な世界に浸っていた影響もある。

やられっぱなしでは気持ちの収まりがつかなかった。

それなのに、叩き潰すべき相手は明白なのに、肝心な相手はここにいないのだ。

同じフィールドにさえ立たず、魔女は安全席から高見の見物をしている。

ここはミリーズが用意した舞台なのにもかかわらず、張本人は外野にいて同じ土俵に立たない。

つまり、ここは対等な戦場ではなく、魔女の玩具をしまうための鳥かごだ。

マフィア時代のハイクなら、勘忍袋の緒がいくつあっても足りない話だ。

今でさえ怒り狂いそうになる衝動をギリギリで抑え込んでいるのだから。

「サティとララは魔女の駒、か。それで？　結局のところ、お前はどうしたいんだ」

「そうですね。これで重要なフェーズは果たせましたから、私はそ

ろそろ退散しますよう。結界も時間切れが近づいてますし」
「端から俺の質問に応じる気はないらしいな。それなら、これだけは答えろ。魔女」
ハイクはわざとらしい一拍の間隙を挟んで、問うた。
「また現れるのか、俺たちの前に」
威圧的な低い声で訊ねると、ミリーズは押し殺すように含み笑いをもらし、
「いいえ、私は現れませんよう」
あっさり否定した。
何？　とハイクが訊き返すより先に、魔女は未来をほのめかす言葉を繋いだ。
「だって、私から現れる必要がないんですよう。なぜなら、あなたの方から私に会いにきてくれますから」
にこり、と笑む魔女。
ゾッとするほど邪気のない表情。
そして彼女の断言がハイクを一つの予感に導いた。
「気づくのが遅いですよう。大切なものは、きちんと管理して手元にのせておかないと」
ハイクは顔を向けるより先に足を動かしていた。
「この子は貰って行きますね。キーパーソンなんで。もともとチェスターたちも回収したがってましたし、ここで私が連れて帰れば彼らにも恩の字を売れます」
歌うように語るミリーズの後方で、サティを食い殺したあのつぼみが、再び大きな口を開く。
その喉から今度は人の腕を思わせる一対の枝が伸びた。
つぼみの中から梯子でも振り降ろすかのように、枝の指先が伸長する。
気を失っているララには、それが自分を掴もうとしていることなど気づきようもない。
（くそっ！）

ハイクとララの距離は二〇メートルも離れていた。
三日前も、彼女はこんな風に地べたに倒れていた。
あの時は、周囲の脅威を遠ざけたから簡単に彼女の下に手が届いた。
そして、ハイクは彼女を助けてしまった。
それは、なんて中途半端な救済なんだろうか。
「待っ――」
「私たちはあなたたちの登場を待ってますからね、吸血鬼さん」
気を失ってぐったりとするララは、つぼみから伸びた枝の腕に捕らえられ、そのまま植物の茎に磔にされた。
ハイクが護身用に持ち歩いているリボルバーの火力ごときでは、太刀打ちできない。
「では、一週間と一日後、夕刻時に再会できることを願ってますよう」
友人に対して気軽に手を振るように、ミリーズは指先をひらひらさせる。
刹那、つぼみの喉元に仄暗い紫色が灯り、力の奔流が溢れ出した。
それは可視光線さながらにつぼみから吐き出され、ハイクの五メートルほど先に降り注ぐ。
まるで咆哮だった。
声がエネルギーと化したかのように。
真夏の比ではない熱風が巻き起こり、粉砕したアスファルトの破片がハイクの全身をくまなく叩いた。
とっさに両腕で顔面をかばったが、細かいダメージの蓄積までは防ぎ切れない。
津波めいた風圧にハイクは後方へなぎ倒された。
地面に強く後頭部を打った衝撃で、意識が吹き飛びかける。
視界は閃光に奪われ、ほとんど機能していなかった。
額から血が流れ、ハイクは全身打撲に近い傷を負った。
気がつけば、いつの間にか植物の咆哮が止んでいる。

わざと外したのかもしれない。
あの力の奔流が直撃していたら、ハイクは骨まで木端微塵になっていたに違いない。
ミリーズの目的は、この場でハイクを殺すことではなかった。
だとしたら、魔女の本当の目的とは何のか。
「ッ……」
痛みに呻く。
後頭部から背骨、足の爪先まで悲鳴を上げていた。
(情けな、い……。たったの一撃か……)
ハイクの視界の霞みは徐々に濃くなって、
「……？」
手の中にしっとりとした紙切れのような感触を得た。
けれども、その正体を確認するよりも前に、ハイクの意識は深い闇の中に沈殿していった。

10

シャリシャリと瑞々しくて涼しげな音が聞こえる。
その耳心地の良さを意識した途端、瞼の裏に微かな眩しさを感じて、ハイク＝R＝セカンドは瞳を開いた。
久しぶりに視認した光源の温かさに眼球の奥が仄かな刺激を受け取り、一瞬だけ疼く。
背中の感触はアスファルトの無骨さではなく、羽毛のように柔らかい。
どうやらベッドの上に寝かされているようだ。
見知らぬ白い天井がそこにはあった。
「痛っ……」
五体満足であるか否か確認するために手足を動かそうとしたら、全身のいたるところに打撲らしい鈍痛が走った。
「おはようございます、ハイク様」
「ヒカゲ……、か」
思ったよりも声は掠れて出た。
天井から真横に視線を流す。
そこにはよく見知った老紳士がいた。
レザーの客人用ソファに座り、果物ナイフで器用に林檎の皮を剥いている。
歳を取っているとは思えないくらい綺麗な背筋は、相変わらずのようだ。
ハイクは気だるい身を起こした。
まるで泥水でも流し込まれたみたいに体が重い。
ハイクは包帯が巻かれている自身の上半身と、周囲にぼんやりと視線を巡らせてから、ローテーブルの上に並ぶ林檎たちを眺めつつ、

ヒカゲに問いかけた。
「ここは病院……いや、診療所か？　それにしては個人宅っぽいが……」
「私のプライベート用の別荘でございます。もっとも、最近は放置しておりましたが」
「そうか。『赤煉瓦の街』に別荘なんて持っていたんだな」
ハイクは血の滲むガーゼが当てられた右手に目線を落とし、
「何日が経過した？」
「約一日。現時刻は昼の一時ですので、丸一日ではございませんが」
「負傷の具合は」
「全治一週間、といったところでございます。命に別状はございません」
「一週間……？」
「どうかなされましたかな？」
怪訝そうにヒカゲは問う。
ハイクが『一週間』に反応するとは思わなかったのだろう。
いや、何でもない、とハイクは平静を装いながら答えて、視線を上げた。
「で、どうしてお前がここにいるのかを説明してくれ」
「申し訳ございません。その言葉に応じるには、まずハイク様の方で何があったのか、旅の経緯を詳しく知る必要がございます。でなければ、私どもの間に大きな齟齬が生じるかと……」
「わかった」
ハイクは特に表情を作ることなく、淡々と答えた。
四日前の人狼たちとの接触から、昨日の魔女の襲来まで。
その間、ヒカゲは黙って耳を傾けていた。
やがてハイクの要約された話が終わると、老紳士は若干ばつが悪そうに切り出した。
「私どもがここに訪れた理由は……サティ＝ループ様にございます」
ハイクは眉をひそめ、ヒカゲに続きを促した。

「実はボスが個人的に彼女を雇い、ハイク様の尾行を命じていたのでございます」
「ああ、それについては知っているが」
「彼女は逐一、近況を報告するようにボスから厳命されておりました。しかし、初日から通信が途絶えたのでございます」
「あいつ、空腹で俺に接触してきたからな。その時点で任務失敗だから、シリカに解雇されるのは決定だと言ってやったら、寝返った。それでおそらく連絡しなかったんだろう。だが、それだけの理由でお前たちが俺を追いかけ、『赤煉瓦の街』に訪れるはずがない。そうだな？」
ハイクが確認作業で訊ねると、ヒカゲは悲しげに目を伏せて首を左右に揺すった。
「サティ＝ループ様の折りたたまれた遺体が三日前、私どもの事務所に送られてきたのでございます」
「は？」
それはおかしい。
サティが死んだのは昨日だ。
しかも遺体が残らない形で処理された。
死体が三日前に発見されるわけがない。
彼女はその時、ハイクと行動を共にしていたのだ。
「ボスがハイク様の尾行を依頼したサティ＝ループ様と、私どもの事務所に配達された遺体は同一。しかしながら、ハイク様と旅を共にしたサティ＝ループ様も彼女なのでございます」
「どういうことだ？」
「魔女が精製した粘土細工が、一つだけとは限らない。そうは思いませんか？」
ハイクは軽く目を見開き、ヒカゲは淀みなく真実を唱え続けた。
「四日前、ハイク様は列車に乗る直前、人狼の一派と交戦いたしました。そこで魔女の結界に引っかかり、人間ではないことが割り出されてしまった。その時、瞳術は使用を？」

「一瞬な」
「きっと魔女もその朱眼を確認し、ハイク様を吸血鬼だと完全断定したのでございましょう。人狼どもの反応もありました。そして決定的だったのは、ハイク様とララ様のやりとりでございます」
「俺とララの？」
「ララ様がハイク様に見せた表情は、初対面とは思えないものだったのでは？」
実際はそんな程度のものではなかったがな、とハイクは自身の心にだけ聞こえるように返答した。
「ララ様の反応によっては、誰もが吸血鬼であると判断される材料になってしまうのでございます」
「どうしてだ？」
「後ほど説明いたします。……ハイク様を吸血鬼だと断定した魔女は、すぐにハイク様の背後関係を洗い、人狼どもの人海戦術を駆使して情報収集し、〈レッドアウトファミリー〉の存在を知った。そのファミリーのボスと、サティ＝ループ様を尾行役に雇った少女が、イコールで結ばれることにも。さらに言うならば、魔女はボスが個人的にサティ＝ループ様に接触した時点で、すでにハイク様をマークしていたとも考えられるのでございます」
「シリカが口にした『吸血鬼ハンター』というキーワード。それに、あいつがサティに見せた尾行対象の男――つまり、その写真に映っていたのは俺だからな」
全体を整理すると、こうだ。
魔女は吸血鬼に関する情報収集のため、複数の分身を街に解き放っていた。
そのうちの一人が、たまたまシリカに掴まり、『吸血鬼』というワードがドンピシャで出てきた。
さらにはハイクが『人外以外無用の結界』に入り、瞳術を行使したことで吸血鬼だと判明した。
そうして魔女は、『ハイク専用に調整したサティ＝ループ様』を

作り、ハイクに接触させた。
「私が入手した穏やかではない情報も、ボスを動かす要因となりました」
「どんな内容だ」
と訊いておきながらも、ハイクの中ではある程度の予想がついていた。
「ハイク様が出発前に駅構内で交戦した人狼の一派。あれは人狼の一部が独断で結成した、反吸血鬼の復讐部隊でございます。私のコネクションを最大限に経由し、その部隊の発端となった人狼部族と、ダイレクトに回線が繋がったのでございます。彼らの長が自ら私たちに情報を開示いたしました」
ハイクはヒカゲの広大な人脈に感心しながらも、
「どこの人狼だ？」
「穏健派として知られる、タイバンの西山秘境に住む人狼どもでございます」
「あそこか。比較的争いだの何だの好まない連中だろう。まさかそこからレジスタンスが出るとはな」
「チェスター＝セドリックを筆頭にする、五〇体近い部隊でございます。私どもの街にある『世界鉄道』の駅でも目撃されております。そして、彼らに『紫色の魔女』なる相談役がバッグについている事実も確認いたしました」
「その相談役がミリーズ＝メリーなわけだ」
「僭越ながら私どもは航空機を利用して、この『赤煉瓦の街』に訪れました。しかし、ボスや私どもが気を失っているハイク様を発見した時には、すでに魔女の姿はございませんでした」
「なるほど。ということは、今事務所はボスが不在ってことか。シリカはどうしている？」
「一足先に港の廃工場に向かいました」
「？」
「気を失ったハイク様が手に握っていたレリーフでございます。魔

女の置手紙。そこに住所が記載されておりました」
それを聞いたハイクは疲労感の混ざった嘆息をもらした。
「人狼と魔女が一体何を企んでいるんだ。いや、人狼はまだ分かる。だが、魔女が人狼に加担するのは何故だ。連中に手を貸す動機があるのか。俺たち吸血鬼を憎んでいるのか」
ミリーズ＝メリー。
彼女には彼女の目的があるのだろうか。
よほどの酔狂でなければ、ここまでややこしいことはしない。
共謀しているはずの人狼一派が捜しているララを発見しておきながら、ハイクの隣で泳がせていた節もある。
「……ミリーズ＝メリーは俺をダシにして吸血鬼を表に引きずり出し、一網打尽にしたかった、のか？」
「確かにその策略は効果的でございます。ハイク様の危機ともなれば、ボスが黙っているはずがございません。同時にボスが黙っていなければ、私どもも同様」
「俺を利用して、吸血鬼と人狼を集団交戦させようとしている、ということか。だが、それで魔女にメリットはあるのか？」
「はい」
ヒカゲは首肯した。
それは私にも分かりません、という返答を予想していただけに、ハイクは虚をつかれた思いで、老紳士の年季が入った顔を見つめ返してしまった。
「可能性の提示でございます」
ヒカゲはその顔立ちに、柔和な笑みを湛えて、
「私ども吸血鬼と人狼がぶつかると、魔女に利益が出るのかもしれません」
「どういう意味だ」
「あくまでも憶測でございます。魔女がハイク様に残したと思われるレリーフには、この街の港にある廃工場の住所が記載されておりました。しかし、重要な日時は記されておりませんでした。昨夜、急

行したボスたちから連絡があり、そこはもぬけの殻だった、とのことでございます」

レリーフに記載された住所。

それは『私たちはここにいるから、こい』というメッセージに他ならない。

しかし、そこには誰もいなかった。

あるいは五感の優れる人狼たちのことだ、勘づいてすぐに撤退したのかもしれない。

「ひょっとすると、ハイク様は魔女から日時を口頭で聞かされたのではありませんか？」

そう訊ねられ、ふいにハイクの脳裏に魔女の言葉がよみがえる。

『では、一週間と一日後、夕刻時に再会できることを願ってますよう』

ハイクは眉間をほぐすように親指と人差し指で押さえた。

「一週間後の夕刻時だ。お前の見立てだと、俺の怪我は全治している予定なんだろう？」

ヒカゲは首の動作だけで肯定してから、

「これから言及することは、あくまでも私個人の推測でございます」

「歯切れが悪いな。もったいぶってないで続けろ」

ヒカゲは元人間の『混血』だが、『純血』や『劣血』に関係なく、基本的に彼の言動には信憑性があると、長い付き合いからハイクは判断している。

――特に魔術の分野には。

なぜならヒカゲは人間であった時代、博識な魔術師だったのだから。

「その魔女は未来視、あるいはそれに近い魔術を扱えるのかもしれません。予知夢。もしくは予言。これは『近い未来に起こるかもしれない出来事』を幻視したり、言葉に唱えたりする魔術でございます。しかし、それは絶対の確率ではございません。あくまでも『未来の可能性を示唆する』魔術」

「未来に起こるかもしれない、その可能性……」
「ただし、予知夢や予言の魔術は『的中すればするほど洗練されていく特性』を持っております。もしもミリーズ＝メリーなる魔女が、その類の魔術を行使できるのであれば、彼女の動機はこういうことになるのでございましょう」
ヒカゲは言葉の間に溜めを挟み、
「魔女は自らの予知夢、あるいは予言の的中率を上げるために、自らが動いて未来を収束させている、と」
「可能性に過ぎなかった未来を、工作して確定させるということか？」
「理論上、予知夢や予言の魔術に、完成はないと古来の魔術師たちによって証明されております。しかし、数字上では限りなく完成に近づけることが可能でございます。それを『エンドレスナインの確定』と魔術師は呼んでおります」
「なるほど。あの魔女は『吸血鬼と人狼が集団で殺し合う』という夢を見たか何かで、それが外れないように工作する。一方チェスターたち人狼は、俺たち吸血鬼に復讐できれば何でも良い。特に人間と判別がつかない現代の吸血鬼は、捜すのも手間だ。そこで利害が一致した魔女と手を組んだわけか」
「ハイク様と私どもを戦場に呼び出すために、ララ様とサティ＝ループ様を利用したのでございましょう」
ハイクは数秒ほど白いシーツの上に視界を固定して、沈思黙考する。
ややあってから、思案顔をヒカゲに向けた。
「ララの瞳術がどんなものか、タイバンの連中は知っているのか？」
「はい。彼ら人狼部族が独自に編成部隊を組んで、チェスターの一派を追っていたようで、その過程で入手した情報でございます」
「聞かせてくれ」
「その答えが先程の説明に結びつきます」
「ララが初対面の俺に示した好意とも取れる反応が、俺を吸血鬼だ

と根拠立てる理由か」
「ララ様の瞳術は――自身と吸血鬼との『確率的な繋がりを糸として可視する能力』でございます」
「何だ、それは？」
「赤い糸、という迷信はご存知で？」
「俺の解釈では、人が他者に対して運命的な縁を感じる繋がりを具現化したもの……だが」
「特に恋や愛、結婚などにまつわるロマンチックな話として、しばしば有名でございます」
「その吸血鬼バージョンが視えるというわけか、ララの右眼は。それが本当だとすると、ミリーズが俺を吸血鬼と断定できる材料にはなるかもしれないな」
ヒカゲは神妙な顔つきで頷き、
「ララ様は吸血鬼と人狼のハーフゆえに、その瞳術を自身のコントロール下に置いていないようでございます」
「つまり、視える時と視えない時があるのか？」
「ララ様のオッドアイは、片方が朱でございます。その朱は、常に瞳術を解放している状態ゆえ。しかし、私ども吸血鬼の瞳術は、双眸の開眼があって初めて一〇〇パーセントの力を引き出せるもの」
「あいつの左眼は碧だ。……これもハーフの弊害なのか」
「おそらくは。……ララ様は吸血鬼と人狼、本来は交わるべきでない遺伝子情報が結びついて生まれた、奇形の人外なのでございます」
ヒカゲはララを差別するつもりで、そのような言い方をしたわけではない。
けれど、『奇形の人外』という呼び方は、あまり気分の良いものではなかった。
そんな心中が表情に出ていたのだろう、察しの良いヒカゲはすぐにハイクに頭を下げた。
「申し訳ございません。つい口先が出しゃばってしまったようでございます。どうかお許し下さい」

「いや、悪気がないのは分かっているんだ。頭を上げてくれ」
顔を上げたヒカゲは双眸を細め、慎重な態度でハイクに訊ねた。
「ハイク様、どうなさるおつもりでございますか？」
「……聞きたいか？」
「ハイク様の取捨選択によっては、私どもも得物を握らなければなりませんので」
「だろうな。俺の問題なのに、すまない。妹が迷惑をかける」
ハイクは自嘲気味に笑って返し、
「だが心配するな、ヒカゲ。魔女の予言は外れる。俺はララを助けに行くつもりはない」
「理由をお聞かせ願います」
「俺がこの街で下車したのも、ララとサティを騙して置き去りにするためだった。予定は狂ったが、結果的に俺は一人旅に戻れる。たった三日の旅で情は移らない。それだけの縁で、いちいち生を懸けていたらキリがないだろう？　サティはもともと魔術で作られた粘土で、ララは人狼からしたら利用価値のある素材らしいから、殺されたりもしないはずだ」
ハイクはきっぱりと言い放ち、細い溜息をもらす。
「残り一年しかない時間を、どうして俺があいつらのために削らなくてはならない？　メリットなんて何もないだろう」
「実に吸血鬼らしい正論でございますな」
「ああ。というわけで、ヒカゲ。頼みがあるんだが」
「はい。何でございましょうか？」
ハイクは気が抜けた表情で欠伸を噛み殺し、
「列車を下りて一二時間以上が経過した。『永久切符』の途中下車システムは無効だ。新たに切符を購入しないことには、旅に戻れない。俺の代わりに切符を買ってきてくれないか？　行列は苦手でな、二度と巻き込まれたくないんだ」
四日前の悪夢がよみがえり、ハイクの顔は若干蒼白になる。
「それくらいお安いご用でございます」

「恩に着る。それと、もう一つだけ……」
「？」
「今度は……見送ってくれないか？　その……、シリカと」
終始飄々としているヒカゲが、珍しく目を丸くした。
いかなる心境の変化か、とでも驚いているのだろうか。
「ハイク様……」
「もうとっくに互いの言い分は分かっているんだ。だが、いまさらそれを言葉に出して解消するのは、難しいように思う。だから、その別れで決着をつけたいんだ。俺が『黒血病』を患ったせいで、シリカに辛い立場を背負わせてしまったことを。ああ、皆まで言うなよ？　自己満足さ。俺はわだかまりを掻き消して、本当の旅鳥になりたいだけだ。シリカが俺を見送り、そして俺はシリカに見送られる。その儀式で、いい加減に終わりにしたいんだ。心の奥底で互いに顔色を窺うような関係は。あいつは、俺の大切な妹だからな」
「左様でございますか」
「無論、シリカがこの申し出をどう受け取ってくれるかは分からないがな」
「ボスなら喜んで承諾することでございましょう」
「表面上はそうかもしれない。だが、あいつの本音なんて俺には分からない。俺が頼めばシリカは見送ってくれるだろう。笑顔で手を振ってくれるに違いない。それでも、やはりあいつの本当の気持ちなんてものは、兄妹だろうと吸血鬼だろうと分からないんだ」
「恐いのでございますか？　ボスの心が」
その問いにハイクは答えられなかった。
「ハイク様はご自身が思っているよりも、口下手で不器用で甲斐性なしでございます」
「ひどい言われ様だ。否定はしないが」
「しかし、ボスには大事な部分はきちんと伝わっているかと、私はそう思います。後は言葉という形にし、相手に伝えられれば完璧でございましょう」

ヒカゲはなぜか後半部分だけ、やや声量を大きくして言った。
まるでハイクではない誰かに聞かせるように。

シリカ＝R＝サードは扉に背中を預けて、廊下に立っていた。
俯き加減のため前髪が垂れて、目元に薄い影を落としている。
周囲から護衛を遠ざけていて良かったとシリカは思う。
耳元が紅潮しているのだ。
こんな乙女チックな自分をファミリーの誰かに見られるわけにはいかない。
尊厳などの問題に関わる。
たとえ、重度のブラコンだと公認されていてもだ。
「はぁ……」
シリカは熱っぽく、悩ましげな溜息をついた。
「やっぱり、まだまだお兄ぃには敵わないやっ」
思わず出た口調。
その言葉遣いは、ボスになった時からたとえ独りごとでも使わないのに、自然と出てきてしまった。
天井に顔を上げる。
瞳は潤んでいるが、絶対的な意思をもってその雫は落とさなかった。

∞　∞　∞

どこか浮ついた空気が流れる『赤煉瓦の街』。
世間的には休日の夜。
ミリーズに一撃で完敗し、救援にかけつけたシリカたちに助けられたハイクは、部屋の窓枠に肘を置いて、外にやや身を乗り出しながら街の景色を眺めていた。
夜風が気持ち良い。

草むらで虫たちが鳴いている。
ヒカゲの別荘らしいこの家は、丘の上にこじんまりと建っていた。
住宅街から離れ、喧騒を俯瞰するにはちょうど良い距離の場所。
静かすぎず、賑やかすぎず、余世なんかを過ごすには申し分ない空間だ。
「お兄ぃ、ちょっといい？」
ノックの音と共に、扉の向こうからシリカの声が聞こえた。
「どうした？」
「入ってもいいかなっ」
「ああ」
ハイクが振り返らないまま応じると、扉が開く気配があった。
背後から体重を感じさせない軽い足音が近づいてくる。
シリカはハイクの隣に並び、窓枠の空いているスペースを陣取った。
兄妹そろって同じ格好をし、夜の帳の向こうに灯る平和そうな街を眺める。
久方ぶりの再会だったが、二人の視線は交わらなかった。
「怪我、どんな感じ？」
「すぐに完治というわけにはいかないみたいだが、普段通りの生活を送るのに問題はないな。心配かけてすまない」
「ううん」
シリカはそのまま力を抜いた声で、
「お兄ぃ。チェスター＝セドリックが率いてる人狼の一派が、ララ＝セドリックを監禁してたことが事実なら、彼女が殺される可能性はないと考えていいよ」
「……反吸血鬼の旗を上げる人狼が、吸血鬼と人狼の遺伝子情報を持つ『原罪』を殺さずに生かしておいたから、か。確かにララには利用価値があるのかもしれないな」
ただし、これから先ララが五体満足でいられるかどうかは不明だ。
彼女は逃亡の前科持ちになってしまった。

最悪、ララは手足を切断されるかもしれない。
二度と逃げられないようにするために。
「チェスターらが重宝しているのは、ララの瞳術だろう。その機能さえ残れば、逃亡を可能とする手足は邪魔なだけだ。必要な時に側になく、勝手に動き出す道具など不便極まりないからな」
「いくら人狼の治癒能力が高いって言っても、負傷のレベルが切断ならおしまいだろうね」
「……」
「……」
会話が途絶える。
その沈黙が意味しているもの。
次に切り出すどちらかの言葉が、さらに相手の心へ深く切り込んでいくのだろう。
「やっぱり……まだ迷ってるんだね、お兄ぃは」
先に口を開いたのはシリカだった。
彼女は寂しげな微笑みを露にして、
「ごめんね、自己中心的な発言するよ。……お兄ぃには残り一年しかないんだよ。やっと手に入れた時間でしょ？　これまで組織のために身も心も削ってきたんだから、今度は自分を大事にしなくちゃだめだよっ」
「シリカ……」
「サティ＝ループは、人間じゃなかった。魔女が影を抜き取って作った幻影。だから、今回はその影が本体の魔女に戻ったってだけの話でしょ？」
「ああ、そうだ。それに、俺はこの街で彼女たちと別れる手筈だった。別の要素が原因で別れることになっただけで、結果は同じ。俺は今度こそ一人旅を始められる」
そこまでハイクが言い切っても、シリカは懇願するような声音で、
「お願いだよ、お兄ぃ。あの魔女には敵いっこない。だから行かないでね？」

「ハイリスクノーリターンだ。安心しろ、シリカ。大切な妹をほったらかして、死に急ぐつもりはない」

ハイクが安心させるように頭を優しく撫でてやると、シリカは照れ臭そうな顔で頷いた。

11

一週間後。

時刻は午後四時に差しかかっている。

包帯の取れたハイク＝R＝セカンドは、日用品を詰め込んだレンタルの旅行用キャリーバックを携え、『赤煉瓦の街』中央部で設営されている『世界鉄道』の駅構内にいた。

予めヒカゲに頼んで切符は購入しておいたので（とは言っても時間帯がピーク時とズレているのか、行列も人混みもできていなかった）、首尾良く改札に進める。

見送りにはハイクの妹シリカ＝R＝サードと、彼女の側近ヒカゲがきていた。

清楚な日傘を片手にするシリカは、純白のトップス部分と上品な黒のスカート部分をくびれの辺りでテープ素材によって分けた、大人らしいワンピースを着ている。

見る度に、ころころと服装が変わるのは毎度のことだ。

対照的にヒカゲはいつも通りの紳士服に身を包んでいた。

ただし、今日は白髪交じりの頭部に黒のハットが乗っている。

ヒカゲはヒカゲで常時、その黒いスタイルだ。

ちなみに、〈レッドアウトファミリー〉の構成員は総力を上げて見送ると申し出てくれたのだが、そうなると人数が多過ぎるし、ここは公共の場なので他の一般人に迷惑をかけるかもしれないため、自重してもらった。

気持ちだけで十分である。

彼らは元ボスなんかのためではなく、これからずっと現ボスに尽くす者たちだ。

こちらに余分な時間を割くべきではない。

「お兄ぃ、気をつけてねっ」

千差万別の国籍が行き交う改札の横合いでハイクは立ち止まり、後ろから声をかけてきたシリカとヒカゲに振り返る。
数多の吸血鬼を束ねていた元マフィアのボスは、ばつが悪そうに首筋をかいて、
「シリカ、ごめんな……」
兄が別れ際に発した漠然たる謝罪に、シリカは一瞬だけきょとんとしたが、すかさず脹れっ面でハイクを睨んだ。
「もう、そうじゃないでしょっ。ごめんじゃなくて？」
多くの言葉を用いずに、言いたい思いの主柱が伝わった。
そのことに深く感謝しながら、ハイクはまんざらでもなさそうに嘆息をもらし、頷く。
「ああ、そうだな。ファミリーの皆によろしく。――ありがとうな、シリカ」
「任せろっ！」
シリカは微かに涙ぐみ、困ったような笑顔を咲かせた後、どんと強く胸を叩いた。
きっと感謝と謝罪はある意味、紙一重なのだろう。
ハイクは苦笑したまま、次にヒカゲへと視線を移行した。
「シリカのサポート、頼んだ。まだ未熟なところだらけだからな」
「お任せ下さい」
ヒカゲは胸に右手を添えて、うやうやしく腰を折った。
ハイクがこの世界で強く信頼を寄せる数少ない吸血鬼に、正式に妹を託した瞬間だった。
（――ああ、そうか）
ここにきて、ハイクは単純な事実に気がついた。
（寡黙であることと、不言であることは違うのか）
自身の気持ちを正しく形にすることは難しい。
そこには建前や本音や矜持や不安が憚り、素直に発音することを邪魔する。
言葉の印象だって文章だけでは、決まらないのだ。

口にする方の表情やイントネーション、それに発言される側の心理状況など感情的条件が伴う。

……もしかすると、正確に伝わらないかもしれない。

……逆に誤解を生むかもしれない。

…ひょっとすると、傷つけてしまうかもしれない。

そんな懸念や羞恥心が、本当に伝えたい部分を遠慮に塗り固めて歪曲してしまう。

言葉は時として精神上の刃になり得るのだから。

特に、それまで言葉ではなく空気の流れを頼ってきた不器用者なら、なおさらそんな憂慮に囚われるのだろう。

確かに言わなくても伝わる思いもあるかもしれない。

父親が娘に寡黙であるように、母親が息子から距離を置いて遠くから見守るように、無言の愛情を与えるのはとても綺麗だ。

けれど、綺麗なままでは

汚れる覚悟を持たないままでは。

いざ言葉の壁を乗り越えたいと願った時、その向こう側の世界を知ることはできないだろう。

例えば、この吸血鬼の少年のように、

「シリカ」

言葉の鋭さに恐れながらも、刃をほんの少しの勇気でできた鞘に収め、

「お前は……」

相手と打ち合う決意を固めなければ。

「お前は……俺を憎んでいるか？」

緊張が喉にせり上がり、唇は砂漠みたいに渇いていた。

手足は微細に震え、背筋には嫌な汗が噴き出している。

それでもハイクは自身を鼓舞した。

これまで暗黙の了解に甘え、一度も言葉にできなかった思いを形にした。

最愛の妹へ、これまでの軌跡が少しでも届けばいいと思って。

互いにつらかった。
互いの見えない傷に遠慮していた。
きちんと確認もせず、自分の都合の良いように相手の気持ちを解釈して、目を逸らして、逃げて。
しかし、
「好きの反対は嫌いじゃないんだよ、お兄ぃ」
たった一言で確執は嘘のように解消された気がする。
勘違いなどではない。
逃げではない。
この土壇場で、兄と妹は受け取ったのだ。
向き合ったのだ。
そこに虚偽が入り込む余地はない。
ハイクは言葉を侮っていた。
偽りしかないと思っていた。
言葉とは偉大だった。
まさか言葉に救われる日がくるとは。
「だからお兄ぃ、行ってらっしゃいっ」
「ハイク様、行ってらっしゃいませ」
ハイクはもう一度、二人に向けて首肯し、
「行ってきます」
踵を返して、キャリーバックを引いた。

駅の広大なプラットホームに辿り着くと、ちょうど乗車予定の列車が到着したところだった。
七二両編成の旅客用列車は、相も変わらずけた外れにでかい。
扉が開いて下車する旅人たちを大量に吐き出しつつ、乗車する者を次々と飲み込んでいく。
ハイクはフロントデスクで手早く宿泊手続きを済ませ、泊まる部屋を名義登録し、『永久切符』の裏にコードをもらって、今度は間

違えず宿泊用車両に乗り込んだ。
一週間ほど前にサティ＝ループが同伴した時は、不慣れから後部車両に乗って遠回りしなくてはならない羽目になった。
今回は運良く四〇両目の部屋を確保できた。
ハイクはつつがなく部屋を発見して、切符を使いチェックインを済ます。
そのまま室内に入り、キャリーバックをリビングに放置して、ベッドルームに雪崩れ込んだ。
ツインベッドの片方に脱力気味のダイビングを果たす。
――カサッ。
パーカーのポケットから紙片が擦れるような音が鳴った。
写真だ。
ララとサティ、そしてハイクが『赤煉瓦の街』の名物、銀時計台の前で撮った写真。
ハイクが彼女たちと共に時間を過ごした証拠。
（だから、どうした。それが、どうした）
そんなことは関係ない。
サティは死んでしまったのだ。
そもそも彼女は生きてすらいなかった。
本体である魔女の人格を一部切り抜いて、魔術的に作り出された粘土細工。
取り戻すことはできない。
あの三人旅は再現できない。
二度と戻らない。
つまり、この選択に間違いはないのだ。

∞　∞　∞

夜を孕む前の真っ赤な黄昏時。

もともとはセメント工場だったのだろう、タンクや太いパイプなど、様々な装置が機械仕掛けのタワーみたいに縦へ入り組んだ外周に、螺旋階段や鉄柵を設けて足場を作っている鉄塔がある。

他にもセメント粉末用の赤錆びた巨大サイロ。

泥にまみれたベルトコンベアや、長さ一〇〇メートルを誇る円筒のロータリーキルンと、それに繋がる冷却機が乱立していた。

その施設の敷地は広大で、規模は基地、要塞といった表現が実に相応しい。

どこを見渡しても大きな鉄の塊が屹立し、一種の異空間を形成していた。

そこに立ち世界観を共有するだけで、汗を流しながら働く作業員たちの活気ある姿が目に浮かぶようである。

が、今やそこも長期間、何らかの理由で人間たちに放置され、濃度の高い潮風にさらされ続けた結果、修復不可能なレベルで赤錆に浸食を受けていた。

もはや重度の廃工場マニアか、心霊スポットを冷やかしにくる若者たちくらいしか見向きもしなくなったその廃工場内に、銀狼の青年チェスター＝セドリックはいた。

意匠の凝った民族的な仮面は外しており、素顔に猛禽類を思わせる尖った瞳を露にしている。

工場の隙間から流れてくる塩の匂いが混じった微風に、ウルフカットの黒髪がなびいていた。

「チッ、聞こえがわりぃな。これだから電波は信用ならねぇんだ」

会話が終了するとチェスターは悪態をつき、耳元から二つ折りの携帯電話を離して閉じた。

「おい、列車が出たようだぜ」

側にいた銀狼の少女スカリーに携帯電話を投げ渡しながら、ぶっきら棒な口調で言う。

けれども、それはスカリーへの言葉ではない。

ましてや工場内に待機する他の同胞たちに発したものでもない。

チェスターは仲間に対し、上からものを言うことはあっても、決して不誠実な態度は取らないのだ。

チェスターの愛想もクソもない視線の先、そこには一人の魔女がいる。

紫色の修道服をまとうミリーズ＝メリーだ。

彼女はざらついた赤錆が浮く鉄骨の上に座って、携帯電話をいじっていた。

おまけに宙に投げ出した両足を、暇を持て余した子供のようにぷらぷらと交差させながら、ガムを噛んで風船を作っている。

その姿は――妖艶の一言に尽きた。

まるで美しい花弁の影に鋭利な刺を隠すバラのように、彼女の魅力は『二〇代の女性』そのものだった。

異性を誘い、惑わすかのような目つき。

膨らんだ唇をなまめかしい色でしっとりと飾るルージュ。

大きすぎず小さすぎず、彼女のスタイルにぴったりと調和している修道服。

その胸元の布を押し出す双子の膨らみ。

まるで隙のない体つきは、色気のある女性の完璧な設計図のようであった。

しかし、それはあくまでも外見だけの話。

精神年齢が低いのか異性を油断させるテクニックなのか、普段のミリーズは少女じみた所作や言葉遣いで振る舞っている。

実年齢二四の女性が剥き出しの鉄骨の上に乗り、はしたなく両足をぶらぶらしながら、携帯電話のアプリと菓子で遊んでいるあたりが、それを露呈しているだろう。

「んふふ、そうですかー」

チェスターからの報告を耳にしたミリーズは、ぷくっとガムの風船を膨らませつつ、鼻歌混じりの相槌を打った。

「……何をにやにやしてやがる」

チェスターが緊張感のかけらもない魔女を睨み上げて、釘を刺す

ように言う。
と、ミリーズはいじっていた携帯電話を閉じて、その端末の側面に付属する星の携帯スラップをチラつかせた。
「いやいや、あなたが文明人っぽいものを使っているので、そのギャップにちょっとだけ萌えたんですよう。あなたたちほど携帯電話が似合わない人型もいませんから」
小馬鹿にするミリーズに反応し、険悪な顔つきで一歩前に踏み出したのはスカリーだ。
それを遮るようにチェスターはスカリーを片手で制した。
この集団の中で誰よりも自尊心を意識しているスカリーのことだ。たとえミリーズの発言が正鵠を射ていようと戯言だろうと、敬愛するチェスターや同胞たち、果てには種族そのものを嘲笑うミリーズの言い方が許せなかったのだろう。
彼女たちは出会った当初から、反りが合わない仲だった。
ミリーズは特別スカリーを嫌っているわけではないみたいだが、時に彼女の誇りをからかったり、挑発したりして楽しんでいる。
当然スカリーはそれが気に食わない。
できることなら牙を剥きたいところだろう。
けれども、魔女の助けはチェスターたちの目的を遂行する上で有力だ。
それにミリーズに本気で反抗したとしても敵わないと分かっている。
だから、結局はチェスターが間に入ってスカリーが折れるしかない。
チェスターがスカリーのためを思って実行していると分かっていても、まるで魔女の肩を持っているようで、ますますスカリーとしては面白くないのだ。
それが約一〇年続いている。
そして今回も同じパターンだった。
四六時中魔女と行動を共にしているわけではないが、スカリーの

ストレスは相当なものだろう。
その捌け口はチェスターがいつも担っている。
スカリーの外見は、人間からすれば一〇代後半頃の少女そのものだが、実年齢に比例しないのが彼らの種族の特徴だ。
個体数は少ないが、その分、銀狼は長生きなのである。
老化現象も遅い。
それでも、スカリーの見た目は一〇年前より遥かに大人びてきているし、中身も随分と成長している、とチェスターは評価していた。
どうしても我慢できずに魔女とぶつかることも少なくないのだが、それは感情を持った生物の宿命だと割り切っている。
「俺たちはクソじじぃどもみてぇな、旧式じゃねぇんだよ。使えるもんなら新しかろうが古かろうが、『原罪』だろうが電波だろうが利用するさ」
「ほっほー。さすがは革命児。言うこともやることも違いますね。有言実行に徹する方は、大好きですよう」
ピキッ、とスカリーのこめかみに青筋が浮上した。
『有言実行』こそを座右の銘とする魔女は、口元の風船を割ってから、人懐っこい笑みを頬に表出して、
「それで、『彼』はその列車に乗ってチェックインまで済ませたんですか？」
「ああ、そうだ」
チェスターの同胞の中でも特に視覚嗅覚聴覚の優れた者を二名、視察部隊として『世界鉄道』付近に派遣していた。
その者たちが傍受した情報を総合した結果報告だ。
間違いはないだろう。
「なるほど」
味の薄くなったガムに飽きたミリーズは、新たなガムを懐から取り出し、指先で頭上につまみ上げた。
真っ赤な夕焼けに染まる空が、天井に空いた無数の穴から望める。
魔女は上空を仰いだまま口を開き、濡れた舌の上にガムを投入し

た。

　くちゃくちゃと音を奏でながら新旧のガムを口内で融合させるミリーズは、一回り大きくなった風船を作ってすぐに割った後、再び咀嚼を始めつつ、にっこりと天使のような笑顔を咲かせてチェスターにこう言った。

「しかし逡巡する時間も、シリカ＝R＝サードを欺くための空白時間も、彼にはあった。そうですよね？」

「ああ、列車はメンテナンスと給油で四五分間あの駅に停車する。例の吸血鬼が乗車したのは、メンテナンス完了の三〇分も前だ」

「覚悟を決めるには十分な時間ですね。ちなみに、シリカさんは列車のメンテナンスに気づいている様子はあったんですか？」

「不明だ。ただし、ハイク＝R＝セカンドの列車が出発するのを、そいつは見送らずに駅から立ち去った模様だ」

「ふーむ、そうですか」

「おい、魔女」

「なんですか？」

　ナイフの刃が月の光に反射したような眼光を瞳の奥に宿し、チェスターは双眸を細めた。

　その眼差しのまま、彼はミリーズに核心を問いかける。

「くると思うか？」

「きますよう」

　彼女は――『予言』の魔女は余裕の表情で宣言した。

「私の『予言』がそう語ったんですから、そうでなくては困りますし。有言実行をモットーにしてるんです。私の分身や『原罪』の少女は、そのためのお膳立てだったんですから。彼の情が二人にほどよく移り始める頃合いを狙って襲った。だから彼はサティ＝ループの復讐と、『原罪』の救済を果たすために、必ずここにきますよう」

　言い切るなり、ミリーズは顔の角度をやや低めに傾げて、チェスターを値踏みする目を送った。

「ところで、ですね？」

ミリーズの能天気で浮ついた声音が、ここにきて急下降した。
微かな冷気さえ帯びて。
「魔術で調節してるので意外と私、地獄耳なんですよう。あなたたちほどでは、ありませんけど」
「あ？」
「そして、ですね。もしも本当に彼がここにくるのでしたら、すでに報告がないとダメなんです。なぜなら列車はとっくに出発してるんですから」
訝しげに眉根を寄せるチェスターに、魔女は涼やかでいて危険な視線を注ぎ続ける。
「あなたの同胞は、視覚嗅覚聴覚ともに低レベルな精度ではありませんよね。なので、彼がここに向かっているのなら、あなたの同胞から報告がないとおかしいはずです。ハイク＝Ｒ＝セカンドが列車を下りた、と。しかし、私は予言を外しません。つまり――」

∞　∞　∞

吸血鬼の瞳術とは『視』る力だ。
物理法則を捻じ曲げる魔術とは違い、あくまでも個人の中の『変化』として補完される。
そんな吸血鬼シリカ＝Ｒ＝サードの朱眼は、いわば軍事用のＡＩを搭載した高性能センサーだった。
赤く染まる視界（モニタ）に、シリカにとって有益な情報や警告を抽出し、優先順位の高いものから表記してくれるのだ。
便利な機能はそれだけに留まらない。
その瞳術をもってすれば、全方位の視野も確保できる。
前方を向いたままでも、真後ろの状況を視認できるのだ。
さらに、シリカの周囲一〇メートル限定ではあるが、血縁関係にある吸血鬼の視界を別ウィンドウでリンク表示できる特典つきだ。
シリカは地図の上から街の構造物の配置を、また三次元では自身

の瞳術能力を利用して考察し、『彼ら』の居場所を正確に割り出していた。

マフィアの捜査能力を、その情報解析能力を、なめてはいけない。

実際に、一体は二〇〇メートル離れたポイントから、もう一体は七〇〇メートル離れたポイントから、それぞれハイクの動向を監視していたのである。

同時に、シリカはハイクが黙って起こす行動も予測していた。

それを承知の上で、シリカは兄の行動が滞りなく進むように、彼を見送った後すぐに呼び寄せたタクシーに乗り込み、部下に襲わせた二体の人狼がいるビルの屋上まで移動して、携帯電話を奪ったのだ。

一体は男で、もう一体は女だった。

シリカは瞳術を行使して電波の悪い場所を捜し出し、そこにタクシーで移動してからチェスターに通信を図った。

そして女性の方の人狼を装って、目標が下車しなかった旨を報告すると、反吸血鬼部隊のリーダーは同胞からの連絡だと思い込んで、アジトへの帰還を命じてから通信を切った。

やがて列車は吸血鬼の少年を乗せないまま、メンテナンスを終えてレールの上を再び動き出したのだった。

∞　∞　∞

「シリカ＝R＝サードですね。サティの記憶メモリの中にあった音声データと一致します。恐ろしい相手じゃないですか。まさか、五感の優れた銀狼相手に背後から忍び寄って携帯を奪い、その上あなたを騙し、情報を錯綜させようとするなんて、タダ者じゃ――」

ゴンッ！！

盛大な爆音と振動に、ミリーズの歌うような言葉は遮られた。

「俺が仲間の声だと気づかなかったのは、電波が悪かったせいか？」

銀狼化現象（ライカンスロープ）。

逆立つ銀髪と、凄んだ獣の瞳に莫大な怒気を溜め、チェスターは横合いに転がっていたクレーン車を右腕で殴り飛ばした。

横薙ぎの一撃を食らったクレーン車の装甲は派手にひしゃげ、坂道を転がる岩石のような勢いで工場の錆びついた壁に激突し、それでも止まらずに屋外へ飛び出していった。

「いいや、違う。俺の爪が甘かったからだ。俺が弱かったからだ。吸血鬼への憎しみが足りなかったせいだ」

チェスターは先の問いかけを、自ら否定する。

「もっと慎重な行動を指示しておけば、あいつらは失態に恥じることもなかった。吸血鬼なんぞに背後を取られることもなかった」

形相とは裏腹に彼の声は穏やかだった。

しかしながら嵐の前の気配というものを、その場にいた誰もが肌で感じている。

だから誰も何も答えず息を呑み下し、静粛なままチェスターを見つめていた。

ずっと彼の側に控え、支えてきたスカリーさえも僅かな畏怖を覚えて。

けれど、魔女だけは違った。

彼女だけは空気を読んだ上で、空気を読まなかった。

ミリーズは完全融合を果たしたガムを口の中で転がしながら、チェスターたちに聞こえるように鉄骨の上から呟きを落とす。

「吸血鬼への憎悪、ですか」

銀狼は吸血鬼を憎んでいる。

個人差こそあれど、彼らはその思いをＤＮＡに刻み、後世に残すほど吸血鬼に対する根深い怨恨を抱いている。

実際に吸血鬼から昔のような仕打ちを受けた銀狼は現代にいないだろう。

それでも、先代の恨みが呪いのように絡みつき、無条件かつ本能的に吸血鬼という種族を嫌悪するのだ。

銀狼の憎悪レベルは、人間のスケールで例えるなら、虫嫌いの女

性が足のたくさんついた昆虫を目にした瞬間の、生理的嫌悪感の抱き方に近似しているかもしれない。

たとえ相手に害はないと分かっていても、負の感情を反射的に拾い上げてしまうのだ。

「そのどうしようもない怨念が最も色濃く性格に備わった銀狼――それがチェスター＝セドリックですからね。あなたほど吸血鬼を敵対視する銀狼も、逆に珍しかったりするんじゃないですか？」

「俺だけが例外じゃねぇ。ここにいる仲間が全員そうだ」

チェスターは槍よりも鋭い眼差しを魔女に向けて、

「俺は過激かつ慎重なんだ。古式に囚われず、目まぐるしく変化する新しい時代の文明にも着目する」

魔女は動じることもなく、けろっとした様相で銀狼のリーダーに言葉を返す。

「ま、本来の銀狼の思考回路なら有り得ない、『魔女との協定』を受け入れたんですからね。そして、あなたと同じように『吸血鬼に対する異常なまでに強い憎悪を抱く思想』を持って生まれた同胞を、世界各地に散らばる銀狼部族の中から秘密裏にスカウトし、半年も要さずに五〇体の実用的な勢力に築き上げるほどの実行力と、カリスマ性を持っている」

チェスターが結成したレジスタンスの目的は、いたってシンプルだ。

過去に酷い仕打ちをしておきながら人類社会の甘い蜜をすすって、のうのうと生きている吸血鬼たちの抹殺。

それはもはや理性ごときでは抗えがない、強烈な衝動だった。

チェスターたちは冷静な部分では、本当は吸血鬼を憎んでいないのかもしれない。

これまでに吸血鬼の方から危害を加えられた経験がないからだ。

だが、本能がその理屈を許してくれない。

このどうしようもない『醜い感情』を抱かせるのは、結局のところ過去の吸血鬼たちが銀狼を奴隷にしていたせいなのである。

チェスターたちの、駆逐の対象に区別はなかった。
『純血』だろうと『混血』だろうと『劣血』だろうと、女だろうと子供だろうと老人だろうと、吸血鬼ならば全てが殺害対象。
だからこそ、慎重に動かなければならない。
人間か吸血鬼か、見極めるのは並大抵のことではないのだ。
吸血と瞳術という特殊能力は有しているが、中身は人間の皮を被っただけの弱者だ。
銀狼を上回る戦闘能力を秘めている者は少ない。
「それにしても、一〇年ですか」
長かったのか短かったのか分からない歳月の時間感覚に、ミリーズは囁いた。

∞　∞　∞

シリカとヒカゲに見送られた三〇分後、チェックインまで済ませたハイクは、『世界鉄道』の途中下車システムを利用して、プラットホームから人々が行き交う駅の構内に戻った。
つい三〇分前に手続きを行ったばかりの少年が、発車時刻ぎりぎりで再び下りるという奇行に、プラットホームの受付嬢は若干不審者を見るかのような目つきを寄越したが、構いはしなかった。
もしかすると改札を出た先にシリカたちが待ち伏せしているかもしれない、というハイクの予想も杞憂に過ぎた。
見せかけは成功したようである。
用心深いヒカゲがいながら上手くいき過ぎたことに少しばかり釈然としないが、彼も老いたのだろう。
ハイクが向かう先は魔女と人狼の待つ街はずれの港、工場跡地だ。
単身で乗り込む覚悟こそ固まっていたが、流石に五〇体の人狼相手に勝算はなかった。
シリカたちファミリーの支援があれば、あるいは勝てる見込みもあるかもしれない。

だが、現代の吸血鬼と人狼の集団が殺し合いでぶつかった実例はないため、戦局がどちらに転ぶかは神のみぞ知る。

現代の吸血鬼に戦闘能力は多く望めない。

武器は人間のように硝煙臭い兵器に頼るし、身体能力全般もそれこそ人間並みで、人狼には遥かに劣る。

唯一、人間にも人狼にもない、吸血鬼のアドバンテージは双眸を血の色に染める瞳術くらいだ。

〈レッドアウトファミリー〉のアジトに帰れば、人狼の優れた五感を逆手に取り、過剰な刺激を与えて狂わす対人狼武装の一式が保管されている。

例えば、シュールストレミングを加工した弾丸で嗅覚を。

瞳を刺激する煙を吐き出すガス銃で視覚を。

爆音重視に作られた手榴弾で聴覚を。

という具合に対策が練られた道具を駆使できる。

だが、ハイクが持ち合わせている火力は、護身用に持ち歩いているリボルバー一丁だ。

一週間ほど前は瞳術にものを言わせて七体の人狼を辛うじて撃退したが、相手がその五倍プラス魔女の戦力ともなれば、それら得物が戦場で役に立つかどうかは不安を禁じ得ない。

戦闘に陥ってハイクが勝利を収める可能性は、この際、皆無と断言していい。

生きて帰ってこれるかは分からない。

むしろ確率は最底辺と推定するべきだろう。

けれど。

それを当然のように理解していても、ハイクは『赤煉瓦の街』を人混みに紛れて突き進んだ。

場所は頭に叩き込んでおいたから、両足は淀みなく動く。

万が一に備えて、一般人を巻き込まないように市営のバスや電車、タクシーは使役せず、繁華街や大通りもなるべく避けて、人通りの少ない路地を黙々と徒歩で行った。

少し前まで死を待つばかりで、旅の目的地さえ曖昧にしていた吸血鬼の少年。

今や彼は明確な意思をその双眸に漲らせ、一つの目的地を目指していた。

12

チェスター率いる銀狼の一派が、勢力的に大人しくなった現代の吸血鬼に報復するため、魔女ミリーズと手を組んだのは利害の一致からだった。

彼らの協定は、一〇年前から結ばれている。

一〇年前。

その年は吸血鬼ラスト＝R＝ファーストが妻のレイニィ＝ガーデンを『黒血病』で亡くしたばかりで、〈レッドアウトファミリー〉の前から忽然と姿を消し、代わりにハイク＝R＝セカンドがボスの座についた年であり。

すでに部族から破門を受けていたチェスターが、当時一四歳だった魔女ミリーズの予言を受けて、実の母親を殺した上で産声を奏でたばかりの『赤子』を誘拐した年だった。

ミリーズの予言通り、吸血鬼ラストと銀狼キティアラ＝セドリックの間に生まれた『劣血』の赤子は、吸血鬼を感知する瞳術を得ていた。

右眼にくすんだ朱、左眼に宝石のような碧のオッドアイを湛える赤子は、『吸血鬼と自身を運命的に繋ぐ糸を可視できる朱眼』を有して生まれたのだ。

チェスターは魔女の手を借りて、吸血鬼ラストと共に逃避行した部族の裏切り者である母親キティアラの暗殺に成功し、呼吸して間もない赤子をさらった。

チェスターは母親のキティアラが、マフィア風情の吸血鬼と駆け落ちじみた行動に出ることを、魔女の『予言』によって心構えていた。

吸血鬼のオスと銀狼のメスの間に生まれる異端の子――ララの能力さえも。

人間と違って、銀狼は『育ての親』と『産みの親』が異なる。
可愛い子には旅をさせよ、とは少し相違があるかもしれないが、銀狼部族は生まれて間もない子を『他の地に住む同胞部族』に預け、育てさせるという習慣があった。
命を与えてもらった感謝と、育ててもらった感謝の重みは比較しようがないかもしれない。
けれど、チェスターの中に『産みの親』であるキティアラの記憶は、微かほどの残滓もない。
物心がつく前に、タイバンの西山秘境という地に手渡されたからだ。
『産みの親』の愛情を知らないチェスターの思考を占領するものは、『育ての親』から徹底的に叩き込まれた吸血鬼への憎悪だけである。
あの両親もまた、吸血鬼を強く嫌悪する銀狼だった。
チェスターの実の父親、つまりキティアラの夫は体調を崩し、若くしてこの世を去った。
その時期にラストも愛するレイニィを亡くしている。
邂逅は果たして偶然なのだろうか。
いや、おそらく魔女が裏で糸を引いていたのだろう、最愛の者を失って傷心する吸血鬼と、銀狼は出会ってしまった。
ラストはキティアラに妻レイニィの面影を、キティアラはラストに夫の面影を感じた。
チェスターは前もってミリーズの『予言』を受けた時、すぐにでもラストとキティアラを殺したかった。
しかし二人を殺害してしまっては、計画の要である『原罪』が生まれないのだ。
ララは吸血鬼を捜すのに必要となる道具だ。
その前に二人を殺せば、魔女との契約も成就されないことになる。
そうして、ララが生まれたタイミングで、チェスターはラストとキティアラを暗殺した。
ララの右眼を使って人間社会に巧みに紛れ込む、吸血鬼の一掃を

始動するために。
「チェスター。きました」
「ああ、分かってるぜ。スカリー」
スンと軽く鼻をすすり、チェスターは周囲の匂いから状況を再確認する。
潮風と赤錆のきつい匂いが鼻腔の粘膜を刺激した。
廃工場内に、良く知っている同胞たちの匂いが、自身を含めて約五〇。
廃工場の外へと出て行った魔女の、いまだに好きになれない香水じみた匂いが一。
その魔女の近くに『原罪』の苛立たしい匂いが一。
そして、廃工場の入り口にやってきた人間臭い匂いが一。
ニィ、と。
チェスターの口元に獰猛な笑みが露になる。
彼を含めた五〇の、突き刺すような視線が入り口に注がれる。
たった一人で現れた吸血鬼の少年へと。
「勇者と愚者の意味を履き違えた吸血鬼様のご登場だ」
赤錆の廃工場内に獣の殺気が充満する。
音もなく現れた少年の姿を吸血鬼と認識した直後から、銀狼たちの激しい葛藤は始まっていた。
無防備にも血に飢えた狼たちが住む森へ迷い込んだ一匹の獲物を、今すぐ己の爪でバラバラにしたい衝動に駆られながら、精神的空腹を抑圧しなければならない。
それが魔女との約束だ。
殺すのにはまだ早い。
知的生命体の有する理性を総動員して、疼き続ける感情の波を内側に押さえ込むチェスターたち。
対する吸血鬼は、チェスターたちの重厚な雰囲気を意に介さず、無言のまま工場の中央へ歩み寄り、立ち止まった。
この数の銀狼を前にして、表情に恐怖の色はない。

ただひたすらに、静かな瞳でチェスターだけを見据えていた。
ハイク＝R＝セカンド。
〈レッドアウトファミリー〉の二代目ボス。
『純血』の吸血鬼。
彼はたった一人、ろくな武器も持たずに約五〇体もの銀狼と対峙した。
チェスターは愚かな吸血鬼の度胸を買い、いきなり全員で袋叩きにするような真似はやめて、こんな提案を口にした。
「ちょっとした余興だ。手合わせしようぜ、吸血鬼。もっとも、テメェに拒否権はねぇけどな」
言いながら両膝を折って、前傾姿勢になるように屈み込み、一息に全身を伸ばして跳躍。
風よりも速い突進。
チェスターは右腕を限界まで振りかぶって吸血鬼の頭部を狙った。
瞬殺の一撃。
威力、角度、速度、タイミング、どれをとってもベストな攻勢。
動体視力の優れたスポーツ選手でも、敏捷性を鍛え抜かれた軍人でも、この軌道を見極めて回避するのは極めて困難だろう。
一秒後には、その手のひらに吸血鬼の間抜け面をした生首が乗っているはずだった。
――
「ッ！？」
吸血鬼の少年は、その紙一重をやってのけた。
チェスターのフルスイングした爪が吸血鬼の右頬を浅く斬り裂き、三本線の血を宙に引く。
瞬発力を活かした渾身の一撃が失敗したのである。
初撃は空振りに終わる形になり、チェスターは崩れかけた体勢を二本の足と地面の摩擦力で調節し、立て直した。
高速回転するタイヤが突発的なスピンを起こしたように、チェスターは足の裏から二本分の擦過跡を引きずりつつ、踵を返して、もう一度攻撃に踏み込む。

しかし――
「……」
「……」
チェスターの刃物よりも鋭利な爪がハイクの首筋、その数センチ手前で。
ハイクのリボルバーがチェスターの鼻先、その数センチ手前で。
それぞれ牽制するように突き合わせた状態で停止した。
チェスターは五本の指を綺麗な直線に揃え、爪の切っ先をハイクの首元に照準する体勢を維持しながら、
「やるじゃねぇの、小僧。俺の移動速度に迫った吸血鬼なんざ初めてだ。それが瞳術の恩恵ってやつなのか？」
眼前の銃口ではなく、その奥にあるハイクの『朱眼の双眸』をチェスターは憎々しげに睨めつけつつ、言葉を吐き捨てるように言った。
しかし、ハイクは感情の窺えない様相のまま、赤い瞳でチェスターを見据えている。
「へっ、無視か。良い御身分じゃねぇか。下等な銀狼とは対話すらしねぇってか」
まるで巨大な権力に守られているだけでイキる弱者を目にしたかのように、チェスターは毒気を抜かれた顔色で言い放った。
言葉と並行し、約五〇の銀狼を束ねる青年は、ゆっくりと右腕を引き戻して臨戦態勢を解く。
それから一歩分横へずれて、前方に顎をしゃくった。
「テメェが求めてるもんはあっちだ。魔女と『原罪』がいる」
すると、ハイクは応じるように瞳の朱を解いて、漆黒の視線をチェスターが促した先――工場の出口に向けた。
「そんなに簡単に俺を通して良いのか」
「不満かよ。別に親切心じゃねぇぜ。魔女が自らテメェを料理してぇっつうから、あいつの顔に免じてここを譲るだけだ。もっとも、俺の洗礼でミンチにならなかったらっつー話だったんだが、テメェ

はより酷な方に合格しちまったってわけだ。それに……」
チェスターはくつくつと悪趣味な含み笑いをこぼしながら、振り返って鋭い視線を流した。
「俺は俺であっちの相手をしなくちゃならねぇ。テメェみてぇな小物は魔女に譲るさ」
ハイクが入ってきたばかりの廃工場の入り口は、赤黒い色彩と卵の黄身をかき混ぜたような、琥珀色に満ちていた。
肌を焼くような夕焼け。
その逆光を背負った――黒服の男たち。
剣？なシルエットの先頭で、腕を組みながら威風堂々と佇む黒いドレス姿の少女。
シリカ＝R＝サード率いる、〈レッドアウトファミリー〉。
彼らはそれぞれの手に物騒な銃火器を携え、決して穏やかではない雰囲気を一様に纏っていた。
対人狼武装。
頭数はチェスターたち銀狼と同じくらいを揃えてきている。
勿体ぶらずにさっさと掃射すれば、チェスター側にも甚大な被害があっただろう。
「お前たち、どうしてここにきた……？」
マフィア風情を気取る吸血鬼たちの唐突な登場に、露骨に驚いたのはハイクだった。
彼が面を食らったように目を白黒させ、動揺の走った声音でシリカに問いかけると、
「兄上の考えは浅はかだ。あれくらいの低コストな欺瞞で私とヒカゲを騙せるとでも？」
「うっ……」
「兄上も少しは予想していたはずだ。改札に出たら私たちが待ち伏せしている可能性くらい考慮したかもしれない。だが、それが的中しなかったことで、兄上は完全に不用心になっていたわけだ」
冷笑を頬に張りつけるマフィアモードのシリカは、ハイクから興

味をなくしたように視線を外し、殺気立っている銀狼たちを順に見やった。

視線に物理的な干渉を起こす刺殺能力があったのなら、シリカたちはとっくに一〇〇枚におろされていたに違いない。

ピリピリと胃が擦り切れるような殺意を内包する廃工場内。

湖の水面上に張った薄い氷の膜を思わせる緊張感が漂う。

その氷の上に放置された者は、寒さで少しでも身じろぎをしようものなら、たちまち氷の膜に亀裂が走り、氷点下の湖に落ちてしまうだろう。

だがシリカはそんな一触即発の空気を無視し、あろうことか微笑すら浮かべて、悠然と一歩前へ踏み出した。

吸血鬼を殺したくてうずうずしている銀狼たちの中心、チェスター＝セドリックを見定めて大仰な口を開く。

「私はシリカ＝R＝サードだ。そこの兄上が君たちに色々と世話になったようで、今日は個人的にそのお礼にきたよ」

「それはそれは、わざわざ高潔な吸血鬼様にご足労をかけた」

「とんでもない。そんな自虐ネタよりも、私は一つ君に聞かせて欲しいことがある」

「あん？」

「もはや言葉による解決の余地はないと考えて良いのか。私たちは無駄に血を流したくない。和平的な交渉でことが済むのなら――」

「ねぇよ、クソ野郎。俺たちがテメェらに譲歩できる条件は、テメェらの即死くらいだ」

「……そうか」

威圧的かつ好戦的なチェスターの遮りに、シリカは呆れたように嘆息を落として、

「実に残念だよ。それなら、こちらとしても武力の行使はやむを得ない」

次の瞬間には、背筋の凍るような殺し屋の眼光を双眸に湛えていた。

いつの間にそんな目つきを覚えたのか。
シリカはその眼差しでハイクに目配せする。
ハイクはその視線の意味を捉えた。
「任せて良いのか、シリカ」
「当然だ。きっちり救ってこい、兄上」
兄妹は頷き合った。
吸血鬼の少年はチェスターたちを警戒しながらも体の向きを変えて、赤錆びた廃工場の出口へと駆け出す。
片やチェスターたちは、ハイクの行動に一瞥もくれなかった。
今となっては小物一匹に用はない。
それよりも眼前に現れた大量の殺戮対象に、歓喜と憎悪を燃焼していた。
これほど一度にたくさんの吸血鬼を炙り出し、殺せる機会など訪れたことがないからだ。
チェスターは興奮による感情の高ぶりで我を忘れないように、知性の総動員でもって本能を抑制しようと努める。
それでも、自然に溢れ出す笑みだけは我慢できなかった。
「行かせて後悔しないか？　兄貴との別れになっちまったぞ？」
「ミリーズ＝メリー、か。その魔女がどれほど強力かは知らないが、私の愛する兄上がそう簡単にやられるわけがない。問題はないさ」
「馬鹿が。自分の心配しやがれ。それに、テメェらが束になろうと勝てねぇ相手に、あの雑魚が単身で挑んで勝てるわけねぇだろうが」
「確かに私たちでは魔女に勝てないかもしれない。銃を寄せ集めたところで、物理法則を歪める魔術の前では無効だろう。だが、兄上なら一人でもなんとかするはずだ。彼はな、ああ見えて往生際が悪い。まあ、それが彼の良いところの一つなんだが」
誇らしげにふんぞり返る小さな吸血鬼の女王に、チェスターは不快そうに鼻を鳴らした。
「テメェはマフィアのボスだろうが。血なまぐさい現場に期待値を持ち込んだ時点で、テメェはリーダー失格だ」

「勘違いするなよ、人狼。私たちはお前たちに同情しない。私たちはマフィアである前に吸血鬼、ではなく吸血鬼である前にマフィアとして生きているつもりだ。喧嘩を売られたからには、黙っているわけにはいかないんだよ」

シリカから返ってきた言葉をチェスターは嘲笑い、一呼吸を置いたところで、

「やれ」

群集対群集の戦闘の合い図が決まった。

吸血鬼側の銃撃戦が始まったのだろう、後にした廃工場の方から派手な発砲音や怒号が聞こえ始めた。

反射的に振り返りそうになった体を努めて制御し、ハイクは前方の魔女を見上げた。

「どうも、やっぱりきてくれたんですね。ご無沙汰してますにゃ」

潮風の洗礼で錆がびっしりと表面に浮いた貨物コンテナの上に、足を組んで座視する紫色の魔女ミリーズ＝メリーがいた。

膝の辺りに肘を置いて頬杖をつき、悠長にガムを噛んでいる。

彼女にその意図があるのかどうか定かではないが、異性を誘惑するような目つきをハイクに投射していた。

ハイクは無言のままブーツの裏で砂利を踏み締めて、ミリーズとの距離を五メートルほど詰めたところで立ち止まる。

周囲は数多くのコンテナが乱立していて、他には転倒して半壊するトラックや横倒しの貯水タンクが転がっていた。

まるでゴミ捨て場のような惨状だが、ほとんど同義だろう。

離れた位置には無人のコンテナターミナル管理棟が見えている。

ハイクは目の動きだけで一通りララの姿を捜し求めたが、どこか別の場所に監禁されているのだろうか、見当たらない。

チェスターはミリーズと共にいるような物言いだったが。

ここは敷地が広い。

見つけるのには骨が折れそうだ。
工場の方から絶え間なく聞こえてくる硝煙の爆音を意識外に葬り、ハイクは武器を持たない空っぽの両手を野放しにしたまま、紺と朱が芸術的に入り乱れる夕焼け空を背後に負うミリーズに眼差しを送った。
「見ない間に随分と老けたな、ミリーズ＝メリー。たった一週間でそこまで歳を食うのなら、俺は時間が解決してくれるのを待つべきだったか？」
「あはは、これが私の本来の姿ですよう。あの時のちみっこい姿は単なるパフォーマンスです。二ヶ月くらい放置されても、私は寿命を迎えません」
ハイクの吐き出した皮肉にミリーズは気分を害する様子もなく、艶やかな唇を微笑に変えて肩をすくめるだけだった。
「単刀直入に問う。ララはどこにいる」
「『原罪』ならここにいますよ？」
コンコンッ、とミリーズは組んだ両足を上下に動かし、左足の踵で尻の下の貨物コンテナを突いた。
どうやらそこに幽閉しているらしい。
せめて彼女が五体満足で拘束されていることを願う。
「彼女を自由にしてもらおうか」
「さあ、どうしましょうか」
「お前にその決定権があるのか」
それは人権の倫理に基づいた否定の言葉でもある。
魔女だろうと人狼だろうと権力者だろうと、ララを監禁する権利は持たない。
彼女の自由は彼女の意思の下にあるのだから。
しかし同時に、それは現実問題としてこんな疑問も含まれた言葉だった。
（ララの拘束も解放も、人狼たちはミリーズに託しているのか？）
顔の半分を燃えるような夕日の赤に、残りの半分を暗澹とした紺

色の影に染める妖艶な魔女ミリーズは、善意を滲み出す親しげな微笑で、けれどささやかに困った顔を浮かべた。

「私としてはもう『原罪』に用はないんですけどね。チェスターたちとは一〇年の付き合いですし、べつに仲間意識なんてものはこれっぽちも芽生えてませんけど、兵隊としては十二分の働きを見せてくれますから、これからも持ちつ持たれつ、互いを駒扱いする仲でいたいんですよう」

「だろうな。索敵技術や身体能力うんぬんの質は、そこら辺の傭兵よりよっぽど使い勝手が良いだろう。おまけに連携は完璧だ。統率の取れた闘い方もできる」

諦め混じりの溜息を含有し、ハイクは腰に手を当てて納得を表した。

「はい。まあ、そういうわけで、あなたの期待に添うのは無理そうです」

よっ、とミリーズは軽く勢いをつけて、貨物コンテナの上から軽快に飛び降りた。

猫のような柔和さでもって砂利のアスファルトに着地する。

妖艶な魔女はぷっと横合いにガムを吐き捨てつつ、後頭部に手を回した。

紫がかった黒髪を夕日の光から匿うように、修道服のフードを目深に被る。

それが彼女の戦闘スタイルなのか、フードの下に仄暗い影が落ちた。

ミリーズは修道服のスカート部分をつまみ、それまでのひょうきんな態度とは打って変わって、淑女さながらの美しい挙動で腰を折る。

「改めまして、吸血鬼ハイク＝R＝セカンド。私は『予言』の魔女ミリーズ＝メリーです」

ミリーズは上半身を元に戻し、懐から『世界樹（ユグドラシル）の杖』を取り出した。

「今回、あなたには効果的なキーパーソンの役割を果たしてもらいました。お疲れ様です。おかげさまで私の一八九回目の『予言』が実現するまで、もう少しです。吸血鬼と銀狼の集団抗争を、銀狼側の勝利に導くことで私の『予言』は完遂します。そして、これからそれを有言実行させていただきます」

毒々しい花弁のバラを先端に添える杖が、銃口にも等しくハイクを照準する。

ミリーズは舞台劇の台詞じみた喋り方を続けた。

「さあ、あなたも得物を取ってください。決着をつけましょう。お互いに闘う動機は十分なはずですから。あなたは私を撃破することで復讐劇と救済劇、その両方を達成できる」

それ以上、ハイクに謡いたい想いもなかったのだろう。

魔女の言葉はそこで幕を閉じた。

――さあ、言い返してこい。

――肯定だろうと否定だろうと、お前の反論が尽きた瞬間こそ、殺し合いの合い図だ。

ミリーズの双眸は言外にそんな妖しい眼光を湛えていた。

潮風がコンテナの間を縫って海の匂いをつれてくる。

湿気を纏う微風が魔女のフードからはみ出た前髪と、ハイクのくせっぽい黒髪を沈黙の中で弄んだ。

空はなりをひそめたように静まり返り、海鳥の一羽すら飛んでいない。

ハイクは束の間、両の瞳を閉じた。

その瞼の裏に何を思い浮かべたのか、吸血鬼は乾いた唇と共にそっと双眸を開く。

「お前も不安だったんだよな」

ハイクの低い声が届くと、ミリーズは呼吸と共に全身の動きを停止した。

最初はハイクの発言を計りかねるように、しかし石化の呪詛でも浴びたみたいに、魔女は数秒間だけ全ての意識的動作を忘れてハイ

クを見つめた。
「魔女だって万能な女神なんかではない。中身はただの感傷的な人間だ。笑いたい時だってあれば泣きたい時もある。辛くて落ち込みたい時もあれば、怒り狂って不満をぶちまけたくなる時もあるだろう。もちろん、自分の力に自信が持てない時だってあれば、まだ見ぬ未来が恐くて仕方がない時があっても、全然おかしくないんだ。夢もなく、就職先も見つからない若者みたいにな」
ハイクは痛ましげに瞳を細めた。
ミリーズにその哀れみを投げかけるように、慈悲深い響きを発音する。
「常軌を逸した魔術のインパクトに騙されがちだが、それを扱うお前は前提として、感情と理性で動く人間なんだ」
硬直するミリーズの、ハイクを凝視する表情は凍結していた。
いや、青ざめに近いかもしれない。
血の気の失せた顔のまま固まるミリーズに構わず、ハイクは続ける。
「俺の知り合いに元魔術師の吸血鬼がいてな。そいつに教えてもらった。『予言』というのは絶対の未来透視術ではない、と。当たる時もあれば外れる時もあるわけだ」
「……」
「『予言』を口にし、その内容が的中するごとに精度を高めていく魔術。お前は『予言』の精度を高めたいがために、予言で唱えた未来を自ら作り上げていた。自作自演……、いや、お前の口癖を尊重するならば有言実行か？」
ハイクは言葉を区切り、俯いてしまった魔女の反応をしばらく窺った。
すると、
「――黙ってください」
たった一言。
魔女の唇から放たれた警告に、ハイクの背筋は強烈な悪寒に縛ら

れた。
ミリーズの形相が一変する。
彼女の面様はさらなる暗い闇に覆われた。
魔女の全身から敵対者を圧倒する何らかの情報源が、全方位に向けて放射されている。
人の鈍い五感では読み取りにくい、しかし確かに存在する濃密な殺気。
その時ハイクは戦力の差を瞬時に理解した。
じわり、と脂汗か冷や汗か判然としない水滴が額や両手、背中に滲む。
初めて魔女の剥き出しの殺意に触れて、恐怖心を覚えた。
どこか心の奥底では、ミリーズとサティを同一視する甘えた自分がいたのかもしれない。
僅かながら警戒心をおろそかにしていた節がある。
ハイクは本能と理性が同時に訴えてくる危機感を無理やり内側に宥め込み、とっさに後退しそうになった体に鞭を打って、逆境に抗うように一歩前へ出た。
「一寸先は闇。それが未来だ。ミリーズ＝メリー」
「……黙ってくださいよ」
「一秒後には何が起きるか分からない。極端な話、居眠りした運転手の操縦が狂って、ひしゃげたガードレールごと車が歩道に突っ込んでくるかもしれない。縁もゆかりもない通り魔や強盗に理不尽に襲われるかもしれないし、いきなり心臓麻痺に陥るかもしれない」
「……黙って」
「億分の一の確率で起きる事象に対し、自分は無関係だと言い切れるのは、その途方もない数字の的中率をないがしろにしているからだ」
だが。
もしも。
「ミリーズ、お前は――」

もしも、その未来を見通せる力があったとしたらどうだろう？

「――どれだけ強くなっても、どれだけ努力を重ねても、いつまでも自分の力に自信を持てなかったお前は――『家族を全員取り戻せる』という予言の後押しが欲しかっただけなんだろう？」

魔女は俯いたフードの下で、唇を引き結んで奥歯を噛んだ。

過去の過ちでも悔いるみたいに、悔しそうに。

綱渡りにも等しい空気感にハイクは生唾を飲み下しつつ、それでも毅然とした佇まいだけは崩さず、揺るぎない看破の言葉を吐き出し続ける。

「今回の『予言』は、おそらくチェスター辺りを軸にしているんだろう。チェスター率いる人狼が吸血鬼と殺し合う未来を、お前は予言した。その舞台を整えるために、お前はわざとララが逃げられるように独房のセキュリティを甘くしたわけだ。人狼の許可なしに、こっそりとな。事前に知っていればチェスターたちはララを手放すことに反対しただろうから、実行はお前の独断だろう。どうだ、違うか？」

ララの右眼は『自身と吸血鬼の繋がりを糸』として可視する。

糸が見える条件としては、彼女と吸血鬼の肉体的距離が大きく関係していることくらいしか判明していないという。

両者が近くなれば近くなるほど糸が現れやすいというわけだ。

なお、糸には二種類の色があり、色が黒だった場合、ララとその糸で繋がれた吸血鬼は『凶』を意味する間柄にあることを表現しているらしい。

つまり、『ララとその吸血鬼は互いを不幸に落とすから出会わない方が良い』と忠告しているのが黒なのだ。

だが、赤は違う。

赤は『血の繋がり』を表現している。

――『家族』、だ。

この情報提供者はヒカゲである。

ララと同じ瞳術を持つ吸血鬼が大昔に一人だけいて、その者の文

献にあった古い知識だと聞いた。
　要するに糸の色が黒にしろ赤にしろ、辿った先にいるのは吸血鬼なのだ。
　魔女はララがその糸の先に関心を示して、いずれ行動に出ることを見越していたのだろう。
「だが、お前は『予言』に固執しすぎた。『予言』のお墨付きをもらうまでは、自分の力に自信が持てず、恐くて行動に移せなかったんだ。それがゆえに、家族を取り戻す以前に、一〇年も『予言』の完成に費やしてしまった。本末転倒というやつだな。目的と手段の優先度が逆転している」
「あまり、理解したような口を叩かないでください」
　ミリーズは剣のような怒気を言霊に流し込んだ。
　刹那――先ほど彼女が地面に吐き捨てたガムの塊が、瞬時の閃光を発して爆ぜた。
　その現象に並行して、魔女の足元を中心に、破滅的な破砕音と烈風じみた衝撃破の渦が巻き起こる。
　アスファルトを覆っていた大量の砂利が、荒れ狂ったように空中に舞い上がった。
　一帯の視界は、竜巻に包まれた砂漠地帯のようにひどく悪化する。
　けれどミリーズは目も開けられない暴力的な砂嵐の中、確実にハイクの姿を見据えていた。
　怒りや屈辱を孕んだ瞳の色を湛えて。
　やがて砂塵のつぶてを含有する暴風が、ミリーズの持つ『世界樹（ユグドラシル）の杖』の動きに従った。
　バラの切っ先がハイクを指名すると、莫大なエネルギーがハイクを食い殺すために殺到した。
　それは魔女に従順な単なる風ではない。
　内部にダメージを増幅させる小石や砂が混ざっているのだ。
　そこにはメリケンサックを装着した拳と、そうでない素手で殴られるくらいの開きがある。

そして、ハイクにその攻撃を完璧にかわす術はない。
即断で瞳術を行使し、スローモーション化した赤い世界で、できるだけダメージを軽減できるように砂の動きを見定めながら、体を丸めて悪あがきするくらいしか抵抗を許されない。
案の定、ハイクの体はゴミくずのように横薙ぎに吹き飛ばされた。
両足が大地から離れ、天と地が逆転し、内臓が焦燥に駆られる浮遊感に襲われたかと思った瞬間には、背中から貨物コンテナに激突して息が詰まり、うつ伏せになって激しくむせていた。
朱眼を解くと背骨だけではなく、暴風がダイレクトに直撃した左半身や、小石の散弾を食らった全身が脳みそに向けて非難がましく痛みを訴えかけていた。
刈り取られかけた意識は頭を振って明晰にするまでもなく、その激痛が手綱を握っていてくれた。
痛覚が正常に機能していることに皮肉混じりの感謝を表しながら、ハイクは地べたに沈んだ体を酷使して立ち上がろうとする。
幸い、今の一撃で暴風は霧散したようだった。
連撃はない。
取り合えず一時的に脅威は去った、と思った。
「がっ――!?」
真上からプレス機のような不可視の圧力が伸しかかり、ハイクの努力を強引に押さえ込んだ。
どれだけ両手両足を踏ん張ってもビクともしない。
ハイクの全身はうつ伏せになる形で、再び地面へのキスを強要された。
「私は……私は、何が何でも予言実行しなければならないんです。どれだけの犠牲を払っても、家族を取り戻すために、『エンドレスナインの確定』に辿りついて、家族を取り戻し、有言実行で、私だけが家族を救える生き残りだから、妹や弟、お父さんにお母さんを、この予言で必ず、あの幸せだった日常を……絶対に私がッ！」
寝言めいた呟きを口の中で繰り返し、ミリーズは覚束ない足取り

で前進する。
まるで大事な支柱を心から失ってしまったみたいに、その空虚な姿と挙措はゼンマイ仕掛けのブリキ人形を連想させた。
砂利のアスファルトに縫いつけられたまま、不可視の圧力に身を封じられるハイクの下まで、ミリーズはゆらゆらと歩み寄る。
右手に携える『世界樹（ユグドラシル）の杖』をスープでも掬い取るような軌跡で緩慢に、力なく振った。
するとハイクの体がいきなり、ごろりと仰向けに裏返った。
ただし、謎の圧力からは解放されず、血が滲んで傷だらけになった吸血鬼の体は、結局のところ地面に張りついたままだ。
ミリーズは闇の水面を映した双眸でハイクを見下し、彼の腹の辺りに馬乗りになって腰を下ろした。
禍々しい紫を咲かせるバラで装飾された杖の先端を、ハイクの首筋に宛がう。
魔女はフードの日陰に隠された目元を淡泊に歪め、狂喜的な笑みを表出した。
猟奇的殺人鬼にも似た、精巧な顔立ちゆえに壮絶な笑み。
けれど。
ミリーズが本当に心を見失った殺人鬼であるならば。
今、彼女の頬に流れている生温かい滴は、一体なんだと言うのか。
「私は銀狼たちを勝利に導かなければならないんです。予言を確実に成功に収めなければ、そうしなければ、全てがゼロに戻ってしまうんです」
ハイクの頬から耳元まで冷たくも温かい、人肌のような雫がつたう。
水滴は一粒一粒、魔女の双眸から落ちていた。
ふいに、ハイクの自由を奪っていた圧迫が、右腕の領域だけ弱まった気がした。
ハイクは手のひらを開閉することでその感触を確かめると、力の限りを込めて右腕を地面から浮かせる。

弱まっている圧力を、真剣同士の鍔競り合いにも似た拮抗を見せて、徐々に押し返す。
「できるさ」
ハイクは喉元を唸らせるように言った。
「お前ならできる」
そう断言する言葉自体がハイクの右腕を後押しするように推進し、ついにその手のひらがミリーズの左頬を柔らかく包み込んだ。
指の腹で魔女の涙を、ぐいっと払う。
「お前なら優しい予言者にでもなって、絶対に家族を取り戻せる」
ミリーズの杖を握る右手に力が籠るのが分かった。
それでも、ハイクは確信に満ちた笑みを浮かべ、言う。
「だが、今回は俺たちの勝ちだ。ミリーズ＝メリー」
はっとした様相でミリーズは顔を上げた。
同時、絶望に値する光景でも目にしたように、彼女はそちらに視線を固定した。
「人狼の連中が、吸血鬼の団結力を侮った結果だ」
工場の方から聞こえてくる断続的な怒号や銃弾の飛び交う喧騒が、いつの間にか収まっていた。
そのことにミリーズは今さらながら気づいたようだ。
魔女が凝視する先にはシリカとヒカゲを初め、対人狼武装に身を固めた〈レッドアウトファミリー〉の面々が仲間の肩を借りながら、決して軽傷ではない傷を負いつつも揃い踏みしていた。
一人欠かすことなく。
「貴様が駒にしていた人狼どもは私たちファミリーに敗北し、お縄になった。これからチェスターの出身地タイバンの人狼部族と連携して、彼らの身柄を引き渡す予定だ」
額から少なくはない量の血を滲み流すシリカが代表して、笑いもせずミリーズに告げた。
「『予言』はハズレだよ、ミリーズ。今からお前が私たちを殺しにかかっても遅いだろう。それはお前の勝利になってしまい、人狼た

ちの勝利にはならないからだ。それでも、個人的な感情の理由で矛を収められないのなら、私が受けて立つぞ」

虚勢や意地で口にできる言葉でも状況でもないのに、シリカは正々堂々と魔女の恨みを買ってやると宣言した。

その憎しみにとことん付き合ってやる、と。

そして、ハイクは――ミリーズの全身から力が抜けるのを感じ取った。

それに伴い、全身を押さえ込んでいた謎の力も。

「自業自得、ですよね」

ミリーズは『世界樹（ユグドラシル）の杖』を手中からこぼし、夜に浸食されつつある空を仰いで、ぽつりと呟いた。

「『エンドレスナインの確定』に到達するには、一度の失敗も許されないんですよう。積木みたいに崩れてしまったら、一からやり直さないといけない。『エンドレスナインの確定』に到達した予言者は史実上、存在しません。それくらい険しい道なんです。極めるのは無謀と言っても過言じゃありません」

ミリーズは泣いているような、笑っているような、くしゃくしゃの表情で、自身がまたがるハイクを見下ろす。

「そして今、私が三年間連続で実現してきた『予言の連鎖』が断ち切られました。私の予言した未来と、現時間の結果に大きな誤差が生じたからです。一八八回的中してきた私の予言も、これでゼロに還元します。『エンドレスナインの確定』に到達する一〇〇〇回目までは、まだまだの実績でしたけど、やっぱり難しいものですね。三年も費やして達成率がたったの一八パーセントなんですから」

たはは……、とミリーズは乾いた笑みをもらす。

一〇〇〇の『予言』を口にするのは容易だろう。

当たる外れるを関係なしに、手当たり次第に予言するだけで話は丸く収まるのだから。

だが、『エンドレスナインの確定』を目指す魔女は違う。

むやみやたらに予言を唱えれば、それだけ外れてしまう確率が飛

躍的に上がるからだ。
ゆえにミリーズは細心の注意を払って予言を語る。
彼女の場合は連続で的中させ、一〇〇〇まで『予言の連鎖』を築かなければ意味がないのだ。
「有言実行には準備期間とか工作に時間を要します。三年で一八八回、連続で予言を成功させているのは、実は好成績だったりするんですけどね」
よっこらしょ、とミリーズは地面に手をついて立ち上がり、ようやくハイクの上からどいた。
ハイクの頭の横に落ちている『世界樹（ユグドラシル）の杖』を拾いもせず、魔女は吸血鬼たちに対して、くるりと背中を向ける。
まるで何もかもが終わって、取り返しのつかない事態に心が折れてしまったかのような、ミリーズの言動を、
「諦めるのか」
ハイクはどうしても見過ごせなかった。
「何ですか？」
ミリーズが無感動な口調で半歩分、踵を返す。
ハイクはリズム的な波を打つ節々の痛みを無視して、吐血を唾と共に吐き出しながら、よろめいて立ち上がった。
駆け寄ろうとする仲間たちを片手で制し、ハイクはミリーズに立ち向かう。
言葉に己の思いを乗せて、相手に伝える術を知ったばかりの吸血鬼が。
「一度や二度の失敗で、もう諦めるのか。お前には俺と違って、まだ未来が残されているだろう。たった一〇年踏ん張った先で躓いたくらいで、お前は家族を諦められるのか」
「あなたは、何を言ってるんですか？」
ミリーズは怪訝そうに眉根を寄せて、全身をハイクに向け直した。
「俺の未来を予言してみろ。一年後だ。おそらく単純明快な答えが出てくるはずだ」

後方でファミリーの面前が息を?む気配があった。
けれど、ハイクは気にせず続ける。
「さあ、やってみろ。俺は予言者でも魔術師でもない一介の吸血鬼だが、お前の予言能力が本物なら、俺の想像通りの未来が返ってくるはずだ。なに、そんなに複雑な未来ではない。お前なら絶対に的中させる」
ミリーズは警戒心も露にハイクに歩み寄った。
吸血鬼の傷だらけの頬に両手を添えて、瞳を間近に覗き込む。
両者の背丈はあまり変わらず、わずかにミリーズが屈んだ。
ほとんど鼻先が触れ合うかどうかの距離で吸血鬼と魔女が見つめ合う。
互いの呼吸が静かに絡み合う。
万が一に備え、シリカたちは弾薬が少なくなった手元の銃器に意識を集中していた。
しかし彼女たちが危惧した事態には発展せず、ミリーズはハイクの瞳の奥に何を直視したのか、束の間わずかに表情を強張らせた。
その唇が予言の結論を機械的に紡ぎ出す。
『……一年後の今日、そなたは、すでにこの世を去っているだろう。その血管に住まう黒い死神が、そなたの生命を枯渇させ、やがては死に至らせるのだ』
唱えた後で、ミリーズは数歩分後退し、弱々しく溜息をついた。
「どういうことですか」
「吸血鬼特有の『黒血病』だ。見ろ、俺の血は少し黒っぽいだろう」
ハイクはパーカーの袖をまくって、皮膚からなるべく多く出血している箇所を露出した。
「余命一年だ」
「……」
「なあ、もうこんな血なまぐさいことはやめにしよう」
口調に包み込むような柔らかさを乗せてハイクが言うと、ミリーズはそっぽを向き、鼻で笑って返した。

「ハッ、自らの罪を認めて牢獄にでも入れと言ってるんですか？」
「いいや、俺は諦めるなと言ったんだ」
「あなたの主張が迷子になってます。何が言いたいんですか。他人事だからって、無責任な発言を連発しないでください。私にあなたの良心を押しつけないでください」
「違う。聞け、ミリーズ。俺は諦めるなと綺麗事で言及しているわけではないんだ」
「？」
「手伝ってやる」
返すべき言葉を失い、ハイクを凝視したのは魔女だけではなかった。
その場にいたハイク以外の誰もが、彼の言動を一瞬、理解し損ねた。
「一年しか付き合ってあげられないが、できる限りのことは協力しよう。ただし、カタギを傷つけるようなやり方はダメだ」
シリカたちが物言いたげにハイクを見つめるが、ミリーズがその思いを代弁した。
「あなた、大きな勘違いをしてませんか？　私はサティ＝ループじゃありません。あの粘土細工に容姿が似てるってだけで、よく同情なんてできますね。自分の言及したことを正しく理解してるんですか？　残り一年の自由を犠牲にし、赤の他人の私のために使うって、絶対に馬鹿でしょう」
そこまで言われても、ハイクに迷う素振りはなかった。
「家族、取り戻したいんだろう？　その部分だけは、サティ＝ループと相違ないはずだ。あいつにはお前の人格の他にも、強過ぎる願望と口調まで移っていたからな」
きっと、ミリーズは恐かったのだ。
彼女自身の未来を予言することが。
だが、『予言』は家族を取り戻す上で有効的である。
それならば、せめて確実性の高い『予言』の太鼓判が欲しかった

に違いない。
『予言的中率エンドレスナインの魔女』を目指したミリーズは、苦虫でも噛み潰したような面様で目線を明後日の方向へ逃がし、
「誰が――」
両手を震わせるほど強く握りしめ、腹から声を絞り出した。
「誰が諦めるものですか。私を誰だと思ってるんですか。『予言』の魔女にして、有言実行の魔女。二言はありません。私は絶対に家族を取り戻します。どんなに無謀だと言われても、世界中の人間を敵に回したって、私は挫折なんかしません。誰がなんと言おうと、生涯をかけて、絶対に――」
「だったら」
感極まった様子のミリーズを遮り、ハイクは足元から拾い上げた『世界樹（ユグドラシル）の杖』を投げ渡す。
「だったら、世界中の人間を敵に回しても、俺はお前の味方になれるはずだ。吸血鬼は人間ではないからな」
愕然とした表情でミリーズは立ち尽くした。
ややあって、彼女は居心地が悪そうに身じろぎし、自らの罪を独白する罪人の顔で口火を切った。
「私は銀狼たちに加担して、直接的ではないにしても、あなたの同胞に手をかけてるんですよ？　免罪符を利用して無関係な人間も殺めた。そんな人間を生かしておいて辛くはないんですか？」
「それを許す許さないは、もはや俺の手に負える問題ではない。俺は神でも裁判長でもお前自身でもない吸血鬼だからな。偉そうにお前を罰する権利はない。ましてや殺すか生かすかなんて、俺がどうにかして良い選択ではないだろう」
「そんな詭弁で割り切れるんですか？」
「罰は何のために存在すると思う？」
質問を質問で返され、ミリーズは返答に窮した。
「気づくためだ、自身の過ちに。そして、お前は最初からきちんと気づいていただろう？」

魔女は罪悪感を意識していた。

けれど、『家族を取り戻す』という正当化できる理由の下で罪を実行しているうちに、良心の呵責を司る感覚が麻痺してしまった。

一〇年という長い月日が、彼女の正常な精神を蝕んだのだ。

特にミリーズの環境は悪かった。

彼女が直接手を下すのではなく、分厚い壁を挟んだ安全な場所で、銀狼たちに命令を促す傍観者となっていたのだから。

現場から肉体的、および精神的に距離があることに、暴走の拍車がかかったと推測できる。

「罪は罰を受けて浄化できるものではない。十字架のように、一生涯を通じて背負い続けるものだ」

ハイクは魔女の心理を汲み取った上で、詠った。

「謝罪の言葉が自身の負担を軽減するために、許しを請おうとするものではなく――」

「――心の底から相手に悪かったと過失を詫びる気持ちの結果であるように、罪という穢れのみそぎは自身のための儀式であってはならない。……有名な聖女の言葉ですね」

ミリーズは諦めたように、照れ臭そうに繋いだ。

13

吸血鬼と魔女のやりとりを外側から見守っていたシリカは、兄の意向に口出しをしたい複雑な心境に陥っているのと同時に、彼をいじらしくも感じていた。

何だかんだ言って、結局はハイクも放っておけない性分なのだろう。

それが自己満足の類かどうかは、彼自身に訊いてみなければ分からないが、それを理解するのは無用だ。

愚かしくもありながら尊敬できる兄。

冷淡な面もあれば、滑稽なくらい優しい面もある。

理性と本能の狭間で行き来し、善悪の往復を繰り返し、強くも弱くもあるがゆえに、後悔に苛まれたり、過去に囚われたり、未来を恐れたりする。

その一面ではない有様が人間臭くて、シリカはほっとするのだ。

いや、好感の基準は人間であるかどうかの定義ではない。

その喜怒哀楽こそ、シリカの愛するものの正体なのかもしれなかった。

「まったく、馬鹿な兄を持つと妹は苦労をする」

「辟易の口調で申しておりますが、顔がだらしなくニヤけておりますよ、ボス」

「どこに出しても恥ずかしい兄上は、まだ私が管理しなければならないかもしれん」

「さすが重度のブラコン。まるで子離れできない親の言い分でございますな」

「やかましい。兄上を他の女に寝取られた私の気持ちがヒカゲなどに分かるものか」

「べつに寝取られてはございませんでしょうに」

「ちくしょう、ぽっと出の泥棒猫め。今回ばかりは見逃してやるが、必ずあの凄まじいボディを凌駕して、兄上を寝取り返してやる」

一五歳の吸血鬼娘は、自身の発展途上な胸をドレス越しに見下ろしてから、二四歳の妖艶な魔女の双壁をなすっ、形の良いっ、豊満すぎるっ、圧倒的な膨らみをっ、恨めしそうに遠目で睨んだ。

「美乳で巨乳とか反則だろう」

あまりの差に、ちょっぴり涙が出てきた。

すると、周囲を取り巻くファミリーの面々が――

「大丈夫ですよ、ボス。貧乳は意外と需要ありますから。むしろ正義です」

「そうそう、微乳は肩も凝りませんし。それにロリってのはアドバンテージな属性だったりするんですよ。むしろ正義です」

「いっそのこと、ボスはそのアホ毛を活かした無乳ドジっ娘メイドに変身するってのは、どうですかね」

「いやいや、妹がスクール水着でアプローチというのをテーマにしてみては？　髪型も普段とは変えて、一〇代特有の瑞々しく汚れなき肉体を捧げるんです」

「ばか野郎、まな板に近いボスが水着なんて着たら、上半身のある一部分が着太りするタイプだって露見してしまうだろうが。ここは愛らしい八重歯を活用した擬人化コス一択で押すんだ」

「私事で恐縮ですが、僕っ娘がドストライクです」

――口々にありがたい慰めの言葉を肩に置いてきた。

けれど、失礼極まりない単語を数カ所に散見したので、発言者たち全員の傷口を順につねっておいた。

（ったく……。薄々は気づいていたが、こいつら頭がおかしいんじゃないか。いかつい顔して、いつもそんなことばかり考えているとしたら調教ものだ。それに考えが手温い。私ならば兄上を振り向かせるのに、徹底的なヤンデレだってこなしてみせる！）

シリカもシリカで自身の思考に欠陥を患っていることには盲目なまま、密かな決意を歪んだ乙女心に誓うのだった。

「ところで、ヒカゲ。タイバンの狼たちはまだか。さっさとチェスターたちを引き取らせたい」
「もうそろそろかと」
「ふむ、では先にララを救出するとするか」
シリカは双眸を朱に染めた。
その視界（モニタ）はいわば軍事用ＡＩを搭載した高性能センサーだ。
視界にシリカにとって有益な情報や警告を流してくれる。
ララを迅速に発見するため開花したシリカの瞳が、異常を捉えたのは間もなくだった。
――ドゴンッ！！
一五メートルほど先に放置されている赤錆だらけの貨物コンテナ。
その上部が凄まじい轟音をがなり立てて吹き飛んだ。
猛スピードで直進するトラックにでも突進されたみたいに、中央が大きく凹んだ四角い金属板は、くるくるとプロペラのように放物線軌道を描いて、明後日の方向へ墜落していく。
誰もがそのガラクタに目を奪われる中、唯一シリカの両目がいち早く警告を表示した。
天井が開けた例の貨物コンテナの内部から、銀色の小柄なシルエットが躍り出てきたのだ。
「まずい。避けろ！」
シリカはとっさに叫ぶ。
だが、その声よりも速く銀狼化現象（ライカンスロープ）を引き起こした少女の細い右腕が、まるでナイフの刃のように、綺麗に、ミリーズの腹部を貫通していた。

ハイクの目の前に瀕死の魔女と、気を失って横たわる少女がいた。
ララの銀狼化現象（ライカンスロープ）の起因となった人物は、ミリーズだ。
その銀狼化を解消するには、原因となったミリーズを排除する以外に術はなかった。

ララは貨物コンテナの中で一週間近く幽閉されていたが、魔術的調合で精製された睡眠薬を飲まされて、今の今まで眠っていた。

その効果が切れて覚醒したララは、貨物コンテナの天井を突き破り、ミリーズを一目散に襲ったのである。

そうして、標的を破壊したと確信したララの銀狼化は役目を終え、黒髪に戻ったノーマルなララも極度の疲労から、一秒も持たずに気を失ってしまったわけだ。

「ああ、痛い……。死傷って……こんなに痛いんですね」

硬いアスファルトの上にぐったりと倒れ伏す魔女は、不健康な紫に変色した唇から掠れた声をもらした。

苦痛をごまかそうとしているのか、微笑を浮かべようとしているけれど、見事に失敗している。

額には尋常ではない量の汗を滲ませていた。

ハイクはミリーズの傍らに膝を落とし、彼女の腹部に目をやる。

紫色の修道服には絞り取れそうなくらいの血が染み込んでいた。

少女のものとは言え、腕の一本が腹部に突き刺さったのだ。

はっきり言って致命傷だろう。

素人の止血など意味をなさないレベルだ。

「死ぬのって……こんなに寒くて、恐いんですね……」

「ミリーズ」

「私は、自分の目的のためだけに……、あなたの同胞たちに、これと同じ苦渋を嘗めさせて……喜んでいたわけですか。とんだ、魔女ですね」

ミリーズは焦点の合わない双眸を、夜が押し寄せる紺色の空に漂わせたまま、呼吸の合間を縫うように言った。

その目から生命力が失われつつあるのは、火を見るより明らかだった。

「もっと……もっと、違う方法があったかもしれないのに、……もっと救いようのある方法があったかもしれないのに。……私は大きな力を持て余した、単なる子供、でした」

「ミリーズ、聞け。諦めるのはまだ早い。後悔したいのなら、まず生きてからにしろ」
ハイクの言葉に絶句したのは、彼の背後まで駆け寄った吸血鬼。
つまり、ララの看病に当たったシリカたちだった。
ハイクがこれから、一体何をまくしたてようとしているのか察したのだろう。
「お前にはまだ死の他に、もう一つだけ選択肢が残されている」
止まりそうな浅い呼吸を続け、ミリーズは辛うじて疑問符の表情でハイクに視線を留めた。
「お前は俺に吸血される覚悟はあるか？」
吸血鬼による吸血。
ミリーズがこれを受けた場合、人間と吸血鬼による血液上の交わりが決定され、彼女は『混血』の吸血鬼になる。
魔女の身体情報が血管構造を中心に人間側から吸血鬼側に、急速に書き換えられるのだ。
「吸血鬼になることで、お前は助かるかもしれない」
事例はある。
かつてヒカゲが魔術師だった頃、彼が所属していた魔術協会で大規模な『吸血鬼の捕獲作戦』が実行された。
それは危険な任務で、ヒカゲは手順を失敗してしまい重傷を負った。
彼は吸血鬼たちの反撃によって危殆に瀕し、路地裏で人知れず人生の最期を迎えかけた。
その時、彼は確かに人生の幕を閉じた。
そして、放浪癖のある流れの吸血鬼――ラスト＝R＝ファーストが、ヒカゲに新たな時間と人外の血を分け与えたのだ。
「この手段は賭けだ。保証はできない。だから、お前自身が決めるんだ」
ハイクは酸素を短く吸って言葉を区切り、
「体が吸血鬼に変換（シフト）する際、俺から送った血がまずお前の全身の健

康状態をスキャンする。これは絶対条件だ。つまり、お前の体に異常がある部分、今なら欠如している腹部だな。そこを補うために俺の血が媒介になり、足りない部分を他の細胞から寄せ集めて、一時的に治癒してくれる……理論上は。だが、所詮それは仮初だ。『混血』化の量子変換が完了すれば、傷口は元に戻ってしまうだろう。その前に、しかるべき医療機関の集中治療室にでも運び込めば助かる見込みもある。俺は医学に関してはさっぱりだから、確率なんてものは導き出せないが」

「……」

「それに仮に助かったとしても、お前は魔術そのものを失う。『混血』は人間ではない。元人間の吸血鬼だろうと何だろうと、人間ではない者に魔術は扱えないんだからな」

――さあ、どうする？

ハイクがそう締めくくると、数秒のタイムラグがあった。

「わた、し……はっ」

魔女はここで決めなければならない。

死んで楽になるか。

それとも。

他者を犠牲にしてまで培った一〇年間の魔術と、人間であることさえ捨てでも、生きて。

家族を取り戻すために、さらなるいばらの道に突き進むのか。

「わたし……は……」

14

〈レッドアウトファミリー〉創始者にして、初代頭領の吸血鬼ラスト＝R＝ファースト。

その妻レイニィ＝ガーデンは、『純血』の第二子シリカ＝R＝サードを出産した五年後、吸血鬼特有の不治の病『黒血病』を患い、この世を去った。

それから間もなく放浪の悪癖が再発したラストは、秘境の地へ導かれるように旅に出て、人狼の女性と邂逅する。

亡き妻の面影を人狼キティアラ＝セドリックに幻視したラストは、種族を越えた相思相愛の中で逃避行に至った。

それこそが事の顛末。

最愛の者を失ってなお、その姿を幻想に追い続けた、一人の吸血鬼の真相だった。

けれど、ラストとキティアラの関係は、吸血鬼側としても人狼側としても異端すぎた。

双方の間柄を人間スケールの価値観で例えるのなら、人が犬や猫などの動物相手に本気で結婚を申し出るくらいの異種結合なのだ。

それでも。

ラストとキティアラはそれまでの居場所を捨てて、子を育んだ。

吸血鬼サイドでは『劣血』、人狼サイドでは『原罪』と呼ばれるハーフの少女を。

しかし、隠居していたラストたちの下に、魔女から『予言』を受けたチェスター＝セドリックの一派が襲来し、二人を殺害した。

チェスターたちは予定通り、吸血鬼を探知するための道具としてララを手に入れ、アジトの独房に監禁したわけだ。

ラストはハイク＝R＝セカンドの父。

キティアラはチェスターの生みの母。

つまり、ララにとってハイクとチェスターは兄だったのだ。
吸血鬼の兄と、人狼の兄。

ハイクが、そんな新事実を知ったのは二週間前だった。
父親に関してあまり良い思い出を持たないハイクとしては、聞いた瞬間ラストに対する父親像が速攻で墜落したが、二週間が経過した今では、どうでも良くなっている。
我が子を置いてファミリーから去り、愛に奔走したことも恨んではいない。
チェスターたちが人狼種族の異例であったように、ラストもまた吸血鬼という種族にとっての異端だった。
血の繋がりよりも、愛を優先する吸血鬼。
世界には例外がつきものだ。
思想を持つ生物が、いつまでもワンパワーンで収まるわけがないのである。
「で、吸血鬼になった気分はどうだ？」
こじんまりとした診療所のベッドで横になって、げらげらと笑いながらギャグ漫画を読む元魔女ミリーズ＝メリーの見舞いにやってきたハイク。
彼は換気のために窓を開けて、薬臭い室内に正午の太陽光とそよ風を吹き込ませながら、昨晩の夕食が何だったのかを訊ねるような調子で、病院着のミリーズに話しかけた。
「ええ、まあ一時はどうなることかと思いましたが、案外世界観は変わりませんね。魔術が使えないのはかなり不便ですが、人間をやめたかどうかなんて実感はわかないですよう」
「かもな」
「ただ吸血鬼は大怪我をしても、あけっぴろげに治療を受けられないのが難儀です。てゆーか、あなたの『黒血病』は私に移らないんですか？」

「そもそも解明されていない未知の病気だから理屈は分からないが、感染力は皆無だ。たとえ俺が誰かに輸血なんかで血を分け与えても、他者の血管に入り込んだ瞬間、ウイルスだけが自動分解するからな。疾患した本人以外の血液内には適用できないわけだ」
「極端に順応性のない病気ですね。死に至る病のくせに」
「そこに治療のヒントが隠されているみたいらしいがな」
「ふーん」
自分から訊いておいて後半部分を適当に聞き流すミリーズは、ベッドに備わるテーブルの上に手を伸ばし、もしゃもしゃと林檎に齧りついた。
「チェスターたちは、どんな処遇を受けるんです？」
「解散を余儀なくされた。人間社会と同じで、懲役じみたことを科せられるようだ」
「そうですか」
咀嚼する林檎を飲み込んだミリーズは、淡泊な反応で何でもない風に相槌を返したが、二つの瞳に悲しみの色が過ったのをハイクは見逃さなかった。
やはり一〇年を共にしてきた仲だ。
口では情は芽生えていないと言及していたが、今のミリーズには、それなりに思うところがあるのかもしれない。
「彼女はどうしてますか？」
「ララのことか？」
「他に誰がいるんです」
ミリーズは拗ねた面様で、つっけんどんに言ったが、すぐに思い耽るような顔色になって、窓の外にぼんやりと視線を移した。
「私は相当、彼女に恨まれているんでしょうね」
「どうして、そう思うんだ？」
「確認作業ですか？　良いでしょう、答えてあげますよう」
「目の前でサティ＝ループを殺しただけでなく、危うくお前を殺させかけたから、だろう」

「……あなた良い性格してますね。そうですよう。あなたに吸血され、制限時間内に移動できる範囲に、たまたま腕の良い吸血鬼の医師と、医療環境が整っていたから、私はこうして延命できましたけど、彼女としては私に死んで欲しかったと思いますよう」

戦闘のあった港から数百キロばかり離れた都市。

そこに住む吸血鬼の医師は、ヒカゲのプライベートな友人だった。

私立病院で働く傍ら、密かに吸血鬼を医療スタッフに抱え込む闇外科医をしているという。

今回、そのスタッフだけを緊急に集めて、内々に執刀してくれたのだ。

「その答えは俺には分からない」

ハイクは背を預けていた窓枠から離れ、おもむろに入り口へと歩み寄った。

「なんなら本人に訊いてみたらどうだ。言葉を使ってな」

ハイクが扉をスライドさせると、開け放たれた廊下側にオッドアイの少女が俯いて立っていた。

ミリーズと同じ病院着を着ている幼い少女は、ハイクに導かれるまま入室する。

そのままベッドの横まで移動して、顔を上げた。

「ありが、とう……」

ミリーズは両目を見開き、その『原罪』の少女ララを驚愕の表情で見つめた。

おそらく二重の意味で驚いているのだろう。

まずはララが喋ったこと。

そして、その言葉の意味そのものに。

「ありが、とう……？」

ララはたどたどしい発音で、もう一度同じ言葉をミリーズに送った。

末尾が尻ごみして疑問形になっているのは、ミリーズに対して言葉そのままの気持ちがきちんと伝わったのか不安になり、ハイクの

顔を見上げて確認したからだ。
ハイクは小さく頷いて『大丈夫だ、自信を持て』と言外にララの背を押してやった。
片やベッドに座っているミリーズはというと、間抜けにもぽかんと口を開けて、ララの照れ臭そうにしている顔に、じっと視線を注いでいた。
「い、意味が分かりません。閉口一番、なんで私に謝礼なんですか？」
「ミリーズさん、ララのこと、見守ってくれてた」
ララのオッドアイに真っ直ぐ見つめ返されたミリーズは、左胸の辺りに握り拳を当てた。
まるで張り裂けそうな感情を宥めるかのように、きつく双眸を閉じて、開く。
「どうして、そう思うんですか？」
ミリーズの声音は微弱に震えていた。
怒りでも悲しみでもない。
その揺れは一体どの感情に触れたものなのだろう。
「ミリーズさん、ララの声、魔法で閉じ込めてた。チェスターさんたちとララ、コミュニケーション取りにくいように」
「お前、魔術でこの子の言葉を奪っていただろう？」
そこでハイクがララの後ろからフォローを入れた。
吸血鬼は少女の華奢な双肩に両手を重ねて、
「ララが話せなかったのは異種結合による弊害ではない。お前の良心の呵責という名の、魔術的声封じだった」
「……なるほど。私が吸血鬼になった途端、この子の声が戻ったんですね？」
「その通りだ」
「しかし、分かりませんよう？　異種結合の弊害ではなかったとしたら、ストレスによるものかもしれません。銀狼化現象（ライカンスロープ）の発現と昇華、終息によってストレスが発散したとも考えられます」

「ララ、銀狼化なったの、あれが初めてじゃない」
ララの反論にミリーズは刹那的に閉口して、不機嫌そうにそっぽを向いた。
「だとしたら、どうして私があなたに『声を封じる魔術』を年中無休でかけなければならないんです？　意図が見当たりませんよ。魔術だってタダじゃないんですから。魔力は私の生命力と直結してるんです。それなのに、あなたに無償で魔法をかけてあげるとでも？」
性格のひん曲がった元魔女の頑なさに、ハイクは呆れ半分の微苦笑で言い返す。
「言葉、ひいては会話は相手との意思疎通を図る上で最適な方法だ。言語能力こそ知的生命体の特権であるがゆえに。そのコミュニケーションの鍵となる手段を、お前はララから根本的に奪ったんだ」
言葉が話せたとて、ララがチェスターたちと良好な関係を築けるとは思えない。
それこそ吸血鬼と人狼が手を取り合って、世界から核ミサイルがなくなるようなデモでも起こす日がこなければ。
そこでハイクはこう考えた。
言葉でチェスターたちを無為に刺激しないように、ミリーズは魔術でララの声を半永久的に奪ったのだと。
会話が成立しなければ、チェスターたちはそれだけララを道具としてしか見ないからだ。
「だーかーら、どうして私がそんな面倒なことしなくちゃならないんですか。結果や方法論ではなく動機を訊いてるんですよう。もしかしてご都合主義ですか。夢見がちな乙女でも、そこまで甘い夢は見ませんよ。私という人格に期待しすぎです。推論にすらなってません。破綻した妄想です」
若干声を荒らげつつ、捻くれ者のミリーズは魔女を思わせる鋭い目つきでハイクを射た。
しかし、
「ミリーズさん、約束した。キティ（お母さん）アラと」

ミリーズの肩が微細に揺れた。
そこに大きな動揺が見て取れた。
「キティアラとお前に交友関係があったのは、すでにタイバンの連中から裏が取れている。お前は『予言』の魔術で、キティアラに対して『いずれキティアラが吸血鬼と結ばれる』という未来を言及した。そして、実際にお前が工作を巡らせて二人を結ばせたんだ。放浪の悪癖を持つラストのことだ。邂逅は意外と容易だったんじゃないか？」
ミリーズは異論もなく項垂れるように俯き、ベッドのシーツをシワが寄るくらい強く握りしめていた。
「だが、当時のお前は『人狼が他種族の者、それも吸血鬼と結ばれる』という事態が、人狼部族にとって、どんなものなのかを正しく理解していなかった。……一〇年前の話だ。お前もお前で幼く、そして『予言』の切磋琢磨に必死だったんだろう。生まれてくるララを、『原罪』と呼ばれるその存在を、正確に把握していなかった」
ラストとキティアラは逃避行を決意した傍ら、追手から逃げ切れないことも覚悟していた。
最終的には掴まって、殺されるのがオチだと。
だが、せめて生まれてくる子供だけは、なんとかして助けたいと考えた。
そこでキティアラは、ララを第三者に託すことにした。
人狼でも吸血鬼でもない、どちらの立場にも翻弄されない魔女の卵に。
ミリーズこそ『予言』に束縛されている身にもかかわらず。
「一つの小さな命を託されて初めて己が行ったことの重大さに気づいたお前は、そうして各地の人狼部族の間でブラックリスト化されている、チェスターの一派に目をつけた。連中の行動原理を徹底的に調査した上で確信を持ち、実際にコンタクトを図って、手を組んだんだ。タイバンの人狼部族が大義名分を得てラスト、キティアラ、そして『原罪』のララを見つけ出し、抹消にかかるよりも前にな」

チェスターの一派は他の人狼と違って、ララの利用を優先的に考える。

ララの右眼は吸血鬼専用の探知機になるからだ。

チェスターたちにとっても、ララは歓迎すべき存在ではなかった。しかし、吸血鬼の殲滅を断固目的とする彼らは、旧来の矜持を捨てる。

それほどの怨恨を吸血鬼に抱くチェスターたちが、ララを計画上利用するために匿えば、彼らの勢力そのものが抑止力になって、他の人狼から遠ざけることになるのだ。

「よって、幼かった魔女は、チェスターの一派にこの子を早急に手渡す必要があったわけだ。タイバンの連中よりも先に見つけ出して」

ハイクはララの小さな頭に右手を乗せ、軽く撫でてやりながら言い切った。

「ミリーズさん、ララ、あそこから逃がしてくれた」

「……逃がした？　違いますよう。泳がしたんです。吸血鬼と銀狼をぶつけるために。勝手に人の行動を偽善に祭り上げて美化しないでください。反吐が出ます」

ミリーズの刺々しい視線や口調にもめげずに、ララは持ち前の根性を振り絞って、おどおどしながらも決して視線は逸らさず言う。

「でも、ミリーズさん、いなかったら、ララ、ハイクにもシリカさんにも、恐そうだけど優しい吸血鬼さんたちにも、会えなかった。自由、なれなかった。ずっと、独りだった。家族のこと、知れなかった」

（あれ、なぜ俺だけ呼び捨てなのだろう？　いや、なめられているわけじゃない。好意的に考えるんだ。きっと他の連中よりも、俺とララの心の距離が近づいている表れなんだ。そうだ、そうに違いない）

ハイクはそんなポジティブシンキングで繊細な精神を支えつつ、かねてからの疑問を解消にかかった。

「文字が書けず、読めもしないララが、この無常な人の世をろくに

知らないララが、一言も言葉を発声できなかったララが、偽造パスポートを用意し、『永久切符』まで購入できたのは何故だろうな。誰がこの子をプラットホームまで誘導したんだろうな。親切な人がいたもんだ。ララ、お前を助けてくれたのは、どんな女の人だったか覚えているか？」

「綺麗なお姉さん。二四歳くらいの」

「そうか、いつかお礼を言わないとな」

「うん」

示し合わせるハイクとララの会話に、ミリーズは渋い顔を作って黙秘権を行使した。

ハイクはさらに畳みかけるように、

「俺の疑問はそれだけではない。魔女が本当に『予言』のためだけに、吸血鬼と人狼を衝突させたかったのなら、妙なお膳立てはいらなかったはずだ。俺の身元を調査し終えた直後、拉致ってシリカたちに要求すれば良かっただけの話なんだ。『予言』を鍛えるのに、わざわざ俺に一週間と一日も時間を与える必要性はないだろう」

沈黙を、ミリーズは溜息と共に開き直った口調で切り裂いた。

「なるほど、まあ事実です。家族を裂かれた私はホームレスになった後、ほどなくしてオカルトに縋りつきました。魔術師としての素質を覚醒した私は、銀狼とたまたま交流が持てましてね。タイバンの銀狼は穏健ですが排他的な部族ですし、情報交換程度の付き合いしかありませんでしたけど、キティアラとの仲だけは違いました。彼女は私を恐がらず、遠ざけず、優しく接してくれたんです。彼女とは歳がかなり離れていたんですが、気が合って、随分と可愛がってもらいました。なので、タイバンの秘境にはしょっちゅう顔を出してました」

ミリーズの独白は続く。

「ある日、私はキティアラを介した『予言』を行いました。内容は知っての通り、『彼女が吸血鬼と結ばれて、二人の間に子供が生まれる』というものです。それから数カ月後、まさかキティアラが部

族を捨てて、逃亡するとは思わなかったんです。愛とは狂気ですね。

『原罪』についての知識が足りていなかった私には、置手紙の『託す』の意味をすぐには理解できませんでした。相談もされず彼女が失踪したのはショックでしたね。……ええ、そうです。私はララちゃん、あなたを守るために抑止力となるチェスターの存在に目をつけ、誘導したんです。私には私の家族を助ける野望があったので、あなたを完璧に救うつもりはありませんでした。その妥協点として、チェスターに保護されるという形になるように決行したんです。でも、『保護される』という部分にあなたの意思はない。だから、ある程度成長したあなたに道を選ばせたんです。あなたが独房から上手く抜け出せるように細工もしてね。ここまでは予想通りでしたか？」

値踏みするような眼差しに、ララはこくんと頷いた。

でも、とミリーズは矢継ぎ早に、

「それなら、あなたたちの親殺しを指揮したのは、私ってことになりますね。なにせチェスターをけしかけたのは、私なんですから。自身の母親を殺した相手に『ありがとう』はないと思いますよ？」

皮肉げに、ララをおとしめるように、ミリーズは頬を吊りあげて魔女めいた笑みを浮かべたが、

「それはお前にとっても想定外だったんじゃないのか」

ハイクの言葉で彼女の喉元は詰まった。

「予言が結果と食い違っていたんだ。お前の予言は、『チェスターがラストとキティアラを殺し損ね、逃がし、ララだけを回収する未来』を言及した。お前はその当時、自分の『予言』に絶対の自信を持っていた。しかし、そこで初めて予言が外れた。それが自分の力に自信を見出せなくなった原因でもある」

「どこでその情報を」

「チェスターの証言を、タイバンの人狼たちが俺たちに回してくれたんだ。ついでに、ララの処遇の選択権さえもな。連中はよっぽど好き勝手やっていたチェスターを疎ましく思っていたらしい」

ミリーズは忌々しそうに舌打ちした。
「お前は見過ごせなかったんだ。家族を失った赤子を」
「……」
「自らの境遇と重なった。お前は誰かと悲しみを共感できるくらいには、まだサティ＝ループでいられたんだ」
キッ、とミリーズが魔女のままだったら、ハイクを石にしてしまいそうなくらい鋭く睨んだ。
「本名で呼ばないでください」
シリカにハイクの尾行を依頼されたサティ＝ループの遺体。
ハイクと共に旅をし、ミリーズの巨大植物に食い殺されたサティ＝ループ。
そのどちらも、ミリーズ＝メリーことサティ＝ループが泳がしていたデコイだった。
それぞれの記憶はミリーズが植えつけた紛いもの。
そして吸血鬼の兄妹はまんまと、魔女の釣り針に引っかかって踊らされたわけである。
とは言え、シリカがサティに目をつけてハイクの尾行を依頼したのは、偶然だろう。
おそらく、たぶん、そう思いたい。
ミリーズは二体だけでなく、他にも多くの分身を泳がしていたのだから。
ただし、サティの遺体をわざわざ事務所に配達したのは、シリカたちを『赤煉瓦の街』まで出張させるための仕掛けに違いない。
「名前は大事にしろ。親から与えられたものだろう？」
「私はもうサティ＝ループのような純粋な人間ではないんです」
「なんだ、性根がヘドロのように腐っていることには、お前にも自覚が――待て。果物ナイフを持ってどうするつもりだ。皮の剥ける林檎はもうないんだが？」
刺傷でまたもやヒカゲの知人に迷惑をかけるわけにはいかなかったので、ハイクは軽く構えた。

ところが、ミリーズは果物ナイフを握りしめたまま、観念したように唇から浅い吐息を落とし、
「家族のために、なんて言い訳を振りかざして他を犠牲にし、挙句の果てには自身すらコントロールできずに力の前に溺れた。こんなブラッディな姿で妹や弟、お父さんやお母さんに、どんな顔して助けに行けばいいと思います？」
「それでも、お前は前に進むしかない。お前が決めた道だ。つらいのなら一緒に背負ってやる。家族というのは、どんなことがあっても味方なんだからな」
「家族？」
「ピンとこないか。お前は俺に血を吸われた時点で血液上、俺の実の娘になるんだ。吸血鬼は血の繋がりを大事にする。娘が困っているのに放置なんてできるか」
「手伝う、手伝う」
きょとんとした顔つきのミリーズに向かってハイクが真顔で告げると、すかさず小さな握り拳を胸の前で作ったララが、意気込んで賛同した。
「ララもそう言っているが？」
「なんで私なんかに」
負い目を感じているのか、全身を萎縮させるミリーズ。
色々な意味で二週間前より丸くなった彼女の姿に、ハイクはぶっきら棒に言い放つ。
「家族を大事にする奴は苦手ではないからな」
ララが自身の左手の小指と、ミリーズの小指を繋いだ。
彼女の右眼にはきっと、そこに『赤い糸』が見えているに違いない。
「それとな、魔術を失ったからと言って悲観するのは、まだ早い」
「？」
「吸血鬼の瞳術を忘れたか」
あっ、とたった今思い出したかのように、ミリーズは声を上げた。

「未来を予知する言葉が予言なら、未来を『視』る力はなんて言うんだろうな？」

ふいに、苦笑いするハイクの顔や、キティアラを想起するララの優しげな微笑み、その全ての光景が、激しくぼやけ始めた。

まるでピントのずれた映像のように、視界の歪みが加速していく。

いよいよ何もかもが不鮮明なモザイクに塗り替わった瞬間――

「試してみろよ」

というハイクの声を最後に――

15

――今度こそ、ミリーズが長い夢から目を覚ました。
「お目覚めか、姪っこ」
横合いから投げかけられた低めの声。
薬品の臭いが染みついたベッドの上で、ミリーズは仰向けになっていた。
彼女は嫌がる首筋を無視し、音源を探って右を向く。
「……シリカ＝R＝サード。トドメでも刺しにきましたか？」
「それくらいの気持ちで乗り込んだつもりだ。しかし、怪我人相手に寝込みを襲うほど私は愚かで姑息な手は使わない。硬派は筋を通すんだよ」
脳みその絶対服従の権利を用いて、さらに顔の向きを変える。
清潔そうなカーテンはしまっている。
夜は明けていない。
蛍光灯の落とされた天井。
左腕に刺さるチューブから伸びる点滴。
ミリーズは現状を即座に理解し、さらに身を酷使して起こそうとした。
だが、シリカに手で軽く制された。
偉そうに制されるまでもなく、体は痛みと麻酔の効果で言うことを聞いてくれる気配はなかったが。
ドレス姿のシリカは素っ気ない表情のまま、肩から下げるポシェットの中をごそごそと漁り、ウサギの形を模した手鏡を取り出してミリーズに向けた。
鏡に写るもう一つの世界。
そこに『朱色の瞳』を持つ自身と目があった。
道理で先程から視界全体に色素の薄い赤のフィルターが展開し、

曇っているわけだ。
「吸血鬼になった際、無意識のうちに瞳術を行使したまま気絶したんだろう。その双眸には今、何が『視』えているんだ？」
「何も。ただ赤いだけですね」
「使い方が分からないのか？」
シリカが怪訝そうに訊ねると、ミリーズは思案顔で、
「いいえ。そうですね……、あれから何日が経過してるんです？」
「私たちが殺し合い、貴様がここに緊急で運び込まれてから、三日目の朝だ」
「ということは、私が『視』たのは一〇日後の未来でしょう」
「なるほど。予知夢ときたか」
「瞳術を行使したまま眠りにつく、あるいは意識がなくなると、私に関する未来が断片的かつランダムに見られるようです」
シリカは細い腕を組んで、小悪魔風味の冷笑を浮かべた。
「良かったじゃないか。予言に代わる力を得られて」
「好きな時に見れないのは残念ですがね」
「命があるだけありがたいと思え」
「そうします」
得心した態度でシリカは一つ頷くと、
「なあ、サティ＝ループ」
「だから、あなたも本名で呼ばないで下さいよう」
「だから？」
「ああ、夢でした。こっちの話です」
「……見透かされているようで気味が悪いな。まあ、いい。私はもう帰るが、医師から面会の許可が下りたら兄上を見舞いにこさせても平気か？」
「いいですけど、ちょっと待ってください。まだ面会許可が出てないのに、あなたは無断で――あーあーじゃないですよ。何ですか、その聞く気ゼロの姿勢」
シリカはとても面倒臭そうな顔で、自身の両耳に指を突っ込んだ

りして謎の耳栓術を披露していた。
ミリーズが諦めて嘆息をもらすと、タイミングを見計らったようにシリカは嫌らしい笑みを表出させて、
「さて、私の執務机には仕事が山積しているので、これで失礼させてもらうよ」
背中を向けて入り口に歩き出したシリカを、ミリーズは呼び止めた。
「ここに何のためにきたんですか」
「あ？　決まっているだろう。貴様が会得した瞳術を把握すること。そして、兄上の可愛い娘の容態を心配して訪問したんだよ。あと、吸血鬼の近親相姦について釘をさしたかったが、また今度にするさ」
そんなカッコイイ感じの台詞を余韻に残して、マフィアの小さなボスは去って行った。
面会の許可が出るのは、一〇日後だろう。
その時、あの二人はここに来室するはずだ。
ミリーズはふと思う。
彼らが見舞いに訪れた際は、先刻、目にした夢の通りに振る舞った方が良いのだろうか。
それとも、もっと自由に、囚われずに、自分らしく対応した方が良いのだろうか。
「つまらないと感じる場合もあるんですね、未来が分かるというのも」
ミリーズは緋色にも似た瞳の力を解除した。
視界に夜明け前の色彩が戻ったことを確認し、薄い瞼を閉じて安静に徹する。
そうしているうちに、うつらうつらとまどろみ始め、昔の夢を見た。
まだ魔術を知らず、けれど聖夜にトナカイに乗って世界中の子供たちにプレゼントを配る、世界で一番平等に近い赤服の存在を信じていた幼い頃。

父、母、弟、妹の家族五人で遊園地に行った思い出を再構築した夢だ。

これが朱眼の力で見た夢だったらどれだけ良いか、と思った。

しかし同時に、諦めないという強い気持ちに再度、炎が灯るのを感じた。

このまま、叶わない夢では終わらせない。

もう一人ではない。

紆余曲折を経て、もう一つの家族を得たのだ。

頼もしい味方だ。

ミリーズはさらに深く、安らかな世界に身を委ねていく。

一〇日後。

あの二人に再会できることを待ちわびながら。

〈シスターズ〉非公式ファンクラブサイト

ブルーE
『そう言えば、〈シスターズ〉の新譜、もう聴いたかよ?』

リピーター
『まだ発売日前じゃろうに』

ブルーE
『ふはは。無論、俺はフライングゲットだぜ。ニ曲目の「ステイ」がヤバかった! あのアクティブなベースラインはストレートで超俺好みだ! 相変わらずリリィの歌唱力と、ノリノリなチョッパー弾きには惚れ惚れするわ。見習いてェ』

リピーター
『ワシはミニアルバムの題名にもなっておる「アートマンズ・レポート」じゃな。キャッチーでありながら深みがあって飽きないギターのリフ。それを後ろから包み込むように哀愁漂わせるメロディアスなベース。そして、安定したリズムで奥行きと音の厚みを支えるドラム。ミドルテンポで絡み合う三人の音作りには感嘆するのう』

ブルーE
『何だ、しっかりフラゲしてるじゃん(笑)。今回のミニアルバムはいつにも増して完成度高かったな。リリィの引き出しが無尽蔵でびっくりだ。〈シスターズ〉初のインスト曲「イン・ザ・リアルワールド」もなかなか良かったし』

リピーター

『あの曲のメインはもっぱらドラムじゃったのう。フェイトはまた腕を上げたようじゃ』

ブルーE

『フェイトのドラムには正直言って度肝を抜かれたぜ。なんつーか、語彙が乏しくて上手く言えねェけど、小技小技の連続で全ての音色が歌声みてェだった。しかもサビの部分、全員わざとアップテンポにしてリズム狂わしただろ？　メトロノーム鳴らして聴いてみたんだが、やっぱサビだけ走ってた。だが、サビの終盤にはきちんとメトロノームとリズムを重ねるという、意味不』

リピーター

『凄いのう。そのうちレコ初ツアーもやるじゃろう。田舎まできてくれるとありがたいのう。まあ……ライブハウスもないし、予算的にも有り得ないじゃろうが』

ブルーE

『〈シスターズ〉はライブバンドだからな、生で聴くに限る。パフォーマンスもハンパじゃねェし。あの三人でしか生まれねェ独特のグルーヴ感があんだよな。素人の俺が言うのもなんだが、ガールズバンドのスリーピースであの音の厚みはそうそう出るもんじゃねェよ』

リピーター

『インディーズに留めておくのは惜しいバンドじゃのう』

ブルーE

『メジャーになったらなったで寂しいぜ？　〈シスターズ〉の実力ならバンド転がしに合うこともねェだろうが、ライブとか行きにくくなるだろうし、何より知ったかぶるミーハーがわくのが許せん。

それに有名になればなるほど、レコード会社はアーティストに売れ線ばかりの曲調を量産させて、好きな曲なんてそうそう書かせてもらえねェだろうよ。従来のコアなファンを大事にする気がねェんだからよ、最近の音楽プロデューサーは』

リピーター
『彼らも仕事じゃからのう。音楽のための金ではなく、金のための音楽なのじゃよ。人にはそれぞれ守るべき生活があるのじゃ』

ブルーE
『そりゃそうだが……あーもう、やめやめ。素人が音楽業界のシケた話してもつまんねェよ。んなことより最近、ウィッチのやつ見ねェな。過去ログすでに二週間前になってるぜ。新譜出るってのに。普段のあいつなら今一番ここでバカ騒ぎしていてもおかしくねェだろうによ』

リピーター
『あやつは確か（自称）二四歳の食べ頃ピチピチガールじゃ。二四ということは立派な社会人。働き盛りで忙しいのではないかのう』

ブルーE
『二四でピチピチとか……その表現からもう賞味期限ぎりぎりの匂いがする』

リピーター
『お主はいつでもウィッチには辛辣じゃのう（笑』

ブルーE
『大体、職業が「現役魔法使いです」とか言い出す二四の女の人ってどうかと思うぜ』

ウィッチ
『こりゃー！　誰が賞味期限ぎりぎりのプリティーマジシャンガールかー！』

ブルーE
『うわっ、出た出たこの暑苦しい感じ。噂をすればだな』

リピーター
『久しぶりじゃのう。元気にしておったか？』

ウィッチ
『いやいやー、ちょっとリアルの方がごたこだと大変でしてね。色々と悩んだり心境なんか変わったりして、しばらくこっちに顔出す余裕がなかったんですよう。肉体的にも精神的にもダークサイドに陥ってました、はい』

ブルーE
『へー、珍しいこともあるもんだな。俺で良けりゃあ相談のるぜ？』

リピーター
『む、急に優しくなりおった。ブルーEよ、お主意外とツンデレじゃろ？』

ウィッチ
『それじゃあ、せっかくなので聞いてもらえますか？』

ブルーE
『おう』

ウィッチ
『実はですね……』

ブルーE
『どんとこい』

ウィッチ
『かくかくしかじか、なんですよう……』

ブルーE
『何がかくかくしかじかだ！　なめてんのか、お前！　せっかく人が親切に……まあ、いい。やっぱり今後お前への接し方は変えねェ方針にした』

リピーター
『二週間振りに、いつものノリが帰ってきたのじゃ』

ウィッチ
『うふふー。ところで〈シスターズ〉の新譜が出るようですね。私は急がしくてフラゲする暇がなかったので、私の前ではまだ封切りしないで下さい。ネタバレが嫌なので、過去ログも確認しません。なので強引に話題を変えます。それにしたって現代科学の力というものは末恐ろしいですよねー（憂いを帯びた遠い眼差し』

リピーター
『気持ちは分かるが、薮から棒にどうしたのじゃ（訝しげに眉をひそめる』

ウィッチ
『いえね、最近の科学水準はどうなってるのかと。ゲームセンター

にすっごい機械があったんですよう。脳内オンラインだか何だかで、催眠術を応用した体験型格闘ゲーム。自分がプレイヤーになって、ゲームの世界にダイブして闘うんですって。もちろん体は現実に残ったままですけど。驚きじゃありませんか？』

ブルーE
『ああ、それはたぶん「理想郷（マリアリア）」製のゲームじゃねェか？　ちっとばかし前に研究チームが製作発表して話題になってたぜ。もう完成してたのか』

ウィッチ
『ブルーEさんは「理想郷（マリアリア）」住まいでしたっけ？　都会人中の都会人ですね』

リピーター
『ちなみにワシは東大陸、世界の隅っこ的田舎者じゃ』

ブルーE
『リピーターって西大陸出身じゃなかったっけ？』

リピーター
『うむ。じゃが、今は訳あって東大陸の秘境に隠居しとるがのう』

ウィッチ
『リピーターさんってリアルでもそんな口調なんですか？　今まであえて聞きませんでしたけど』

ブルーE
『もしかして六〇、七〇代とか（笑』

リピーター
『ただの老いぼれじゃ。「理想郷（マリアリア）」の医療技術をもってしても、一五四まで延命するのは不可能じゃろう？』

ブルーE
『確かにウチでも、そこまでの水準には達してねェな。全身機械仕掛けにでもすれば話は別かもしれねェが、それはインチキ臭ェしな。おそらくそれでも一〇〇には届かねェだろう。……つか、何で一五四？』

リピーター
『となれば、ワシの年齢は必然的に一〇〇以下というわけじゃ。「理想郷（マリアリア）」の情報科学力は世界最先端じゃからのう。そこで実現されておらんのじゃから、世界のどの医療機関も言わずもがなじゃ』

デュアル♪
『お腹いーっぱい♪』

ウィッチ
『デュアル♪さんの空気読まない突撃発言、相も変わらず素敵でしょう』

デュアル♪
『あれれー？　ウィッチん久しぶりー！』

ウィッチ
『お久しぶりですよう、デュアル♪さん。いつもみたいに、また繋ぎっぱなしで消えてたんですか？』

デュアル♪

『ちょっとねー♪』

ブルーE
『どうせ何か拾い食いでもしてたんだろ』

デュアル♪
『ナキナキ、いくらなんでもあたしはそこまで意地汚くないよ！三秒ルールは固く守るんだから！』

ブルーE
『おい、ばか！　リアルの呼び方で書き込んでんじゃねェよ！　つーか、三秒ルールの規範に反してなきゃ、お前は拾い食いすんのか！？』

デュアル♪
『ナキナキはしないの？　むしろ、してたじゃん♪』

ブルーE
『してねェよ！　何、平気でねつ造してんだ！　お前、後で説教二時間な！』

デュアル♪
『ぶーっ、やだー！　そんな意地悪言ったら、ナキナキが隠してるエッチな本の名前を皆に教えちゃうよ！　「揺れる～」とか「大人の～」とか！』

ブルーE
『だあああああああああああああらっしゃあああああああああ！！！　待て待て待て！　ステイステイ！　お前、勝手に俺の部屋の本棚どかしたのかよ！？　いつだ！？　いつやっ

た！？』

デュアル♪
『うん！　一週間くらい前かな！』

ブルーE
『うん！　じゃねェよ！　ふつー、どかす！？　他人の本棚を独断で移動させる！？　女子が男子部屋のエロ本探しとかアグレッシブすぎるわ！』

デュアル♪
『にゃはは♪　でもでも、今回はけっこう難しいところに隠してあったよね？』

ブルーE
『今回は……？　え？　今回は、って何？　まるで前回があるみてェな言い方はよせよ』

デュアル♪
『大丈夫だよ、ナキナキ♪　ちゃんと同じ隠した方で元通りに仕舞っておいたから、あたしにバレてることなんてナキナキには分からないよ！』

ブルーE
『いや、そこ心配してねェし。しかも、俺ドジっこ属性ねェし。……ああ、クソ。まさかあのセキュリティが突破されてたなんてな……なんか切ないぜ』

ウィッチ
『なるほど、勉強になりますよう、デュアル♪さん。そうやって異

性の趣味嗜好を把握しつつ、掌握するんですね』

リピーター
『いや、ここで学んではいかんと思うのじゃが』

ウィッチ
『でも……吸血鬼のエロ本なんて、あるんでしょうか。どうなんです、ブルーエッチさん』

ブルーE
『別に俺はあらゆる種類のエロ本に精通してねェよ！？』

デュアル♪
『にゃはは、ウィッチん面白い♪　でも、何で吸血鬼？』

ブルーE
『私の知り合いに、人間には欲情しない変態がいまして。ああ、でも仲良しで羨ましい限りですね。こういう時、私もリアル仲間をここに誘ってローカルネタ共有したいですよう』

リピーター
『？　誘えば良かろう。ワシらに遠慮はいらんのじゃぞ？』

ウィッチ
『まあ、そうなんですが』

ブルーE
『リピーター、察してやるんだ。ウィッチには、きっとリアルに友達がいねェんだから。吸血鬼のエロ本探してる自称魔法使いさんなんだぜ？』

デュアル♪
『そうなの？』

ウィッチ
『いえいえ！　いますよう！　みくびらないでください！　ブルーEさんは、一体私の体のどこを見て言ってるんですか！？　節穴すぎます！』

ブルーE
『ウィッチのそういう言動とか見てると、ちょっと友達になりたいとか思えねェし』

ウィッチ
『今日のブルーEさん、いつもの三割増しで毒舌ですね！』

リピーター
『お主に毒を吐けなかった二週間分の鬱憤を晴らしておるみたいじゃのう』

デュアル♪
『ウィッチんと絡むの久しぶりだもんね♪　ナキナキもはしゃいでるんだよー！』

ウィッチ
『取りあえず聞いてください。私の連れには通信端末を携帯している方がいなくてですね……いえ、言い訳とかじゃなくて、本当ですからね？』

リピーター

『このご時世に誰も？　携帯するツールでなくともネット環境がそろっておれば、ここにはアクセスできるじゃろうに』

ブルーE
『つーか、その言い訳は自分で自分の首しめてねェか？』

デュアル♪
『じゃあ、あたしが友達になってあげる♪』

ウィッチ
『ちょっと待ってください！　同情とかもやめてください！　私はそんなキャラじゃないですよう！　友達いますから！　いますから！　いーまーすーかーらー！　つい先日まで、私じゃないですけど私みたいな人物が、その友人二人と一緒に「世界鉄道」に乗って旅行してたんです！』

リピーター
『混乱しすぎじゃ。「世界鉄道」は分かるのじゃが、ウィッチじゃないがウィッチみたいな人物は、お主の友人と旅行に行っていたわけじゃな？　じゃが、それは結局自慢にも何もなっておらぬぞ。ウィッチじゃないがウィッチみたいな人物は、お主のことではないのじゃろう？』

ブルーE
『妄想友達一〇〇人できるといいなー（棒読み』

ウィッチ
『ひどい！？』

リピーター

『笑』

ウィッチ
『鼻で笑われた！？』

デュアル♪
『あたしがウィッチんの親友、記念すべき一人目だね！』

ウィッチ
『ぬわぁ、味方がいねぇ！（頭を抱えて悶える』

ブルーE
『おっと、すまねェ。ウィッチイジりを中断すんのは大変心苦しいわけだが、そろそろ出勤時間だ。今日はこれで落ちるぜ』

デュアル♪
『あたしも！　ウィッチん、リピたん、ばいばーい！』

リピーター
『二人はバンド仲間かつ仕事仲間でもあったかのう。どちらも頑張るのじゃぞ』

ウィッチ
『中断ってことは、私イジりは続行する気満々ってことですかい、ブルーEさん。……よ、よーし、こうなったら次までになんとかして友達！　に通信端末持たせて、私に友達がいることを証明してみせます！　首洗って待ってろい！』

1

プロローグ　α

ここは人が安眠の最中に見る夢のような世界だ。
子供のおもちゃ箱をひっくり返したかのような世界。
例えば、空は紺色の夜に満ちているのに地上は昼間みたいに明るい。
けれど、頭上には太陽もなければ月も星も見当たらなかった。
光と影が相互作用する法則がないのである。
また、足元から地平線の彼方までどれだけ首を巡らして瞻望しても、地面に咲き誇るのはあらゆる色彩の花だった。
一陣の風も吹かないのに花畑はそよそよと揺れ、甘い香りを運んでは鼻腔をくすぐってくる。
少年はその匂いを好きにも嫌いにもなれなかった。
「見解の相違だね。偽善はそこまで悪いものでもない。君はそうは思わないのかい？」
そんな現実味に乏しい世界に佇む、一人の少女。
彼女は目の前の少年に向かって微笑が染みつくような口調で言った。
衣服も身につけていない優美な裸体。
背丈は少年より少し高いくらいだ。
腰の位置まで届く漆黒の髪に、病的なほど白い肌。
満月にも似た銀色の瞳は何よりも神聖な光を湛え、目に映る世界の全てを堪能するかのように、ゆっくりと開閉している。
夢のような世界に囚われた、とても美しい少女。
華奢を通り超した彼女の体は――しかし異様かつ異常なものだっ

た。
　まるで束縛を強調するかのような『黒銀の首枷』が、少女のほっそりとした首に嵌め込まれている。
　一見すると頑丈な作りには見えないのだが、その首輪には解放のための鍵穴が存在しなかった。
　どうあっても外せない異様な首輪。
　さらに、その『黒銀の首枷』が巻かれている首筋から下方。
　白い地肌の上に、タトゥーじみた赤黒い紋様が少女の全身にまんべんなく刻印されている。
　安易な表現を起用するならば、それは魔法陣のような――『何かしらの呪縛』のようだった。
「偽善。君たちは時にそれを煙たがったり非難したりするけど、大いにけっこうじゃないか。例えばだよ、悪魔にすがりついてでも救われたいと願望する者がいるとする。それなら君が言うところの愚行は救済される側にしてみれば、どこまでいこうと善に過ぎないだろう？　捻くれて悪を醸成するよりは遥かにマシだとは思わないのかい？」
　朗々と歌うように語る少女。
　少年はその姿を痛ましい気持ちで見つめていた。
　返すべき言葉はなかなか上手く文章になってくれず、ぼんやりとした目線を爪先に落とす。
　ややあって、彼はようやく乾いた唇から憂いを帯びた声音を紡いだ。
「……だからこそ、人は知らない間に誰かを傷つける。無意識のうちに互いの距離を測る。そこに働くのが善意か悪意かなど瑣末だ。言葉や行動は相手の受け取り方一つで本質を無視し、容易に白にも黒にも塗り替わる」
「うん、良くも悪くも相手次第というわけだね」
　呆れると言うよりは、むしろ受け入れた上で諦めているというニュアンスの物言い。

少女はそっと溜息を吐いてから続けた。
「人間の考え方なんてその数だけ分岐する。人間の意思なんてその数だけ転じる。人間の気持ちなんてその数だけ相違する。今さら価値観の差異に遺憾を抱くのは論外だよ。疑問視することも危うい。……けれど、それでもあえて問おうか。どうして人間は不条理を嘆くのだろう？　経由するのはもっぱら他者の思考回路だというのに」
「そんなこと、わざわざオレに訊くことではないだろう。それが都合の良い生き方ばかりを模索する矮小な生命の根源だ。でなければ罪に追従する罰は生まれたりしない」
「ほう。けれどね、『罪の意識を感じて罰を受諾するのが人間』だと強引に定義するのなら、このボクも君たちと同じ人間に該当するわけだよ。この矛盾はいかがなものだろうね？」
少女の吐息めいた繊細な声は、にわかに笑っているようにも聞こえた。
ただし、それは人である少年に向けた嘲笑ではなく、鳥籠に幽閉されている自分自身へと振りかけた自虐なのだろう。
「人はね、矛盾の上で心と体のバランスを成り立たせているんだ。でなければ、いざ辻褄が合わない境遇に立った時、即座に合理的な行動を取れなくなってしまう。かつて、ここに召喚させられた君がそうだったように。……ま、これは極論だけどね」
クツクツと嫌な含み笑いを零す少女。
それに応じる少年の口はなく、やがて少女の乾いた声だけが虚空に霧散した。
突如として双方の間に静寂の幕が下りる。
遥か遠くの空で鳥が鳴く声を聞いた気がした。
少年は鳥の声が聞こえた方向に目線を上げてみる。
しかし、視認できるのは雲一つない夜空ばかりで、そこに生きる生命などなかった。
太陽は昇らず、月が浮かばない世界ゆえに、一日という概念すらない世界。

ここにいる二人以外に呼吸するモノがいるのかどうかも怪しい、そんなふざけた世界に少年は心の底から辟易した。

「ボクは、死なないよ」

ふいに、そんな突拍子もない言葉で少女は沈黙を破った。

どこか温度の冷めた彼女の口調に、少年は顔の向きを落とす。

彼は、少女のその発言が比喩ではない事実を知っている。

彼女は冗談でも何でもなく本当に死なない。

否、死ぬことができない。

「ねぇ、君は不死に憧れがあるかい？」

少年が首を軽く横に振る動作で否定すると、

「クスッ、賢明だね。永遠など価値も見出せないよ。どうしてか分かるかい？」

抽象的な少女の問いに、少年は迷うことなく返答する。

「孤独」

端的すぎるその音こそが、けれど少女の心の模様を描いた的確な言葉なのだろう。

置き去りにされることを、どうしようもなく恐れている少女の絶叫。

「ボクはこの特異な体質のせいで幾度となく人間たちの死を見届け、また見送ってきた。だからこそ、ボクは独りが嫌いなんだよ。結局、この世界に神様なんていないのだから」

――そして、それでも君は逝ってしまうのではなく、行ってしまうんだろう？

微かな哀愁を尾に引く声でそう言った少女は、まるで逡巡している大人みたいだった。

ここを去る者の背を押して見送るべきか、それとも肩に手を置いて引き止めるべきか。

そして、その選択権が自身にはないことを彼女は自覚しているのだ。

少年は口元を一文字に縫ったまま、ひたすら正面から少女を見据

えた。
手を伸ばせば決して届かない距離ではない。
だが、動かない決意の下、閃光の瞬きさえ纏った双眸が少女の瞳を強く捉えている。
「……そうかい、分かったよ」
やがて少女は根負けしたように嘆息混じりの口調で口火を切った。
「自ら生を放棄した君はまさに愚の骨頂だよ。咎の権化。その体たらくが生み出した無能者だ。必ず無知の罪深さに舌を巻くことになる。もはやこの領域に足を踏み入れるつもりなら、露知らずがまかり通ると思わないことだよ」
少年は口を開かず、少女の柔らかそうな唇の動作をじっと見つめていた。
「また逢えると良いね。ボクは期待せずに待っているよ」
優しい彼女のことだ。
その言葉と本音は違うのかもしれない。
けれど、たとえそうであったとしても。
少女に言うべき言葉など一つしか思い当たらなかった。
「ああ、待っていろ。オレが、必ず永遠(お前)を殺してやるから」
少女の足元にあちらの世界では見たこともない橙色の花が咲いた。
全長一〇センチにも届かない小さな花だ。
少女はそれをまるで聖母のような所作で優しく摘み取り、少年に手渡す。
少年のヒビ割れた指先に、その花弁が触れた直後――彼はこの世界から不在した。
まるで最初からそこに存在していなかったかのように。
煙も残さずに。
再び独りぼっちになってしまった少女は数秒後、呼吸音のない花畑の中心を吐息めいた一つの囁きで飾ることに成功した。
――ありがとう。

2

プロローグ　β

情報科学主義国家の首都『理想郷（マリアリア）』。
その地のちょうど中央付近に位置する総合病院にて。
完全隔離された個室の贅沢待遇ベッドの上に包帯だらけの体を深く沈めている青髪の少年、ナキ＝エクイルドはぼーっとした眼を天井に向けながら小さな嘆息を漏らした。
室内がひどく静かなのは現在の時間帯が朝方で、四方を取り囲む白い壁や窓ガラスが外部の騒音を一切通さない特殊な防音効果を発揮しているからだ。
たとえこの建物の隣でロックバンドの野外ライブが行われていたとしても、扉や窓を閉め切っている限り、ナキの耳に彼らの暑苦しい魂のシャウトが伝わることはないだろう。
そして、ありがたいことに無意味に流れる静寂など、妙な居心地の悪さしか与えてくれなかった。
どうやらあの上司は、『ナキの性格からしてこの状況は逆に息が詰まるだろうな』とまでは考慮してくれなかったみたいだ。
ある程度のざわざわがあると寝心地が良くなるのは、自分だけなのだろうか？
とも思ったが、『三日前』はあれほど睡眠を欲していたナキの瞼も、今では意味もなく閉じたくないと拒否権について語っている。
詰まるところ、今のナキにはこう呟く以外に簡潔かつ適切な言葉で己の心情を表現する他、どうしようもなかったのである。
「暇……」
することがないというのは、思っていたよりもつらい。

入院など過去に記憶遡行しても全く身に覚えがないため、ナキはこういうシチュエーションに慣れていない。

よって彼は音楽を聴くこと以外に暇の潰し方が分からなかった。

室内にはベッド、カーテン、客人用ソファしか置かれていないので、もうびっくりするくらいやることがないのだ。

外の世界の情報を手に入れるために個室を抜け出し、憩いの広場的なところまで遠征して、他の患者と雑談でもしながらゆるい時間を潰しても良いのだが、昨日余りにも暇過ぎて音楽プレイヤーを聴きながら病院内を探索するように練り歩いていたら、運悪く担当の医師に見つかり、それとなく安静を促されてしまった。

一五にもなって聞き分けのない子供だと思われるのも癪なので、ナキは自室で大人しくしていることにした次第だ。

趣味のエレクトリックベースを弾くのも絶賛自制である。

せっかくオリジナルメンバーがそろって、これからって時に、ライブはお預け状態だ。

こうして自前の音楽プレイヤーと、その小さな機械の中に収録されているリスペクトバンド〈シスターズ〉や〈ルーム６〉、〈シリアスブラック〉がこの世に存在しなければ、ナキの入院生活は悲惨なものになっていただろう。

それでも、ナキには今の内に想念しておかなければならない懸案事項が一つだけあった。

やることがあるのだから仕方がない、という様子でナキは細く溜息をつく。

もう少ししたら来室すると一報があった上司に、『三日前の出来事』の詳細を口頭説明するため、しばし長考することに。

同時に、嫌でも再認識してしまう。

『情報科学』が人間社会を支え、武力や経済を掌握する〈世界政府連合同盟〉が世に流す情報は、ほぼ『毒抜き』が済まされた一般常識の範囲内に留まるばかりの話なのだと。

そして。

現在のナキにとってどんな事実よりも非常識だったのは。
『異能力』が実在し、ひいては自身がその非科学的な力を手に入れたということだった。
一般人にも秘匿され続けている『異能力』。
それを体内に補完したのは半ば己の意思だったとは言え、一五年もの歳月を情報科学が人の生活の柱である世に頭の天辺から足の爪先までどっぷり浸ってきたナキは、『異能力を手に入れる原因となった事件』から三日が経過した今でも、自身に降りかかった非日常を日常として手のひらに馴染ませることができずにいた。
きっと『異能力』の存在が非公式だったのと同様に、世界にはまだまだナキの想像にも及ばない無秩序な『誰かの日常』がごろごろと転がっているのだろう。
だが、ナキは世界の暗部――それも薄っぺらな水面下の、そのまた表面辺りのみを報道するニュース番組なんかでしか知る手段を持たない、ただの一般人ではない。
少なくともそういう『普通』といった枠組みよりも、混沌とした部分に近い社会で生きている種類の人間だと思っていた。
実際のところ、それはナキの慢心だったのだが。
『光と影』の性質には気づいていた。
けれど、『光と闇』の対には、まるで気づいていなかった。
たったの一五年間呼吸しただけで熟知できるほど、世界中に這い回る人々の常識や日常は浅くはなかったのだ。
いや、もしかするとそういう考察の結論をこうも簡単に出してしまった時点で、到底甘いことなのかもしれない。
けれど、考えさせられる良い機会にはなったと思う。
この『異能力』を手にしてしまった以上、これまで自身の糧にしてきた常識には戻れなくなるだろう。
しかし、その価値ならば確かにあるかもしれない。
だからこそ、あの時。
あの『奇跡の現場』の当事者となった自分が上司に話さなくては

ならない。
この口で、この言葉で、直接。
そう思い改め、ナキは一から順に想起する。
暫定的に『世界最後の異能力』を手にした、三日前の出来事を――。

3

am 5:03

現代では『戦争が科学を発展させる』という周知の事実こそ、古臭い思考の代表として国の政策から消えつつあった。

代わりに、それを推進しているものは、科学者たちの『純粋な向上心と独占欲』である。

確かに『情報科学』は物理的側面においても人類の保有する最大の武器であり、戦争では欠かせない必需品だ。

人間たちの蛇のようにしぶとく長い歴史の中で異彩を放ちながら重宝され続けている理由も、『情報と結びついた科学』は人が編み出した人工的な知恵の実なのかもしれないと大袈裟に謳われていることから窺える。

『戦争を意図的に勃発させて科学者たちを煽り、自国の科学力を向上する』という旧時の手段がいよいよ老朽化している近年、それほど『情報科学』の発展は目覚ましかったのだ。

人間社会にとっての大きな流れを生み出し、その先陣を切った代表こそ――

情報科学を統治する都市『理想郷（マリアリア）』だった。

誰もが世界で一番安全な地と認めるその街には、三〇年ほど前に高度な情報科学技術を用いて設立された『特殊部隊』の本部も常時布陣している。

『理想郷（マリアリア）』のロジックは、前提として情報科学のみで成立しており、その圧倒的な支配力でもって社会に厳存していた。

今となっては各国もその国もしくはその街の『情報科学』という基盤を中心に効率良く循環しているようなものである。

だが。

世界に広く、そんな繁栄など一ミリも行き届いていない領域だって存在する。

一般的に廃止（ウェイストランド）された街と呼称する、その界隈が完膚なきまでに無音である理由は、単純に周囲に音を発するべき生命体が息づいていないからだった。

人の生活感というものが絶対零度のように頓挫した世界。

都市の興隆から見捨てられ、復興の兆しを完全に見失った街。

いくら雑居ビルや高級マンション、ビジネスホテル、ショッピングセンターなど文明の力により建造された建築物がところ狭しと並んでいようが、それらは形ばかりのものであり、決して片鱗の枠から離脱することはない。

真相は都市の郊外に位置する廃墟の密集地。

それが廃止（ウェイストランド）された街という通称の由来だ。

泥水のように粘っこい陰鬱な雰囲気を常時垂れ流しているそこは、まるで密閉した空間の中で酸素だけが損なわれていくような圧迫感があり、さながらゴーストタウンのようだと言えなくもない。

そして、この地のように戦争が起因で街としての機能を消失した廃墟地帯は、世界各地に数多く点在している。

いずれもここと同等かそれ以上に、人が普通に住めるような環境にまで回帰させようという考えさえ憚られるほど凄惨な有様になっている。

けれど、マフィアやギャングといった犯罪組織さえ、間違っても隠れ蓑としてアジトに選んだりはしない廃止（ウェイストランド）された街に、とある人影が落ちていた。

本来ここで目撃する影の正体はこの三種類ではないだろうか。

一、こういった場所をアジトにする『反政府組織』の者。

二、こういった場所をアジトにする『反政府組織』の者たちを摘発する政府側の者。

三、こういった場所で勃発した戦争の被害者になった街の住人、幽霊。

『廃墟、過去の惨劇、死の痕跡』という要素が揃えば、どれだけ現実的な価値観を獲得した大人であっても、三番目のそれくらいは連想できそうなものだ。

また想像しかねないほど廃墟の並びは歪で、日差しを一切受けつけない森の中のように薄暗く、不気味だった。

時間帯的にも夜明けの一歩手前である。

電気など回流していないので灯など皆無だし、一帯は湿気でジメジメしているし、彼らが出るには打ってつけの条件どころか最高の舞台だ。

もっとも。

その影の答えである『反政府組織を摘発する政府側の人間』に属する青髪の少年ナキ＝エクイルドは、無慈悲な戦争で魂を引っぺがされた浮遊霊でもなければ、こんなところに遠征してまで超能力や魔法や悪魔払いという俗な分野を熱心に研究するオカルト信者でもない。

長くも短くもない鮮やかな青髪に、本人が気にしているという何の特徴もない容貌。

極めつけは一五という年齢に応じた中肉中背で、どこにでも生息していそうなごく普通の少年なのだが――廃止された街（ウェイストランド）にいる人間が人畜無害な一般人である可能性など果てしなく低いことはすでに世の常識である。

（そろそろ頃合いか）

腐敗する歪んだビルが四方から囲む交差点の中央付近。

そこに無造作に転がる巨大な瓦礫を背にしてナキはできる限り気配を殺し、じっと息を潜めていた。

彼が身を隠しているその残骸の向こう、約六〇メートル先にはボロボロに荒れ果てたビジネスホテルがおどろおどろしくも建っており、今回の『ターゲット』は今もそこにいるようなのだ。

瓦礫の影からそっと顔を出して周囲の様子を探ってみると、西の空より淡い陽光を携えて昇る太陽の頭が視認できた。

いよいよ夜明けの到来だ。
ナキはもう一度だけ突入ポイントであるホテルの入り口に目線を落とす。
どうあっても負の印象から抜け出せそうにない建物の入り口は、爆撃か何かで吹き飛ばされたのだろう、まるで立ち寄る者をどこか別次元へ誘うようにぽっかりと穴が空いている。
思わずここで起きた戦争の悲惨さをイメージしてしまい、ナキは若干ばつの悪そうな表情を流してから、再び遮蔽物の内側に顔を引っ込めた。
彼の右手には少年と称される者には似ても似つかない鉄の塊が握られている。
口径七・六五センチ。
装弾数一八発。
ある国の政府直属の機関に所属する者にしか触れることを許されていない白銀の拳銃『マスター六二式ロールアップ』という名称のハンドガンだった。
しかしながら、それよりも真に着眼すべき部分はナキの黒いスーツにネクタイという、まるでボディーガードのように仰々しく堅苦しい格好と、その左手首に仕込んである漆黒の情報端末機『情報処理体（オプション）』の方なのだろう。
『はいはーい♪　ナキナキ、聞こえますかー？　こちらは現在、ターゲットを観測中♪』
突然、ナキの着用している黒服の左手首付近から青空のように晴れ渡る少女のクリーンな声が流れ出た。
視線を左手首に移せば、そこには縦六センチ、横二センチ、厚さ一センチ程度しかない外装の機械がベルトによって固定装着されている。
色は黒。
光沢はなく、のっぺりとしたシンプルなデザイン。
この重苦しい雰囲気とは場違いなほど明るい少女の声は、その黒

い情報端末機――『情報処理体（オプション）』という機械からプライベートモード通信で発せられたのだ。

ナキは左腕を曲げ、通信機能も搭載している『情報処理体（オプション）』を口元まで持ち上げてから囁くように応答する。

プライベートモードゆえに体の周りに展開している『あの防音の壁』が、外部にこの音声情報を通さないとは言え、なんとなく声を潜めてしまうのだ。

「聞こえてるぜ、ドラマー。こっちはすでにポイントで待機してる」

『おお、それじゃあ準備はおーけぃ？』

配慮して小声で返答したナキに対し、相手方の少女は全く声量を変えない。

これも任務の内なんだからもう少し緊張感を持って欲しいものだ、と一日中口を酸っぱくして注意したところで何も変わりはしないだろう。

それは彼女と仕事仲間としても、バンド仲間としても組んでから一年、脳みそのシワになるまで理解した一つの事実だ。

ナキは溜息を押し殺しつつ『情報処理体（オプション）』越しに言葉を吐く。

「んじゃ、いつもの頼むぜ。今回はちっとばかし本気を出すか。俺もそろそろ帰りてェし」

『にゃは♪　任せてぃ！』

はしゃぐような言葉が返ってくると、しばしの沈黙が訪れた。

左手首の『情報処理体（オプション）』に内蔵されているナノマイクが無言でも拾っているのか、些細なノイズが走っている。

静寂時独自の耳鳴りが遠くに聞こえ始め、そのまま三秒が経過した。

刹那のことだった。

『カウントダウンを開始する』

この場の空気が果てしなく凍りついたような気さえした。

背筋が一斉に粟立ち、全身の温度が緊張と共に急激な速度で引いていく。

けれど、それは断じて恐れからきた反応ではなかった。
どちらかと言えば、むしろ武者震いに該当する。
『定刻まで一〇、九、八――』
原因は先程の少女の声だった。
ただし、八秒前に耳にした可愛らしい着色とは一八〇度も異なる。
その声音は感情の起伏さえ垣間見せない冷徹な、音だった。
質という根本的な部分から静寂に限りなく近い形へ変換した、音でしかなかった。
あまつさえ、聞く者の鼓膜さえ刺し殺すのではないかと危惧するほど鋭利に研ぎ澄まされた、音。
まるで、この黒い情報端末機の『情報処理体（オプション）』の向こう側に控えているあの少女が別の誰か、それこそ殺し屋とでも交代したかのような高低差だった。
『七、六、五――』
それでもナキは冷静を貫いたまま少女の秒読みを頭でなぞる。
ハンドガンのグリップを軽く握り締める。
廃れたビジネスホテルの入り口を再度視界に入れながら、何度鼓膜に湿らせても慣れることはない恐ろしく美しい彼女の声が、ゆっくりと意識の底に溶け込むのを頭の隅で感じていた。
『四、三、二――』
少女の氷のように凍結した声はいつも、ナキの見える世界の認識を切り替えてくれる。
無論、今回も、抗うことなく。
「『――ッ！！』」
最後の刻は口にされない。
しかし、ナキは駆け出す。
視界にはないが不手際や予期せぬアクシデントさえ発生していなければ、あの少女も同時に動き出したはずである。
心配など無用だ。
ハンドガンの感触を確かめるように両手で構えつつナキは足の裏

で地面を蹴る。

待機していた位置から目標の廃墟まではおよそ六〇メートルだ。

元駅のターミナルや市街地の大通り、交差点などの交通網が縦横から編み込まれて混雑する路面を挟んだ、さらに向こう側。

その前途には廃止された街という呼び名通りの光景が広がっていた。

道など荒れ放題。

それこそ世代元も検索できないほど半壊する車体や分解したビルの瓦礫。

中には原形不明の肉塊のような物体まで、とにかくありとあらゆるものが腐った街中に乱雑に転がりまくっている。

――が、そのタチの悪い障害物競争のような道程をナキは一切無視して突き進んでいた。

まるで障害物自体が道を譲るかのように、ナキの進行方向に展開していた物体は全て横薙ぎに吹き飛ばされている。

そのトリックの種は、ナキの左手首――『情報処理体』端末機にある。

単純な話、艶もない漆黒の機械からナキへ『筋肉に作用する特殊な情報パルス』が発信し、『超人的な機動力を得る情報』が出力されているのだ。

差し詰め、実体のないパワードスーツを装備しているようなものだろうか。

その情報力には眼前に立ちはだかる全長五メートル近い建物の残骸も、一六の少年の拳一つで容易に跳ね飛ばせられるほどの能力が備わっている。

すなわち、ナキの直線的な移動はあくまでも変じない。

六〇メートルという距離の間に散らばる遮蔽物たちに行く手を塞がれながらも軌道修正は一切行わず、軽々しく四秒で完走するという驚異的なタイムを叩き出した理由もまた、その黒い情報媒体の原動力にあるというわけだ。

そうして、科学者たちの異常な発想で実現された『情報処理体（オプション）』をマキシマム装備品とするナキは、木端微塵に弾けている正面玄関からホテル内部へと正々堂々侵入した。

数歩足を踏み入れただけで、床に寝ていた砂塵たちは虚を衝かれたように舞い上がる。

乾き切った埃の臭いがすぐに充満してナキの鼻腔を刺激した。

電力が通っていないため室内は暗がりになっているものの、完全な闇というわけではなかった。

外の太陽が徐々にそのアイデンティティを確立させ始めているのだろう、目を凝らせば何とか内装を視認できる。

真っ先に目に留ったのはロビーの左手に設けてある受付っぽいカウンターの痕跡だった。

放射状にグチャグチャになっていて判断しにくいが、おそらく入り口が蒸発した時に巻き込まれたのだろう。

ついつい黙祷してしまいそうなくらい無残な焦げ跡が塗装の剥がれる側面の壁にまで色濃く染みついている。

しかし、今でこそ心霊スポットみたく廃れている廃墟ホテルだが、この街が戦争で潰れてしまう前まではそこそこ豪華な仕様で飾られていたらしく、広間のスペースにもある程度ゆとりが確保してある。

そんなこんな内部を把握しながら右手に目を移す。

と、まるで機関銃で蜂の巣にされたかのように小さな穴が無数に空く壁に、何枚かのエレベーターの扉を発見した。

「レビィ、予想通りターゲットは一階ロビーにはいねェ」

周囲を警戒しながら左腕の袖に付属する『情報処理体（オプション）』に向かって告げる。

少女からの返答は間一髪も入れず返ってきた。

『――了解』

ブチッと愛想のあの字もなく通信が切れ、思わずナキは片眉を歪める。

（相変わらずこのバージョンのレビィさんはクールビューティーだ

な、まったく）

普段もこれくらい冷静沈着でいてくれたらどれほど良かろうかとブツブツ不平を呟きつつ、ナキはエレベーターが並ぶ壁を尻目に奥に見えた階段下まで歩んだ。

蜘蛛の巣のようにヒビが入っていて危ういオーラを醸し出してはいるが、階段としてはまだ機能してくれそうだった。

もう一度、左手首を胸元まで持ち上げる。

『情報処理体（オプション）』には液晶画面があり、事前に設定さえしておけばタップ一回で必要な時必要な分だけの情報を即座に引き出し、空中投影で表示させることも可能だ。

ナキは今この時必要な視覚的情報を二秒もかからず再確認し、小さく吐息を漏らした。

『情報処理体（オプション）』をスリープモードに戻し、

（さて、作戦開始だ）

そして――床を蹴る。

ただそれだけの挙措でコンクリートの床はささくれるように四方八方へ破裂した。

事前情報もなしでその光景を傍から見れば、その床が豆腐のように柔らかい材質なのだと錯覚する者もいるのではないかと疑うくらいのあっけなさだった。

だが、今さらそんなことを気にするナキ＝エクイルドではない。

怨念めいた怒涛の叫び声と共に、一気に階段を駆け上がる。

装備する者の筋肉のリミッターを安全かつ一時的に外す『情報処理体（オプション）』を左手首に携えたナキに、階段を一段一段丁寧に上るなどという友好的思想はない。

その情報能力さえ行使すれば二〇段以上あるコンクリートの確執など一回の跳躍で難なくクリアできてしまうからだ。

かくしてダンッ、と底が脆く抜けるくらい激しく床を踏みしめ、最上階フロアに到達したナキ。

二〇メートルほど直線に伸びるボロボロの通路の両脇には、同じ

くズタボロに半壊した部屋の扉がいくつも傾いだまま張りついている。

ここでもしも、ひょっこり半透明な人が出現した日には存在を信じる他ないねと言わせんばかりに廊下は悲惨な状態だった。

「ハッ、見つけたぜ」

けれど、不敵な笑みを浮かべるナキの焦点は、そんなホテルの内装などにはない。

天井が抜けて仄かな明かりが差し込む廊下の末端、そこに今回の『ターゲット』がいるのだから。

ネルフィーユ国の妃ジェシカ＝イブリースがこよなく愛する、原因不明の誤作動を起こして暴走に特化したペット用小型ロボット――その名もペペが。

どの角度からカメラを回しても本物の小鳥にしか見えないくらい精密にリアルを再現した、手のひらサイズの茶色い塗装ロボット、ペペ氏とナキの視線がかち合う。

互いに合図など不要だった。

重心を低く構える。

情報の力を借りて床を強く蹴る。

爆発的なスピードで滑空するかのように前方へ跳び出す。

シュッと風を跨ぐ繊細な音に伴い、二〇メートル以上あった目標との距離はほぼ一瞬で短縮した。

それでも。

ペペは本来、起こすはずもない誤作動がシステム内で生じ、自律制御を自動で稼働させた不良ロボットである。

理論上は有り得ないはずの『野性としての本能』を擬似的に覚醒させ、身体的には機械仕掛けであることに変わりはないのに内面はえらく野性的になってしまったという、少しばかりロマンチックな奴だ。

そんな半野性化したペペが簡単に捕獲されるはずもなく、『野性の本能』と『機械としての機動性』を駆使して僅かな差でナキの手

を交わした不良ロボットは、機械構築の羽を広げ、優雅に宙へと身を躍らせた。
「チッ……」
舌打ちする。
が、ナキの中に焦りはない。
床の底に踵までメリ込んだ右足を軸に、勢いを乗せ過ぎた体を急停止させる。
体勢もろくに整えないで無理やり腰を捻り、そのまま銀色のハンドガン『マスター六二式ロールアップ』の銃口をペペに向けた。
浮遊する標的に照準を定め、ナキは躊躇することもなく、
（『捕獲対象を無傷で確保すること』が最優先すべき必須条件、か。でもまあ――）
引き金を絞った。
（――特殊金属製ネットだし、少しくらいは仕方ねェだろ？）
ポンッ、と。
肩の力が抜けるやるせない音が室内に反響した。
銀色の銃口より放ったのは七・六七ミリの弾丸ではなく、妃ジェシカ＝イブリースの愛するペペ捕獲専用にわざわざ技術部の連中が製作した硬式弾丸ネットだった。
銃口から飛び出した瞬間、弾丸に仕込んだ特殊金属製ネットがムササビのように開くというシンプルな仕組み。
ただ飛距離はネット自身の重みによって決して長くはなく、せいぜい一〇メートル強が良いところなので接近してなんぼのもんじゃいという短所もある。
「オラオラオラァ――！！」
初弾および五弾目まで見事に外れてしまうという結果は、ほぼ必然だった。
所有者が使い慣れていない上に、技術部による実験や実践もろくに積まないまま急ピッチで具現化した飛び道具が、即席で実力を発揮できるわけがない。

「見事じゃねェか、ぺぺ。不良ロボットの分際でここまで手を焼かせるとは」

ナキは賞賛しながらも、さらに畳みかけるように硬式弾丸ネットを撃ち続ける。

だが、どうやらこの三日間の濃いお付き合いは、こちらの行動パターンや射撃時の微細な癖などを脳内チップで解析するのに十分な関係性だったらしい。

律儀に回避行動プログラムまで演算して自主作成したのか、素晴らしく臨機応変な動きで避けられていた。

こともなげに天井へ向かい飛翔する不良ロボット。

ところで。

この廃墟の最上階天井は戦争の被害により空が筒抜けになっている個所が多々ある。

外野では本格的に朝日が出始めたのか、そこから廃墟の中に明確な光が差し込んでいた。

ついては、ぺぺは予見していた通りの行動を取った。

いくら半野生化しているとは言え、元々攻撃専用スペックをインプットしていないぺぺには、正当防衛の反撃プログラムを改変して組み立て直すことなどできない。

それは、今は亡きＳＦ作家が提唱した『情報ロボット工学三原則』が現代の機械にも適用されているからだ（その原則から発生する『フレーム問題』というやつも、人間の神経系を模倣し、機械の高速性に還元した拘束的処理能力と、状況予測の記号化および固定化にものを言わせて、すでに解決済みだった）。

ゆえにロボットたちの例に漏れることなく、ぺぺも『情報ロボット工学三原則』を行動の優先順位としているため、そもそも攻撃機能を搭載していない。

ぺぺが野性能力を備えているのは、あくまでも製作者が『どれだけ作り物をリアルに近づけられるのか』、総じて『野性の挙動』を脳内チップに入力しているからに過ぎないのだ。

結果。

そんなプログラム同士のせめぎ合いによってペペが起こす行動とは、つまり逃走だ。

廃墟に日差しが入り込む穴こそが抜け道となる。

ペット用小鳥型ロボットは今まさにそこから逃げ出そうとしていた。

一見して分かる。

取り逃がす一歩手前である。

「だがな――」

けれど、ナキにはまだ無駄口を叩くだけの余裕があった。

「こちとら無駄に三日三晩、対象を無傷で確保とかいう無理難題を押しつけられてお前を追撃してたわけじゃねェんだぜ？」

誤作動によって自律制御さえ会得したペペが仮に人の言語を理解する機能まで所有していたのなら、ひょっとするとナキの言葉をキャッチした時点で飛行停止を選択し、別の逃走ルートを検索していたのかもしれない。

あるいは敵であるその二人にも自身の思考パターンが熟知されていて屋上には『鳥籠役の伏兵』がいるのかも、と察知できたのかもしれない。

それすらも計算の内なのか、青髪の少年は緩やかに唇の端を上げる。

ターゲットに悟られないよう金属ネットを休みなく撃ち放つ。

そう、まるで誘導するかのように。

（……）

そして、見事に金属製ネットの嵐を突破し、自由を求めて外部へ飛び去ったペペは――

「ピピィーッ！！　ピピィーッ！！」

直後、合成じみているものの、わりとリアルな小鳥の鳴き声が屋上から落ちてきた。

ナキはホッとした様子で強張らせていた体の緊張を解き、軽く床

を蹴って真上に跳び上がった。
ペペが通った同じ天井の穴……など小さ過ぎて人は通れないので、『情報処理体（オプション）』より情報の力を拝借して穴も空いていない部分を頭突きで突貫し、そのまま上方へ抜ける。
日差しを遮る構築物もなく朝日をガンガンと浴びる屋上へ首尾良く着地したナキが、うっすらとクマが伸びる目元を細めて片手で太陽光を遮断すると、
「にゃは♪　やっぱり下方からの垂直攻撃より同じ目線からのドッキリ攻撃の方が効果は抜群だったね！」
背後から少女の陽気な声が飛んできた。
のっそり振り返ると、そこに咲いていたのは灰色の髪を太陽の光で煌めかす少女の、いささかも邪気を含まない満面の笑みだった。
「予想外の包囲網にペペロンチーノもギョッて顔してたもん！　ギョッて！」
レビィ＝ハルデンス。
ナキと同じ一六歳。
肩にかかる程度に切り揃えたサラサラの灰髪に、海と空を思わせる透明でありながら吸い込まれそうになるほど鮮やかで大きなブルーの瞳。
雪原地帯のようにどこまでもまっさらで、むしろ無駄に健康的な純白の肌は、まるで彼女の性格をそのまま忠実に再現しているかのようだ。
背はナキの頭一つ分ほど小さく、華奢な体つきから思い浮かぶ言葉は『可憐』である。
着ているものは、やはり黒服。
ウエストラインを妙に強調している細身のジャケットに、インナーには襟元にリボンが付属する黒のカットソーを採用し、その下には白く輝く太もも様も露になる丈の短い薄生地のタイトスカートを履いている。
端的に言えばナキと同様、レビィも一般庶民という分類には属さ

ない人種だった。
　細くて白い手の中には白銀のハンドガンが握られているし、着用している黒服は耐熱、耐寒、耐電圧、耐衝撃、防弾、防刃などの効果を一定以上発揮する、特殊繊維で編み込まれる科学合成品だ。
　そして、決定的なのが左手首の黒い情報端末機『情報処理体（オプション）』である。
　レビィは右手のハンドガンをスーツのホルスターに仕舞いながら、ニコニコと天真爛漫さを振りまく。
「やっと終わったね♪　長かった！」
「そう言う割に疲労感が全然伝わってこねェんだけど」
「だってまだ体力の半分は温存してるもん♪」
　えっへん！　と小さい胸を張ってふんぞり返るレビィに呆れつつも内心で感心しながら、ナキは彼女の左手に目をやる。
「で、傷はなかったか？」
　そこには例の小鳥型不良ロボット、ペペ氏がしっかりと収められていた。
　ミシミシという聞き捨てならない不協和音が耳朶を打っている気もするが、ナキはあえて気にしないでおこうと決心した。
　不良ロボットもまるで更生したかのように大人しいし、触らぬ神に祟りなしというやつだ。
「大丈夫、塗装も問題ないのだ♪」
　そっか……、とナキは安堵色に塗れた細い息を吐いて、途端ペペロンチーノことペペ氏を射抜くように睨みつける。
「ペットのくせに性能が良過ぎるだろ、こいつ。ハイスペック仕様の意図が分からねェよ。それに拍車をかけて『無傷で捕獲』とか指示してきた、あの上司のふざけた条件。おかげで俺は人間三大欲求の一つ、その名も睡眠欲が不足気味だ」
「この子の思考回路を解読するのに時間かかっちゃったからね♪」
　手元のペペを人差し指でツンツンしながら疲れなど微塵も知らないレビィの口ぶり。

ナキは賛同するように頷いて、
「ま、動物的な本能を獲得して半野生化したとは言え所詮は機械的だったけどな。動作には生物特有のそれが欠けてたし、何回かプログラムの独自計算を施したぎこちない挙動も垣間見えた。製作者は外見のリアリティばかりを望み過ぎた、断然未熟者だ」
結局のところ、これだけのロスタイムは間違いなくクライアントであるジェシカ＝イブリースのワガママのせいだ、とナキは口を尖らせ執拗に主張した。
「でもでも、それにしても計算外の奇襲を狙った戦術は流石ナキだよ？　最後にはやっぱり上手くいったもん♪」
にへら、と絵に描いた子供のような無邪気さで笑うレビィの賛辞に、ちょっとは歯が浮く気持ちにならないこともない。
「そ、そうか？　机上の空論なら誰でもできるだろ。その『機械の計算外を割り出した作戦』を実戦でやってのけちまうレビィの方が、俺なんかより十分にすげぇと思――」
そこまで言い終えた時、ナキはとっさに自身の口を押さえ込んだ。まるで禁句でも口にしてしまったかのように口元を覆う指の隙間からは、『やっべぇよ』という声にならない声が淡々と溢れ出している。
だが、時は遅かった。
いや、この場合は時間とか、もうそういう感じではない気がする。
額から嫌な汗をダラダラと滝のように流すナキの眼前には、両手を広げて接近してくる愛くるしい灰髪少女のあどけない姿があった。
「ありがとう♪」
ザ・キス魔。
「にあああああああああああああああああああ――――――――！！」
という変態的な絶叫は当然ナキのもの。
『褒められてテンションが絶頂に達した際、その沸点に触れた者に抱きついて唇を与える』という未曽有の習性を備える彼女に、ファ

ーストキスを奪われたナキも幾度目かの経験者だが、その際（神に誓って）不可抗力で接触してしまうレビィのささやかな女性的双丘の権威は一概に感極まるものとは言い切れないものの、その度に心臓が左心房から元気に飛び出すんじゃないかってくらい動揺するのも、また揺るぎない事実だ。

　がっつりと抱きついてくるレビィの体温がスーツ越しに伝わり、蜂蜜のように甘い匂いが嗅覚を盛んに刺激してくるが、ナキの意識はほとんど自身の腹部に密着する、紳士として形容してはいけない二つの柔いものに一切合切掻っ攫われている。

「ぬぅおおお

無節操娘はクリクリの瞳を、さらに丸くして小動物のように小首を傾げた。

「あのな、レビィの容姿からして惑わされる男はけっこういると思うぜ？」

三白眼気味のナキが案ずるのも無理はない。

真面目な話、レビィはなかなか可愛い顔をしているのだ。

本人にその自覚はないようだが、男性陣にはある程度の評判を勝ち取っているのでナキの錯覚や妄想の類ではないだろう。

まあ、それもあの本部内で耳にした意見でしかないのだが。

「誤解されるのも面倒だろ。デメリットにしかならねェんだから今の内に治しとけ、な？」

当たり障りのないよう促してみる。

「病気？　病気って何？　何のこと？」

とても良い笑顔でしらばっくれる少女、レビィ＝ハルデンス。

スマイルという単語を考えた人は何らかの方法で時間跳躍する装置を発明し、未来を観察しているところでこの純粋無垢な娘に邂逅したに違いないって確信が理屈抜きで持ててしまうくらいの、笑顔。

「いや、だからさ――」

「そんなことよりそろそろ帰ろうよ♪　あたしはお腹が空きました！　ずっとレーションばっかりだったからお味に飽きたのです！」

青の双眸をランランと輝かせ、鼻歌混じりで本部の食堂に思いを馳せているレビィから早速舌鼓の幻聴が聞こえてきた。

彼女は彼女で『食欲』が警報を鳴らしているのかもしれない。

過労死寸前のナキにとっては、まさに青息吐息な事態である。

ここから後どれくらい時間が経過すれば安らかに眠れるのだろう。

せめて一時間後の自分がシャワーも浴び終えていて、後は今か今かと主人を待ち構えているマイルームのフカフカベッドにインするだけの状態を妄想してみることにした。

脳内シミュレーションなら何を行おうと罪になりはしない（犯罪チックな言い方ではあるが）。

そして、時間が解決してくれるさという希望的観測に基づく慰めの決まり文句。
あれは真っ赤な嘘である。

4

ａｍ　１０：５９

情報科学主義国家と言えば、よほどの天邪鬼でない限り真っ先に念頭に浮かべるのは、西大陸中心部に築かれた国家ネルフィーユだろう。

代々名家だったイブリース家の人間カウル＝イブリースが一昨、六代目国王の座についたばかりでもある。

彼ら国王家の所在は常にそのネルフィーユ国の首都『理想郷（マリアリア）』にあった。

人口は約二億人。

世界最先端の情報科学技術を我がもの顔で保有する『理想郷（マリアリア）』にイブリース家の者たちが身を寄せている理屈は実に簡明で、科学酔狂な『理想郷（マリアリア）』が世界で最も安全な地だと言われているからだ。

その理由もひとえに都市全土をドーム状に包み込む不可視の障壁『情報結界（アクセスフィールド）』が敷かれているからに他ならない。

略説して述べると、『情報結界（アクセスフィールド）』とは、そう呼称される由縁通り『理想郷（マリアリア）』の街を外部の物理的干渉から守る不可視のバリケードシステムである。

他国の前時代的な核兵器くらいならば雨のように降り注いでもビクともしない頑丈さを誇っているという、『情報科学的な結界』だと捉えてもらって差し支えないだろう。

さらに、その『情報結界（アクセスフィールド）』に許可なく触れる者がいたならば、たちまちネルフィーユ起程の情報科学武装特殊部隊が現場に出動するという措置まで導入されている。

その特殊部隊こそ〈世界政府連合同盟〉直属の治安維持機関――〈ブラックアウト〉だ。

本部はネルフィーユの首都『理想郷（マリアリア）』に常置しており、この国の〈ブラックアウト〉稼働人数は総員約二万人に達している。

それは『理想郷（マリアリア）』が〈ブラックアウト〉発祥の地だからこその数字なのだが、その強大な勢力と今なお飛ぶ鳥も落とす勢いで躍進し続けている情報科学技術こそが、イブリース家を安心して玉座に座らせている最大の根拠というわけである。

そんな首都にある〈ブラックアウト〉本部敷地内前頭には、『理想郷（マリアリア）』の象徴としても建設された巨大ビルが三つ、三角形になる配置で塔のごとく鎮座していた。

都市に並ぶどの建物をも凌駕する三つビルは、黒を基調とするモノトーンな塗装と、長方形螺旋型構造という奇妙な外装をしている。

街の象徴というだけのこともあり、湯水でも浴びるみたいに情報科学の干渉を受けた『理想郷（マリアリア）』の中でも一際目立つ二〇〇階建て。

まるで天上に住む誰か様に宣戦布告でもするかのように空に向かい屹立していた。

この街のマッドサイエンティストたちは一体全体どこの神様に喧嘩を売ろうとしているだろうか。

と、たった今〈ブラックアウト〉本部に帰還し、『象徴のビル』内部にある上司の仕事部屋にて任務報告会を行おうとしている黒服装備の二名は、そんなセカイ系じみた不毛の想像を今のところ膨らませたことはない。

「たっだいまー♪」

満面の笑みを浮かべ、小気味良い足取りで入室する灰髪の少女はレビィ＝ハルデンス。

不満タラタラ疲労感たっぷりの顔つきで後に続いたのは青髪の少年ナキ＝エクイルド。

元々広いはずの上司の部屋は、書類やら雑貨やら壊れて放置プレイされている機械の部品やら特筆することすらできないほど散らかり放題になっていた。

部屋を取り囲む四方の壁は天井に頭をこするほど背の高い本棚で

敷き詰められ、床もガラクタや配線コードなどが揉みくちゃに転がっているので僅かばかりの隙間も窺えず、部屋の外装を確認できるのはやはり頭上の天井だけ。

ゴミ屋敷のごとく足の踏み場さえないその部屋の中心。

空中投影型の立体コンピュータや仮想ディスプレイ、キーボードを映し出すための機械に繋がる無数のケーブル束などに、呆れ混じりの半眼を向けつつも、ナキはそれとは無関係の不服を唱える。

「クレアさん。今回の任務すっげェ不満だったんですけど」

二、三秒の間を設けてコンピュータのディスプレイ画面から目を離した金髪ポニーテールの上司は、キャスターつきの椅子を後ろに引いて振り返った。

その動作によって背後に積まれていた分厚い書類たちが雪崩のようにバラバラと床へ散らかるが、気にする様子もない上司クレア＝ローズは形の良い唇に薄っぺらな微笑を含ませ、開き直るようなことを言う。

「あら、妃のペット無傷捕獲任務、私はけっこう重要な仕事だったと認識しているけれど？　だからこそ、あなたたちを信頼して依頼を任せたのよ？」

信頼して、の部分をえらく強調された。

クスクスと口元に手を当てて上品に笑うクレアの顔にはシワの一つも線が通わず、鑑みるに歳は二〇代前半頃だろう。

『片づけられない女』という欠点さえ目を瞑れば、クレアはかなりの美人だ。

薄い化粧のくせにくっきりとした顔立ちは気味が悪いくらい整っていて、座っているため分かりづらいが背はナキよりもやや高い。

スタイルはモデル並みに抜群だし、細身ではあるものの無骨というわけではなく、きちんと鍛えて引き締まっているのだ。

ちなみにブラックコーヒーを注いだマグカップを片手に持ち、書類やデータの海に埋もれるクレアは〈ブラックアウト〉の戦闘員ではない。

それはダークスーツの上に肩から白衣を引っかけるという独特な格好から一目して見当できる。

クレアは〈ブラックアウト〉本部直属の科学者だ。

同時にナキたちの直属の上司でもあるが。

「そんな不満そうにしなくても報酬は大きいけれど。イブリース家の妃が直々に依頼しにきたのだから見返りは期待して良いと思うわ」

湯気の立つマグカップを左右に揺らしながら、クレアはうっすらと微笑みを咲かせる。

科学者たちの間で『微笑みの道化師（ポーカーフェイス）』だの『科学者の権威』だの『小悪魔クレア』だの良く分からない二つ名で密かに崇められている所縁はそこにある。

「別に報酬なんてどうでも良いですよ。カレンじゃあるまいし。そんなことより俺はもっと正式な任務の方が良いんです」

「あら、惰性のナキ君からは考えられない言動なのだけれど。これもレビィの影響力なのかしら？」

「にゃは♪　ナキナキはあたしにベッタリだから仕方がないのです！」

「今すぐ黙せ、レビィ＝ハルデンス」

「まあまあ、今は任務明けでもあるわけだから少し休んだ方が良いわよ。仕事に身を入れる男の人は魅力的だけれど、休憩も挟んで身を労わり、女の子にも優しくしなくちゃモテないわ」

「モテないモテない♪　モテる必要は全然ないけど！」

グリグリッと、レビィがクレアに便乗するように人差し指をナキの右頬に埋め込む。

ナキは反論を唱えるべきか悩んだが、これ以上は骨折り損になりそうだなと思いあえなく自己完結した。

ただでさえ三日三晩という疲労を蓄積しているのだから、この選択は概ね正しいと言えるはずだ。

自ら疲れを取る必要もないだろう。

即刻、気持ちのベクトルを切り替えたナキはさっさと報告を済ま

せてシャワーを浴び、フカフカのベッドに潜り込むことだけを第一に優先すべき行動として動き始める。

「おい、レビィ。さっさとソイツ渡して帰ろうぜ」

レビィの左手に目線を落とし、催促する。

そこには技術部特製の鳥籠に幽閉され、囚われの身となっているペット用小鳥型ロボット、ペペ氏がいた。

「はい、クレア♪　これがペペ氏です！」

ペペ氏は鳥籠の中でも無闇に暴動を起こしたりせず、まるで陰謀でも企んでいるかのように（いや、別に伏線ではない）大人しくしたままクレアへと引き渡された。

ナキは見て見ぬフリをしていたが、実はこの不良ロボット、任務終了後に二人を回収した〈ブラックアウト〉の護送車の中でレビィにずっと調教を受けていたのだ。

レビィは良かれと思ってシツケをしたつもりなのだろうが、ペペ氏にとってあの無邪気さは恐怖政治でしかなかったのかもしれない。

今ではすっかり蹂躙され、レビィに対して完全に畏縮してしまっている。

「（うむ、時として無邪気とは残酷なもんだ。案外レビィは将来教育ママになるのかもしんねェ。三日三晩のよしみで同情してやるよ、ペペ）」

昨日の敵は今日の友的に同情の余地を見出したナキが、籠の中で微動だにしないペペに憐れみの視線を投げかけていると、

『ありがとう、ナキさん。あなたも苦労なさっているんですね』

何だか意思が疎通した気がした。

「（すまねェ。立場上、俺はお前を助けることができねェんだ。逆らえんのだよ、この隣にいる純粋無垢な少女と実際何を考えているかも分かんねェ金髪ポニーテールには）」

『いいえ、良いんですよ、ナキさん。性善説を唱えるつもりもありません。強いて言うのなら今回は私に運がなかっただけなんですよ。あなたも十分に気をつけて下さいね』

目頭が熱くなる。
「ナキナキ、さっきから何一人で呟いてるの？」
「妄想癖があるのかしら？　知らなかったわ」
不思議そうに顔を覗き込んでくるレビィとクレアの誤解をナキは華麗にスルーして、
「あの、もう帰って良いですか？　眠たくて仕方がないんですけど」
「そう、ね。ええ、構わないけれど。お疲れ様。あなたたちの『情報処理体（オプション）』は私が保管庫に預けておくわ」
ナキとレビィには特に異存もなかったので、黙って『情報処理体（オプション）』を取り外してクレアに渡した。
「ああ、それと報告書なるべく早めに提出すること、でないと報酬の方もカードバンクに振り込めないわ」
「了解です」
「あとは……何か大切な伝言を預かっていた気がするのだけれど、忘れてしまったし良いわよね？」
「いや、全然良くねぇし。大切な伝言ってはっきり理解してるなら、絶対に自己解決しちゃいけねぇだろ」
「うふふ」
「うふふじゃねぇよ！！」
頭大丈夫かアンタ！？　と正論なるツッコミを飛ばすと、クレアは顔色一つ変えずに（微笑みながら）、うーんと唸りつつ何故か側に立つナキの顎に手を添えた。
その『大切な伝言』とやらを思い出そうとしているのは理解できるが、普通そこは自分の顎に手を当てるものではないだろうか。
しかも、いつまで経っても帰ってくる気配がない。
ついに痺れを切らしたナキは大袈裟に嘆息してから、クレアの手を乱暴に払いのけて、
「じゃあ、もう思い出したらメールでも何でもして下さい。どうせ寮にいると思いますし、寝てると思いますけど構いませんから」
「あら、ごめんなさいね。最近物忘れが激しくって」

全然申し訳なさそうではない。
せめて悪びれる演技をすることくらい覚えて欲しいものだった。
「さあ、行くぞ、レビィ」
「バイバイ、クレア♪」
踵を返してドアに向かう二人。
人体センサーによって薄い扉が自動で開き、廊下に出る。
視界を割って入ったのは窓もなく、白々しい蛍光灯のみが空間を照らす長ったらしい廊下だった。
誰もいない静かな通路に二歩出ると、背後でドアが独りでに閉まる音が聞こえた。
「とりあえず、寝――」
「ご飯♪」
「俺は寝――」
「ご飯♪」
過酷なことに、ナキにはまだ試練が残されているようだった。
すでに先手を打たれた感は否めない。
一瞬、強烈な拒絶の表情で対抗してはみたものの、その反抗心はレビィの壮絶な笑顔により抹殺されてしまった。
「……し、承諾した」

二〇〇階建ての『象徴のビル』内部は九割が科学者、研究者、技術者たちのテリトリーと化している。
膨大な量の『情報科学』技術を扱う本部は、そのビルをほぼ余すところなく科学研究施設として使い切っていて、唯一、科学、研究、技術以外の用途として余裕がある空間はクレア＝ローズのようにビル内に専用の個室を持つ者たちのスペースくらいなものだった。
けれど、〈ブラックアウト〉本部の敷地は何も螺旋型構造の象徴が構えている面積のみではない。
国内にもいくつか支部を増設しているとは言え、二万人もの〈ブ

ラックアウト〉隊員や科学者、サポートスタッフなど多くの人間を腹に抱えている本部なのだから、それだけの数を収納、運営するには別館となる施設が多々必要となる。

そして、その別館こそ象徴のビルの後方に増置してある作戦会議棟や戦闘訓練棟など計一五〇棟に及ぶ各専用施設と、無闇やたら横に長い造りの寮だ。

〈ブラックアウト〉の隊員や科学者のほとんどは任務あるいは仕事を完遂し、自身の上司なり何なりに報告を済ませると本部外の自宅にとっとと帰宅してしまうが、中にはナキ＝エクイルドやレビィ＝ハルデンスのように寮住まいの者もいる。

理由はそれこそ十人十色で、二人の場合はたんに帰るべき家がないだけだった。

ナキは犯罪組織が勃発させた紛争の孤児だったらしく、物心がついた時には〈ブラックアウト〉本部に拾われて寮内に住んでいた。

そういう経緯もあってか、彼にとっては両親が不在していることも自宅がないことも特別違和感のあることではなかった。

今のところそれを寂しいだとか辛いだとか他の奴らが羨ましいなどと思ったこともないし、〈ブラックアウト〉としてそれなりに任務を遂行していれば生活に不自由を感じることもないので、さしたる問題も困難も生じはしない。

言ってしまえば、けっこう現状に満足しているのである。

自分の力で何かを獲得し、それで誇れるものは一つもないけれど、生活に必要なものは周りが与えてくれるのだ。

だからナキには特別に大切なものがないのかもしれない。

これといった人生の目標もなければ、壮大な夢もない。

強いて言えば音楽が好きでバンドを組んだりもしていたわけだが、それは所詮、趣味の範囲内だ。

まさか本気でバンドで食って行こうなんて妄想はしない。

〈ブラックアウト〉という泥臭い日常に甘んじ、のらりくらりと惰性的に呼吸するだけ。

それがナキ＝エクイルドの人生だった。
片やレビィの経歴は、ナキよりも少しだけ複雑だ。
彼女は五歳の時、親に捨てられるような形で〈ブラックアウト〉に入隊したらしい。
詳しい事情までは踏み込んで訊いていないのでナキも深くは知らないが、おそらくレビィの両親は『貢献金』目当てだったのだろう。
少し前に廃止されたその制度は、かつてネルフィーユ国政府が世間――主に貧困層や紛争の被害にあった者たちを救済するという建前で一時的に世界中に配布した政策だった。
内容は『五歳児未満の子供を〈ブラックアウト〉に入隊させた際、その両親に世界治安維持の貢献人として莫大な謝礼金を贈呈する』というもの。
情報科学の急激な発展により世界の勝ち組へと食い込んだネルフィーユ国は、それを実行可能にするだけの予算もたんまり蓄えていた。
そして酷い話ではあるが、実際に自分たちにとって何の利益にもならない子供をあっさり金に換えた大人たちは多い。
貢献金制度により『戦争の被害者をいかに道徳的に救い上げ、効率良く〈ブラックアウト〉の入隊率を底上げするか』という政府の目論見は滞りなく成功に終わったわけだ。
レビィもそんな身勝手な大人たちの意向によって現在の境遇に立たされている一人だった。
いつも紺碧の双眸を好奇心旺盛な子供のように瞬かせている少女からは、まるで過去の記憶など忘却の彼方へ島流しにでもしたかのように、態度には反映されないのだが。

「それじゃあ、また後でね♪」
思わず擁護したくなるような満面の笑みを残し、灰色の髪をフワフワ揺らしながらレビィは女子寮の方に去って行った。

（相変わらず元気だな。俺はもうこんなにクタクタだってのに）

ここで溜息をついたら何か負けだと思ったナキはグッと堪えて、えっちらおっちら男子寮廊下に足を運ぶことにした。

『情報処理体（オプション）』はフロントで手続きをして自ら保管庫に預けるのが手順だが、それはクレアに任せた。

彼女はたまに、気が利くことをしてくれる。

可愛がられている証拠だと思う。

なので、『情報処理体（オプション）』は手元にないものの、ナキはハンドガンや黒服を装備したままでだ。

もちろん〈ブラックアウト〉とは言え四六時中その制服を着用しているわけではない。

ナキやレビィの境遇上、着替えを常時持ち運んでいるわけではないので寮の自室に帰還するまでは仕方なくこの格好でウロウロするしかないだけだ。

「はあ……寝てェなー。ベース弾く元気もねェよ」

寮棟一階の廊下に到着したところで音楽大好き少年ナキの瞼がそう語る。

『象徴のビル』の廊下は窓のない作りになっているが、寮棟の壁は一面がガラス張りになっているため昼間は外からの日差しだけで室内の明かりが賄えている。

環境にも優しくて良い方法だ、と節約の王子様を自負しているナキは寮の設計士に感心しつつ進み続けた。

一〇一号室から一五〇号室まで部屋が並ぶ寮の廊下は長い上に、ナキの部屋は一二五号室というド真ん中的位置にあるので、一階フロアの者たちの中でも一番歩行距離がある。

「おっ、いたいた。ちょっとアンタ探したわよ」

それでも見慣れているせいなのか、はたまた一時的に無限体力娘のレビィから解放された安堵感からなのか、無駄に奥へ伸びる風景には少なからず安心感を覚えた。

特に異常はない。

本日もナキの日常はギリギリのところで平穏だった。
「間違いなく空耳アワーだ。こんな時でさえ耳鳴りがカレンの声に聞こえちまうなんて、よっぽど疲れてんだな。やっぱレビィとの飯はとんずら――」
「そんなに私は現実逃避したい存在かっ！！」
「グふッ」
腰が砕けるかと思った。
普通、体がくの字に曲がると表現すると前屈みになるような状態が目に浮かぶものだが、今回ばかりはその先入観は適応されない。
突如、背後よりドロップキックが入った時はその逆で、腰および背骨に重大な危機が訪れるからだ。
「ぐっ、後ろからとは卑怯な」
へそが突き出るように前のめりに数十メートルほど吹き飛んだナキ。
腰を庇いながら起き上がって振り返ると、そこには腕を組み、仁王立ちでふんぞり返る金髪ツインテールの少女がいた。
黒いジャケットにタイトなミニスカート。
全身黒尽くめなのはやはり同じ種類だからなのだろう。
レビィの格好と大差はない。
「フン、後ろを取られる方が悪いのよ。アンタも〈ブラックアウト〉の端くれなら、いかなる時も死角に気を張ってなさい」
それはクレアの妹、カレン＝ローズのブラックな襲来だった。
年齢は一七歳で、ナキの先輩に当たる。
身長はナキとほぼ同等で、姉と同じ綺麗な金髪をカレンは黒いリボンでツインテールに結っていて、勝ち気な目元以外は姉と似ているのでかなりの美少女フォルムで、もしかしたら姉と同じようには育たないかもしれないが決して未来に希望を捨ててはいけないぞと思わず励ましたくなるような控え目の胸がとても特徴的だ。
「あれ？　何でこんなところに壁――じゃねェ、カレン――でもなくて、だな……」

これが世に言う泥沼というやつだろうか。

前言撤回しなければ、今の言い分だと壁＝カレンの大人しい胸囲になってしまう。

黙したまま鬼神のごときオーラを放射するカレンの鉄拳が顔面に無尽蔵に降り注ぐ一歩手前で、ナキは手のひらの生命線がまだ消失していないことを確認しながら何とか弁解を始める。

「いや、その、今のは悪かった。ちょっとしたジョークだ。冷静になって考えてみろよ、カレン。そんな無礼なこと俺が本気で口にするとでも？　だとしたら心外だね。俺はいつだって紳士だ。いくら君の女性的な部分がお姉さんと比べて小――」

「最近私ね、完全犯罪の考案が趣味なの」

「――っとも変わらねェからってナキ＝エクイルドに限って失礼極まりない目線を送るはずがねェだろう？」

口が達者ではないことは自覚しているが、カレンを目の前にすると余計なことまで口走ってしまうというのは、ナキがカレンに出会った頃からの有力な弁である。

補足しよう。

あの天真爛漫娘に対して口をへの字に曲げ、毅然とした態度で佇むカレンの性格は『傍若無人』という一言に尽きる（プラス自尊心の塊だ）。

「まったく……。そうよ、用があってアンタを跳び止めたの」

「できれば呼び止めて欲しかったがな」

「ところでアンタさ、お姉ちゃんから何か話なかったの？」

ささやかな抗議は鮮やかに流されたが、いつものことなのでナキはそんなことではめげない強い子だ。

「えっと、何の話だ？」

「うっ、やっぱり……お姉ちゃんのばか。それとなく話しといてって言ったのに」

目線を明後日の方向に逸らしつつ、親指の爪を浅く噛むカレン。

かと思えば、頬をほのかに朱に染めつつ上目遣いの緊張した様相

で、ナキの顔色を窺い、
「た、単刀直入に訊くけど」
「何だよ、改まって」
「アンタは今日暇なんだから、これから私に付き合いなさい」
訊くけど、などと前置きしておいて、カレンの口から出てきた言葉は明らかに疑問形ではなく命令形だった。
「街の方に用事があるのよ。そ、その……ほら、一人で行ってもつまんないし、暇そうなアンタを荷物持ちにでもしてあげようかと思って」
それでホイホイついていく奴がいたら馬鹿だろう。
「で、どうなの？」
腰に手を当てて妙に偉そうな態度で訊ねるカレンだが、なぜかその表情は不安そうに歪んでいる。
ナキはぽりぽりと頬を掻きながら、ばつが悪そうに答えた。
「ああっと、悪ぃ。今日は無理だ。報告書でっちあげねェとまずいし、三日連続も神経使うような追跡任務あたってたから、ろくに睡眠とれてねェんだ」
「ほう、アンタ。先輩の言うことが聞けないってーの？」
「立場の優位性を利用した陰湿なイジメが始まろうとしてるじゃねェか！　はっ、そうだ。分かった。それなら代役を用意しよう。レビィなんかどうだ？　疲れ知らずのあいつなら、とことんお前の買い物にも付き合えるだろうし、やっぱり何だかんだで女同士が一番だろ？」
「バカね、あの子と一緒に行っても意味ないわよ！　アンタとじゃなきゃ！」
何でだ？　と疑問に思いつつも、ナキは慌ててカレンの叫び気味な口を両手で塞いだ。
ここは男子寮である。
特にナキの部屋が存在するフロアには、彼女いない歴がそのまま年齢に反映している猛者が多い。

どいつもこいつも飢えているような連中の住家。
そんな空間で、こんなラブコメチックなやりとりをしていたら、今後ナキの元に回覧板が回ってこなくなるかもしれない。
最悪、夜中にピンポンダッシュをされたり、不幸の手紙を郵便受けに入れられる恐れがある。
妬まれるのも嫌なのでナキは、押さえた手の下でむーむー言っているカレンをなだめることにした。
取り合えず封じていた口元を解放する。
「ぷはっ、いきなり何するのよ」
カレンは歯を食いしばりながら静かな怒りの口調で詰め寄ってきた。
「お、落ち着けカレン。明日はどうだ？　明日なら俺も――」
「明日？　へー、明日ね。確か明日は『情報進退検査（メンテナンス）』だった気がするんだけど？」
「げっ、そうだった」
顔を引き攣らせるナキに対し、カレンは冷ややかな眼差しを送る。
もはや打つ手なしかと項垂れたナキだが、対するカレンは案に相違して冷静な溜息をつき、
「ま、仕方ないわね。アンタがいてくれた方が参考になったんだけど、ここは一人で行くとするわ」
話はこれで終わりだと言わんばかりにカレンは体を反回転させ、ナキをあしらうように手をひらひらと振る。
彼女にしては、あまりにもあっさりとしていて拍子抜けである。
色鮮やかな金髪のツインテールを颯爽と翻し、この場から立ち去ろうとしたカレンの背を、ナキは呼び止めた。
「おい、カレン」
「何！？」
カレンは瞬間移動まがいの勢いで戻ってきた。
びっくりした。
どうやら期待させてしまったようだ。

彼女の気迫に押されたナキは、たじろぎながら右足を一歩後ろに引き、
「い、いや、買い物は今度必ず付き合うからよ。あらゆる予定をキャンセルして、一日お前専用の荷物持ちになってやる。約束する。誘ってくれてサンキューな」
一瞬、カレンの表情は空白になり、
「え、なっ、いや、べ、別に私はそんなつもりじゃ。お、お礼なんて言われる筋合い、なんかない……かも？　私が勝手に、したいわけだし」
どういうわけか頬をほんのり赤らめ、人見知りしたように俯くツインテールの少女。
「で、だ。例の件について考えてくれたか？」
例の件？　と頬の紅潮を隠すようにカレンは小首を傾げた。
どうやら忘れているようだ。
互いに忙しくて、なかなか連絡を取る時間がなかったせいかもしれない。
「ほら、メールで頼んだだろ？　ナキ＝エクイルドプロジェクトによるバンド結成の件だ」
「ああ、そう言えば。確かに、そんなふざけたプロジェクトの話を持ちかけられてたわね」
カレンの脳内には、ナキが一週間前に発案したオリジナルメンバーによるバンド結成に関する記憶があるはずだ。
他のバンドと掛け持ちをしていないメンバー（未経験者大歓迎！）を集める際、カレンにメールでヴォーカル担当になってくれるように頼んでいたのである。
「うーん、まあ……やってあげても良いわよ。ヴォーカル」
「え、マジでか！？」
事前に通知していたとは言え、口頭で二つ返事をもらえるとは思わず、思わずナキの声量はテンションと共に上がってしまった。
カレンが異常に歌が上手いという事実を知るのは、ナキを含めて

クレアとレビィの三人くらいだろう。
今まで〈ブラックアウト〉の先輩たちのコピーバンドでベース枠の助っ人ばかりやっていたナキだが、自分のオリジナルバンドを作る際には、絶対に彼女をヴォーカルにしようと決めていた。
事前に唾をつけておく必要はなかった。
カレンの人付き合いの悪さから考えて、他のバンドに取られる心配がないからだ。
（懸念があるとすれば……）
「お前、アマチュアのバンド活動は金の消費が半端じゃねェぞ？」
ナキが戦々恐々と訊ねると、カレンは『は？　アンタ何言ってんの？』と言わんばかりの顔つきで、
「そんなの私は一銭も出さないわよ。ヴォーカルは機材とかお金かかりそうにないから、承諾してあげても良いって言ってるの。あ、ギターヴォーカルやって欲しいんなら、ギターを用意することね。そうすればやってあげても良いわ」
案定、金が絡むと交換条件のようになってしまった。
「（ぐっ、カレンの声を失うのは惜しい……最悪、俺が実費で賄うしか……）」
器用で何事もコンスタントかつ人並み以上にこなすカレンのことだ。
ギターを持たせれば、それなりに上手くなるだろう。
守銭奴な人格はともかく、素材としては優秀だ。
「んで、他のメンバーは？」
「えっと、今のところ俺とレビィ、お前だけだ」
「……ごめん、あんたの、その……気がついてあげられなくて」
「何が！？　なぜ謝る！？」
カレンが眉をハの字にしてナキに頭を下げるなど、よっぽどのことがない限り有り得ない事態だ。
「人望、ないのね」
「違ェよ！　今まで先輩たちの中に混ざって、散々コピバンやって

きたんだ。それなりのコネはある。だから、ヴォーカルもギターも一応は見つかるんだよ。つーか、逆に先輩たちから勧誘があるくらいだ」

「ああ、そういうこと。アンタ、ベース握らせると目つき変わるしね、キモい」

「最後小っちぇ声でキモいつった!?」

「キモいくらい上手いってことよ。ところで、あんたが持ってるアレ、けっこう高いんでしょ?」

カレンの呆れ半分、感心半分の声音を聞いて、ナキの脳裏に自室で主人の帰りを待つ愛機の姿が過る。

スタンドに支えられているのは、外国産の大手メーカー〈ロストナンバー〉のオーソドックスなプレシジョンベースだ。

塗装は木目の繊細な色調で整えているメイプル色。

こちらはメインで使用しており、アクティブな低音を作りやすいのでロック調に向いている。

サブには同じメーカーのジャズベースを使っている。

こちらの塗装は黒で、オールマイティな音色を生み出しやすいため重宝している。

どちらも楽器店で試奏して、一目惚れした品だ。

ベース歴三年の音楽少年は、意味深そうで実はそうでもない溜息を一つ落とし、

「だが、俺がやりてェのはコピーでもオシャレポップでもねェ。パンクやミクスチャーやファンクやオルタナや広義の意味でのロックだ」

「要するに世代的にも周りの同い年とは趣味が合わないと」

「イエス」

「ふーん。ま、事情は分かったわよ。私もロックとか良く分からないから、今度データ送信しなさいよ。女ヴォーカルのバンドとか特に参考にしたいわ」

ナキの部屋にその手のCDが、何百枚と積み重なっていることを

カレンも知っている。
壁には彼女の口から出た〈シリウスブラック〉のベーシスト・ラウンド＝クロウのポスターも貼られてたりした。
「おう、今度お前のコンピュータに送っとくぜ」
「ん、それじゃあね。また何かあったら報告して」
そんな淡泊で軽い挨拶を交わし、二人はその場で別れた。

5

am　11：43

昼時の食堂棟はとにかく人が多い。

自炊する気などさらさらない〈ブラックアウト〉本部勤めの隊員や科学者、研究者、技術者など大多数の者がここぞとばかりにその棟を利用するからである。

しかも食堂としてのみ機能する食堂棟は七階建てのビュッフェスタイルで経営しており、各階ごとに異なるジャンルの有名料理人たちが待ち構えているので、まず味には飽きないことが客を鼠のように誘い込む要因となっているのだろう。

そんな色んな人種でごった返す食堂棟の三階フロア。

異国の料理も窺える階層の中央付近に位置するボックス席に、青髪の少年ナキ＝エクイルドは座っていた。

その正面を陣取るのは言わずもがな灰髪の少女レビィ＝ハルデンスである。

二人はビジネスモードの黒服から私服に着替えて、約三日ぶりのまともな料理にありついていた。

ダークトーンのオープンカラーシャツにフォトTシャツ、デニムパンツ、エンジニアブーツという風体で攻めるナキの眼下には、海鮮をメインにしたバランスの良いセットとショートケーキが一つ。

白の薄いカーディガンの下にトップスとしても使えそうなピンクのチュニックワンピースを着て、その上から腰の辺りに黒のレザーベルトを巻きつけ、通気性重視のニット製ショートブーツを履くという可愛らしい格好のレビィは、肉メインの料理でナキの五倍は皿に載せていた。

どこにそれだけ入る胃袋があるの？　どうしてそれだけ食してス

マートな体型を維持していられるの？　と疑問を抱いてしまったら最後、枚挙にいとまがなくなり土壺にはまる。

何故なら『不思議』を体で表現したような少女がレビィ＝ハルデンスなのだから。

灰髪少女の武勇伝は記すだけで分厚い辞書が出版できそうなほど膨大なのでさておき、現状は『野菜もちゃんと食えよ』と注意するくらいが無難だろう。

「野菜もちゃんと食えよ。背、伸びないぞ」

命の恵みをどんどん胃袋へ吸収するレビィに根拠のないことを言ってみると、意外にも肉を刺しているフォークの動きが停止した。

脈ありだった。

「ふぇ？　お野菜様を食べたら背が伸びるの？」

レビィが大きな瞳をまん丸にして食いついてきたので、ナキは真剣な顔を装いつつ二回大きく頷く。

「ああ、そうだぜ。野菜は母なる畑の子供たちなんだからよ。そんな子供たちが母なる畑から元気に育つよう愛情という名のカルシウムを与えられていないわけがねェだろう？」

果たしてこんな頭の悪い嘘にも引っかかってしまうのがレビィである。

レビィは肉汁がしたたるフォークをピクピクと震わせて悩んでいる。

「むぅ……」

「つまりだ。野菜を食べれば背が伸びる。クレアさんが言ってたんだから間違いねェよ」

「……わ、分かった！！」

人生で三番目くらいに大切なことを決意したかのようにレビィは立ちあがり、料理の並ぶ方に大股で向かった。

その小さな背中を眺めつつ、ナキは黄昏れるかのように目を細め、そっとほくそ笑む。

（ふ、愛い奴だ）

一分後、お野菜様を確保したらしいレビィが少しだけ青ざめた顔でテーブルについて、
「お野菜様は畑のお肉様……お野菜様は畑のお肉様……お野菜様は畑の……むぐぅ！？」
どうにかして野菜を肉に脳内変換しようとしているこの少女、何気に背が平均より低いことを気にしている。
そして、ナキはたまに他人の不幸を蜜の味に変えて楽しむ嫌らしい嗜好があるのだ。
「むはっ……やっぱりお野菜様は苦手だよ……」
レビィは目尻に涙を溜めながら自分の気を別のところへ反らせるように、ナキに訊ねる。
「それで？　ナキナキはどうしてツンちゃんの誘いを断ったの？」
レビィ的金髪ツインテールのツンちゃん。
もしかしてそれは『ツインテールのツとン』ではなく『ツンデレのツンちゃん』なのか？
だとしたら見当違いだぜ。
あいつも俺と同様デレの要素は皆無だからな。
デレた例がない。
いや、待てよ。
ひょっとしてツンって『ツンツン』って意味か？
ああ、なるほど。
それなら正鵠を射ているな。
流石はレビィ――という心境でいつもナキはそのあだ名を聞いている。
「まあ眠ぃし疲れてるし報告書があるからな」
ナキはサーモンのお造りを口に運びながら、適当に答えた。
「ふーん、そっか♪」
すると、結局お野菜様からの愛情という名のカルシウム摂取を諦めたのか、本物のお肉にフォークをぶっ刺し始めたレビィはニカッと白い歯を見せ、こう笑うのだった。

「それじゃあナキナキ♪　これからどうする？」
「……いや、悪い、レビィ。何て言った？　よく聞こえなかった。おそらく聴覚が脳を守るために勝手にシャットダウンしたんだろう。もう一度言ってもらえねェか？」
　訊き直すとレビィは空になった食器類をいそいそと回収し始め、ナキの分まで流し台に放り込んできた。
「それじゃあナキナキ♪　これからどうする？」
「あはは、これからどうするかって？　おかしな子だな、レビィは。良いか、俺たちは三日三晩ろくに睡眠も取れてねェんだぜ？　君の目の下にクマがうっすらとも浮かび上がってねェのは、単なる神様の悪戯だ。すなわち導き出される回答は一つ。これから寝――」
「遊ぼう♪」
　グレネードランチャーよりも強烈な一言だった。
「……カレンとのくだり聞いてたか？　俺は眠てェんだ」
「何して遊ぶ？」
「ふむ、実に面白い。まず会話を成立させるところから始めなければならねェらしい。よかろう。時にレビィ。君は三日三晩の追跡任務の後だというのにも拘わらず寝ないのかね？」
「久しぶりに街に行ってみる？」
「たっぷり睡眠を取らねェと伸びるものも伸びないぞ？」
「それとも街に繰り出してみる？」
「それにもう俺の体はガタガタなんだ。分かるだろ、分かるよな？　同じ境遇だもんな？」
「そだ♪　街を散策するのも良いね！」
　右腕を蛇のように巻き取られた。
　ナキはそのまま無理やり立たされる。
「それじゃあ街に行こう♪」
　レビィはエレベーターではなく階段の方に向かってぐんぐん進む。
　目をちっとも合わせてくれない。
「ちょ、おまっ、何でそんな力強ェんだよ！？　頼む！　少しで良

いから耳を傾けてくれ！　俺に睡眠を！　睡眠を！」

どこにも届くことのない切なる願いを雄叫びに乗せ、ナキは半ば誘拐に近い形で階段を引きずられる。

「全部回りたいな♪」

「ふざけんな！　『理想郷（マリアリア）』の街全部回るなんて三日三晩あっても絶望的に足りねェよ！」

「え？　じゃあ三日三晩だけで良いよ？」

「何その百歩譲ったよみたいな顔！　もしも三日三晩『理想郷（マリアリア）』ツアーを実行したら俺の致死率は飛躍的に上昇すること間違いなしだ！」

「せっかくの休みなのに？」

「あのな、レビィ。お前には是非とも一度落ち着いて『休み』という単語を辞書で引いた後、さらに一万回ほど熟読してもらいたい。気になった部分や共感できる文章の横に線を引くのも手だろう。俺が思うに休みとは仕事などを休息する時間、日、期間のことであり、その間にじっくり寝て次の稼働に備えるための貴重な時間であり、ただでさえ俺たちは不規則な生活を送ってるわけだから、休みというもごきゅッ――」

喉仏にものすごい速度の手刀がメリ込み、ナキの言葉は強制遮断させられた。

「げほっ、何しやがごみゅッ」

第二陣が投下。

「や、やめがふッ」

軽く呼吸困難に陥った。

何が恐ろしいって、レビィが屈託のない笑みを張りつかせたまま口を封じてくるところである。

「ありがとうナキナキ！！」

「何がどんな風に！？　謝罪される覚えはあっても謝礼される覚えはねェんだけど！！　この暴力ヒロインめ！」

「ヒロイン……！？」

「都合のいい部分だけ聞き取ってんじゃねェよ！」
紺碧の瞳に幾千万もの星々を輝かせるレビィにストレス混じりの突っ込みを入れてから、ナキはやけくそ気味に言い加える。
「まったく……ああ、もう分かったよ。観念する。行けば良いんだろ？　逃げはしねェから手を離してくれ。歩きづらい」
「ほんと？」
「ああ、約束する」
「逃げたりしない？」
「しないしない」
「にゃは♪　分かった！」
解放。
猛ダッシュ。
喉仏に激痛。
悶絶。
ナキ＝エクイルド捕獲。
「ごめんなさい。もう逃げません。喉仏だけは勘弁して下さい」
組み手によって階段の踊り場に薙ぎ倒されたナキは、ガサガサの声で降伏を認める。
「それじゃあシュッパーツ♪」
遠足前の子供のように意気込むレビィの声に紛れ、手元からガチャリという不穏な音がナキの鼓膜をノックした。
猛烈な違和感を悟り、ナキは立ち上がりながらも音源を辿って自身の手首に視線を落とす。
「おや？　何だいこれは？」
問わずにはいられないブツを発見してしまったため意に沿って少女に問い合わせてみる。
が、盛大にスルーされた。
ので、もう一度じっくりと手首を観察することにする。
（ふむ、どの角度から考察してもこいつは手錠だ。しかも『連鎖信号（チェーンメール）』内蔵式じェねぇか）

犯罪者の逃走、暴行、自殺防止などのために手首へ取りつける拘束具の一つにしても、〈ブラックアウト〉の特注品には情報による科学的調整が行き届いている。

その一つが『合同信号（チェーンメール）』だ。

手錠内部に搭載した汎用チップが拘束者の手首より脈や体温、発汗量、筋肉の収縮などすべからく観測し、身体の健康状態から心理状態まで洗いざらいデータに書き移して、電子メールを通信機端末に一斉送信するという代物。

さらに、その手錠からは自身の居場所を通信機端末に送受信する信号が常時発せられているため、いかなる逃走手段を持ち得ていたとしても追手から逃げ切ることは不可能に近い。

手錠には情報的科学コーティングも施してあるので、まっとうにキー所有者に外してもらうか手首を切断する以外にその機能から逃れる術はないのだ。

つまり、一度でもそいつに手首を噛まれでもしたら、

（ニゲラレナイ……）

ということだった。

「嘘だ、まさかこんな奴隷みてェな格好で俺は街へ放り込まれるっつーのか!?　鬼畜が過ぎるだろ!　世間の目ってのは思ってる以上に怖ェんだぞ、レビィ!　頼むから嘘だと言ってくれ!!」

羞恥心は社会的に人を殺せる。

それだけは間違いではないのだろう。

∞　∞　∞

「ナキナキはどっか行きたいとこある?」

灰髪の純粋（という言葉を盾にしているかもしれない）少女レビィ＝ハルデンスは、清々しいくらい上機嫌な風向きで訊ねた。

言うまでもなく、その問いかけの先には一人の少年の姿がある。

（施錠された）両手一杯に抱える買い物袋のせいで視界がほぼ閉塞

している、その名もナキ＝エクイルドだ。
自他共に認める節約家のナキは、特売か音楽関係の文字が目に入らない限り、そうそう財布の紐を緩めたりしないので、要するに荷物は余すところなくレビィの戦利品であって、ナキは単なる荷物持ちに駆り出されたという構図が容易に成り立つわけである。
「そうだなー、行きてェところとなれば……楽器店？　いや、弦の予備は買ったな。今は特に欲しいエフェクターもねェし、シールドも買い換えたばっかだからな」
目の前は色んな意味で真っ暗なので仕方なく顔を上げる。
仰げば空は快晴だった。
天気予報によると昨日に引き続き、ネルフィーユ国民頭上には太陽のアツいアプローチが降り注ぐらしい。
（そう言やぁ、駅前ショッピングセンターで、肉類魚介類の半額セールがあった気が……。今日だっけ？　でもなー、冷蔵庫にねェのは野菜類だしなー。いや、だからって肉や魚をないがしろにするわけにはいかねェが……）
家計の事情に耽る弱冠一六歳は、マイ冷蔵庫の中身ならば常に把握しているので、その映像はどんな時でも記憶の中からダウンロード可能だ。
さてどうしたものかと、雑貨店やら書店やらファストフード店がやたらめったらひしめく商店街を二人してノロノロと進行していたら、
「はっはっはっ。ナキ君にレビィちゃん。久しぶりだね、元気してた？」
聞き覚えのあるオッサンのしゃがれた声に足を止める。
二人がそちらに視線を投げると、ナキが昔から行きつけにしているスーパーの店長がちょうど商品を陳列しているところだった。
さらに店長の向こう側に焦点をフォーカスすると、古代の臭いを醸し出すこぢんまりとしたスーパーが目に映った。
店内前頭の陳列棚にはみずみずしさに色取りの野菜たちが行儀よ

くお座りしている。
「おお、おっちゃんか。なんか久しぶりだな」
「ひ、久しぶりっすおじさん♪」
しゅたっ、と足首を揃えて敬礼するレビィの歯切れの悪い口調には、もちろん理由がある。
「はっはっは。今日は二人で買い物かい？　相変わらず仲良いんだね」
「その台詞は今の俺の状況と、この手首を見てから言ってくれよ。特に手首のコレ（手錠）は決して仲睦まじい者同士で表現するべき友情の品じゃねェだろ。対等という関係性から限りなくかけ離れたコイツ（手錠）を直視してなお同じ台詞を吐けるなら、あんたは間違いなくそっちの世界の覚醒者マゾヒストだ」
「はっはっは。今日は二人で買い物かい？　相変わらず仲良いんだね」
「なぜ否定しない!?　ええい、近づくな！　この覚醒者め!!」
覚醒者は敬礼したまま硬直しているレビィに柔らかな視線を投じて、白羽の矢を立てる。
「それよりどう？　レビィちゃんはもう野菜を克服したかい？」
「むっ……えっと、ちょ、び、びみょーにっ!!」
青ざめながら小刻みに震えているレビィというのは、けっこうレアな絵である。
「そうかそうか！　野菜に罪はないからね、良い傾向だ！」
このスーパーの売りは新鮮な野菜だ。
しかもセールで安いときたら近所の主婦層が食らいつかないはずがなく、このスーパーは穴場として認識されており、ナキが網羅している戦場は大抵の奥様方も目をつけているので、見かけに寄らずけっこう繁盛しているようなのだ。
詰まるところ、拘束束縛希望の変態店長はレビィの数少ない天敵ということになる。
店長の濃厚なベジタブルトークが続き、レビィがいよいよ失神し

そうだったのでナキは助け船を出すことにした。
「で。その野菜だが、今日は良いの入ってんのか？」
「ああ、そこまで質にこだわらないのなら夕方頃にタイムサービスやるよ？」
「マジか、ちょうど冷蔵庫ん中の野菜枠ストックが切れてんだ」
その手の言葉に弱いナキはテンションが上がったのか、手荷物も持ち直しながら嬉しそうに言った。　が、問題点があると言えばただ一つ。
「あー……くそ。夕方っつーと寝てるかもな。俺たち任務明けなんだよ」
「そうなの？　まさかナキ君が寝る間も惜しんでレビィちゃんの奴隷に身を徹していたとは思わなかった。恐れ入ったよ。僕も見習わなくちゃ」
もはや秘匿しようともしない店長、改めオープンな変態。
「そうだ、何なら取っておいてあげようか？　僕とナキ君の親密な仲だし」
「き、気持ちはありがたいが遠慮しておこう。曲がりなりにも俺は一特売戦士だ。正々堂々ガチで参戦させてもらうぜ」
親密という単語に一線を置くように豪語すると、オープンな変態は愉快そうに声を上げて笑った。
「良いね若いねオトコだね、期待してるよ」
「おう、そんじゃまた後で」
「レビィちゃんもまたね」
「バ、バイバイ♪」
荷台を引きながら店の奥に引っ込んで消えるオープンな変態の背を見送りつつ、ナキとレビィは再び足を起動させる。
この地区には今の店長みたいな全開かつフレンドリーな商売人が多発していて、歩いていると他にもナキが通っている各地の戦場（特売セール）で知り合った猛者（主婦）たちと遭遇したりする。
そして、顔を合わせる度に激戦区（タイムセール）の情報交換を挨拶代わりに行う

ことが日課になるつつある一六歳の少年が、エプロンと買い物かごを片手に下げる四、五人の主婦たちと輪になってあれこれ談を交わしている光景は個性的であるが、ナキにその自覚は皆無である。

ここまでナキが節約に徹底するのは、やはり趣味に金銭をつぎ込みたい性格だからなのだろう。

「てなわけで、少し駅前に行こうぜ、レビィ」

「良いよん♪」

変態の前では比較的しおらしかったレビィも、すでに水を得た魚のごとく復活していた。

二人はあらゆる種類の店舗が集積している商店街を抜け、映画館と連なったアミューズメントパークの煌びやかな建物が見えてきたところで、交差点で隔てた向かい側に渡る。

やや斜面に傾ぐ路面をダラダラと上って住宅街に踏み入り、一際目立つ豪邸を視界の先に認めたら、そこはもうフラン＝タールカートンの家である。

「あれ？　どうしてフランラの家に行くの？」

横から不思議そうに訊ねるレビィ。

覗き込んでくる紺碧の双眸に対し、ナキは手元の荷物を顎でしゃくって答えた。

「ほら、こんな大量の荷物持ってちゃ闘えねェだろ。ロッカー借りるのだって金がかかる。昼飯も食堂で贅沢しちまったから、こういう細やかな部分で節約しねェと馬鹿にならねェんだよ。塵も積もれば何とやらだ」

「闘うって誰と？」

「フフ、今日は駅前のショッピングセンターで肉類の特売セールなのだ」

右も左も分からないジイさんバアさんからしめしめと金をせしめた悪徳業者のように唇の端を釣り上げるナキ。

そして、何よりその単語がレビィの底なし沼並みに続く体力と相まって、有言実行もびっくりの行動力に灯をつけた。

「お、おおおお

6

pm　13：11

フラン＝タールカートン一五歳は、〈ブラックアウト〉本部所属の技術者だ。

フワフワと腰まで流れるクリーム色の髪に、癒し系万歳おっとり猫系の顔立ち。

ナキ＝エクイルドが知る同年代の少女たちの中ではまずまず発育が進んでいる方で、出ているところが出ている絶世の美少女と言えばどう見積もっても十中八九フランのことである。

人懐っこい性格と柔らかい口調もあって男性陣からの好感度が高いことは当然、それどころかファッションセンスが良いということで女性陣からも圧倒的な人気を誇っている。

そんなパーフェクト少女の両親は、これまた相当の資産家でネルフィーユ国内五本の指にも入ってしまうくらいの大金持ちなのだが、それを鼻にかけて高飛車な態度を振る舞うわけでもなく、温厚かつ誰にでも分け隔てなく優しく接するという、もう本当に何から何まで素晴らしく良くできた人間、それがフラン＝タールカートンなのである。

それがフラン＝タールカートンなのだ。

ザ・フラン＝タールカートン。

そして、とんでもない大富豪の家のインターフォンを躊躇いもなく押せるのは、ナキやレビィ＝ハルデンスを含め数少ない。

『理想郷（マリアリア）』の都市全土を保護するドーム状の不可視シールド『情報（アクセス）結界（フィールド）』を一個人の家が設置しているなど、ガチでタダ事ではないからだ。

ピンポーン、と仰々しい呼び出し音が鳴る。

『はい、こちらタールカートン邸でございますゆえに』
レビィがインターフォンを押して僅か二秒後、機械越しに聞こえてきたのは若い女性の超義務的機械的無機質的棒読み口調だった。
「あ、ココアか？　俺だ俺」
『……わたくしには娘しかおりませんので、「俺」という一人称で言われましても性転換の発想以外思い浮かびませんがそうなのでございますね、ココア二号』
「お前が二号を出産してたってのは初耳だが、その結論は色んなステップを踏み外し過ぎだな。大多数の人間は詐欺師っつー可能性を真っ先に考えるからお前も騙されんじゃねェぞ？」
『ココア二号はあなたと、わたくしのデンジャラスな結晶でございますゆえに。あの夜はとても……』
「おい、展開が妙に昼ドラチックな方向に転がりつつある気がするぞ。いや待てレビィ、何をそんなドン引いた顔してんだ」
人の話を信じやすい純粋少女は一歩身を引いて、本気でショックそうな顔をしている。
『ジョークというやつでございますゆえに』
ココア＝アロイストローネはタールカートン家に仕える腕利きのメイドである。
しかしながら、彼女の声には人が言葉として出力する音の調子がネジ一〇〇本分くらいは欠けていた。
意思と感情を反映し、他人に伝えるはずの言語が本当にただの羅列と化しているのだ。
それでも文面からならば、たとえイントネーション自体が皆無だとしても感情の起伏を読み取ることは可能である。
ココアに感情がないわけではないからだ。
何を隠そうココアは無表情を装いたいだけの脳内お花畑さんなのだ。
子供の頃に見たアニメの無口キャラに影響を受け過ぎて、一九を迎える歳になっても歯止めが利かなくなってしまい、ついに行くと

ころまで行ってしまったというイタいけな残念メイド、それがココア＝アロイストローネである（結婚などもしておらず、ココア二号も彼女の豊かな発想力が生み出した事実無根の仮想生物に過ぎない）。

『ご用件はフラン様でございましょうか』

「ああ、とりあえず開けてくれよ。話はそれからだ」

『ただいまセキュリティを解除しておりますゆえに少々お待ちを』

数秒後、アーチ構造の頑丈そうな扉が左右にスライドして開いた。

簡易的に『情報結界（アクセスフィールド）』を無効化したのだろう。

相変わらず手際だけは良いな、とナキは感心する。

「お久しぶりでございますゆえに。ナキ様レビィ様」

そこには早くも前で腕を組み、礼儀正しい姿勢のまま深くお辞儀をするメイド服姿のココアが待ち構えていた。

緑色を基調にした丈の短いワンピースにフリルのついた純白エプロンを重ね、ウェーブのかかった茶髪の上にはレースを施したカチューシャがちょこんと乗せてある。

まるで人形のように凝固させた表情は端整極まりなく、それこそ作り物のように微動だにしない。

笑えばそれなりに可愛いに違いないのだろうが、ナキはココアの口角が緩む瞬間を目撃したことはなかった。

「元気だったココちゃん！」

芝生や生け垣アートが生い茂る中庭に入るや否や、レビィがココアに突進するように抱きつく。

傍から見ていると姉妹のように思えてくるので、二人はそこそこ馬が合っているのだろう。

「レビィ様もお元気そうで何よりでございますゆえに」

「あったり前だよう！　毎日お肉様食べてるからね！」

「――なにをう」

一瞬、不屈の精神で守護しているはずのココア製無表情メッキが剥がれかけたように見えたのはナキの錯覚だろうか。

レビィの無駄なきスリムボディを悟ってのことなのか、一応ココアの無表情キャラは役作りなのでカロリーとか体型とか、そういう話題にはやはり女の子として気になる領域なのかもしれない。
「高カロリー摂取の上でこの幼児体型なのでございますか」
「ち、違うもん！　これはすれんだーって言うんだよ、ココちゃん！」
仄かに頬を染めているレビィはココアとの身長差もあって本物の妹みたいだった。
「レビィ、恒例の挨拶はその辺にしとけ。ココア、フランのところに案内してもらえねェか」
「そうでございましたゆえに。その前にその大荷物を客間にでも保管しておきましょう。半分持ちます、ナキ様」
「ああ、助かる」
ナキとレビィはココアに連れられて奥行きのある館のような豪邸に向かった。
人工石で舗装する石畳の上を進みながら左右を視線でなぞると、柔らかな陽光に輝き芽吹く深緑の情景が映り、改めてここの敷地のでかさを認識させられた。
「相変わらずでけェな、ここは。花壇に、家庭菜園もあるし、こんだけ敷地が広いと手入れとか掃除とか大変じゃねェか？　メイドならではの時間節約法とかあんのかよ？」
ナキが三歩ほど前を行くココアの背に訊ねる。
あわよくばその術を盗もうというわけだ。
「わたくしは掃除などしたことございませんゆえに。掃除、洗濯、料理は全て機械がプログラムに従って勝手に行います」
振り返らないまま無機質な声でそう答えたココアを見つめながら、ナキはそうだったと思い出す。
ここは情報科学を神のように祭り上げる『理想郷（マリアリア）』なのだ。
タールカートン家に訪れるまでの道程でも情報機械製人型傀儡と何機も擦れ違った。

金銭的に裕福な者には身の回りのことを全てやってくれる家庭用ロボットがいる街でもあるのだ、この都市は。

「あれ？　それじゃあ、普段ココちゃんはここで何してるんだっけ？」

人差し指を唇に当てながらレビィが呟くように問いかけると、ココアがピタリと歩みを止めたので釣られて二人も急停止した。

無着色な横顔を数センチばかり振り向かせ、ココアは肩越しに衝撃的な一言を放つ。

「フラン様とわたくしは百合仲でございますゆえに」

「がふッ、じ、冗談だろう!?　ディフェンダーいや、フォワードか!?」

驚きのあまりナキは思わず訊いてしまった。

「はい、ジョークというやつでございますゆえに」

「……、」

言葉に詰まるナキには、ココアのそれが役作りのせいなのか『冗談を口にする人間には見えない』という先入観をいつまでも経っても払拭できないため、たまに彼女の温度を感じさせない言葉を真に受けてしまう傾向がある。

ともあれココアなりの冗談だったことに脳内で胸を撫で下ろすと、袖がクイクイっと引っ張られた。

「ねぇねぇ、ナキナキ。ゆりなかって何？」

「気にしなくてよろしい。レビィが一生知る必要のない世界の話です」

まだ赤ん坊並みに純粋なこの少女には早過ぎる知識だ。

むしろ、一生知らなくて良い。

「わたくしの雇用理由としては、ただの機械からは決して得ることのできない『人間関係』というものでございましょう。父上様も母上様もお忙しい身分でございますからフラン様が、わたくしなどで満足していただけるのならば幸いでございます。わたくしもフラン様のことは妹のように好いておりますゆえに」

淡々と本音を並べてから勇むように本館に向かうココアの姿は、どこか誇らしげだった。

ナキとレビィは軽く顔を見合わせ、頬を緩ませながらメイドの後を追随する。

玄関に到着し、一旦大量の荷物を客間らしい部屋に預けると、二人は豪邸の二階へと通された。

紅茶を用意するから先に行っていてくれとのことだったので、ナキとレビィは目的の人物フラン＝タールカートンの部屋に勝手に向かうことにした。

空調が効いているのか室内は良い具合に涼しい。

初見の者なら間違いなく恐れ慄いてラフに歩くこともできないであろう高価そうな絨毯が敷き詰まる長い廊下を、二人は我が家のように平然な顔をして歩く。

無神経なのか、友好的なのか、少し分からない。

シミ一つ付着していない壁に飾られた名画っぽい絵を何十枚と横目にしつつ、天井のシャンデリアから落ちてくる淡いオレンジの色彩の中、絢爛な廊下を真っ直ぐ猛進して、T字の曲がり角で左に折れる。

と、そこで前方に目的地であるフランの自室が出現した。

「久々だな、フランに会うのも」

「にゃっほーい♪」

名高い職人が『芸術とカオスの紙一重とは何ぞや！』を描きたかったに違いないシュールな模様が刻まれている漆塗りの木製扉を、しかしレビィはノックもせずに遠慮なくブチ開ける。

果たして二人を快く迎えてくれたのは、癒しさえ覚える猫のような人懐っこい頬笑みだった。

「あっ、やっぱりさっきのチャイム、ナキ先輩とレビィ先輩だったんですね。前に会ったのは確か……先月の駅前スーパー特売セールで共闘した時でした？」

腰の辺りまで流れる柔らかそうなクリーム色の髪を先端で小さく

結んでいるフランは、二重の猫眼を嬉しそうに瞬かせている。
今まで武具の調整か発注生産でもしていたのだろうか、天使のような笑顔を咲かせる顔にも、つなぎの作業着にも油がベットリとつきまくっていた。
「フランラ！」
ココアの時と同じく再会を喜ぶように跳びついたレビィの小柄を、フランは似たような体格でもって受け止めたが、背が微妙に高いだけのフランは〈ブラックアウト〉として日々鍛えているレビィの押しに負けて、二人はそのまま後方のベッドにバフンと倒れ込んだ。
「あはっ、相変わらずですね、レビィ先輩。て、あれ？　ココアはどうしたんですか？」
「紅茶を淹れてからくるそうだ。そんなもん機械に任せりゃ良いのにな」
フランの質問にナキが苦笑いで答えてやると、
「ふふっ、今日はお客さんが他にもきてるから、たまには自慢の腕前を披露したくなったんだと思いますよ？　特に先輩方がきてくれたんですから」
「ココちゃんの紅茶はおいしいもんね♪」
「まあ確かにあれは機械には出せねェ絶妙な美味――って、今客が他にいるっつったか？　俺たちの他にも誰かきてんのかよ？」
不思議に思ってそう訊ねると、フランの二重瞼がパチパチと開閉して部屋の入り口に突っ立っているナキの背後に移動した。
意図を探るために振り返ると、開きっぱなしのドアの向こう、その廊下側から一つの足音がこちらに向かってくるのが分かった。
その音源の主がお盆を持った無表情メイドかと思いきや――
「あれ？　何でアンタがここにいんのよ」
「と、柳眉を逆立て、口をへの字にひん曲げながら廊下に仁王立ちしていたのは、紛れもなく金髪ツインテールの少女カレン＝ローズ様でございましたゆえに。その突拍子もない驚くべき光景に、振り返った側のナキ＝エクイルド様は思わず絶句。絶望的だったのは、

むしろそのまな板――失敬、その奥ゆかしい双房の胸でございます。まさか一日に二度もこれほど神様に恵まれなかった少女に遭遇するとは夢にも思わなかったからでございますゆえに。アーメン」

「何ですって!?」

「す、すとっぷ、息がッ……俺の生命を繋ぎ止める呼吸器官がッ……」

顔を赤く沸騰させたカレン＝ローズからフルパワーで首を絞め上げられるナキは、視界が白濁していく中ものすごい不条理を感じていた。

ツインテールを形成する黒いリボンの向こう側で気配を絶つ小悪魔メイドに渾身の怨念を送る。

「あははっ、カレン先輩。制裁はそのくらいにしてティータイムにしませんか?」

「フン」

あべこべな文字入りのロゴTシャツの上にメッシュのキャミソールを重ね、ブラウン系のショートパンツに小洒落たミュールを履く私服姿のカレンは、フランのまあまあというジェスチャーでナキの亡骸を床へ落とし、室内に足を踏み入れた。

はっきり言って、ここで再会したのは気まずかった。

カレンには買い物に誘われていたのに、報告書や疲労を理由に断ったのだ。

なので糾弾されても文句は言えないが、

「な、何でココアが知ってんだ」

続いて主犯のココアも入室しようとし、死霊にその足首を捕捉される。

ゼェゼェ言いながら気道の確保をする生まれたての馬みたいな動きでナキが立ち上がり、ココアの耳元で囁いた。

無表情仮面を装うココアの半眼は、どういうわけかナキを責めるジト目にも見える。

「何のことでございましょうか」

「だから俺が今日カレンに会ったのが二度目だっつーことだよ」
「先程カレン様がお手洗いに行かれるまでフラン様と談笑なさっていた際、わたくしが盗み聞きしたからでございますゆえに」
合点。
「ツンちゃんも武器の調整とか頼んでたの？」
カレンは部屋の中央に配置してある三人がけ用のソファにドカッと座り込みながら、
「違うわよ、私はスーツの新調。す、少し胸がきつくなったからね。悪い？」
「あはっ、胸の方は問題なかったじゃないですかカレン先輩。嘘はダメですよ、嘘は」
「……年上を立てる気はないわけね、アンタ」
そんな会話を耳に入れながらナキとココアも部屋の中央に歩み、カレンの向かい側に設置されたもう一つのソファに座る。
ココアは用意していた紅茶と洋菓子を配ってからナキの隣に腰を下ろした。
「フラン、俺たちのも終わってんのか？　確か昨日が完成予定日だったよな？」
「はいっ、もちろんですよ。〈ブラックアウト〉の誰もが使いにくいって言って酷評を極めた大剣『クトネシリカ』。今回はサービスで予備の一本も用意しときましたから安心です」
ぱちんっ、と柔和なウインクが投げられた。
フランはこの場にいる女性陣の中でも一番常識と良識のある人間だ。
しかも、めちゃくちゃ可愛いので、これに胸をはずませない男は、男ではないか人類外の生物なのだろう。
卒倒して何が悪い。
「ふふっ、レビィ先輩の『ガルガラ』と『リボルバ』も整備完了してます」
「ありがとう、フランラ♪」

フランは〈ブラックアウト〉本部に務める技術者だ。
その役割は主に〈ブラックアウト〉専用武具の整備、調整、改造、製造からナキたちの制服でもある黒服の新調まで。
依頼主は無論〈ブラックアウト〉隊員であるため、技術者は自分を使ってくれるお得意さんを確保しなければ収入を得ることはない。
どれだけ〈ブラックアウト〉に腕の良さをアピールするか、またそのお得意さんと上手く関係を築き上げてパイプラインにするか、それこそ技術者が技術者として生き抜くための、技術レベルの次に注視すべき項目点だった。
「あっ、そうでしたそうでした。先輩たちにお訊ねしないといけないことがありました」
ベッドの上でレビィと並んで座るフランが両手をパチリと鳴らし、何かを想起したように口を開く。
丁重な所作でティーカップを持ち上げ、一口紅茶を含む天使に全員の視線が集う。
「アイソトープ比率の調子はどうですか？」
唐突な問いに〈ブラックアウト〉戦闘員組はキョトンと顔を見合わせた。
縦六センチ、横二センチ、厚さ一センチ程度の薄い板チョコのような機械。
――ハードウェア『情報処理体（オプション）』。
フランの言うアイソトープ比率とは噛み砕いて説明すると、『情報処理体（オプション）』を装備する者の『戦闘能力に匹敵する情報数値』のことだ。
〈ブラックアウト〉にとっての一つの成績だと考えてもらって相違ない。
そのアイソトープ比率によって『情報処理体（オプション）』が出力する機動性も大きく変動するので、個人の戦闘能力はこれにより大幅に上下することになる。
あの黒い情報端末機が『装備する者の筋肉に作用する特殊な情報

パルスを流し込んで与える超人的な力』の情報源は、その機械の内部に潜むカード基盤のソフトウェア――ＳＯＩをソースとして出力されているのだ。

アイソトープ比率によって能力値に個人差はあるが、世界的な平均値は六〇・一パーセントとされていて、八〇越えは化け物クラス、九〇越えはワールドクラスなどと形容することもしばしばあり、また一〇〇パーセントが上限というわけではない。

ちなみに『情報処理体（オプション）』の特殊機能としては、『情報操作（ドライブシステム）』という飛び道具的なギミック回路を搭載している。

多少の負荷をかける代わりに両腕両足の各部位いずれか一ヶ所の情報出力を瞬間的に一・五倍底上げする『情報制限加速（リミッタードライブ）』というものだ。

発動条件は『情報制限加速（リミッタードライブ）』を起動させたい任意の部位に脳神経と『情報処理体（オプション）』を連動して神経を促す、いわゆる精神集中というやつで可能である。

と、このような情報科学の結晶にも弱点が律儀に用意されている。

『情報処理体（オプション）』自体そこまで完璧なシステムではないのだ。

ここで思い出して欲しいのは、ナキたちが制服として着用を義務づけられている黒服の形状である。

形はもちろんメンズ、レディースと二種類に分離しているわけだが、どちらも襟元から足首までしか身体を覆っていない繊維だ。

耐熱などの効果はあるとは言え、顔面は完璧ノーガードだし、女性用に関しては胸元が開けていたり太ももが露になっていたりと、露出しまくっている。

これで防御機能が本当に成立しているのかと言うと――答えはイエスだ。

『情報処理体（オプション）』は、特殊な情報パルスを利用して超人的な機動性を得たり、仲間との通信を図ったりするためだけの媒体ではない。

ネルフィーユ国の首都『理想郷（マリアリア）』に展開している不可視のシールド『情報結界（アクセスフィールド）』。

あのバリケードシステムが適用されたのは、実のところ『情報処理体（オプション）』の方が先なのだ。

装甲機能として『情報処理体（オプション）』の周囲に働く魔法のような障壁技術を応用し、後から『理想郷（マリアリア）』の外壁の防波堤として情報の結界を採用したのである。

結果、『情報処理体（オプション）』内部のＳＯＩカードから発信する不可視の防御装甲『情報結界（アクセスフィールド）』は、装備する者の体表面上に結ばれ、生身の体を外部のあらゆる物理的干渉から保護する、というわけだ。

もっとも、周囲の情報をキャッチするための攻撃性を重視するか、周囲の攻撃から内部を守る防御性を重視するかで、シールドの性質や性能も大きく変わるのだが。

そして、情報によるロジックの砦は完璧ではないというのも事実だった。

『情報結界（アクセスフィールド）』にも耐久という制限がある。

ある程度の衝撃を吸収すると崩壊してしまうのだ。

その耐久力は、アイソトープ比率のパーセンテージがそのまま反映しているので、個人差がある。

よって一概には言えないが、例えば何らかの攻撃を受け、右腕付近に展開する『情報結界（アクセスフィールド）』の耐久を失ってしまったとする。

すると、装備する者の体内に回流する特殊な情報パルスは滞る構図になっているため情報伝達が凍結し、『情報結界（アクセスフィールド）』と『情報処理体（オプション）』から付与される超人的機能が完全停止してしまうのだ（本部に帰還して適切な処置を施せば機能は復帰する）。

無論、『情報処理体（オプション）』を起動するための心臓とも表現できるＳＯＩカード自体は、通常トン単位の圧力が加わっても潰れないほど硬質さに特化している。

が、万が一『情報処理体（オプション）』が撃破されてＳＯＩカードを損なってしまった場合は、一瞬で全ての機能が消失するのはもちろんのこと――

その者のアイソトープ比率は永遠に葬られることになる。

それは〈ブラックアウト〉の一隊員がアイソトープ比率を獲得するには、最低でも『一〇年の歳月をかけなければ不可能』という事実が判明しているから言える結論だ。

ナキやレビィ、カレンの三人も幼少の頃より様々な実験や訓練を何万回と繰り返して今がある。

ＳＯＩカードのコピーやバックアップは、そのデータの繊細さゆえに再現できないのが実情だ。

その上、一度その基盤を損失してしまったら、また一〇年という月日をかけてアイソトープ比率を会得し、再び〇パーセントから数値を築き上げなければならない。

簡潔にまとめると、ＳＯＩカードとは〈ブラックアウト〉にとって生命線のようなものであり、『情報処理体（オプション）』のアビリティーを引き出す唯一無二の情報媒体なのである。

なおアイソトープ比率の引き上げには年齢、健康状態、体力の向上、精神状態などが大きく関わってくる。

常に上下する比率の固定化には、七日に一度実地する『情報進退検査（メンテナンス）』で割り出す数値を媒介にし、データ化した情報をＳＯＩカードに入力して直接更新する方法が取られている。

最高記録より下回る数値の場合は切り捨て、元の記録を維持する。

保持していた最高記録より上回った場合はアップロードし、元の記録の方を抹消する。

ゲームのデータでもセーブするような方法で更新したパーセンテージを維持することにより、常時、個人のアイソトープ比率を最善状態にしているというわけだ。

「あたしは五三・九パーセントですっ♪」

「ちっ、私は四六・二パー」

「俺は四五・七だ」

それぞれ自己申告で己が成績を吐く三人は、で、それがどうかしたの？　という顔でフランの言葉を待つ。

「えーとっ、レビィ先輩はともかく、お二人は少し心配な数値です

けど仕方ないですよね」

フランらしからぬ奥歯にものが挟まったような言い方だった。

「あのっ、実は私宛……と言うか、先輩たちに召喚指令が届いてます」

フランは油にまみれたつなぎのポケットから携帯型『情報処理体（オプション）』を取り出し、液晶画面を数回タップして操作する。

それから三人にも内容が見えるように手のひらを返して、

「もうっ、先輩たちが普段から携帯型を持ち歩かないからですよ？」

携帯型の『情報処理体（オプション）』は〈ブラックアウト〉仕様ではなく、一般にも普及している通信端末機だ。

なので、中にはＳＯＩカードも挿入されておらず、情報の結界や情報パルスの機能は搭載していない。

嫌な予感に苛まれつつナキたちは身を乗り出し、フランの携帯型『情報処理体（オプション）』の液晶画面を覗いた。

メール文だった。

差出人はクレア＝ローズ。

要約すると、そこにはこう記載されている。

『上司権限で個々の「情報処理体（オプション）」は、保管庫からすでに回収済み。即刻タールカートン家の屋上から飛びなさい』

武器の受け渡しは機内で、というフランの労わるような声がいつもならそれだけで救われる気分になるのに、今のナキには彼岸のごとく途方もなく遠いところで聞こえた。

（ああ、睡眠セール睡眠特売睡眠お肉睡眠野菜睡眠睡眠睡眠睡眠すいみん……）

それはつまり、有無も言わせぬ上司からの出動命令だったのだ。

7

pm　14：03

近年、〈世界政府連合同盟〉と反政府組織によるちょっとした小競り合いくらいならば時折思い出されたかのように勃発するものの、世界中を巻き込む大規模な戦争にまで発展することはなく、極めて冷戦に近い均衡状態がしばらく続いていた。

反政府組織とは、世界各地に息を潜めて根を張る『政府の主義や思想、政策に対して武装で反逆する犯罪集団』のことである。

組織が生まれた理由、火種を作る理由は、様々な主義、思想、戦闘分野で分岐しているように一口に『何が』とは言えない。

政府の国是により傷ついた者。

政府の暗部を暴いて公に示そうとする者。

政府の行いを浅い知識と外見のみで判断し、周囲に乗じる者。

他者の悪意が込められていることに気づかず、プロパガンダ情報だけを信じて行動する者。

そして、単に殺しがしたい者。

それぞれに理由があり、一つに収束することはない。

従って一つの思想、主義、戦闘分野を掲げた反政府組織が他の組織と手を組み、同盟を結ぶという事態は珍奇なことであった。

過去の記録でも数件と数えるほどしか例がない。

しかし逆に言えば、数件の確率でそれは起こり得るということでもある。

仮に、近い思想を持つ組織同士が接触した際、それは極めて好ましくない状況に陥る。

合併した組織がその勢いに乗って活気づき武器を取るというケースがほとんどだからだ。

そういった世界各地の反政府組織の動向を吟味し、脅威レベルがイエローからレッドに変わった組織を予め潰しておくという先手を打つべく、彼ら〈ブラックアウト〉が戦地に向かわされる事態もしばしばあった。

『理想郷（マリアリア）』から発進したマミー二号という名称の小型ジェット機は、〈ブラックアウト〉戦闘員三名と技術師を一人、それからどういう巡り合わせか無表情なメイドさんまで乗せて、海洋の遥か上空を高速で飛行していた。

ジェット機の機内は特別装飾しているわけでもなく閑散としている。

殺伐とした運転席を隔てて三列縦隊の席が三つ並び、後部には〈ブラックアウト〉の三人が戦闘で使用する武具一式が置かれていた。

「流石は国内最強の資産家だ。家の屋上にジェット機が待機してるとか俺にとっちゃファンタジーの域に達してるぜ」

「かっちょいーね♪　運転手さんもフランラの友達なの？」

「はいっ、そうですよ。何かあったらいけないからってことで、父が保険として雇ってるんです。たまに家の中で挨拶する程度の仲でしかありませんけど」

「この上ない金の無駄遣いね。もっと有効的な使い道があんでしょ。例えば私に寄付するとかさ。斡旋してみてくんない？　きっと世界平和に繋がる一番の近道よ」

「カレン様の目からヨダレが出ておりますゆえに」

「あーやだやだ。金に貪欲な女は意地が汚ェな」

「あれれ？　ナキナキも節約王だけど、ツンちゃんとは違うの？　ねぇ、どう違うの？」

「ふふっ、いみじくも貪欲という一点においては至言ですよ、レビィ先輩」

「ちょっとちょっと、私は別に金の亡者じゃないわよ？　ただ案じ

てんの。アンタの金銭感覚の狂いをね。それと、どうせ溢れんばかりのお金があんならしょうもないことに使ってないで貧しい民に恵めば、ほらね、皆ハッピーで丸く収まんじゃないの」

「具体的な金額は提示できませんが、タールカートン家は毎月貧しい地に赴いて多額の寄付金を贈呈しておりますゆえに」

小汚いお金の会話に花を咲かせているのはナキ＝エクイルド、レビィ＝ハルデンス、カレン＝ローズ、ココア＝アロイストローネ、フラン＝タールカートンの五人だ。

座席をスライドさせて円を作るように座っている（着替える暇もなくフランはつなぎの作業服のままだった）。

その五人が輪になっている中心の空間から一枚の立体映像が浮き出ていた。

機内のどこかに投影機械があるのか、液晶画面のように薄い空中投影型の映像には、金髪ポニーテールの科学者クレア＝ローズの肩から上の姿が映し出されている。

クレアの自室にあるコンピュータと接続し、ライブ中継しているのだろう。

クレアはいつものように薄い微笑みを湛えながら、五人に向かって口を開く。

『そろそろ良いかしら？　ブリーフィングに移行したいのだけれど』

そうだった、と言わんばかりにナキたちの会話が途切れる。

「その前にお姉ちゃん、文句を言わせて。何で私まで同じミッションなのよ。大体、私はお姉ちゃんの指揮系統じゃないし、任務内容のレベルもこいつらを基準に下がるだろうから、報酬も少なくなるんじゃないの？」

シートに浅く座り直しながら身も蓋もないことを零す金髪ツインテールを、ナキは侮蔑色の眼差しでチラリと一瞥し、

「（今、こいつの良いところ述べろとか言われても何一つ答えらんねェな）」

「おっと、そこのアンタ。今、明らかに私の悪口言ったでしょ」

「滅相もございません。この善良な紳士ことナキ＝エクイルドがそんなこと」
「カレン様の性格に難あり、とのことでございます」
「いいや、違うんだカレン。話せば分かる。頼むから、その『完全犯罪考案集・バイ・カレン』を閉じてくれ」
どこから取り出したのか、カレンの右手には一冊の不吉なノートが。
まさか本当に殺人ノートが実在していたとは、と戦慄するナキ。
そして、ココアは裏切り者という認識で間違いはなさそうだった。
何か恨まれるようなことでもしたのだろうか。
『うふふ、仲が良くて微笑ましいわね。あ、フラン。レビィを起こしてくれないかしら？』
性格上アンド体力上、レビィが惰眠を貪るようなことはまず有り得ない。
レビィがうつらうつら舟を漕ぎ始めている時は大抵、小難しい話を聞かされているような場面だけだ。
じっと机に座って勉学に勤しむよりも体を目一杯動かす運動タイプのレビィは、『これからつまらない話が始まる』という予感でさえ居眠りの対象となる。
苦笑いでも垢抜けて可愛らしいフランは、クレアに頼まれた通りに傍らの灰髪少女を揺すって起こす。
「はっ！　が、頑張ります！」
早速レビィは寝ぼけていた。

そんなこんなユルい雰囲気のまま始まったのが、これからナキとレビィとカレンの三人が行う討伐作戦だった。
『と、その前にあなたたちに一つ、アドバイスをしておかないといけないわ』
「アドバイス？」

椅子の肘かけに肘を置いて頬杖をつきながら、カレンは不機嫌な面持ちで訊ねた。
『あなたたちは「神様の証明」という思考法を知っているかしら？』
「はあ……まあ、一応は」
眉をひそめるだけのカレンの代わりに、脳内で日頃は掘り起こさない枠の知識を掬い上げながらナキが答えると、レビィがよく分かっていないような顔で挙手し、クレアに質問の許可を求めてから、
「何それ、食べられるの？」
真正面のカレンが真剣にズッコケていた。
「神様と聞いて食いもんに繋げるレビィの思考回路に何よりも恐怖する」
ナキはうんざりしながらも、きちんとレビィに解説を始める。
「本来なら、ある事柄を証明する際に否定的な『ない』ことを明かす手法は用いないんだ。分かるか？　否定するってのは、否定的全構成要素を洗い出して証明しなければならねェからだ」
すると、フランが子猫のような微笑みを漏らしつつ、引き継ぐように人差し指を立てて、
「あのっ、例えばですね、『今この世界に生命体Ｘがいない』ことを証明しようとしたら、この世界を隅々まで調べ上げて、その生命体Ｘがいないことを証明しなければならないんです。でも、その調査は限りなく不可能ですよね」
「にゃんで？」
「はいっ、生命体Ｘがいないことを証明するには、この世界を隈なく探し回らなくちゃいけないですよね？　でも、その調査の間にも生命体Ｘはどこかに移動しているのかもしれないし、どこかで出現しているのかもしれないじゃないですか。人の目の届かないところで、ね？」
だから、それは証明する方法としては不毛だと言える。
逆に『今この世界に生命体Ｘがいる』という肯定的証明は、その要素一つでも提示することができれば証明完了となる。

前者の例は、絶対的に世界中を調査しなければならないが、後者の定立は人間が一人でも生命体Xに出会ってしまえば、世界中を渡り歩く必要もなくなるというわけだ。

ふむふむ、とレビィが珍しく頭を回転させる話に耳を傾けていたが、後頭部の周辺からプスプスと機械がオーバーヒートするような音が聞こえる。

「でも、それがアドバイスってどういうこと？　意味分かんないわよ、お姉ちゃん」

口を尖らせ、姉に不満の言葉を漏らす妹君。

けれど、それにはナキも同意見だ。

『神様の証明』の解釈は復習できた。

しかし、それがこれから行う討伐作戦と、どう関係があるのか結びつかない。

『語弊があったかもしれないわね。これはアドバイスにもなってないわ。ただ、心構えとでも言えばいいのかしら』

言葉をお茶に濁してはっきりとしない姉の返答にカレンは顔をしかめ、しかしそれ以上追及しても無駄だと悟り、渋々と口を閉ざした。

『それじゃあ、話を最初に戻すわね。今回の「試験」内容を通達します』

ピッ、と立体映像の右端に一つのアイコンが生じる。

クレアがそのアイコンにカーソルを当ててクリックすると、画面はどこかの航空写真に切り替わった。

平地ばかりが続く何もない土地の拡大図だ。

戦争の残滓――廃止（ウェイストランド）された街。

その地図を北上するように指でスクロールさせると、一ヶ所だけ不自然にも無傷で残っている建物を発見した。

周囲の構築物は跡かたもなく消失しているのにも拘わらず、その建物だけは何故か被害らしい被害を受けた様子がない。

『ナキ＝エクイルド、レビィ＝ハルデンス、カレン＝ローズ、計三

名の討伐作戦はネルフィーユ国極東にアジトを置く反政府組織〈ラビット・ランス〉の討伐ミッションとなります』

言葉と同時、その建物の横に吹き出しで〈ラビット・ランス〉の詳細情報が表示された。

無傷具合が逆に非日常を語っている建物が、どうもピンポイントでそうらしい。

前述の通り反政府組織という集団は、思想、主義、戦闘分野が一つの枠組みに納まることがないため、滅多なことでは手を取り合わない。

人間は些細な思想や主義の擦れ違いで道を違える性の生き物だ。

それは悪党と呼ばれる反政府組織に限ってのことではない。

いわゆる『派閥』というものが人間社会には生じる。

味方同士であってもそうなのだから、全く性質の異なる組織が統合することは十中八九起こり得ないという見解は、およそ正しい意見だ。

しかしながら、いつの時代にも『異例』は存在するものである。

今、世界には各国の政府連合と拮抗するだけの勢力を持つ三つの組織が混在していた。

『理想郷（マリアリア）』のように情報科学技術に特化した機械的武力を行使する〈レイジス・コア〉。

世界各地に研究所を設備し、実験によって産出した生物兵器を用いる〈ゲリアル〉。

そして、三大組織の中で最も小組織を傘下に従えている〈マター〉。

『〈ラビット・ランス〉の勢力は約八〇人弱。典型的な小規模組織よ。あなたたちの実力なら十分に殲滅できるレベルでしょうけれど』

組織同士の結合は特異な事例だが、『対等な立場からの同盟』ではなく『上下関係のある同盟』ならばどうだろう。

三つの巨大組織は世界各地の小規模な勢力たちの上に鎮座している。

その力の元に小さな組織が傘下として入る。
事実、それが近年の反政府組織の動向だ。
特に〈レイジス・コア〉の傘下加入率は著しく、その追い風もあるのか近時の彼らは活発的だ。
『〈ラビット・ランス〉は〈レイジス・コア〉の傘下組織よ。どんな戦闘分野かはもう目に見えているわよね？』
〈レイジス・コア〉と〈ラビット・ランス〉の間には『上下関係のある同盟』が結ばれている。
よって子も親の思想、主義、戦闘分野を少なからず取り入れているはずだ。
〈レイジス・コア〉の傘下に入っている時点で、〈ラビット・ランス〉が似たような性質を備えていることを暗に証明しているのだから。
親だって全く正反対の組織を子にするはずがない。
「情報科学を駆使した機械的武力、ですか？」
ナキが恐る恐るといった感じに答える。
『ご名答。八〇というのは半数が人間、もう半数がロボットという内訳だけれど。人間側も体の一部を機械化（インストール）している者もいるわ。〈マター〉や〈ゲリアル〉に比べて私たち側に最も近い分野を得意とする〈レイジス・コア〉の傘下と直接対決というわけね』
ゴクリ、とナキの喉が鳴った。
相手の戦闘分野を聞かされての反応だった。
正面で堂々構えている、いや、むしろ退屈そうな顔で口をへの字に曲げているカレンとは正反対の表情だろう。
ナキとカレンの間には〈ブラックアウト〉としての経験差が一年ほどある。
一つ上の会期生であるカレンは一つ年下のナキやレビィよりも一年早く『予備生（一五歳になるまで講師から様々な訓練を受ける〈ブラックアウト〉候補生のこと）』を卒業し、戦場を駆け巡っていたのだ。面構えも貫禄があり、そこには一年という確かな隔たりが

垣間見える。
「（ふむ、年の功ってやつか）」
「カレン様――」
「問題ないわ、ココア。聞こえてたから」
「いだだだだだだだだだだだ！！　コブラツイスト！？　いや、年の功は褒め言葉だろ！？」
　ゴキバキと良い音を骨で感じながら、ナキは立体映像の向こう側にいるクレアに瞳で助けを求めた。
『一七歳の女の子に対してそれはないと思うけれど……』
　結果的にサブミッションの脅威を身を以て知ったナキは、ココアが自分に何らかの私怨を抱いていることに間違いはないと内心で結論を出しつつ、
「ぐっ……そ、それにしても相手は八〇人か。これまで相手にしたのは最高で五〇人だったよな？　しかも銃や防弾チョッキを装備してるだけのテンプレ武装集団。三大組織に所属してもない独立の小組織ばっかりだった。こりゃマジでフル装備するしかねェか」
　シートに座り直し、腕を組みながら脳内で自身の装備品を想像セレクトする。
「ん、何かナキナキらしくないよ？　いつもなら気合いで何でも乗り切ろうとするのに！」
「馬鹿言っちゃいけねェぜ、レビィ。それじゃあ、まるで俺の脳みそが筋肉でできてるみてェじゃねェか」
　ナキは不服そうにレビィを見返してから、
「しかし、まあ何だ。誰が相手だろうと俺たちのコンビネーションは看破できねェだろうけどな。なにせ、俺たちリズム隊。ベーシスト&ドラマーだ。面白いじゃねェか、三対八〇。軽くこなしてやろうぜ」
「ハイタッチ♪」
　パン！　と景気の良い音が機内に咲く。
　私服姿の三人がそれぞれ〈ブラックアウト〉の制服である黒スー

ツに着替えるため、機内後部の空いたスペースで各自装備の転換を行ったのは、間もなくだ。

∞　∞　∞

タールカートン家の自家用ジェット機マミー二号が、その地に到着したのは一時間後だった。

首都『理想郷（マリアリア）』は海に面していない都市であるため、外部への移動方法はおのずと陸路と空路の二手に別れる。

しかし、知っての通り『理想郷（マリアリア）』は外部からの不正な侵入を未然に防ぐための情報科学的セキュリティ網『情報結界（アクセスフィールド）』を敷いている。

核ミサイルさえ反射するらしい透明な防壁は、時として内側にいる者にも不都合を呼び寄せていた。

出るにしても入るにしても手続きやら何やら色々と手を回さなければならないのだ。

輸出入などに陸路を経由する時は、必ず『情報結界（アクセスフィールド）』を巡らすための装置が常設してある街の外壁周辺を通らなければならないし、そこで門番をする役人に申請した通行許可証を提示すれば『例外的に結界を消去している道』へ促され、難なくやり過ごせるのだが、空路はそうもいかない。

陸路の手続きよりもその手順が面倒なのだ。

上空は地上のように自由が効かない。

意図的に『情報結界（アクセスフィールド）』を消去するという技術が、まだ空で実現できていないので一時的に航空機などが『理想郷（マリアリア）』の上空を通過する瞬間のみ、都市を囲む不可視の障壁は完全にリリースされる。

ついては、直上より核ミサイルの群れが嵐のように降り注ごうと絶対的に都市を守る魔法のような砦はその一瞬だけ隙間が生じ、空白の名の下に消滅してしまうということ。

刹那的とは言え、そんなリスクを背負ってまで『情報結界（アクセスフィールド）』をキャンセルするのは国中の様々な機関に申請書を提出したりしなけれ

ばならないので、やたらと時間がかかり不便だ。
という背景もあって『理想郷（マリアリア）』は輸出入を九割以上も陸路に頼っている。
陸路では距離的な問題から色々と制限がついてしまうが、この首都は科学の力で自給自足もきちんと行えているため、実のところは何の問題もなかった。
そんなわけで『空路の使用は緊急時のみ』というのを基本方針にしている今日この頃ではあったが、それでも国民の事情とやらを考慮した上で空路を利用し、彼ら〈ブラックアウト〉を廃止（ウェイストランド）された街に投下したのは、やはりそれ相応の価値があるのだろう。
「しっかし、ここも酷ェ有様だな。世界中から核ミサイルの集中砲火を受けた街みてェだ」
青髪の少年は降り立った地の土を踏みしめ、見たままの感想を述べた。
降り立った、と一口に言っても敵のアジトを目前にしてマミー二号がけたたましく着陸してくれたわけではない。
マミー二号から投下されたのは、黒く細長いカプセル状のコックピットだった。
フラン＝タールカートン自主作成のブラックアウト降下作戦用カプセルである。
地上に落とされた三つの黒いカプセルは、それぞれナキ＝エクイルド、レビィ＝ハルデンス、カレン＝ローズの三人を搭載したまま、自由落下中もバランスを崩すことなく、やや傾いだ格好で縦に地面へ突き刺さった。
大地に衝突する寸前に、衝撃緩和システムとホバークラフト機能が作動するので搭乗者に負担は伝わらない仕組みになっている。
プシューッ、と空気の抜ける音が聞こえた。
ナキが乗っていたカプセルの近くに着陸した、もう二つのカプセル。
その黒い側面のハッチが開き、コックピット席からレビィとカレ

ンが乗り出して地面に足をつけた。
途端、三つの降下作戦用カプセルは無音のまま熱を当てられたように溶解を始め、どろどろと黒い液体と化して蒸発した。
『理想郷（マリアリア）』の技術を他組織に回収されないようにするための自動分解処理だ。
ナキたちが乗っていたカプセルはものの数十秒で跡形もなく霧散し、痕跡は着地時に穿たれた地面のクレーターのみになった。
足の裏にザラついた砂の感触を感じながらナキは首を巡らす。
彼方の地平線まで一望できてしまうほどの平地が目に映る。
そこは昔ここに街がありましたと言われなければ分からないくらいの平らだった。
微風で砂埃が舞い上がる灰色の風景には、建物の残骸すら転がっていない。
ただし、そんな中に一つだけ不自然過ぎるほど戦争の痕跡を残さないで佇む建物があった。
味も素っ気もない独房じみた一階建ての構築物の周囲には、バリケードのつもりなのか金網のフェンスが張り込まれている。
お世辞にも真新しいとは言えない。
建物自体その痛み具合は、単なる劣化によるものだ。
時間と共に老朽化した自然現象そのものである。
だがそれゆえに、その建物と灰色の情景が歪な不協和音を奏でていた。
本来ならば戦争の被害によって蒸発していなければならなかったものが、何の因果で今も生き残っているというのだろうか。
――元原子力研究所。
クレア＝ローズが表示した立体映像の情報データベース内に、そんな言葉が載っていた。
読み進めてみると、この建物の本質は『地下に拡張する研究施設』ということが判明した。
そのコンクリートの塊は内部への入り口に過ぎないわけだ。

「んじゃ、行きましょうか」
フン、とぶっきら棒に鼻を鳴らすカレン。

〈ブラックアウト〉の装備一式は基本的に支給制度である。
銃器や剣類など幅広く揃えてあり、自分に合った得物を各々好きなように手に取る。
人によっては親交を深めた技術者にオーダーメイドでオリジナルの武器を製作してもらう、なんてこともアリだ。
ナキのメインとなる装備品はそのオーダーメイド――大剣『クトネシリカ』だった。
両刃の直刀。
凝った意匠はなく、刀身からグリップまでスーツに調合するように漆黒に染まっている。
もはや鞘が邪魔なので専用ホルダーによって背中に装備するタイプだ。
ナキの身長とほぼ同じ長さと、常識外れの幅と厚みの刀身。
斬る、というより叩きつけるための武器みたいだった。
けた外れに超重量な大剣を装備の中に組み込めるのは、彼ら〈ブラックアウト〉の身体能力を補助する『情報処理体（オプション）』の補助があってこそだろう。
生身のままでは両手で持ち上げることすら苦労する一本だ。
純粋純白少女のレビィはと言うと、支給品の持ち込みはせいぜい弾倉くらいで、大抵は自前の赤褐色のハンドガン『ガルガラ』、群青色のハンドガン『リボルバ』なる二丁を使用している。
その二丁は共に拳銃マニアには喉に留まらず穴という穴から手が出るほど欲しい、世界に二つとない名銃らしく、『マスター六二式ロールアップ』系よりも型は古くて科学的な情報干渉も受けていない旧型なのだが、レビィが扱うと何故か現代の拳銃よりスペック的に数段レベルが高くなるのが肝だった。

レビィの戦闘スタイルはその伝説的二丁を駆使した中距離および近距離型ではあるが、遠距離も十二分にカバー可能な機動性がレビィにも銃の方にも備わっているので、けっこうオールマイティな場面での活躍を期待できる。

カレンの装備もこれまた極端で接近戦から中距離、遠距離全てに特化対応できるよう黒服の内ポケットにコンパクトナイフや手榴弾や閃光弾、右腰に刀、左腰ハンドガンをぶら下げ、右手にサブマシンガン、左手にショットガンを持ち、背中にスナイパーライフルと携帯式バズーカを担ぐ、というあらゆる戦闘シーンを想定した武器を体中に纏っていて、かなり重々しい出で立ちになっている（ここにも彼女の傲慢な性格が見え隠れしている）。

こうして三人の戦闘スタイルを総合してみると、それぞれ個性的ではあるが、作戦ならばいくらでも立てようがありそうだった。

「多分もう気づかれてるよね♪」

数百メートル先、少しだけ傾斜のある位置で佇む〈ラビット・ランス〉アジトの入り口を眺めながら、レビィが言葉を躍らせるような口調でそう言った。

「だろうな。どうする？　作戦とかあんのか？」

ナキは適当に相槌を打ち、傍らの重装備少女に訊ねてみる。

「は？　作戦？　んなもんあるわけないでしょ」

金髪のツインテールをサラリと後ろに払うカレンは、この上ない真顔で先輩の〈ブラックアウト〉にあるまじき発言をする。

「問答無用、正面突破に決まってんでしょうが」

そのまま特攻隊よろしく走り出したカレンを半眼の動きだけで追いかけつつ、ナキは呆れるように右手を額に当てた。

深い溜息が生気と連なり空に溶けて雲散霧消する。

「最悪だ」

「良いじゃん、ナキナキの好きな正々堂々だよ！　行こっ♪」

レビィが嬉しそうな表情をしながら散歩にでも誘うかのような調子で腕を引っ張るので、ナキも仕方なく足を前へ出す。

周囲は建物の粉微塵が堆積する砂ばかりで遮蔽物などない平らな土地だ。
やや下るような緩い斜面こそあるものの、視界を妨げる物体は皆無。
弾けるような青空の彼方で後半戦を繰り広げる太陽光を尻目に、三人は目的地まで滞りなく疾駆する。
残り、およそ三〇〇メートル。
カレンの後に続いて走るナキがその背に向かって叫ぶ。
「おい、カレン！　気をつけねェとそろそろトラップとか何かが――」
そこまで言って、ナキの言葉は唐突に閉ざされた。
バゴッ、という派手な爆音が聴覚を圧迫したからだ。
さらにナキとレビィの前方数十メートル先で同様の衝撃が断続して炸裂した。
人間の柔な四肢など容易くもぎ取り、体の破片がブーメランのように舞うような火力だった。
圧倒的な威力を弾き出した爆風までもが、後方にいた二人を容赦なく襲う。
ナキは足を止め、顔の前で腕をクロスしつつ硝煙と砂埃で視界の悪くなった前方を凝視した。
「カレン！！」
灰色のカーテンが視界を覆う先にナキが応答を求める。
反応はすぐにあった――舌打ちという形で。
「人の温度を感知した方向に一斉に爆薬が破裂する、人体温度感知型高性能対人地雷、ね。……良いの使ってんじゃん」
ブツブツと考察と悪態をついている声が耳に届き、ナキはホッと安堵する。
視線の先には無傷のまま突っ立っているツインテールの歪んだシルエットがあった。
やがて地雷の爆破により宙を舞った砂塵が地に落ち、曇っていた

視界は徐々に晴れていく。
カレンの姿が鮮明になる。
（あーあー、あれ……けっこうキレてるな）
冷静沈着。
あれほど行動ががさつなカレンが恐ろしいくらい落ち着き払っ――
「ったく。こんな高価な地雷なんか埋めちゃって、しかも私に感知させてから盛大に大爆発？　大爆笑ね、それは。片腹痛いわ」
――っている風に見えるのは、実はその闘志をギラギラと燃やし、本気と書いてマジでブチ切れている唯一無二の証拠である。
カレンの真後ろからは、主に殺気で構成したまがまがしいオーラが湯気のように噴出していた。
（あれ、おかしいな。俺はいつ他人のオーラなんてもんが視認できるオカルト的能力を会得したんだ？）
ナキがそんな錯覚に捕らわれて両目をこすっていると、
「あれま、ツンちゃんの武器壊れちゃったの？」
カレンの元に歩み寄りながらレビィが意外そうな声を上げた。
「支給品だから耐性ないってのも分かるし、金払ってるわけじゃないから文句を言うつもりなんてなかったけど、いくらなんでも軟弱過ぎよね」
肩をすくめ、カレンは装備品をアクセサリーのようにジャラジャラと外して地面に投げ捨てた。
爆心にいたカレンの武器は全て半壊してしまったのだ。
生き残っている品と言えば左手首の『情報処理体（オプション）』と耐久性に優れているブラックスーツ、負の闘志が漲るその拳くらいである。
『情報結界（アクセスフィールド）』の恩恵は体表面上、つまり皮膚の数ミリ上で展開しているため、スーツや支給武器はダメージが直撃するのだ。
それでも、今のカレンを見て脳裏を過る言葉は『凶』の一文字なのだが。
「それにしてもアイツら、よっぽどこの拳でフルボッコにされたいみたいね」

先手を取られたのがよほど悔しかったのだろう、すっかりダークサイドへと堕ちてしまったカレンは満面の黒い笑みを零しながら言う。

「なら、さっさと期待に応えてあげないとね。私を怒らせたらそれだけじゃ済まないことを教えてやるわよ」

8

pm　15：19

カレン＝ローズは怒りに身を任せ、再び駆け出した。
一帯の地雷は先程の爆破によってほとんど誘爆したようで二次的な爆発は起きなかった。
従って、心置きなく〈ラビット・ランス〉のアジト入り口まで突っ切る。
体当たりで金網フェンスをブチ破り、内側に侵入したところで滑るように足を止める。
と、足の裏の感触が硬質なものに変じた。
灰の山から打ちっぱなしのコンクリートになったのだ。
フェンスを境界のようにしてアジト敷地内だけは適度に整備されているが、見た目は簡素なものだった。
取ってつけたような独房じみた建物が一つ中央に配置してあるだけで他に装飾品もない。
見渡す限りでは界隈を取り囲む味気ない金網フェンスだけだ。
「ねぇ、何で内側には敵兵もトラップも置いてないんだと思う？」
周囲をグルリと観察し、孤立無援で屹立する構築物を穴が空きそうなくらい強硬な眼光で睨み回しながら、カレンは後方の二人に訊ねてみる。
しかし、なぜか返事がなかった。
足音は背後まで迫っていたのは確かである。
不審に思ったカレンは、あわやその足音が一つだけだと気がついて――
ほぼ零距離だった。
カレンの動体視力をもってしても、その攻撃から自身を回避させ

ることは叶わなかった。
『白くて硬い拳』がカレンの右胸に突き刺さる。
ガゴッと個体同士が奏で合う鈍い音が耳に届き、カレンの体はそのままアスファルトを擦ることなく、建物の横っ腹に激突した。
背中に衝撃を感じ、僅かに呼吸が乱れて口から吸い損ねた気体が乱暴に漏れる。
いくら体表面上に『情報結界（アクセスフィールド）』を張っているとは言え、体にかかる負担やダメージそのものを完全に無効化できるわけではないのだ。
ある程度の中和は可能でも相手の力の具合によっては痛みが体に浸透してしまう。
「やってくれんじゃないの……」
立ち上がり、顔を上げ、口元を拭い、カレンは己に奇襲をかけてきた者を視界に入れる。
そこにあの二人の姿はなく、代わりに立っていたのは『白い人型の機械』だった。
「たくっ……あのバカ二人は何やってんのよ」
カレンは心底呆れた様子で素早く『情報処理体（オプション）』の液晶画面を操作する。
スーツの左手首にベルトで固定ロックしている『情報処理体（オプション）』には、『情報結界（アクセスフィールド）』の耐久力を確認する機能の他にも、『情報操作（ドライブシステム）』を起動する作用や、登録した仲間の生命維持反応も調べる相互情報共有機能も備わっているのだ。
「フン、どういう方法で二人を消したのかは知んないけど、死んではないようね」
二秒にも満たない時間でそれを視認したカレンは、改めて白い敵の形状に視線を這わせる。
涙滴型の白い頭。
ほっそりとした華奢な胴体に四肢の一つ一つを鈍器のようなもので形成し、鋼らしきスプリングで繋いでいる。
真っ白なボディにゴツゴツした印象はなく、むしろそれとは正反

対にスマートで体の各パーツは滑らかな表面を描いている。
頭部もまるで殻を剥いたゆで卵のように白く、太陽光を照り返していた。
情報機械製人型傀儡の中では有名な雑用ロボット、R機だった。
『Rシリーズ』は『理想郷（マリアリア）』のメインストリートでも日常的に歩き回っているほど普及した傀儡だ。
特に体に不自由のある者や老人、妊婦の介護補助などの目的で製造されている。
よって、戦闘モードなど備えているわけがない。
（てことは、通常の機体を弄くって別口にさせたもんね。なまじ人間ばかり相手にしてきたから少しやりにくいかもしんない）
「ま、それがどうしたって感じなんだけどね」
眉根を寄せ、語らぬ白い機械に向かって牽制するように吐き捨てる。
すると、R機はまるでその言葉を待っていたかのように勢い良く前方へ踏み込んだ。
足元に小さなクレーターを作るほどの勢いをつけ、プログラムしてある通りの綺麗なフォームでカレンに向かい疾駆する。
軌道は直線的。
距離は一〇メートルもない。
双方が交差するのはあっと言う間だった。
「そうね、アンタたちに良いこと教えてあげるわ」
だが、カレンは構えない。
まるでそのまま殴り飛ばしてもらっても構わないとでも言い張るかのように、毅然たる態度を覆さないまま微動だにしない。
「あのバカ二人組をわざと内部に取り込んだとしたんなら、そっちも早めに分裂させるべきよ」
そして、口元に薄い、薄い笑みを浮かべたまま、
「アイツらの『コンビネーション』は、この私でも看破できないほど優れたもんなんだからね」

突然、地上の偵察用R機から通信が途絶えた。
あの機体に内蔵しているカメラから送信される映像に砂嵐が入ったのだ。
寸前までは金髪をツインテールに結ったブラックアウトの少女が、一台のモニタ画面に映っていたのだが、どうやらその偵察用機体はやられてしまったらしい。
〈ラビット・ランス〉のヘッド、ガルマン＝ヒルムは部屋の壁に直接埋め込んでいる何十台もの旧式モニター画面に血走った眼差しを右往左往させ、軽く舌打ちした。
黒髪のドレッドヘアー。
ガサガサに荒れた褐色の肌。
ドロドロと狂気が渦巻く瞳。
筋肉質な体を保護する黒いタンクトップと銀色の甲冑。
腰からぶら下がる何十丁もの拳銃。
ガルマンが苛立たしげに足踏みしている空間は〈ラビット・ランス〉本拠地の地下、最奥の九階である。
いかにも人体と環境に悪そうな暑苦しい空気が漂流しているその部屋には、壁際で直立する数人の武装兵士とモニター画面の前でせわしなくキーボードをタイピングしているオペレーターの三人がいた。
「おい、地上の犬の比率はどうなってやがる」
白熱灯の無機質な光に照らされる下、ガルマンが罵詈雑言でも浴びせるかのような口調で急かすと、せせこましくキー操作を行っていた三人のオペレーターは、モニター画面を凝視しつつ慎重に答えた。
「三秒後、アクセスコードによるフィルター解析が終わります」
「――結果、出ました」
「地上のブラックアウト、アイソトープ比率四六・二パーセントで

す」

嘲笑。

優秀なオペレーターたちの言葉を受け、ガルマンの表情が醜く綻んだ。

それは心の底から他人を蹴落とすような外道の笑みだった。

「なんだぁ？　どんな敏腕の政府犬どもが嗅ぎつけてきやがったのかと思いきや、たかだか六〇にも満たねぇヒヨッコちゃんかよ。それでたったの三人で突入してくるたぁ、いよいよご苦労様だな」

ガルマンの連ねた汚い言葉は正論だった。

〈ブラックアウト〉の平均アイソトープ比率は六〇・一パーセントである。

ところが、あの金髪ツインテールの少女の比率は普遍的数字よりかなり下回り、化け物クラスやワールドクラスと呼ばれる者たちの成績にはとことん劣る。

しかし、確かにそういう一種の見方、考え方もできることにはできるのだが、ガルマンは一つだけ勘違いをしていた。

もちろんアイソトープ比率とは『情報処理体（オプション）』の性能を示す値であり、比例してパーセンテージを増長すればするほど個人の機動力が優れていくことに相違はない。

現に〈ブラックアウト〉は比率を成績の一つとして考慮している。

だが、それは発想を転換すると、アイソトープ比率とはどこまで行っても『性能を簡易的に数値化しただけのデータ』に過ぎないということにはならないだろうか。

つまり、

「比率のパーセンテージは、『情報処理体（オプション）』のパルス機能をどれだけ引き上げているかという目安だ。個人が本来持っている五感の素質や動体視力、思考速度、戦闘スキルの面をデータに表現しているわけではない」

カチン、という金属の触れ合うような音がした。

振り返ると、そこには安っぽいソファに座りながら悠々とタバコ

を吸っている青年の姿があった。
年齢は二〇代前半頃。
琥珀色の髪と、右耳から肩まで垂らした銀色の鎖の先端に太陽がモチーフになっているアクセサリーを取りつけてピアスにしている。
細身の赤いスーツと底の磨り減ったボロボロの革靴は、彼の容姿とよく同化していた。
青年はガルマンより一〇歳以上も歳が下回るが、明らかに上からの態度で接していた。
それでもガルマンは表面上は気にする素振りも見せず、白い煙を黙々と吐く青年に向かって板についていない敬語で話す。
「なに、問題ありゃしませんよ。こっちにはそちらが用意して下さったR機が四〇も待機してんですから」
〈ラビット・ランス〉のヘッドは勝ち誇ったように歪みまくった笑みを漲らせながら、
「元々の戦闘員を合わせて八〇もいるんです。たった三人の雑魚に何ができるんだってわけですよ。それに――」
遮るように、ガルマンの背後で再びモニタ画面に異変が生じた。
「ナンバーDDX九一〇から九一三までのR号機から通信の強制遮断！　自律制御は稼働していません！」
「デルタ班からの応答も同時に途絶えました！」
「アルファ班より援護要請！！」
モニタ上の唐突な事態の悪化に取り乱し、ガルマンの指示を仰ぐオペレーターたち。
そして、カチンという金属音。
どうやら手元のジッポーを開閉するのがソファに座る青年の癖らしい。
「さっきのブラックアウトの助言、きちんと聞いておくべきだったかもしれないな」
薄ら笑いを浮かべる青年のそれは、ガルマンのように誰に対する侮蔑でも嘲笑でもなかった。

まるで無関係の位置からこの状況を眺める傍観者のように、希薄。
「おい、動揺してんじゃねぇよ！　さっさとR機を地下五階に集結させろ！　ベータ、ガンマはそれぞれ四階、五階に配置しろ！　機械のサポートに回せ！」
怒鳴り散らすようにガルマンが命令を飛ばすと、
「踊らされているな、たかだか六〇にも満たないヒヨッコ三人組に」
青年は天井に向かって煙を吐きつつジッポーを軽快に鳴らして、
「分かっているだろう？　お前たちの負けが何を意味しているのか」
焦燥。
焦りが芽生えた。
冷ややかなその口調にガルマンは何も言い返すことができなかった。
青年の言葉の表層に纏わりつく真意を良く理解できていたからこそ。
（クソが……）
次々と砂嵐へチャンネルが切り替わるモニター画面の内、まだ通信システムが生きているものを黙視する。
淡い光を放射させるそこには、黒服を着る二人の少年と少女が映り込んでいた。
「ヘッドのお前が揺らいでいたら手足の奴らは無駄死にするだけだ。生き残りたければ腐敗したその頭を必死に働かせてみせろ」
横から水をさされたのが気に障ったのだろう、ガルマンは青年の言葉を無視して、
「……R機を全機駆動させろ。七階で待機中のも全部だ」
オペレーターだけに聞こえるよう小声でそう告げる。
実に冷静な声色だった。
「し、しかし……七階で待機中のR機は最後の砦として……」
煮え切らない様子のオペレーターが躊躇して目を泳がせている。
ガルマンはその頭を引っ掴み、より絞った声で言う。
「良いか？　どうせ失敗しちまえば俺たちはオシマイなんだよ。こ

の戦に勝てなけりゃ待ってんのは死あるのみだ。〈ブラックアウト〉に捕まって、その後の人生を牢獄の中で過ごす、なんて甘い道はもう残されてねぇ」

後方のソファで新しいタバコに火をつけ、紫煙をくゆらせている青年を一瞥した。

「せっかく〈レイジス・コア〉っつーでかい組織から『正式な傘下』として認められる時がきたんだよ。分かるだろ？　生か死か」

ガルマンの声は、

「は、はい……」

生死の覚悟を決めた者のように、

「さあ、てめぇはどっちを選ぶよ？」

微弱に震えていた。

ネルフィーユ国極東に位置する〈ラビット・ランス〉のアジトの真髄は地下にあり、包丁で切り刻んだように細い迷路化した構造となっていた。

地下一階から九階まである通路の群れは侵入者を精神的に追い詰めるためのものだろう、知らない国の治安の悪い土地で夜中に一人迷子になってしまうような境遇にさせる。

いつどこから敵襲があるかも分からないし、どんなトラップが仕掛けてあるのかも予測できない。

おまけに内部は暗くて足場も悪い。

敵は暗視スコープを装備しているのだろう。

人のか弱い精神を磨り減らすには十分な設備だ。

これほど危険な要素満載な場所では完全に地の利は組織側にある……はずなのだが、

「きゃっほーい♪」

その二人、ナキ＝エクイルドとレビィ＝ハルデンスは、そういった組織側の『小細工』を一切シカトして自由気ままに前進していた。

「ぐわぁ！！　な、何だ！？」
「クソッ、こいつら真っ向から壁をブッ壊して下に向かうつもりだぞ！！　誰か止めろ！！」「力技かよ！！　冗談じゃねぇ、無茶苦茶だ！！」
「そ、そっち行ったぞ、おい！！　止めろって！！」
「し、慎重という言葉を知らんのかこいつらは！！」
露骨に狼狽する敵兵たちを見て分かる通り、地下五階は完全に二人のペースに巻き込まれて揉みくちゃになっていた。
影に身を潜ませて待ち構えていた伏兵たちも、ナキとレビィの身も蓋もない突破方法に面を食らっている。
しかし、それは自業自得だろう。
通路の幅が狭いことや視界が鮮明でないことから奇襲の攻略にばかりに賭けていた敵兵は思うように反撃を繰り出せずにいる。
唯一、組織側の人間たちにとって良心的なのが、二人が床を破壊せずにきちんと階段を捜している辺りだった。
「まあ確かに、隠密に、なんて俺たちのガラじゃねェしな！」
「にゃは♪　ロッカーだもんね！」
バキバキバッコーン、と手当たり次第タックルで壁を突貫し、進み行くナキたち。
途中、どさくさに紛れて白い機体のような物体も何機か吹き飛ばしてしまった気がするが、もう二人の心に留まることはない。
「おっと、何か広いとこに出たな」
「んー、何の部屋だろ？」
そうやって破天荒的手段で地下へ地下へと下っていた二人は、広く殺伐とした空間に潜り込んだ。
天井までの高さは五メートルほどで、幅、奥行きは共に八〇メートルはあるフロア。
奇襲をかけるために設けた場所ではないのか天井には電灯が取りつけられていて、視界はまずまず良好だった。
おそらく今までの階層は、ここと同じスペースの部屋に薄い壁を

差し込んで迷路に仕立て上げていたのだろう。
　数えるにナキたちは現在地下六階にいるはずなのだが、これより下の階層もこういう空間の広がりになっているのだろうか。
　情報が正しければ地下九階が最奥なので後三階ほど下れるはずだ。
（だと楽で良いよな。実は隠しステージがありましたとか、そんなイベント求めてねェし）
　ナキが楽観的思考を脳内で転がしていると――
　バゴンッ、という嫌に耳に馴染んだ音が室内に木霊した。
　奇しくも、それは先程まで自分たちが拳などで奏でていた壁を打ち抜く音に酷似していた。
　しかも一度ではない。
　何度も、何度も全方位から叩かれている。
「わーわー、R機がいっぱいだ♪」
　天井から、床から、横の壁から、コンクリートの壁を力任せに破って室内に押し寄せてくる白い軍勢を視界の先に認めた時、レビィが新作の玩具でも見つけたかのような好奇心に満ちた調子で呟いた。
「上下を無視するとは邪道な。許せん。覇道には覇道なりのルールがあるだろうに」
　己の拳で叩き抜いた穴から続々と集結するR機をいけ好かなそうに睨むナキは、先程まで自分たちが前後左右を無視していたことなど過ぎ去った過去として、とっとと棚上げしてしまうおざなり精神を炸裂させた。
「でもでも、こんなにいっぱいR機が出てきたってことは、やっぱり〈ラビット・ランス〉と〈レイジス・コア〉の間にはパイプラインがあったって証拠だね♪」
「ああ、そうだな。その裏づけが取れたことは、まあどうでも良い。けどよ……」
「うん♪　数、多いね！」
　ワラワラといたる箇所から虫のように這い出てくるR機は、ざっと見渡しても三〇機はいる。

「なんつーかよ、戦闘モードなんか備えてねェ家庭用傀儡のくせに、ちっとばかし骨が折れそうじゃねェか。ジャミングでカレンとも連絡が取れねェし、心配だ。さっさと終わらせようぜ」

ナキは専用のホルダーで背負う大剣『クトネシリカ』のグリップに右手を回し、超重量の両刃を静かに抜き取った。

刃からグリップの末端まで光さえ反射しない黒一色に染まる直刀。その切っ先が、ナキの片腕一本で重たげに天井を仰ぐ。

右足は半歩前へ。

左足を軽く後ろに引きながら爪先を外側に向けて開けば、右肩は前方に、左肩は後方に控え、自然と全身が斜めに姿勢を取る。

左腕は胸の高さまで上げて、掌底を打ち込むかのように構える。

そして大剣を握る右腕はガッツポーズさながらの形に維持し、その右拳を胸元の辺りで開く左手のひらに添える。

すると、まるで突きを放つ前のような独特の体勢に至る。

「本気でやるぞ、レビィ。――死の宣告（カウントダウン）だ」

「了解しました♪」

レビィの陽気な声が響いた、その刹那、空間そのものが滞るような錯覚に陥った。

ギチギチと歪んだ音さえ耳にできそうなほど輪郭のある、ひたすら純粋な狂気。

細くて脆い糸を切れる寸前まで強引に引き伸ばし、まるでその場の空気を凝縮するかのような緊張感。

それはナキの放つ拒絶の意思でもなければ、三〇機のR機から無神経に零れる威圧感でもない。

双方は共に、精神の垣根さえ飛び越えて周囲を際限なく凍てつかせるような器ではない。

レビィ＝ハルデンス。

それは間違いなく完全に心を閉ざした『彼女』の口より解放される死の宣告（カウントダウン）だった。

「定刻まで一〇、九、八――」

あらゆる感情を孕んだ上で色を無とした彼女の声音は、『心のスイッチ』を自ら切り替えた清音であり。

「七、六、五――」

その技巧は、同時にナキのスイッチ切り替え法でもあり。

「四、三、二――」

レビィがさらなる深い静寂、動を帯びるための意図的な手法でもあり。

その青月色の瞳に映り込む全ての敵へ伝える、死の宣告（カウントダウン）でもあった。

「「――ッ！！」」

最後の刻は言及されず、二人の顔からは表情が消えた。

破壊だけを求める凶刃にさえ見える少年と少女。

そこに感情は生まれない。

だからこそ、今なら二人は人だって殺せる。

「ッ！！」

ナキはR機の群れを掻き分けるようにして、その中心へ跳び込む。

神経集中により発動する『情報処理体（オプション）』の特殊機能『情報制限加速（リミッタードライブ）』を右腕に作動し、漆黒の刃を横薙ぎに振るった。

本来ならば『クトネシリカ』が大剣である以上、ナキは両手と全身の連携で刀身をフルスイングするような、大きなモーションをとる必要がある。

だが、彼の装備する〈ブラックアウト〉の『情報処理体（オプション）』が、漆黒の大剣をタクトのように振るう挙動を可能とした。

床を蹴り、腰を捻り、音さえ置き去りにした渾身の斬撃が炸裂する。

ガギンッという高音を引き連れ、前の方に並んで構えていた白い三機が横一線に吹き飛ぶ。

大重量を利用したサイドスイングに、三機はそのまま上半身と下半身を真っ二つに裂かれ、赤や緑のコードの束を人間の腸のように垂らしながら数秒後に完全停止した。

ナキは振りかぶった大剣の重みに流されることなく、片足で踏みとどまる。
さらに返す刃で、左の視界に映った機体に突きを繰り出した。
持つ場所がグリップに限定されるがゆえに、生身の人間がこれをやれば結果は不安定な点の攻撃に終わってしまうだろう。
だが、『情報処理体（オプション）』のパルス補助が大剣のスラストを綺麗に叩き出す。
『クトネシリカ』の切っ先は、そのまま機体の白いボディにめり込み、突貫した。
そんなダイナミックな光景に隣接するように、ナキの数メートル後方では瞳の色を失ったレビィが一機のR機に詰め寄り、『ガルガラ』と『リボルバ』の引き金を躊躇いなく絞っていた。
弾丸は正確無慈悲。
吸い込まれるようにR機の外殻を突き破って、内部の心臓を貫く。
バチンッと電流が弾けるような音がして、そのR機が力なく床へ崩れ落ちた。
命中率に狂いはなく、一撃でしとめている。
無論、他のR機も目標と定めた二人に対して動いていた。
が、追いつけない。
否、攻撃の一手を決めることができない。
ナキとレビィの間には一〇メートル程度の距離がある。
二人は互いに背を向けて眼前の機体を全力で潰しにかかっているのにも拘わらず、お互いのフォローは欠かさずに行っていたのだ。
一〇メートルという間合いを常に保つことにより、自然とR機の軍勢を二手に分担させるよう誘導する。
しかし、敵陣に囲まれないように背中を預けるパートナーが死角からの攻撃を受けそうな時には即座に反応し、フォローに向かう。
すると、相方の『変則的な挙動』に気がついたパートナーは、ろくに確認もせず相方が戦闘を繰り広げていた位置まで瞬時に移動する。

つまり、常時『敵戦力の分散』のために一〇メートルという距離のインターバルを置き、『死角対策』としてはパートナーの周囲に流れる空気の微細な変化を読み取って一瞬でフォローに向かい、その交差の狭間で互いの位置関係を変えるという、とんでもない戦術がここに行使されていたのだ。

素早い移動を可能とする情報パルスを筋肉へ与えてくれる『情報処理体（オプション）』を持つ二人だからできる芸当、というわけではない。

これはもっと単純に、打ち合わせなどなしに動きの波長を合わせられるナキとレビィだからこそ実行できる『コンビネーション』だ。

約一年、ことあるごとにアドリブでベースとドラムでジャムセッションを重ねてきた。

相手の目を見ずとも、もはや呼吸のように相手の思考を読める。

その境地に達したのは、やはり二人が奏で続けてきた音楽のリズムだった。

そして、『心のスイッチ』を切った二人の殺人プログラムに綻びは生じない。

R機は一機、また一機と確実に切り伏せられていく。

どうやら、このR機にはペペのように戦況を把握して打破するという能力までは備わっていないようだった。

違法改造して無理やり戦闘モードを搭載したのだから、そこが関の山なのだろう。

仮に、このコンビネーション技が崩されたとしても阿吽の呼吸を会得したナキたちが他のスキルを披露すれば良いだけの話だ。

それから固物が衝突する甲高い音や、電機のエネルギーが蒸発してショートするような音が一〇秒ほど続いた。

戦局は言わずと知れたワンサイドゲームだった。

二人の一方的かつ華麗な破壊工作（ダンス）は残り一機にまで差し迫る。

「これで最後だ」

呼吸のリズム一つ乱さず、ナキは白い機体の胴体部分を斬り払った。

その一声によって二人のスイッチが再びオンに切り替わる。
床で転がる機械の残骸よりも冷たく、虚無よりも無機質だったレビィの表情に人間らしい本来の温もりが帰還する。
戦闘時の心の切り替え。
オフはレビィによる死の宣告（カウントダウン）。
オンはナキからの第一声。
不思議なスイッチの切り替え方法だが、こうでもして心を殺さなければ二人はまだ救済者にも破壊者にもなれない半端者――あるいは未熟者だった。
オンにしたままでは、まともに人も殺せない。
「ふぃ……。レビィ、大丈夫だったか？」
一息ついてナキはレビィの方に体を向ける。
レビィは赤褐色塗装のハンドガン『ガルガラ』と、群青色塗装のハンドガン『リボルバ』のマガジンをそれぞれ取り換え、腰のホルスターに突っ込みながら、
「ちょっと足首捻ったかも……」
「『情報結界（アクセスフィールド）』にダメージはあったか？」
「うぅ……ないよう……ナキナキは？」
少し涙目になりながら左足首を庇うようにナキの側に駆け寄ったレビィに、先刻までの冷徹な面影はどこにも残っていなかった。
「俺もこいつらから受けたダメージはねェな。ただ右腕に『情報制限加速（リミッタードライブ）』を使っちまったが、大した問題はねェよ」
激しい扱いをされたのに刃こぼれ一つなかった漆黒の大剣『クトネシリカ』を背中に収め、左手首の『情報処理体（オプション）』を弄くりながらそう返すナキ。
「それじゃあ、行こっか？　そろそろラスボス戦のはずだよ！」
「ああ、一撃で黙らせてやろうぜ」
少年と少女の絶妙過ぎるコンビネーションに面白いように沈んでいったR機計三〇機は戦闘開始約一分で壊滅したわけだが、またいつ敵の襲来があるか分からない。

バラバラに分解された白い機械の塊が山のように散らばる床を渡り、二人は足早に七階に繋がる階段へと向かう。
と、ナキの両足がピタリと停止した。
レビィも釣られて止まる。
「どったの？」
「いや……そう言えばよ、こいつら床から湧いて出てきたよな？」
いまさら確認など取るまでもない。
R機が天井や横の壁、床のコンクリートを突き破って、わざわざナキたちにスクラップされにくる様ならば二人してガン見していたのだから。
「んじゃあ、その床の穴はどこに繋がってんだろうな？」
「にゃは♪」
レビィもナキの意図を察したのか子供のように可愛らしい笑顔を返すだけ。
「ま、罠が仕掛けられてる可能性も否定できないが、気にする必要は？」
「なし！」
声と同時。
躊躇いや危惧、杞憂の素振りなど全くチラつかせないままR機製作の穴に跳ぶ込むナキとレビィ。
その身を投じる闇の帳の向こう側に二人の価値観さえ一瞬で覆す、あのような存在が待ち受けていることも知らずに――

9

pm　15：30

この状況は何だ？

〈ラビット・ランス〉のヘッド、ガルマン＝ヒルムは再考した。

確かにガルマンは我人共に認める外道である。

殺しの衝動を行為に移し、それを糧に生きる邪悪の権化だ。

本当は政府のことや反政府組織の理想なんてどうでも良い。

ただ手っ取り早く『人間を殺すというシチュエーション』を上手い具合に与えてくれる境遇が、結果的に今の形になっただけなのだ。

ガルマン自身もそんな自分を腐った人間だと自覚している。

そういう腐敗した精神を己に宿らせた奴らが過去に暮らしていた国の政府の連中だということも。

ガルマンの良識や常識を破綻させ、血や肉を貪るように捕食する殺人鬼へと変貌させたのがどういった人種の者たちなのかも。

その全てを承知の上で、彼は受け止めてしまっていたのだ。

どこにでも転がっているような、こんな世界では当たり前のように起きる悲劇により自分が人間という枠組みから逸したことさえも、である。

だからこそ、闇に染まった。

他人の血肉を体に浴びて喜ぶような化け物になってしまった。

けれど、

「アンタがヘッドのガルマン＝ヒルムね？」

それにしても、と思う。

それにしても、血管から泥や汚物でも漏れ出してきそうな化け物に対し、血潮のような双眸を瞬かせるこの少女は一体何者なのか、と。

そんなことは服装に視線を注げば一目瞭然だ。
黒いジャケットにタイトなミニスカート――〈ブラックアウト〉。
反政府組織を摘発する政府の主戦力。
少女の姿ならば地上での交戦時、R機搭載のカメラによって確認は取れていた。
よって、ガルマンが言いたいのはそういう名前や身分、ましてや容姿の話ではない。
もっと別次元で混沌と渦巻いているような感覚。
金髪ツインテールの少女の背後から放射する得体の知れない暴力。
あるいは理不尽さ。
漠然的な捉え方で言う『どういった能力の持ち主なのか』という身分証明。
曲がりなりにも組織のトップに君臨し、闇を礎に肉体と精神を築き上げてきたガルマンだ。
彼を闇と表現するならば、世界にとって庶民の治安を維持する〈ブラックアウト〉とは光だろう。
眩し過ぎるまでの、光。
だが、眼前の少女を目の当たりにした瞬間、ガルマンはその考えを簡単に破り捨てた。
暴力で暴力を鎮めるように、少女は闇を闇で殺したのだ。
いや、あれは闇ですらなかったのだろう。
もっと深いところで管を巻く、形のない何か。
「私たちってさ、アンタらみたいなのから犬だの何だの言われてんのよね？」
急転直下は一分ほど前のことだった。
漆黒のスーツを纏う金髪ツインテールのブラックアウトは、突然ガルマンたちが潜伏していた地下九階に現れたのだ。
横合いの壁から突如として。
ガルマンには、まずそこから理解できなかった。
この地下九階の施設をアジトとして根を張る〈ラビット・ランス

〉のヘッドであるガルマンは、当然ながら建物の構造を隅々まで熟知している。
そして、何度脳内の地図を広げて現状と照らし合わせてもみても適合しない。
この九階フロアの壁の向こうに空間など存在するはずがないのだ。
「そのあだ名は不適切かつ大袈裟ね。残念ながら私たちは犬なんて呼ばれるほど誇れたもんじゃないわ」
だが事実として、ブラックアウトの少女はそこから壁を破って出現し、一切の反撃も許さないままオペレーターおよび護衛の兵士たちを制圧した。
所要時間はたったの一三秒だった。
「大体そんな生易しい牙も持ち合わせてないし。知ってた？　私たちってけっこうハイエナなのよ？」
ガルマンが知るよりも遥かに色濃い、それこそ信念めいた負の色を眼光に宿した少女が芯のある声で言う。
まるで子供を傷つけまいと優しく問いかけるような物言いで、そっと狂気の刃を潜めている。
不測の事態だった。
残るはソファの上で未だ悠長にタバコを吸い続けている青年とガルマンのみである。
その青年は助太刀などしてくれないだろう。
ガルマンは毒に犯された想像力を車輪のように働かせ、前方と後方の脅威を天秤にかけ、やがて黙考を頓挫させる。
「ケッ、何がハイエナだ。犬だろうがハイエナだろうが呼び方なんざどうでも良いんだよ」
ガルマンが足元に唾を吐き捨てながら強がるように口を開くと、ブラックアウトの少女は鼻で笑ってこう返した。
「ハイエナはね、血肉に飢えてんのよ」
「あぁ？」
「アンタらと似たようなもんね。相手が敵なら同情なく殺す。容赦

なく絶つ。骨すら砕く。遺言さえ燃やす。その片鱗だって見逃さない。それが〈ブラックアウト〉ってもんよ」

つまり、とツインテールの少女は不敵に笑んで前置きする。

「アンタこれから肉片に変わるんだけど、そこんとこ正しく理解してるわけ？」

『コンビネーション』に長けているあの二人に比べ、カレン＝ローズは個人戦を好んでいる。

誰かと共闘するなど足手まといになるだけで邪魔だし、何より、万が一にも自分が足を引っ張ってしまうという事態だけは是が非でも避けたいと考えていたからだ。

そんな思考回路だったためか、かつて同じ指揮系統の者同士でチームを組んでいた時でも、カレンは任務の事前に企てた作戦を端から無視していた。

独断専行。

一人でやって一人で片づけるを信条の基盤にしているカレンにとっては死んでさえいなければ、そこで誰がくたばろうとお構いなしだった。

元より『年齢とアイソトープ比率の割に秘めているポテンシャルの高さ』を買われ、勧誘されて入ったチームだ。

志願したわけでもないので、カレンはそこでも好き放題やりたい放題に傍若無人の限りを尽くしていたというわけである。

それでも。

チームの隊長や他の隊員がカレンを手元に留めておいた理由が二つある。

一つは、カレンをチームへ誘ったのと同様の『年齢とアイソトープ比率の数値にそぐわない戦闘スキルの潜在さ』。

そして、もう一つは――

数多の機材で熱気が染み出る部屋で攻防を繰り返すカレンと〈ラビット・ランス〉のヘッド、ガルマン＝ヒルム。

最奥の部屋は二人が本気で殺し合うには多少手狭な空間だったが、両者の間に特定の距離は生まれなかった。

その値が常時大幅に変動を繰り返すほど、双方とも目まぐるしい挙措で駆け回っているからだ。

けれど、両者は決して対等というわけではない。

ガルマンが辛うじて保っていた拮抗状態も、カレンの組み手による猛攻で徐々に衰え始め、錆びていく。

ベリッ、と。

ガルマンの右腕が銀メッキの甲冑ごと、カレンの手によってもぎ取られた。

痛みは伴わなかったはずだ。

ガルマンの右腕は義手である。

〈レイジス・コア〉の恩恵か何かで手に入れたものなのだろう、そこには高度な機械技術が仕込まれていた。

また切断面である右肩も機械化（インストール）しているのが視認できる。

しかしながら、ガルマンにしてみれば『義手の右腕』も立派な武器だったようで、彼は苦々しい表情を浮かべながら、

「ッ！！」

無造作に床へ投げ捨てられた自分の義手など見向きもせず、ガルマンは半ば暴走気味にカレンへと殴りかかる。

残った左腕は生身だった。

「遅いわね」

向かいくる拳をカレンは横に移動することで軽く流し、ガラ空きとなったガルマンの懐に思いっ切り膝蹴りを叩き込む。

うっ、と小さく呻く筋肉質な図体が二メートルほど飛び上がり、床に転げ落ちた。

そんな一連の光景を琥珀色の髪の青年は、ソファの上でつまらな

そうに傍観していた。
「クーーソガキがあああああああああああああああああああああああっ！！」
泥臭い咆哮を唱えながら立ち上がるガルマン。
もはやろくな構えすら取らないまま、がむしゃらな勢いでカレンに向かい肉薄する。
――怒りで我を忘れた者に大した末路はやってこない。
前方でソファに座る青年がタバコを宙に投げ捨てる瞬間、そう唇を動かしたのをカレンは確かに見た。
「おおおおあああああああああああああああああああああああああ！！」
半狂乱に吠えながら迫るガルマンの体に重ねるようカレンは体を回転させ、半円を描く綺麗な回し蹴りを繰り出した。
数秒もしない内に二つの影は磁石で引かれ合うように交差する。
ズシャッ、という生々しい音がカレンの鼓膜を打った。
発生源はガルマンの飛散した血だった。
色の悪い血液がドロドロと尾を引き、コンクリートの上にだらしなく流れている。
ただ、原因はカレンの加えた一撃ではない。
カレンはむしろ、その不可解な光景に呆然とした視線を縫いつけさせられる側に立っていたのだから。
「お前の負けだ」
低く、耳触りの良い青年の声がカレンの耳朶に触れた。
その現象を『いつの間にか』という表現では簡単に処理できない。
だが、それは本当に『いつの間にかの出来事』だった。
先程までソファの上でタバコを吸っていた赤いスーツの青年が、カレンとガルマンの間に割って入るようにして佇んでいた。
歩いたわけでもない。
走ったわけでもない。
そういう『人間が用いる普通の移動方法』ではなかった。

いきなり虚空に現れた。まるで瞬間移動（テレポート）でもしたかのように。
「ッ、テ……メェ……！？」
ガルマンの濁り切った瞳には困惑の色が浮かんでいた。
動揺。
流石のカレンも驚愕の表情を固めたまま微動だにしない。
ただ眼球だけをゆっくりと下ろして見る。
その青年の手からガルマンの胸部へ向かって一本の大剣が貫いていた。
単なる剣ではない。
夕日のように赤々と燃え盛る橙色。
二メートル強の刀身を誇る『炎の大剣』。
輪郭から何まで全てを炎で象ったその大剣はいっそう猛々しく、まるで目の前の汚れを浄化するかのように、銀色の甲冑もろともガルマンの心臓を突き刺している。
驚きのあまりカレンが立ち尽くしていると、
「があああああああ

えなかった。一体、どんな情報技術よ。しかも、この状況は何なの？　コイツら仲間じゃなかったの？　スーツの男に至っては炎を素手で持っちゃってるし、大体どこから取り出したって言うのよ？　いや、そもそも炎で人体は貫けるものなの？）

燃えているだけで剣のような硬質さが伴うのは納得がいかなかったが、どれだけ思考を巡らしても確かな理解には及ばなかった。『理想郷（マリアリア）』にすら存在しない奇怪な戦闘技術に頭の中が混乱する。

一部始終を一番近くで見ていたのに、その一部も理解できない歯痒さにカレンは苦虫を噛み潰したかのような顔をした。

（無抵抗だったから放っておいたんだけど、もしかしてコイツが一番ヤバい？）

カレンは歯噛みしながら、その情報元も分からない特異な得物『炎の大剣』でガルマンを串刺しにして炙る青年の背に焦点を合わせる。

すると、青年は残虐な行為をそのままに、耳元のアクセサリーをジャラつかせながら首だけをこちらに振り向かせて、

「お前、わざと急所を外していただろう。生身の部分にはなるべく攻撃を加えず、できるだけ無傷で捕獲できるように。最初の相手に恐怖心を煽るような演技もそうだ。相手の戦闘意欲を削ぎ落すための詭弁だろう？」

カレンは肯定も否定もせず、青年の目を睨み続けた。

青年が口にした言葉は、〈ハイプ〉の隊長やメンバーがカレンをクビにしなかったもう一つの理由に遠からず密接していた。

――かつての隊長や隊員たちが、カレンをチーム内に留まらせておいた最大の理由。

それはカレン自身が考える『独断専行』と、チームのメンバーが考える『独断専行』の定義が異なっていたからだった。

また、カレンの考える『優しさ』や『思いやり』といったものが、チームの考えるそれの定義とは異なっていたからだ。

すなわち、他の者から見たカレン＝ローズという人物は一口に言

うと、『不器用なくせに誰にでも平等に気を配る温かな人間』となるのだ。

「自覚はないのか。まあ、良い。どうせお前もここで死ぬ」

眼球の焼けるような朱色に輝く『炎の大剣』に串刺しにされ、ひたすら身体を焼かれていたガルマンの断末魔はすでに途絶えていた。

灼熱の業火の中で肉はおろか骨すら原形を留めていない。

そんな無残な死を遂げてしまったガルマンを直視していたカレン。

「ア、アンタ……」

震える声は、決して恐怖からくるものではない。

心の底から湧き上がる怒気。

今、カレンの心の内を占める感情は微かな畏怖と、莫大な憤りだった。

怒りに満ちた眼光がカレンより放たれる。

しかし青年は怯む様子もなく、それがどうしたと言うように肩をすくめて、

「感情論でオレを超すことはできないと思うが。冷静になれ、ブラックアウト」

肩で風を切りながら振り向き――そして、動いた。

右手の大剣でカレンを殺す気だ。

天井は低いため上方を迂回するような回避軌道は不利だろう。

身を屈めてカウンターを直接叩き込む方が効率的に思える。

(刀身は長い。当たれば相当なダメージを食らうんでしょうけど、それなら剣の流れに集中すれば良い。それにこんな狭い空間じゃ思うように振れないはず)

そのことを念頭に置き、体勢を低くして構えを取った。

――直後、カレンの体は自身の意思とは無関係に横合いへと吹き飛んだ。

「がっ……あッ!?」

一体、何が起きたというのか。

感覚的には有り得ない方向から『空気の塊』のようなものが横っ

腹に直撃したような衝撃だった。
いや、実際にどういった現象が己の身に降りかかったのかカレンは正確に把握できていない。
だが、あえて言葉で表すならその表現が一番適していると思った。
突如、襲いかかった死角からの攻撃に耐え、カレンは膝に手を置いて立ち上がろうとする。
アバラが嫌な音を立てて軋み、微細な痛みがそこから伝染するように全身にまで駆け巡った。
（な、何が――）
「態勢は立て直させない」
三考している暇さえ与えらない。
再び『不可視の衝撃』がカレンの身体へとメリ込んだ。
ただし、今度は一ヶ所ではない。
――ガガガガガガガギチッ――
それは鳩尾を軸に人体の急所という急所を複数回にわたって殴打した。
――ガガガガギチッガガガガガギッガガガ――
成す術もなく、カレンは己の全身を強打するその音を聞き続けるしかなかった。
目に見えない砲弾が全方位から一斉に我が肉を打つ、その音を。
――ガガガギッガガガガガギチッガガガガガギガギガガガガギチッ――ガガガギッガガガガガガガガギッガガガガガガガガギガガガギガガガ――ギチッギチッ――
両足が床から離れ、ボロ雑巾のようにズタズタになった体が数メートルも跳ね上がる。
天井スレスレのところで体は一瞬だけ止まり、それからは重力に導かれるまま下降する。
あまりの激痛にカレンは受け身も取れず、そのまま背中から地へと激突した。
「っ……ぁ……」

焼けるような痛みに体を丸め、口の中で小さく悲鳴を上げた。
視界が赤く明滅する。
――右耳が音を拾わなくなった。
――――唾液と混ざる鮮血の液体が床に散る。
――――――右肘から上の感覚がない。
――――――――誰かの血の臭いが鼻につく。
――――――――――どこかの関節が鈍痛に耐えかねて絶叫した。
そこへ。
床に転がり悶えるカレンの体に追撃をかけるように青年は大剣をかざす。
炎の帯を余韻に残し、空気さえ焼き切って、炎の刃は振り下ろされる。
沈みそうになった意識を無理にでも表層へ引っ張り出す。
パニックに陥る隙間もない。
カレンは体を投げ捨てるように死に物狂いで横へ跳び、間一髪のところで本当の致命傷を回避した。
それでも、床へ叩きつけられた『炎の大剣』は周囲に火の粉を撒き散らし、爆風を煽り、カレンを部屋の隅へと追いやった。
二、三転するカレンの体が止まったのは、四方の壁の一角に肩から激突したからである。
もとより戦闘するには狭い部屋だ。
逃げ道などありはしない。
（……ッ）
血だらけの床にうつ伏せになる形で横たわったまま、呼吸することさえ危うい。
そんなカレンの視界の端をかすめたのは、同じく汚い床にへばりつくガルマンだった『塊』だ。
ポタッ、と。
意識の水面下で悲しい響きの感情が、密かに波を打った。
波紋は緩やかに加速し、体の芯へジワジワとにじり寄ってくる。

何か心を押し留める防波堤が崩れ去った気がした。
「言ったはずだ。感情の起伏などではオレは殺せない。お前の生半可な生き方とは度合いが違うからだ」
低く、冷徹な言葉が耳の中に浸透する。
この時、カレンの口元には笑みが生まれていた。
絶望の淵に立った時にのみ、思わず零れ落ちてしまうような苦い微笑み。
たとえ逃げ道があったとしても、その逃げ道ごと食い潰しそうなほど爆発的な威力を所持する青年の力を見てしまったから。
「しかし、何も知り得ないまま逝くというのはあまりに不憫だな。名も知らない男に奇怪な術で殺されるというのは、どういう気分だ？」
カレンはゆっくりと顔を上げ、赤に濡れた唇を動かして何かを言い返そうとした。
しかし、掠れ切った声すら出なかった。
初めて口の中に広がった血の味を舌で感じる余裕ができ、その隙間に乗じて青年の顔を窺う。
彼はカレンの無力さを侮蔑するわけでもなく、嘲笑うわけでもなく、だからと言って同情するわけでもなく、ひたすら感情のこもらない、紙のように薄い笑みを浮かべていた。
愛想笑いに近い表情なのかもしれないが、それは単純に似ているだけであって根本的な部分は社交辞令ですらない、全くの異質だとカレンは悟った。
もう駄目かもしれない。
そんな弱音の所思が浮上する。
体も言う通りに動いてくれそうにない。
勝てる気がしない。
それを到底受け入れることができない。
世界の最先端を走る『理想郷（マリアリア）』の情報科学技術でさえ再現不可能と思える、青年の扱う非現実的な戦闘技術を。

ここまでのことをしておいて、青年はまだ傍観者のような一線を引いた笑みを露にしている。
そして、そんな彼の周囲には、二メートルを優に超す『炎の槍』が九つも浮遊していた。
切っ先をカレン一人に向ける形で、まるで耐熱性の細い糸か何かで宙に吊るし上げているかのように、フワフワと。
その矛先は、その標準は、カレンから一切揺るがない。
そんな力ばかり有するその青年に勝てる要素はないとカレンの直感が語った。
超能力のような。
魔法のような。
絵本でしか見たことのないような。
それこそ『理想郷（マリアリア）』の圧倒的な情報力をも軽く凌駕した、不可解な情報技術のロジックには太刀打ちできないと。
なぜならカレンの体と精神を支える重要な要が、『不可視の衝撃』と『炎の大剣』によって的確に射止められ、攻撃性を重視しているとは言え『情報結界（アクセスフィールド）』も中和し切れなかったほどのダメージが骨の髄まで蝕んでいたからだ。
一人では勝てない、とカレンの瞳は諦めていた。
――けれど。
もしも一人ではなく、あの二人がここにいてくれたらどうだったのだろう？
このような瀬戸際になり、一瞬でもそう考えてしまった自身の弱さをすぐさま鼻で笑う。
そう、何もカレンは認めていないわけではないのだ。
仲間という存在はそこまで鬱陶しいものでもないことを。
信じるという行為が報われる時もあれば、そうでない時だってあることを。
本当は誰かに『優しさ』を与えて、その誰かから『温もり』を返してもらえないことを恐れていた自分勝手な結論を。

『優しさ』なんて曖昧なものは最初から故意的に手渡せるものではなくて、知らず知らずの内に相手の心に芽生えているものなんだ、ということを。

言うまでもなく、それはカレンの『独自の見解』であり、あまつさえ途中経過でさえある。

差し詰め、未完成の愛情と言ったところだろうか。

だからこそ、カレンは救いたかったのだ。

どれだけ闇に溺れてしまった者でも、どれだけ重い罪を重ねてしまった者でも、その価値は絶対に失われない。

生きて、生きて、生きて、生き続けてやり直さなければならないことがあるから。

罪を償い、人として悔い改めることに価値がないわけがない。

きっと、そんな時にこそ人の心には大事な何かが生まれるはずなのだと。

そう信じていたからこそ、カレンはここまでやってくることができた。

頑張ってこれたのだ。

誰だって生まれながら闇に浸っている人間などいるはずがない。

あのガルマンにさえ何かしらの悲劇があってのことだったと思いたい。

どれほど泥臭い血液が流れている愚か者であっても、まだ救いの道が残されている。

きっと、一からやり直せる。

カレンは、ただそう伝えたかっただけなのだ。

それなのに、目の前の青年はその可能性を根こそぎ否定するかのように、あるいは拒絶するかのように、何の逡巡すらなく罪を潰した。

青年とてカレンの思いの根底全てに感づいていたわけではないのだろう。

だからと言って人を殺すことに慣れているようなその手を、許せ

るはずもなかった。
――ゆえに。
怒りや絶望に心の大半を奪われ、自身の片影に隠れてしまった『新たな意識』にカレンが気づけてなかったのも半ば必然だった。
この期に及び、自分を今にも殺そうとしているその青年にさえ、まだ『救いがあることを教えようとしている自分自身』に。
闇にとり憑かれてしまっても、闇ではなく光で生きる道を見つける活路があるはずなのだと。
這い上がるチャンスは平等に訪れるのだと。
誰かを殺めてしまっても、きっとこの世のどこかに償う方法が残されているのだと。
そう懸命に伝えようとしている己の心に。
カレンの慈悲はいつだって『無意識レベル』なのだから。
だから、
「ぐっ……」
――生き残らなければ。
再度、カレンの心に火が灯る。
こんなところではまだ死ねない。
死んではならない。
何よりも死にたくない。
もう一度会って顔を合わせたい奴らだっている。
歌いたい言葉だって、たくさんある。
そう思い、千切れてしまいそうな腕や足にも力を込めてカレンが立ち上がろうとした。
寸前――間に合わなかった。
巨大な火力がカレンに牙を剥いた。
青年の周りに浮かんでいた九つの『炎の槍』が一つの対象に狙いを定め、一斉に放たれたのだ。
まだカレンは『情報結界（アクセスフィールド）』を失っていない。
だが、どれだけ強い結界が体表面に働いていようと。

どれだけ左手首から回流する特殊な情報パルスによって超人的な機動力を得ていようと。

中身がボロボロに傷ついたカレンの体ではその迎撃範囲に対する回避行動は難しかった。

（ちっ……）

ただ無情に、ひたすら無感動に、炎の先端はカレンに向かって飛翔する。

次こそスーツさえも貫通する。

そうすれば、やはりこの身も死に至るのだろう。

（ここまで、ね……）

そうして、カレンの肌に空気をも焦がす非現実的な熱風が突き刺さった。

∞　∞　∞

全焼した部屋の中心にはレト＝イジャスただ一人しか立っていなかった。

琥珀色の髪に、右耳から肩まで垂らす銀色の鎖。

その先端部に太陽のアクセサリーが連結している。

大柄でも小柄でもない、年齢に見合う程度の至って平均的な体躯は細身の赤いスーツに、底の磨り減ったボロボロの革靴という服装で締めくくっている。

レトは口に咥えたタバコにジッポーで火を点け、肺を煙で満たす。

周囲に転がっていた〈ラビット・ランス〉の兵士もろとも炎で焼き払った地下九階は、今や部屋として機能するとは到底思えないほど痛ましい有様になっていた。

（いずれにしても、これ以上〈レイジス・コア〉としてここにいる意味はないな。〈ラビット・ランス〉の正式な傘下加入の件は白紙に戻る。後はオレ個人の用を済ませるだけ、か）

横に視線を投げると、そこには巨人に平手打ちでも貰ったかのよ

うな穴が空く壁があった。
あの金髪ツインテールのブラックアウトが突撃し、地下九階に潜入してきた例の壁である。
その穴の先から『本来あるはずのない部屋』が顔を覗かせていた。
（あのブラックアウト、まさかここの『仕掛け』に気づくとは）
ゆらゆらと紫煙をもてあそぶように吐き出しながら居心地の悪そうな顔をするレトには、一つの仮説があった。
地上から三人の〈ブラックアウト〉が突入してきた時、レトはR機搭載のカメラから受信する映像を通して、あの二人組の方が内部に落ちてくる様子を見ていた。
金髪ツインテールの少女が『あるはずのない部屋』より、突如として現れた理由もこれで説明が可能である。
ただし、彼女の場合はわざと落ちたのだろう。
単純な歴史的所見だった。
ここは〈ラビット・ランス〉の本拠地である以前に、かつて宗教団体の一派が独自で築き上げた『地下要塞』なのである。
今なお〈世界政府連合同盟〉と宗教団体の間には埋めることのできない深い溝があるらしいが、事態の発端は小さかったはずだ。
ある国の政府関係者が『宗教団体を「独自の勢力を所有する危険分子」ということを認識すべきだ』と力説し出したことから、その隔たりは生まれてしまった。
最初こそ波風も少なかったが、しばらくすると宗教団体に不満を持つ政府の人間たちは触発されたように異口同音の宗教団体陰謀説を唱え始めた。
社会的抹殺。
自分たちの立場を危うくするような脅威要素に対し、大義名分を掲げて庶民の賛同を手にした政府が、武力行使による一方的な迫害政策を行っていた時代が数十年前まで実在していたのである。
『虐殺』という名の字ではなく、血で語られた歴史が。
現代の反政府組織が発生している要因として、各国の政府と宗教

団体の勢力図が絡んでいることは明らかだった。
その争いの余波こそ〈世界政府連合同盟〉と反政府組織による、世界的規模にまで発展した冷戦状態の影響だと陳ずる学者もいる。
ともかく、連合の同盟国が富国強兵によって自国の経済力および軍事力を色めき立たせ、市民の信頼を勝ち得るため躍起になっていた頃があり、その裏では宗教団体の人間が身を隠しながらも神に祈りを捧げていた時代があった、というわけだ。
そして、〈ラビット・ランス〉のアジトとして使役されていたこの施設も血塗られた話の断片だったのだ。
小規模な宗教団体の一派が『隠れ蓑』にしていた地下要塞。
過去に一度だけ行われた〈世界政府連合同盟〉による一斉摘発で、その網にかかって炙り出された後には、政府所有の地下研究室に新装し、捕まった宗教団体の人間たちはその地下研究施設で秘密裏に『人体実験』のモルモットとして処理されてしまったが――
今までの〈世界政府連合同盟〉の非道な政策から捕まれば命がないことを承知していた宗教団体の者たちは、地地中に展開する『隠れ蓑』を『仕掛けだらけの要塞』へ改装していたのだ。
要するに、地上へ繋がる隠し退路が、この部屋のどこかにあったとしても何ら不思議なことではないのである。
いや、むしろ間違いなく、この地下要塞にはレトさえ知らない『地上と最下層の九階を直結させている通路』があるはずだ。
（だからこそ、あいつも意表をつかれたような顔をしていたのだろう）
今しがた『炎の大剣』で焼き殺した男の顔が脳裏を過る。
〈ラビット・ランス〉のヘッド、ガルマン＝ヒルムの経歴の中には、ここを隠れ家にした宗教団体の一派という項目があった。
連合同盟の捜査網に取り押さえられて『人体実験』を受けたという過去が。
ガルマンの老化はその実験の影響で延長していた。
細胞あるいは分子レベルで人体の成長速度を強引に遅延したのだ。

彼の闇や負や歪みといった性質の根源は、まさしくそこにあったのだろう。

正気の沙汰を失った近因は過去、遠因は寿命の長さゆえに人よりも知り過ぎた世界の悪意。

その結果があれだった、というだけの話である。

どう見てもまっとうな人生の幕の閉じ方ではない。

もしかしたら、金髪ツインテールのブラックアウトが乗り込んできた時点でガルマンの命運は尽きていたのかもしれない。

ガルマン自身はアジトの構造を隅々まで把握し切ったつもりでいたのだろうが、実際にあの少女が突破して露になった『あるはずのない部屋』を目撃した時、目を白黒させていたのだから。

当然だ、とレトは心の中で呟く。

ここを研究施設として塗り替える際、政府はさらに『複雑な仕掛け』を施したのだ。

『そういった専門の知識や技術』も著しく乏しかった小規模の宗教団体が織りなすクオリティとはわけが違う。

そんな宗教団体や歴史の知識があったのか、たんに勘が冴えていたのか、はたまた偶然か、金髪ツインテールのブラックアウトはその仕掛けを逆に利用し、一気に最下層の九階まで辿り着いたという憶測も十分許容範囲ではないだろうか。

（……しかし、まさかこうも簡単に『目的の部屋』が見つかるとはな）

レトはそれまでの思考を大した感慨もなく打ち切り、砕かれている壁の穴を潜った。

『目的の部屋』に足を踏み入れ、適当に視線を遊ばせてから自嘲的な微苦笑を零す。

増設しただけの空間ではないことが窺える。

隣の焼けただれた部屋よりも数倍狭い、独房じみた個室。

家具や機材も何もなく、生活など送れそうもない灰色の空間。

間違いなく――レトの花が咲いた場所だった。

ふと足元に目をやる。
薄らと埃が覆う汚いコンクリートの床には、何年前のものなのかも分からない血痕のシミがへばりついていた。
それが自身の血であることだけは覚えている。
顔を上げて、半分の長さになってしまったタバコを指の間から床へ滑らせる。
途端、その手元より原理不明の発火が巻き起こった。
聞き慣れた灼熱音。
一瞬にして一帯の酸素は奪われ、室内には直径三メートルほどの火球が躍った。
炎の動きは一見しておかしかった。
まるで手動リモコンで遠隔操作でもされているかのように、オレンジ色の軌跡を残しながらその室内のみを練り歩き、燃やし回っている。
（……やはり、と言うべきか）
この時のレトは特に表情を作るというわけではなかったが、彼を良く知る者ならば黙して佇んでいるだけのその姿から微細な心の変化に気づき、どこか落胆した面持ちにも見えただろう。
（脈略もない短絡的な理論と手法では、たとえオレの原点に回帰しようと何も起きない）
表に感情の色を滲ませない全くの無表情のまま、しかし何かを諦めたかのように踵を返し、レトは燃え盛る部屋を後にする。
その足取りはどこか重い。
元の部屋に戻ったレトは原形も留めていないほど黒ずみ、ひん曲がり、溶解している部屋の隅を一瞥した。
あのブラックアウトを殺すために放った九つの『炎の槍』の爪痕を。
（そろそろ地上にでも出た頃だろう）
隣の部屋から納まり切らずに溢れる炎の光に照らされた天井を見上げ、レトは想起する。

九つの『炎の槍』がその圧倒的な火力で少女を食い潰す直前。
偶然にも彼女の背後の壁にあった『仕掛け扉』からあの二人組のものだと思われる腕が伸び、そのブラックアウトを扉の向こう側へ救助した、その瞬間を。
「さて、オレの個人的な案件も済んだことだ」
軽く目を伏せてから、その数秒後。
「取り逃がした残党の始末に行くか」
レトは悲劇の施設を後にした。
後味の悪い残業を遂行するために。

10

pm　16：27

ナキ＝エクイルド、レビィ＝ハルデンス、カレン＝ローズの三人は『ラビット・ランス』のアジトから抜け出した後、遠くに見えていた山中へと逃げ込んでいた。

足の裏に湿った土の感触がある。

空気だけは嫌味と思えるほど澄み切っていた。

背の高い木々がそびえ立つ山の中はそれだけで隠密行動の手助けとなるが、やや下り気味の太陽の恩恵は深緑に遮られて薄暗く、視界はお世辞にも良好とは言えなかった。

それでも三人はできるだけ息を潜め、身の周りに警戒心を振りまく。

カレンの話によれば、かなりヤバい奴がいるとのことだった。

経験の浅い自分たちみたいな小物では手に負えないと『自尊心の塊』であるカレンが声を荒げて言うのだから、その言葉自体に間違いはなさそうだとナキは判断し、あの場から一目散に撤退した。

そいつは二〇代前半くらいの青年で琥珀色の髪が特徴的らしく、右耳には銀色の鎖と太陽のアクセサリーをピアスにし、赤いスーツを着ているという。

初見でも一発で分かりそうなその青年の容姿を勝手に想像しながら、ナキはここまでくれば大丈夫だろうという適当な頃合いを見つけて立ち止まり、改めてカレンに訊ねる。

「で？　そいつが高度過ぎる情報技術を使って大剣を象った炎を精製し、〈ラビット・ランス〉のヘッドを一撃で殺したってのか？　それまた何で？」

レビィに肩を借りていたカレンは彼女から離れ、巨木の腹に背中

を預けながら蒼白した表情で答える。
「知んないわよ。私だってまだ自分の目を疑ってるわ。でも、あれは火炎装置（パイロキネシス）や発火砲弾（ファイアーボール）とか、そういう科学的な力に頼った現象には見えなかったのよ。あんなの絶対に有り得ない……あんな理論の糸口も見えなかった情報技術、それこそ超能力とか魔法の域よ」
カレンの独り言のような弱り切った言葉を聞き、ナキは溜息交じりの息をそっと吐いて、
「正気か？　ああ、いや、疑うわけじゃねェけどよ……にわかに信じ難いっつーか。なんか種でも見落としてんじゃねェのか？　こんなご時世にオカルトなんてよ……」
どうコメントすれば良いのか分からないという風情でナキが返すと、カレンは弾かれるように顔を上げ、持ち前の勝ち気な双眸でナキの顔面を貫くように睨めつけた。
「あんな状況で悠長に考察する暇なんかなかったわよ。そんな余裕なかった」
あの時――ナキとレビィは敵の姿をはっきりと確認したわけではなかった。
そんな猶予さえなく、とっさにカレンを救出したのだから。
だからこそ、その事実が『異常』を語っている。
情報科学の最高峰とも言われている『理想郷（マリアリア）』の『情報処理体（オプション）』を装備するカレンと、最低限の武装防具も纏っていない一個人との戦闘で、『カレンを助け出した』という状況自体がすでに常軌を逸しているのだ。
「それとも何？　アイツは情報力でどこからともなく炎を出現させて、科学力でその炎を硬質な大剣に変えながら素手で振るってたの？　じゃあ『不可視の衝撃』は？　『情報結界（アクセスフィールド）』をまるで無視した爆発的なエネルギー量のソースは何？　それも情報科学の力？」
カレンは不服そうな顔をしてナキに捲し立てる。
どうやらカレンも自身が築いてきた理屈や常識、もっと言うならば価値観というものと葛藤しているらしかった。

己の両眼で認めた現象を科学的には説明できないと言いながら、それを超能力や魔法という超常的な力のカテゴリーに分類することもしたくない。

立場が逆ならナキも同じ気持ちになるのだろう。

生粋の情報科学世界で育ち続けたナキだって、この目で直に目撃したのならまだしも、物理的法則に反するような存在をそうそう簡単に信じるわけにはいかない。

そこには何らかのトリック――つまり、科学的な情報理論が隠されていることを考えるのが健全な反応だと言える。

「まあ、落ちつけよ。俺たちは実際に見たわけじゃねェし、率直に言わせてもらうと超能力とか魔法とかそんなもんは信じられねェ。そいつの扱う技術には手品みてェな種が絶対にあると思ってる。普通そうだろ？　幽霊なんてもんを信じ続けるにしては、俺たちは〈ブラックアウト〉として生き過ぎちまった。死んだ後には天国と地獄があって嘘をついたりすると地獄に堕とされる、なんてことを親に聞かされた子供が泣いちまうような純粋な心は、とっくの昔にオブラートに包んで焼却炉に捨てちまったんだからよ」

そう反論するナキだったが、彼は次の言葉こそ重要だと思わせるように一呼吸置き、ゆっくりはっきりとした口調で、

「けどな、幽霊の存在なんか信じられなくたって俺はカレンの言葉くらい信じるぞ」

ボンッ、という擬音が聞こえた気がした。

「あーいや、これじゃあちょっと矛盾してんな――って、どうしたよ、カレン？　顔が夕日になってるぞ」

あれほど真っ青だったカレンの顔がどういうわけか首元まで朱に染まっている。

「い、いや……な、何でもないわよバカ！！」

いきなり本調子を取り戻したかのように怒りんぼうになったカレンを見て、ナキはわけも分からず首を捻るしかなかった。

「そ、それにしても、こういうハプニングも起きんだから援軍くら

いちゃんと待機させて欲しいもんよね！　ルーキー三人だけに何もかんも任せるなんて、ほんとお姉ちゃんも何考えてんだか」

カレンの姉であり、ナキたちの直属の上司であり、〈ブラックアウト〉本部に所属する一流の科学者でもあるクレア＝ローズに『情報処理体（オプション）』で増援を要請してから一時間は経過している。

けれど、待てど暮らせど返信はない。

〈ラビット・ランス〉のアジトからジャミングでも発信されているのだろうか。

一応、信号の送信完了表示は出るのだが。

「少し、良い？」

と、ナキとカレンの会話に一切加わらず、沈黙を保っていたレビィが青い瞳を持ち上げて口を開いた。

「『神様の証明』。クレアがわたしたちに与えてくれたヒント。反芻してみて。これはつまり、『そういうこと』ではないの？」

シン、と。

三人の間に静寂が降り注ぐ。

微風に揺れていた木々の葉のざわめきまでもが口を閉ざした気がした。

そう感じざるを得ないまで『心を半殺しにしているレビィ』のオーラは、とてつもなく寒々しい。

「どういうことだよ、レビィ？」

ナキは眉をひそめ、カレンと顔を見合せてから向かい側に立つレビィに意図を訊ねてみた。

レビィの結氷する紺碧の双眸が無機質に瞬き、小さな唇が何かの言葉を漏らそうとして――

しかし、それよりもコンマ数秒だけ先に、ナキでもカレンでもない『第四者』の声が三人の中心から突如、割り込んできた。

「見つけたぞ、ブラックアウト」

ナキたちの視界の端で、花弁のような火の粉がまるで雪のようにチラチラと舞ったかと思った、その直後。

その者はすでに、人が人として用いる移動手段を完全に省いた上で忽然と出現していた。
瞬きをした一瞬の隙を縫ったかのように。
あるいは時間を止めて、輪になるよう陣形を取っていた三人の中心に着いてから再び時計の針を起動させたかのように。
その青年はナキに背を向けて立っていた。
琥珀色の髪。
肩まで垂らした銀色の鎖と、その先端に太陽をモチーフにしたピアス。
細身の赤いスーツ。
「コ、コイツ――」
言うが早いか、何の予備動作もなしにカレンの四肢が斜め後ろへと投げ出される。
体は文字通りくの字に折れ、数十メートル先まで石ころのように土の上を転がり、樹木の足元でようやくその勢力を失って停止した。
「……ぁ……ッ」
苦し紛れに嗚咽するカレンの姿を間近で目撃したナキは、一歩遅れて自陣に尋常ではない危機が迫っていることを実感する。
だが、それを次の動作に繋げるほどナキの経験値は豊富ではなかった。
突然の有り得ない事態に柔軟かつ機敏な対応が取れるほど、ナキの精神は成熟し切っていなかったのである。
頑丈さに乏しい未熟な心構えだったから、というわけではない。
〈ブラックアウト〉という仕事柄、不測の事態などいつ発生しても不思議ではない。
ナキが過去にこなしてきた任務も作戦通りスムーズに進んだことなど数えるほどしかなかった。
ナキはその度に即席の戦術を練り直し、現場でしか得られない情報をフル活用し、その状況に最も適したレビィとのコンビネーションで関門を乗り越えてきたのだ。

（こいつが、カレンの言ってた野郎か！？）

しかし、今回はその『有り得ない』の純度が明らかに違った。

ナキの経験則でものを言うと、目の前の青年の現れ方も、たった今カレンを後方へ薙ぎ払った攻撃手段も確かに科学的ではなかった。

どう想像を働かせてみても人間技とは思えない。

それこそ超能力か何かで瞬間移動（テレポート）したと断言する方がよっぽど納得いくように。

そんな麻痺した思考回路がナキの頭の中を走り回るほど、今の現象は奇異だった。

三人の視界を上手く潜り抜け、唐突にその中心に出現する情報技術など思い当たるはずがない。

「オレにも色々と事情がある。許せとまでは言わないが、殺されることを手早く受け入れてくれないか、ブラックアウト」

虫けらでも見るかのような蔑んだ瞳ですらなく、そもそも興味がないという淡々とした眼差しでカレンに身勝手を言い放つ青年。

同じ人間相手に話しているとは思えないほど色彩のない口調。

対して、『不可視の衝撃』が腹部に直撃して吹き飛んだカレンは、樹木の腹にもたれかかりながら吐血していた。

ポタポタと、その唇の端から鮮血の液体が痛々しく伝っている。

どこか内臓が傷ついた可能性がある。

けれど、いつもと変わらぬ勝ち気な双眸は痛みによって多少歪んでいるものの、満身創痍な我が身にも、奇襲をかけてきた青年にさえ向けられていなかった。

ナキとレビィ。

その二人にカレンは瞳の色だけでこう訴えている。

助けて――ではない。

逃げろ、と。

自身は一人でまともな歩行もままならないほどの血を吐き、深刻なダメージを負ってしまったのに。

このままでは奇怪な戦闘技術を繰り出す青年に容赦なく殺されて

しまうかもしれないのに。
そんなことは些事だとでも言い張るかのようにカレンはその眼差しでもって、二人にそう叫んでいた。
「……ハッ、馬鹿言ってんじゃねェ」
だが、そんな覚悟、あるいは絶念めいたカレンの願望をナキは鼻で笑い、一蹴する。
カレンの想いや感情、その裏側にある願いまで全て読み取った上で、少年はあえて言葉を続けるのだ。
「自己犠牲なんてみっともねェぞ、カレン。そんなもん俺たちが許すわけねェだろうが。それでお前は満足するかもしれねェけどな、残された奴らのことなんざ微塵も考えてもねェような結論、絶対に認めん――なあ、レビィ？」
問うた少女からの返事はなかった。
ひょっとすると、最後ら辺の台詞は野暮だったかもしれない。
無言の返答はつまり、すでに『半分だけオフに傾きかけていた心のスイッチ』が片側へ振り切っていることを意味し、
「宣告を開始する」
ナキをその『虚無』へ巻き込むために死の宣告（カウントダウン）が始まることを暗に語っているのだから。
「ちょっと、何……言ってん、のよ……。私のことなんか……良いから、さっさと――」
「おい、あんたは一体どこの誰様なんだよ」
レビィの死の宣告（カウントダウン）の調べに重ね、ナキはカレンの抗議を遮るように青年の背に訊ねた。
もう、その聴覚にカレンの都合の良い言葉が触れることはない。
「レト＝イジャスだ」
名乗った青年レト＝イジャスは右手のジッポーを鳴らしながら、そこで初めてナキの方に体を向ける。
拍子に彼の右耳から流れる銀色の鎖がジャラジャラと音を立てて揺れた。

「まあ、実際あんたが誰かなんてことに興味はねェんだけどな。どんな情報ソース（トリックの種）を使って俺たちの前に現れ、どうやってカレンをブッ飛ばしたのか、『炎の大剣』なんて物騒なもんも扱うらしいが、そんな技術元の好奇心さえ今は薄らいでるぜ」

死の宣告（カウントダウン）の数値が零へと歩み寄るのに比例し、ナキの瞳から鋭利な光が溶けていく。

無が浮き彫りとなる。

残り少ない眼光を放ちながら、ナキは敵意を存分に含んだ口調で言う。

「ただし、カレンを狙うってんなら話は別だ。そんな興味だの好奇心だの通り越して俺はあんたを殺すぜ。警告する」

黙したままナキのみに焦点を合わせ、その言葉を聞いていたレトの唇の端が緩やかに上がった。

どこか気の許せる仲間にでも見せるような無防備な微笑みを湛えつつ、それでいて限りなく無関心そうにも聞こえる声でレトはこう返す。

「一応、聞いておこうか」

「今から俺たちはあんたを倒すために闘うんじゃねェ。カレンを守るためだけに動くってことだ。その違いがどういう意味か分かるだろ？　手段なんか選らばねェ。いくらでも卑怯を尽くす。どれだけでもこの手を汚す。よって、殺しにも迷わない」

ナキはそこで言葉を区切り、

「今すぐ手を引け。それが互いのためだ」

告げることは告げた。

言うことは言った。

今の文章の中には一つも嘘がない。

レトがどれほど優れた戦闘技術を誇示していようとも、心を殺した自分とレビィのタッグに、たった一人で勝てるはずがない。

負けないにしても、互いに深い痛手を負うはずだ。

信頼にも近い確信がある。

だからこそ、ナキは本意ではない『交渉』を含めた言葉を発した。
「お前は一つだけ勘違いをしているようだ」
が、ナキの譲歩に対してレトの姿勢は一ミリも揺らいでいなかった。
「オレはそのブラックアウトの女を殺しにきたわけじゃない」
希薄な笑みを崩さないまま、ナキの警告を無価値だと言外に知らしめるように、
「ここにいる全員を殺しにきたんだよ」
それが、その言葉が、彼らの分岐点を一本の手綱へと手繰り寄せる決め手となった。
すでにレビィの死の宣告（カウントダウン）は完遂している。
無言のままスーツの襟元を緩めたナキの瞳からは、もはや温色の眼光が消え失せていた。
右手を背に収める黒い大剣『クトネシリカ』のグリップに触れさせ――
ドッと柔らかい土を足の裏で強く押し込み、驚異的な速度で前方へ跳び出した。
視界の端に赤褐色のハンドガンと群青色のハンドガンを構える少女の姿を捉えながら、数メートル先に佇むレトを射程範囲内へ連れ込むまで一気に肉薄する。
抜刀術は、ナキがよく好んで使用する瞬殺の斬撃だ。
一瞬とも呼べる時間でホルダーから引き抜いた漆黒の両刃を、頭上から大上段で全体重をかけて振り降ろす。
刀身をダウンスイングし切ってしまえば、次の動作に移るのが困難になるだろう。
だが、そのリスクが伴う代わりに、相手にヒットすれば大ダメージを加えられる。
不自然なことに直立したまま僅かな挙動さえ見せないレトの体に、ナキは容赦のない一閃を引く。
そして、右腕に神経を一極集中して注ぎ、一・五倍の情報出力を

得る『情報制限加速（リミッタードライブ）』を起動させた。
ゴッ、という空気を強引に叩き割るような音が生じた。
「！？」
本来ならば、それで全てが終わっていたはず。
しかし、いつまで経ってもナキの手のひらには、人の肉を斬った感触が伝わってこなかった。
力の限り振り抜いた黒い刃にも血液らしきものは付着しておらず、それどころかナキの視界にはカレンとレビィしか存在していないのだ。
足元周辺にでも上半身と下半身に分裂した赤いスーツの死体が転がっていても良いはずなのに――カチン……、という甲高い音はあろうことかナキの真後ろから聞こえた。
即座に振り返るが、それよりも先にナキの体が前方へ突撃するように舞った。
背中に食い込んだ『不可視の衝撃』による強烈な痛みをはっきりと認識できたのは、巨木の腹へ激突して地に落ちたその後だった。
「がッ……！？」
吸い損ねた空気が口から暴れるように漏れ、呼吸のタイミングを逃す。
（な、んだ……！？）
でたらめな回避方法とその攻撃、その威力に困惑する。
一瞬どころか、冷静になったとしても相手の在り方に理解は追いつかないだろう。
情報ソース（トリックの種）はもちろん、レトの身辺からは具体的な武器らしきものさえ見当たらないのだから。
ここにきて、ナキの中にもようやくカレンと似た自覚が芽生えつつあった。
今まで相手にしてきた奴らとは全く異質の技術を所有する、レト＝イジャスの概要が。
カレンからの事前情報によれば、レトは『炎の槍』を最低でも九

つは自在に扱うのだと言う。
それから、自らこの目で見た『瞬間移動（テレポート）』らしき技術と、虚空からの『不可視の衝撃』。
確かに、そこに情報科学の介入があるとは思えなかった。
いくら『理想郷（マリアリア）』でも、あれほど高度な情報スキルは発現できていない。
『でも、あれは火炎装置（パイロキネシス）や発火砲弾（ファイアーボール）とか、そういう科学的な力に頼った現象には見えなかったのよ。あんなの絶対に有り得ない……あんな理論の糸口も見えなかった情報技術、それこそ超能力とか魔法の域よ』
先刻のカレンの切羽詰まったような言葉を思い出す。
本当に絵本にでも取り上げられそうな魔法みたいな力だった。
威力の上限も、射程範囲も、何もかもが理解不能の戦闘技術。
「……いってーな。何もんだよ、あんた。気味が悪ぃ技術使いやがって」
レトを睨み上げるように二本の足を踏ん張らせて立ち上がるナキに、
「オレは〈レイジス・コア〉に所属する単なる下っ端だ。〈ラビット・ランス〉との契約人。ただそれだけの――」
カチリ……、という冷たげな音によってレトの言葉は遮断された。
過度な破壊力を持つ衝撃を真っ向から食らってしまったがゆえに、ナキのスイッチは強制的にオンになったが、心をオフからオンに切り替える手法は何もナキの第一声だけではない。
スイッチの微調整はレビィ自身でも行えるのだ。
（ナイスだ、ダークレビィさん）
心の色が無色のため、逆に質量があるかのような威圧感を全方位に向けて放射するレビィは、レトの側頭部に『ガルガラ』と『リボルバ』の銃口をそれぞれ突きつけていた。
そして、レトはジロリと目線だけを真横にずらし――
（何だ？　どうした？）

その表情を一変させた。
驚きに染まる瞳をさらに剥き出し、まるで幽霊でも見るかのような顔色でレビィを凝視している。
驚愕、困惑、焦燥、絶望、あるいは希望さえも含むような複雑な表情を露にし、硬直していた。
レビィの銃が零距離で頭部に当てられているから、ではなさそうだった。
むしろ原因はレビィそのものにあるような印象を受ける。
その真相は不明だが、到来した時間は有効に使うべきだろう。
ナキは状況に目を見張った。
樹に背中を預けたまま顔だけを持ち上げ、事態の成り行きを苛立ち混じりの表情で見つめているカレンを視界に入れる。
何もできない自身の体に腹を立てているのか、ギリギリと強く歯を噛みしめている様子がナキの位置からでも良く分かった。
『情報処理体（オプション）』による『情報結界（アクセスフィールド）』や情報パルスの機能はまだ健在のようだが、生身のダメージが深刻過ぎて動けないのだろう。
どのような戦闘形態ならばカレンを巻き込まないかを考案しつつ、ナキは改めてレトへと顔を向けた。
常識で考慮すればチェックメイトのはずだが、いかんせん炎を大剣にしたり虚空に消えたりする奇術師に対して、この状況が優勢なのか劣勢なのか現段階では判断しかねる。
カレンの情報とナキ自身が実見した情報を統合して、レトには『瞬間移動（テレポート）』のような戦闘技術を持っていることは事実だ。
それが種のある手品なのか、それとも超能力や魔法と言った非科学的な分野のものなのか、現実的に考えれば答えは明白だ。
情報科学が絶対などと言う世界で生きてきたナキにとっては、そういう一般的人智の領域を越えてしまったような話はフィクションの中だけに留めておいて欲しかった。
受け止められる気がしない。
それでも、情報科学的に有り得ない光景をまざまざと披露され、

冷静な思考はいくばくか損失していた。
『その可能性』の不安が払拭できない。
理論の根幹も理解できない驚異的な力。
それはもはや『魔法』と言ってもある意味間違いではないだろう。
レビィがさっさと引き金に手をかけないのは、そのためだ。
ナキにレトから有益な情報を引き出させるため。
死なせるのは簡単だが、尋問する必要がある。
またはその価値があるということだ。
「お前は……何だ？」
けれど、その質問を先に口にしたのはレトの方だった。
相手は傍らのレビィ。
動揺の色が浸食するレトの瞳には、すでにレビィの姿しか映っていないようだった。
レトは返事を待つというわけでもなく、一人口の中で自問自答するように言葉を転がす。
「何故……いや、それこそ愚問、か。ならば……そうか。なるほど、つまりオレはまだ神に見捨てられていなかったらしい。短絡的だが、その線を考案したことはなかった」
ふいにクツクツと不気味に笑い出し、レビィの紺碧の瞳に焦点を合わせるレト。
一瞬前までの感情の不安定さが一掃している。
「このオレに銃の弾丸などが命中するとでも？」
レビィの銃身を右手で指差しながらレトは明瞭とした声で続ける。
「試しに撃ってみると良い。無論、弾は当たらないがな」
ナキにはそれがハッタリに聞こえなかった。
人間の感情を際限なく取り除き、零に等しいがゆえに純粋な殺意を背負うレビィに銃を向けられ、竦み上がることはおろか軽口を叩けるほどの余裕を浮かべるとは、全くもってタダごとではないからだ。
（くそ、いくら考えてもトリックなんて分かりゃしねェ。隙間ない

距離から撃たれる弾丸よりも速く回避する自信があるんだろうが、どうやってその『瞬間移動（テレポート）』なんてしやがる）

敵の力の分野も看破できなければ、その打開策を生み出せるわけがない。

「この力に対して解決策が浮かばないのだろう？　まさに未知との遭遇か」

レトは苦い顔をするナキに傍観者のような視線を送りつつ、

「まるで理解していないな。お前は科学分野だろうに。いや、だからこそ盲点があるということか。お前はそこの金髪のブラックアウトに、オレが炎を操縦することを聞いたようだが、そこでヒントだ。火とは主にどこに漂う何を消費して発火している？」

あまりにも簡単な設問だった。

それゆえにナキは言い淀む。

「……酸素、か？」

「そう。それがなければ、どんなものも燃えたりはしない。空気の出入りを封じられた瓶の中では、ろうそくの火が消えるようにな。……オレは炎を利用しているわけではない。ただ副産物として生み出しているだけだ。真に行使しているのは、それ。そして、『酸素と結合し、発生した炎』はオレの意思と体の一部となる。簡潔に述べると、炎の一部となったオレの体は『空気中の酸素を媒介として任意の空間に発火するように出現する』というシンプルな理論だ」

ナキの顔が青ざめた。

虚空に現れたり消えたりする『瞬間移動（テレポート）』の種が明かされたからではない。

ナキはレトの種明かしの原理をほとんど理解していない。

そこにはナキたちの科学が水を差すような隙があるようには思えなかった。

けれど、レトが酸素さえ存在する場所ならば、『炎の化身となってどこにでも出現できる』と言外に示していることだけは分かってしまったのである。

「酸素を行使する、だ？　なんじゃそら……ばっかじゃねェの？」
不信感混じりの否定を吐くナキだったが、
「……オーケー、百歩譲ってあんたの言葉が真実だとする。だが、それならどうして炎なんかになって移動する？　あんたは『酸素をコントロールする技術』を持ってんだろ？　だったら、わざわざ火なんかに頼らねェで、直接その酸素を伝って『瞬間移動』すりゃ良いじゃねェか」
ナキの探るような言葉を受け、レビィに銃口を突きつけられたままのレトは手中のジッポーをクルクルと回して遊びながら、感心した様子で答える。
「ほう、そういう発想ができるお前には素質があるのかもしれない。そこに着眼点を持つとは、こちらの基本的なセンスならばありそうなものだ」
レトは初めて心の底から愉快そうに笑って、
「良いか、オレの『対象元素（ブラックイコライズ）』は万能ではない。ガソリンだけ所持していても車体がなくては移動できないように、酸素だけあろうとも炎がなくては移動できない。どんなに便利そうに見える力にも無視することのできない法則や理論があるものだ。全ての『可能性』を紡ぎ出し、常識に置き換えられるわけではない。リスクさえ伴う。そして、それを突き詰める者のことを『異能力者』と言うのだ」
「い、のう……？」
あまり聞き慣れない単語にナキは目を細めた。
「この異能力を一つの学問として捉えた時、オレが『「対象元素（ブラックイコライズ）」の異能力で酸素を行使する理論を構築するための知識分野』とでも言っておこうか。もちろん、分かりやすい教科書があるわけではない。能力の種類は千差万別だ。各々が自身の可能性を定義しなければ発展はまず有り得ない」
ナキの時間がほんの少しだけ止まる。
レトなりに己の持つ異能力――『対象元素（ブラックイコライズ）』とやらを噛み砕いて説明したつもりのようだが、それはナキにとってこれっぽっちも理

解できる論理ではなかった。
異能だの何だのその時点で、脳内思考の歯車は上手い方向に回らなくなっている。
今すぐにでもレトが『実はこういう現実的なロジックのある情報ツールでした』と告白してくれるのを切に願っているくらいだ。
そんな心中をナキの顔色から察したのか、レトは締めくくるように言う。
「もう分かっただろう？　これは『理想郷（マリアリア）』や〈レイジス・コア〉の上を行くような情報科学の力ではない。つまり、常識内にいるお前たち科学側の人間が、非常識に染まってしまったオレたち異能力者の非科学を理解することは不可能だ。理解が及ばないものとは鬼門になる。恐怖の対象になる。結果、お前たちはオレを打破できないという結論に至るわけだ」
ダンッ、と流暢に語っていたレトの側頭部で群青色のハンドガンが火を噴いた。
無言のままレトを停止させていたレビィが『リボルバ』の引き金を引いたのだ。
完璧な零距離だ。
避けられるはずもない。
それなのに、放たれた弾丸は誰の命を奪うこともなかった。
「お前も覚悟の足りない甘いことをしている」
声はレビィの背後からだった。
「さっさと撃てば勝機も見込めただろうに」
レビィの表情が強張る。
全細胞が反射的に脳へ身の危険を通達したのだろう。
オフにしていた『心のスイッチ』が、死への直感と悪寒によって強制的にオンにされたのだ。
それがいかに異例なことかナキは痛感する。
立場はあっと言う間に逆転していた。
グツグツッ……、とレトの手のひらからは三メートル近い炎の塊

が煮えたぎるように溢れ出していた。
「くそっ！！」
銃を撃った体勢のまま硬直しているパートナーの元まで、たったの数メートル。
その短い距離を瞬の狭間で縮めるべくナキは膝を折り、力の限り跳躍する。
そこまでの距離が常しえに感じるほど遠くに思いながら。
「レビィ！！」
ヴォッ、と大気を揺るがすほど芯の硬い音が周囲に拡散した。
ナキの指先数センチまで迫っていた少女の華奢な体は烈火に包まれて、
「なっ……！？」
――消えた。
紅蓮の炎がナキの視界を満たすとほぼ同時、灰色の髪の少女はその姿をくらました。
それこそ、レトの奇術『瞬間移動（テレポート）』のように。
荒れ狂った朱の世界が一帯に広がる。
ナキは業火の渦に巻き込まれながらも必死に手を伸ばした。
ギチギチと全身を蝕む獄炎に耐えながらも必死に叫ぶ。
「ぐぁ……ど、こだ、レビィ！！」
しかし、その指先は最後まで求めたものに触れることはなかった。
「これくらいで変化は起きない、か。いや、そもそもこの少女でサルベージできるかどうかなど分からない。むしろ可能性は零に等しいだろう。だが、だからこそ試行する価値はあるというものだ。このくらいならば、ドッペルゲンガーの引用も通用するかもしれない」
そんな独り言が聞こえたかと思うと、辺り一面に拡大していた爆炎は瞬く間に勢力を劣らせていった。
その動きは不自然極まりなく、まるでブラックホールにでも吸収されていくかのように一点の空間に流れ込み、最終的には勝手に霧散した。

レビィは元いた場所から数十メートルも離れた土の上に、仰向けになる形で横たわっていた。
小さな体が上下していることから、たんに気絶しているだけだろう。
問題は、レビィがどうやってそこまで移動したのかということだ。
単なる爆炎の影響なのか。
それとも、レトの論理不明の力の効果範囲がそこまで及んでいるのか。
「何故オレが敵であるお前に、これほどまで丁寧に手の内を口述したのか、分かるか？」
試すような口調でナキに問いかけたレト自身は、爆炎の中心にいたにも拘わらず火傷はおろか、まるで自らの意思で炎の干渉を妨げたかのように無傷で立っていた。
先程の場から一歩も動いていない。
目を閉じて呼吸するレビィを、音もなく一瞥するレト。
ナキもその視線の先を追い、嫌味を込めて言い返す。
「んなこと知るかよ。あれか、もしかしてあんた喋りたがりの自慢屋か？　自重しろよ、他人に嫌われるぜ？」
しかし、レトはナキの吐く毒をものともせずに、
「その少女に認知させるためだ。異能力という存在の在り方を。『仮定領域の世界』を用いて、ここに昏睡する『矛盾』を前提的に排除し、他界の法則や理論をこの世界に強制適応させる異能力が実在するということを」
こういうのを勘が冴えていたと言うのだろうか。
黙って話を聞いているナキの胸に一筋の黒い予感が流れ落ちた。
「彼女が信じる信じないではない。異能力者から直接その話を解かれることにこそ最大の意義がある。ある意味それは異能力の干渉を受けるようなものだからだ」
何故かは分からない。
だが、本当に何故か。

「でなければ――」

レトの口から出てくる次の言葉だけは、絶対に聞き入れてはいけないような気がした。

「でなければ、その少女で『実験』をする意味がないだろう？」

11

pm　16：44

ナキ＝エクイルドは不安の色を織り交ぜた瞳を細め、眉根を寄せた。

（どういう、ことだ。レビィを『実験』？　どういう意味だよ、そりゃ）

少し離れた場所で横たわっているレビィ＝ハルデンスはもちろんのこと、樹木に背中を預けて座り込んだままのカレン＝ローズも戦闘に加われる状態ではない。

吐血は治まったようだが、中身はボロボロのようである。

レト＝イジャスの攻撃力は、不可視の情報障壁『情報結界（アクセスフィールド）』を果てしなく無視していたのだ。

確かに『理想郷（マリアリア）』に展開されている『情報結界（アクセスフィールド）』と、『情報処理体（オプション）』に搭載されているそれとでは規模も容量も違い、スペック的には数段階も劣る。

指向性も攻撃をメインとしていて、鎧のためのシールドではないのだ。

それに国家規模と個人の大量生産型では、そこに詰め込むギミック回路が大きく異なる。

けれど、それは見当違いというもの。

レビィやカレンを戦闘不能に持ち込んだのは、単純にレトの一撃一撃の方が結界の防御力を上回っているからに他ならない。

耐久力こそ零に帰らないものの破壊力があり過ぎて生身へのダメージ浸透が深刻なのは、過刻まともに衝撃を食らったナキが身をもって知ったことだ。

（『情報処理体（オプション）』なんてもんはＳＯＩカード（ソフトウェア）さえ

残ってりゃ替えはいくらでもある。もう増援の方も望めねェってんなら、玉砕覚悟で突っ込むしかねェじゃねェか）

ナキは素早くそう決断して、

「おい、『対象元素（ブラックイコライズ）』使いの非科学者さんよ。あんたの目的は何だ。何でレビィみてェな新米ブラックアウトに固執してやがる？　レビィが〈ブラックアウト〉に関する核心の情報を脳に蓄積してるかってーと、そう言うわけでもねェ。俺が言うのも何だが、泳がせておいても構わねェと思うんだが？」

このタイミングでナキがそう口を割って切り出したのは、時間稼ぎに過ぎない。

この短時間の間でレトが『人の話に応じる人物』だということが分かったからこその選択だった。

とは言っても、手配しているはずの応援がきてくれる気配はない。

今は一人で二人の少女、特に身柄を狙われているらしいレビィを守らなければならない。

何としても。

幸いにもレトの矛先は戦闘不能の二人ではなくナキ個人に向いていたが、その矢もいつ方向転換するか知れたことではない。

ここで重要となるのは時間稼ぎだと悟られないことである。

この際、目の前の敵の目的などどうでも良い。

どの道、彼女たちを守ることに変わりはない。

「逆に問おう。お前は何のために立ち上がる？」

レトの返しに少しばかり意表をつかれたナキだったが、

「……別に俺は善人じゃねェからな」

そこに一拍を置き、皮肉めいた頬笑みを浮かべ、あえて自虐的に答えることにした。

「誰も彼も救えるような強さを持ってるわけじゃねェし、どこまでも正義の味方を貫けるような覚悟があるわけでもねェ。惰性で生きていくために今の職に満足してるだけで、困ってる奴らや助けを求めてる奴ら全員を守りたいと思えるような博愛じみた思想も、矜持

も持ち合わせてねェよ」

だがな、とナキは静かに言葉を区切る。

「だからこそ、全てが救えねェってことが分かってるからこそ、俺は本気で守りたいと思えるような存在の一人や二人くらい、絶対に守り通してみせると決めてんだ」

「……」

「ああ、青臭い台詞だってことくらい自覚してる。小便臭いガキの強弁だってことも」

しかし、レトはナキの言葉を笑ったりはしなかった。

「ならば、ここに互いの事情なんてものは関係ないだろう。オレはオレの目的のために、お前は彼女たちと自分の命のために闘う。それでは満足できないか？」

ここが引き際だった。

ナキは会話による時間稼ぎの見切りをつける。

「そうだな。それ以上に殺し合う動機なんて必要ねェのかもな」

そして、戦闘が始まった。

言葉の時間稼ぎを断念したナキは、故意的に深い追いするよう前方に強く踏み出した。

傍から見れば単なる黒いプラスチックにしか見えない『情報処理体（オプション）』端末機は、ナキに超人的脚力の脈動を与える。

『情報結界（アクセスフィールド）』の耐久力の減少と機動力は比例しない。

いくら耐久のパーセンテージを削れようと零に還元しない限り、情報パルスの波形は保持するのだ。

ナキは右手に馴染むもう一人の相棒、大剣『クトネシリカ』を構えながら駆ける。

理解のできない手段で『瞬間移動（テレポート）』を可能とするレトに対し、無様なフェイントなど意味はないだろう。

戦闘スキルとその破壊力、防御力、回避能力、洞察力、動体視力、思考速度、体力、精神力、その他全てが上回る敵には何をやっても勝てるわけがない。

圧倒的な差を埋める起死回生の術などナキは持っていない。
（勝てはしねェだろうが、負けるつもりもねェ。差し違えてでも時間を稼いでやる！！）
ならば、漆黒の刀と共に散りに行く。
一か八かの賭けだったが、予想に反してレトはすんなりとナキが仕掛けた誘いに足を踏み入れてくれた。
レトの右手に例の『炎の大剣』が精製されている。
『対象元素（ブラックイコライズ）』の応用なのだろう。
ナキは剣術の道を極めた者でもなければ心得さえろくに弁えていない不束者だったが、それでも長年連れ添ってきた『クトネシリカ』を扱う手ならば、他の誰にも負ける気はしなかった。
ナキの右腕が唸る。
ただ、自分が仲間だと認めた少女二人を守りたいがために、少年は黒刀を振るう。
一六年をかけてようやくできたこの繋がりを断ち切る権利など、誰にも与えるつもりはなかった。
（この一歩だけは絶対に譲らねェ）
黒と朱の両刃が勢いをつけて交わる。
肩口から水平に薙ぎ払ったナキの直刃を、レトは炎の角度を調節して受け流した。
ナキの打ち出した『クトネシリカ』の軌道に合わせ、刃の方向をそらす見事なパーリングだった。
重量系の武器に対し、精密な受け流しができるものなど少ないだろう。
ナキは怯まず、もう一度豪快に巨大な刀身をサイドスイングする。
力任せの一撃を、レトは炎の大剣の腹でスムーズに流した。
レトが真っ向からのブロッキングを行使しないのは、武器が壊れる心配ではなく、体ごと後ろに弾かれることを懸念しているからだろう。
（得物の強度には、それほど開きはねェ。だが、重さなら俺の『ク

トネシリカ』に分があるはずだ。こいつもかなり体術を鍛えているようだが、扱う者の機動力には科学的な差がある）

それは『情報処理体（オプション）』の補助を受けるナキと、生身で炎の大剣を振るうレトの差だ。

至近距離（クロスレンジ）から近距離（ショートレンジ）の長い攻防が続く。

双方は鍔迫り合いになる形で幾度となく衝突し、接近しては睨み合う。

レトはナキの猛攻に防戦一方を強いられた。

（このまま体力と集中力を削って、押し切ってやらぁ！）

そんなナキの勢いとは裏腹に、結末はすぐに訪れてしまった。

「ッ！？」

ピシピシッ……、という不吉を知らせる音の正体は、黒き刃の悲鳴だった。

『炎の大剣』との接触面が飴のように溶け、腹の中心から徐々にヒビが浸食しているのだ。

剣は盾とは違い、その形状から負荷を分散したりできない。

そのため刀身は灼熱のダメージをストレートに吸い込んでしまう。

どれほど頑丈な物体でも、攻撃を受けているうちに負荷は溜まり、いずれは破滅する。

レトはナキの攻撃を受け流しながら、反撃の布石を作っていた。

（なんて無茶苦茶な野郎だ。ブラックアウト相手に、一人でここまで渡り合えているだけでも褒められたものだってのに）

じわじわと『クトネシリカ』の分厚い刃を熱で溶かし、浸食するレトの炎。

少しでも強く押し返せば、炎の刃はたちまち黒い刃を溶解させ、ナキ本人に襲いかかるだろう。

だからと言って刃を引くことはできない。

（だったら、俺も無茶苦茶でいってやる！）

ナキはグリップを握る手の力を瞬間的に強めた。

レトの剣先を横合いに逸らしたのだ。

大剣と大剣の刃が互いに食いつくように重なっている状態ゆえに、ナキが『クトネシリカ』をあらぬ方向へ力づくでずらせば、炎の大剣も強制的に移動する。

ナキが力を込めたことによって『クトネシリカ』の刃と炎の接触面はより密接になり、浸食率が飛躍的に上がった。

すでに黒い刃の七割が燃え盛る刃に食われてしまっていた。

まるで高周波レーザーカッターにでも切られていく鉄くずのように。

そして、やがては限界を向かえる。

『クトネシリカ』の刃は二つに切断された。

レトはそのまま炎の大剣を振り抜ぬこうとしたが、いささか軌道に無理があった。

『クトネシリカ』の犠牲を顧みず、ナキがレトの構えを下段気味にしたせいだ。

微かに剣筋が鈍り、中途半端な力でナキの右肩に展開する『情報（アクセス）結界（フィールド）』の耐久を浅く削る程度に留まる。

対し、どれだけ小さかろうと命懸けで生み出した隙間を見逃すほどナキも魯鈍ではない。

もとから己の得物を呈してレトを叩き斬るつもりだったナキは、肩に走った火傷のような痛みも意識外に飛ばし、三分の一しか刃の残っていない『クトネシリカ』を力の限り握りしめて、上方から下方へと、渾身の一撃を振り下ろす。

「これで――チェックメイトだあああああああ

った。
けれど、それは結果でしかない。
まるで手応えのない感触に、ナキの喉は三六〇度砂漠地帯に取り残された者のように一気に干上がった。
口の中から急激に水分が消えていく。
空振りが意味するところは、再びレトが視界から消えたという事実と同義だったからだ。
反射的に振り返ったその矢先、情報の結界を丸ごと無視した痛覚がナキの脳内を圧縮した。
見ると、炎の刃の先端部が数センチばかり腹部から突き出ていた。
「かはっ」
鉄のような味の赤が唇の端からボタボタと垂れ始め、スーツの上着や土の上に歪な水玉模様を描き出す。
右手から力が抜け、大破した『クトネシリカ』が半回転して落ちる。
膝から崩れ落ちるナキの背後でサクっと、捨て猫でも切り捨てるかのような軽い所作で、刺突に特化した『炎の槍』を抜き取るレトがいた。
ナキは骨抜きでもされたみたいに力を失い、前のめりに倒れ込む。
(これ、は……ちっとばかし……ピンチ……か)
うつ伏せになる形で土の上に横たわるナキを数秒だけ見下ろしていたレトは、すぐにその視線を他へ移行させた。
見たところ一番無傷で倒れている灰髪の少女は、少しだけ離れたところで静かに意識を埋没させている。
「オレも鬼ではない。お前たちが抵抗さえしなければ別れの挨拶くらいさせてやっただろうに」
上辺だけ実に残念そうに呟くレトは、右腕を真横に薙ぎに払って『炎の槍』を投げ捨てた。
弧を描きながら宙を舞った炎の得物は、その軌道に合わせるように火球へと形状変化する。

直径三メートル程度の炎の塊が霊魂のように空中をさ迷い、気絶しているレビィの体躯に標準を定めていることを――
一線を引いて黙視していたカレンだけが悟っていた。

それは苦痛の中で耳をそばだてていたカレンが良く分かっていることだった。
心の奥底で一番言って欲しかった者たちから、その言葉を聞くことができたのだから。
一挙一動、他人に八つ当たりするような行為でしか心の内を表現できないような傍若無人者との絆を、暴力的な振る舞いでしか誰かと関係を築けないような杓子定規との絆を、彼らはきちんと認めてくれていた。
（だけど、今はそんな安寧に浸ってる場合じゃない）
カレンは目尻に光る粒を溜め、奥歯を噛み砕いてしまいそうなほどの強さで歯噛みしていた。
そうやってレト＝イジャスを睨み上げ、注意をこちらに向けるのが精一杯の抗いだった。
情報の結界が中和し切れなかったダメージ浸透によって、芯から力が抜けている。
「や、め……な……さい、よ」
それでも、カレンはズタズタなった自分の体に構わない。
血だらけの唇を開く。
今にも消えてなくなりそうな声を振り絞り、残り僅かな力を行使する。
たとえ、それが寝返りも打てない乳児が泣き喚く程度の挙措だと分かっていても。
この破綻しかけている状況に何の効果ももたらさない、意味のない行動だと理解していても。
逆に沈黙している理由の方が見当たらない。

「やめ……な、さい、よ！」
血生臭く漏れる息と共に口から赤の液体が上着の上に飛散する。
「アンタ……何をそん、なに……抱えてんの……よ」
すると、レトは何かを考え込むかのように、やや時間を置いた。
それからスッと体の向きを変え、カレンに対して初めてと言っても良いほど対等な物言いでこう応じる。
「大抵の人間は各々の闇や悲劇を抱えているものだ。問題は個人的なディテールやウエートではない。それを他人に見せるか見せないか、または他人の目に映るか映らないかだ」
まるで何かの堰が切れたかのように、レトは次々と重みの増す言葉を解き放つ。
「しかし、それがどうしたと言うのだ。ここでオレが背負っている闇や悲劇を話してやっても構わないが、それで何がどうなる。赤の他人であるお前が事態に切実な光明を差してくれるとでも言うのか。ならばいくらでも言葉を尽くそう。語ることで『彼女の悲劇』が終焉を向かえるのならば、オレは何だってすると決めたのだから」
カレンは感情に押し流されるまま言い返すようなことはしなかった。
ひたすらレトの瞳を見つめ返す。
話に耳を傾ける、それを徹底することで何らかの変化を望んでいたからだ。
人は『誰かに話す』という行為によって負担の逃げ道を開通させることができるのだから。
「だが、お前たちには理解できないだろう。情報と科学を盲信し切っているお前たちには、『彼女』を救い出すことはおろか悲劇を受け止めることすら不可能だ」
ところが、憂いを帯び始めたレトの声音によってカレンの目論見は泡と化した。
「何……言ってん、の？」
表情を歪めながら途切れ途切れに訊ねるカレン。

喋るごとに温存していた体力が着実に限界を招いているが関係ない。

レトは赤い上着の内ポケットからタバコを取り出し、口で咥えながらジッポーで火をつける。

「『彼女』を救済することのできないお前に話す価値などない。そして、本当の意味で悲劇の共有は有り得ない。それこそブラックアウトであるお前たちが嫌と言うほど思い知らされているだろう？」

レトの肺から吐き出された紫煙はすぐに虚空と同化し、やがては溶けて消える。

「だか、ら……そんなの、話してからじゃ、なきゃ……分かんないじゃない……」

カレンは眼前の闇で溺死しかけている愚か者を、どうにかして引きずり上げたかった。

レトの事情など微塵も知らないし、彼には彼なりの確立した目的があって、その覚悟の上で行動しているのかもしれない。

それは世間から見て一〇〇人が一〇〇人とも同情し、賛成するような内容なのかもしれない。

だけど、その中の一人が異議を唱えてはいけないというわけでもないだろう。

周りの意見に同調しなければならないというわけでもないだろう。

世論がいつだって正しいわけではない。

それは正当化した常識にこそなり得るが、本質を貫いた部分では他の者から見て間違っているかもしれないのだ。

（――ああ、そっか。だから……コイツも、コイツにも『基準』があるのか）

この時、漠然とではあるが、カレンは知ってしまったような気がした。

レトの双眸がどこまでも夜闇に似ていて、何モノにも揺るがない芯を宿らせている外堀の理由を。

「結局、人の祈りは無価値だ。この世界に神は不在しているのだか

ら」

それとほぼ同時、物理的には手を伸ばせば届く距離にあるというのに、どうしても縮めることのできない隔絶した壁が見えた気がした。

両目から溢れ出した涙が頬を垂れている意味が見つからない。

少なくとも己の死へと直結した恐怖によるものではなかった。

それならやはり、自分の安価な信念では誰も救うことができないという現実を胸に押しつけられたせいなのだろうか。

（だったら、私じゃコイツを助けることなんてできない。コイツが声も上げずに求めてんのは、自分を救済することじゃないんだから。そして、今の私にはその資格がない。詰まるところ、私はただの偽善者だったってこと。勝手にコイツを救おうとか考えて、それがお門違い、しかも自分の手に余ることだと分かった途端に手のひらを返して偉そうに落胆する。たくっ、どこまで自分中心なのよ、カレン＝ローズは）

カレンの意思から言葉を繋ぐ気力が損なわれた。

身体的問題ではなく、心が折れた。

無力という響きがこの上なく痛々しかった。

覚悟の度量が違い過ぎたのだ。

それがどうしようもなく悔しくなって、俯き、誰の耳にも留らないほど生に乏しい声で――

それでも、カレンは唱える。

「私は……私は、まだ」

まだ、きっと誰かを救える。

生きてさえいれば、少しずつ大人になって強くなれるはず。

あの青髪の少年だって。

あの灰髪の少女だって。

必ず守り通してみせる。

何故なら――

「仲間、だからな」

幻聴、かと思った。
ゆっくりと顔を上げると、そこには不確かな現実が陽炎のように揺らめいていて、けれど確実に質量のある両足でもって地面の上に佇んでいた。
「仲間だから、約束する。これ以上カレンの目の前で誰かが死んじまうようなことは、俺が全部止めてやる」
声の主は横っ腹に風穴が空いているのにも拘わらず、そんな激痛を堪えている素振りさえ見せないまま滑らかな口調でそう言った。
「そんでもって俺の相方に手出しするような勇者気取りは、積極的かつポジティブに殴り飛ばしてやる。拒否権は認めねェぜ――レト＝イジャス」
そこに、ナキ＝エクイルドは立っていた。
「……腹部の傷は決して浅くはなかった。塞がったわけではないだろう。あまりの激痛に感覚が麻痺してしまったか。それとも、その『情報処理体（オプション）』は装着者が一定のダメージを負うと強制的に痛覚を遮断させるようなパルス回流の新機能でも搭載しているのか？」
レトは赤黒い血が染み出ているナキの腹部を俯瞰的な目つきで眺めながら、
「しかし、その結界も超人的な機動力も……終わっているのだろう？」
窮地を乗り越えて立ち上がったナキに向け、空中浮遊している火球が投擲された。
ヴォッ、と強烈な火力を蓄える炎の弾丸がナキを標的にして飛翔する。
それは銃器から放つ弾丸のような直線的軌道を軌跡とせず、まるでリモコンで遠隔操作しているラジコンのようにナキへ飛来した。
速度に制限がかかる代わりにコントロールの精度が飛躍的に上昇している。
しかし、ナキが横合いへ跳ぶように回避すると、その火球は湾曲を描いて隕石のように地面に衝突した。

ドッ、と地面の土が噴水のように爆ぜ上がり、炎の断片が四方八方へ盛大に飛び散る。
そこにクレーターが生じて、マグマのような泉が形成する。
今のは単なる偶然だ、とカレンは思った。
ナキの『情報結界（アクセスフィールド）』はすでに零に帰している。
『情報処理体（オプション）』から得る情報の結界が無効になるとは、つまり人体に注がれる情報パルスも遮断されるので、超人的な機動能力さえも失ってしまうということ。
先刻のあれを生身で食らえば、人間の体がどうなるかくらい容易に想像できる。
それにも拘わらず、ナキは脇見も触れずにレトとの距離を詰めるべく、ひたすら前へ前へと走り出した。
そこに恐れというものが欠片もないかのように。
「……」
そんな最中、レトは訝しげに眉を寄せていた。
真正面から攻めてくる少年の口元が微かに緩んでいたからだ。
まるで勝利を確信したかのような不敵な微笑み。
そこに違和感を覚えたのか、レトは右手のジッポーを剣の柄のように握りしめて――
ダンッ、という音が鼓膜に突き刺さり、レトのジッポーのみが精密に弾け飛んだ。
それはハンドガンを所持していないナキや、瀕死状態のカレンが放った弾丸の音色ではない。
この一年、ずっと聞き続けていたナキならば視認せずとも分かる音だった。
赤褐色のハンドガン――『ガルガラ』の発砲音。
「なるほど。根本を絶つために、あえてオレの身体ではなく火元を狙ったわけか」
レトは皮肉な微笑みを滲ませ、そっと瞳を伏せる。
「その選択は概ね正解だ。ブラックアウト」

瞬間、肉薄していたナキの硬い拳が、まるで吸い込まれるかのようにレトの頬へと叩き込まれた。

理論不明の『瞬間移動（テレポート）』による緊急回避を行わなかった異能力者レト＝イジャスは、そのまま後方数メートルほど吹き飛び、ついに地面の上で沈黙を生み出した。

ナキ＝エクイルドは乱れた息を整えつつ、殴り飛ばしたレトと己の拳を交互に見比べて、

「ハハ……ガッハハハハハハハハハハハハッ！！　このマヌケめ、レビィがそう簡単にくたばるわけねェだろうが！　この歳にしてアイソトープ比率五三・九パーセント獲得とかいう前代未聞の異例児野生児天才児！　そんな最強少女と俺様による『囮と気絶の漁夫の利作戦』だコノヤロー！！」

ビシィッ、と土の上に倒れているレトを指差して魔王のように笑うナキと、いつの間にか立ち上がってニコニコと笑っているレビィ＝ハルデンス。

カレン＝ローズは一人、話に置いて行かれた子供のように目を丸くしている。

あれだけ三人の攻撃を交わしていたレトが、ナキの何の捻りもないボロボロの一撃を容易く受け入れた意味が分かっていないのだ。

「終わった……の？」

数メートル先で転がったまま動かないレトを見ても、なお疑問と不安を拭い取れないような顔をしてカレンが言うと、

「分からねェのかよ、カレン。レビィの機転が効いたナイスフォローが」

浮かない表情をするカレンにナキはふんぞり返ったまま目線をレビィに移す。

カレンも視線を後に続かせると、

「にぃや！」

先程レトの手中より正確に対象物のみを撃ち抜くという神業的な射的能力を披露してくれた狸寝入りのレビィが、ちょうど土の上に落ちていたジッポーを両足で思いっ切り踏み潰す瞬間だった。

ゴリゴリと腰まで入れて粉々にしている。

「要するにな、『火種にしてたジッポー』さえなけりゃ火は生み出せねェんだよ。そこで伸びてるアホの『対象元素（ブラックイコライズ）』はあくまでも酸素を操る能力らしいからな」

「火元がなくなっちゃえば『炎の大剣』も作れないし、『瞬間移動（テレポート）』もできないってナキは予想したんだよ、ツンちゃん♪」

「そういうこった。多分そうなんじゃねェかっつー賭けが、たまたまヒットしただけだが」

ナキが左手首の『情報処理体（オプション）』を人差し指でコツコツ叩きながら言う。

どうやらカレンの知らない間に二人の間で、端末機による情報が交わされていたらしい。

「まあ、取り合えずは皆生きてる。それが何よりだ」

二人は動けずにいるカレンに歩み寄りながら、

「そうだね！　皆ボロボロのドロドロだけど、ちゃんと生きてます♪」

「はは、カレンも命に別状はなさそうだな。輸血は必須だろうが……あー、いや、俺もか」

微苦笑を含ませながらナキがその手を差し出す。

彼の手に応えようと、カレンも気恥ずかしそうに視線を逸らしながら震える腕を持ち上げた。

人知れず、隙間だらけだった心に安堵感が満ちていくのを感じながら。

けれど、仲間に繋がりかけたその手は途中で止まってしまうことになる。

「人に殴られたのは久方ぶりだ」

心臓が激しく鼓動を打った。

三人の視界の隅でムクリと起き上がる青年の姿が映った。
「マジかよ、こいつ……」
「む。あたしはまだ闘えるよ、ナキ」
布切れ一枚で辛うじて体を支えているようなナキと、何故かレトからその身を狙われているレビィが再び絶望に立ちはだかる。
しかし、存外にもレトは軽薄な笑みを露にしているだけで、
「安心しろ。これ以上、闘う意思はない。これ以上は割に合わないからな」
は？　と誰かが返すよりも先にレトは踵を返し、あろうことか三人に背を向けた。
まるで本当に闘う意思がないことを証明するかのように。
「ただし――」
途端、語気を強めるレトの眼差しが振り返り、レビィへと注がれる。
「彼女だけは貰って行くがな」
レトは二人に横顔を見せたままこう続けた。
「火種なんてものは、どうにでもなる。炎も戦争も一度燃え上ってしまえば火の手は一瞬で世界に及ぶ。そういう分かりやすい構造になっているんだ、悲劇は」
言葉が終わるか否か、どこからともなく出現した炎の熱気が周囲を包囲するかのように放蕩した。
見れば、レトの背中に『炎の翼』が生えていた。
両翼合わせて一〇メートルはある。
そこから爆ぜて消える無数の火の粉がまるで浄化を象徴する羽毛のようだった。
場違いを承知で、ナキたちはこう思う。
何の混じり気もない綺麗な色だ、と。
「それと、また勘違いをさせたようで悪いが、オレは酸素を行使する異能力者ではない」
それでも、束の間の幻影はすぐに現へと形を変える。

「オレは酸素も含めた『気体元素を行使する異能力者』だ」
そんな言葉を残し、レトは言っていた通り虚空に消えて、この場から退散した。
本当に、あっけなく。
きっと、誰もが口を揃えて言うだろう。
ナキに非などない。
責められるわけがない、と。
それは少し距離を置いた位置から成り行きを眺めていたカレンが保証できる。
あれは、どうしようもないだろう。
ナキの『情報結界（アクセスフィールド）』はとっくに壊れてしまっていた。
いくら〈ブラックアウト〉とは言っても中身は単純な人間の細胞が詰まっている。
だから、いきなり『不可視の衝撃』によって吹き飛ばされてしまっては、阻止できるわけがない。
――発火作用による『瞬間移動（テレポート）』を行ったレトに羽交いじめにされたレビィが、炎と共にどこかへ連れ去られるのを。

12

pm　17：00

『歴史上、神様をサルベージするという無意味極まりない人類の計画が永久凍結したのは、そもそも想像力に欠陥を抱えている人間が思念し、投影した主など神であって神ではないからだよ。

神様はどこまで行っても人の手が及ばない存在でなければならないからね。

ところが人類は神様を諦めることができなかった。

多岐に渡る愚昧な手法を繰り返し、試行し、模倣し、昇華し、検閲し――

すると、やがて人類の思考は科学へと変遷していった。

もしかすると、そっちの世界で情報と科学ばかりが異常なまでに躍進を遂げた理由は、そこにある執着心なのかもしれないね。

もちろん、それを裏づける証拠などないけれど。

と、そうこうしている内に人類はとうとう見つけ出してしまったんだ。

神の存在にも劣らない、人の心を魅了する「それ」を。

確かにどこの世界にも神様は存在しなかったけれどね、「異能力」というものなら君たちの世界にも再現――いや、抽出していたんだよ。

そこで人間たちが発想したお話と言うのが、「異能力によって創造主に酷似した生物を捏造する」という、ありがちと言えばありがちな展開だったんだ。

そのおとぎ話に導入したのは、人柱に仕立て上げられた一人の少女。

まあ、最終的には彼女の生命も落とされかけたんだけれどね。

何故だか想像できるかい？
説明のつかない力を持つ少女の印象が、人々の敬意に恐怖心を上書きしてしまったからだよ。
……ところで、君は「世界一分前始発」なる説を知っているかい？
人間の記憶の曖昧さと、世界が太古の昔から続いているものだと証明できないことに託つけて、「世界は一分前から始まったのかもしれない」という支離滅裂な説のことだよ。
人間の脳みそに蓄積される記憶なんかでは「世界が一分前に突如として出現したわけではない」と断言することは不可能だろう？
過去の遺物も意味を成さない。
それならボクたちが記憶している思い出や知識とは何か。
個人の既成概念や昨日の記憶、一週間前の記憶、一ヶ月前の記憶、一年前の記憶とは何か。
それでも、これらはその問いの答えには決して成り得ないんだ。
それこそ、神様が君たち人間に植えつけた「間違った記憶」なのかもしれないからね。
さあ、今の話には「矛盾」があるだろう？
はは、滑稽だと笑うかい？
ボクとしては気に入ってるんだけれどね。
君はどう思う？』

∞　∞　∞

界隈であれだけ赤い色彩を放っていた炎の渦は、奇怪なことにまるで己の出演項目が終わったことを悟った役者のように潔く舞台上から鎮火していった。
（何て、奴……）
カレン＝ローズは肩の力を抜き、そっと細い吐息を吐いた。
レト＝イジャスは自分たちの前で酸素だけではなく、気体元素そのものを『対象元素（ブラックイコライズ）』で駆動させることが可能だと明言した。

それが真実だとすれば、あの青年なら酸素濃度やら何やら微調整して山火事にならないような状態にしておくことも、赤子の手を捻るくらい容易にやってしまいそうだと思った。

いや、とカレンは余念を振り払うように頭を振る。

呆れ混じりの苦笑を口元に含む。

未知なる力を悠々と振るうレトに成す術なく翻弄された挙句の果てに、仲間の一人も守ってやれなかった自身の底知れない不甲斐なさ。

それと、あの二人が死線を潜ってもなお敵である自分たちを生かしたまま戦線を離脱する猶予さえ持て余していた、あの異能力者にそれぞれ違った意味で戦慄すら覚えた。

天下の〈ブラックアウト〉が三人もいながら無様だった。

しかも、たかだか小組織が発しているジャミングなんかで本部との通信経路が不確かである上に、姉であるクレア＝ローズはエラー時の救援すら計らっていないという始末だ。

何が世界最先端を行く『理想郷（マリアリア）』の情報科学技術だ、とカレンは舌の上から悪態を吐き捨てる。

本当なら誰よりも迅速にあのバカ娘を助けに行けるはずなのに、自分たちのどうしようもない状況に一番腹が立った。

苛立ちを全てそこに詰め込むように舌打ちをする。

ふいに脱力していた重い首をおもむろに上げる。

視線を前方に彷徨わせると、そこに戦意喪失の背中が目に映った。

極限の負傷ないし絶望で膝を折っている青髪の少年の後ろ姿が。

（そこのバカは腹部に著しい損傷を受けてる。おそらく結界も死んでるはず）

しかし、とカレンは思う。

己の左手首にベルトで固定する『情報処理体（オプション）』端末機に視線を落とす。

侵入者の警報でも知らせるかのように赤い照明で明滅する液晶画面を視認する。

まだ、機能は生きていた。
見ると、カレンの四肢を防護する『情報結界（アクセスフィールド）』の耐久力は、各部位残り二パーセントと表示されている。
手榴弾の一発でも食らえば、『情報処理体（オプション）』の情報パルス機能がたちまちショートしてしまうくらいに結界の耐久力は消耗している。
これを失えば、『情報結界（アクセスフィールド）』だけでなく、神経系及び筋肉などに超人的機動性を付与するパルスの回流も遮断され、カレンの身を守るブラックスーツは単なる特殊繊維に成り下がってしまう。
大抵の〈ブラックアウト〉はそんな状況に陥ることを由々しい事態だと認識しているし、そうならないよう万全な下準備も怠らない。
万が一、銃弾の飛び交う戦場で生身になったとしても、兵隊としての戦闘訓練は叩き込まれているから、そう簡単にくたばることはない。
けれど、彼ら〈ブラックアウト〉が『情報結界（アクセスフィールド）』や超人的機動性を失うことを何より恐れているのも、また揺るがない一つの事実である。
（だから……）
機能停止の境界線が危うい『情報処理体（オプション）』を左手首に装備するカレンは、湿った土の上にだらしなく伸びる自身の手のひらをじっと見つめた。
血が混じり、泥だらけだった。
（だから……それがどうした）
それでも、閉ざされたのは可能性だけではなかったはずだ。
傷だらけの拳を固く握りしめる。
動けませんなどと戯言をほざく気はなかった。
ここは踏ん張り、立ち上がらなければならない時なのだ。
「……で、アンタはどうすんの」
気がつけば、カレンは地に崩れ落ちているナキの丸まった背を見下ろしていた。
「どうするっつったって……もう、無理だろ。どう見てもここが限

界じゃねェか……」

くぐもった声は振り返らず、ポツリポツリと土の上へ落ちては消える。

「大人しく応援を待とうぜ。それが懸命だ。いきなり連絡が取れなくなったんだ。きっとクレアさんたちも探してくれてる。今の俺たちには何もできやしねェよ」

カレンの見る錯覚だろうか、その双肩が微弱ながら震えている。

「詰まれたんだよ、俺たちは。完敗だ。打つ手なし。一人は横っ腹に穴まで空いてやがるし、片やもう一人は今の今まで瀕死で沈黙してたんだぜ？　どうしようもねェよ」

少年はかすれた声でせせら笑った。

その瞳は今、開いているのだろうか。

それとも閉じているのだろうか。

とても小さく見えるその背中が、腹部の風穴よりも痛々しく見えるのは何故だろう。

「そうやって打ちひしがれてれば楽よね。責任転嫁なんて自分の心の中でも可能なんだし」

フン、と無愛想に鼻を鳴らす。

「確かにアンタの言う通りかもしんないわよ。でも、そんな夢想を継続するよりも前にやるべきことがあるんじゃないわけ？　もっと器用に生きなさいよ。後悔しても良いの？　偽善でも自己満足でも何でも良いから答えてみなさいよ。アンタにとってあのバカは何なの？　ただの仕事仲間だから殉職も仕方がないとかって割り切れるほど安価な存在なの？」

返答は、ない。

その無言が説教はよせと言っているようで、カレンの口調はますます冷徹さを増していった。

「今この瞬間でさえ、あの子がどんな目にあってんのかも分かんないのよ？」

したくもない想像が脳裏を過る。

残虐な拷問や人体実験の光景などいくらでも思いつく。
重苦しい静寂が森の中に充満した。
それから何分経っただろう、カレンは人に踏み潰された花を見るような眼差しでナキを見下ろし、諦めたように小さく嘆息する。
「……そう、分かったわ。アンタがそう決めたんなら強制はしない。私は一人でもあの迷惑女を探しに行って一言文句を言ってやる。ついでに、あの琥珀頭もぶん殴ってきてやるわよ」
そして、背後からナキの左手首を乱暴に掴み上げ、ブチブチと彼の『情報処理体（オプション）』をむしり取った。
「これはもうアンタには必要ないもんよね。結界もパルス機能も停止してんだし、あの子を助ける気力なんてないんだからさ。だから、これは私が貰う。ああ、安心しなさい。中のＳＯＩカードはちゃんと返すから」
言いながら少しだけ未練がましい挙動で踵を返すカレンは、ナキと背中を向かい合わせたまま、そちらを見ることもせずに、
「私を助けてくれたことに関しては礼を言うし、アンタたちの顔をもう一度見れたことは……その、本当に嬉しかったのよ。アンタが立ち上がってくれた時だって……」
けど、と悲哀の色を滲ませた表情で後づけし、
「今のアンタ、最高に格好悪いわ。一生そうしてなさいよ、バカ」
ボロボロの足取りで、その場を去って行った。

「――なんてな」
ナキ＝エクイルドは悪戯好きの少年がその作戦を成功させた後、親にこっぴどく叱られたにも拘わらず全く懲りていないような顔で小さく舌を出した。
（悪いな、カレン）
心の中でひっそりと拝むように手を合わせるナキ。
カレン＝ローズが持ち去って行った『情報処理体（オプション）』はフェイクだ

った。
あれは体中傷だらけで正常な歩行もままならないカレンを連れて行くわけにはいかないと考えた末、ナキが即興で編み出した迫真の演技だったのである。
異能力者レト＝イジャスもそう馬鹿ではないだろうから、真っ先にレビィ＝ハルデンスの『情報処理体（オプション）』を破壊しようとするだろう。
すなわち、カレンが奪ったナキの『情報処理体（オプション）』でレビィの所持する『情報処理体（オプション）』に緊急アクセスし、レトの移動先を導こうとしても無駄なはずだ。
ナキの思惑通りカレンもしばらくは偽の情報が走る画面に踊らされ、歩き続けることになるだろう。
もっとも、優秀なカレンのことだから捏造したダミー情報には早い内に気がつくはずである。
略奪したナキの『情報処理体（オプション）』をあらん限りの力で地面に叩きつけ、金髪のツインテールを逆立てながらプリプリ怒るカレンの姿が瞼の裏側に克明にイメージできてしまい、思わず表情が綻ぶ。
（そうだぜ、レビィ。お前はまだ死ぬわけにはいかねェんだ）
確かに、レビィは親から存在を破棄された。
本来は絶対に切れることのない絆を、簡単に拒絶された。
当時、幼かった彼女にとっては親など世界そのものだっただろう。
そんなレビィを拾った〈ブラックアウト〉だって、死んでも代わりの利く一つの道具くらいにしか思ってない。
（けどよ、それが全てじゃねェだろ。今のお前には怒ってくれる人がいる。悲しんでくれる人がいる。五臓六腑吐き出しそうな体を闇雲に引きずりながら、それでも助け出そうとしてくれてる仲間がいるんだ）
足を引きずりながら去ったカレンの、弱々しくも懸命に前進しようとする背を思い出す。
（思ってるほど、お前の世界は悪い方向に傾いてるわけじゃねェんだよ。だから、もう心のスイッチを切ってまで『頑なに世界と距離

を測るような真似』しなくたって良いんだよ、レビィ）

ナキは立ち上がる。

研ぎ澄ました瞳に確固たる意思が灯る。

体は汗と泥と血に塗れていたが、今は毛ほども気にならない。

炎の刃が貫通した腹部にさえ意識は向かない。

――どうして気づかなかったのだろう。大切なモノは、こんなにも身近にあったのに。

（さて。あの甘ったれた異能力者にも伝えなきゃならねェことがあるしな）

最終戦に向けて、少年は意気込むように一言。

「待ってろよ、レビィ」

13

pm　19：02

夜闇と静謐さに染まる教会の聖堂。
レト＝イジャスはその中央に鎮座する木目の台座に薄い影を落としていた。
教会と言っても、男女の壁画や鮮やかな虹色のステンドグラス、神聖な神々の像などで分かりやすく装飾した建物ではない。
外壁は巨大ハンマーにでも叩かれたかのように深くえぐられている。
天井はここからロケットか何かの試射実験があったのではないかというほど綺麗さっぱり筒抜け、今宵の星空を一枚の絵として正方形に切り抜いている。
白亜の床に視線を這わせれば、見たこともない凶暴な猛獣が練り歩いたとしか思えない爪痕のような傷が縦横無尽にほとばしっているのが窺えた。
それら全てが、ここで展開した戦争の惨状さを如実に物語っている。
教会は無残にも半壊していたのだ。
そもそも、廃止された街という呼称を受ける地に原形を留めたまま現存している建築物の方が稀であるため、この教会の有様だって何も不思議がることではない。
ここだって無慈悲な戦争によって被害を受けたその他大勢の一つだ。
生物の呼吸音が耳に障らないのが何よりの証である。
戦争が勃発した地からはどんな生物であっても例外なく近寄らな

い。

この愚かな霊長類以外の生命体は。

と、そんな余計な思考を脳内の脇に追いやりながら、レトは慎重な手つきで腕の中の少女を台座の上に預ける。

まるで寝かしつけた赤子を起こさないよう配慮する母親のように、慈愛に満ちた手厚さだった。

それからタバコを取り出し、ジッポーを失ってしまったことを思い出して足元の瓦礫を二つ手に取った。

科学が途方もなく進化したこの時代では滑稽なほど原始的な方法なのだが、そうそう馬鹿にはできない。

両手で摘まんだ瓦を近づけて軽く擦り、レトの右手の人差し指に安物ライター程度の火力が灯る。

熱がる様子もなく、レトはささやかに燃える指を口に咥えるタバコの先端に持って行った後、軽く払って消火した。

紫煙をくゆらせながら天を仰ぐ。

雲一つない夜の帳の向こう、星の瞬きと端っこの欠けた満月の温かな光がスポットライトのように降り注ぎ、虫の羽音さえ忘却した聖堂の台座上を淡く照らし出している。

自然の恩恵を全身で受け止めている灰色の髪の少女は、喜怒哀楽どの感情に触れているか分からない器用な表情で瞳を閉じている。

――酷似、していたのだ。

天使とも見紛うほどあどけない顔つきで意識を鎮めている、この少女が。

『仮定領域の世界』から抜け出すこともできないまま永遠の役目を課せられた、あの少女に。

「マリア……」

レトは力なくそう呟いた。

それは彼の弱音そのものにさえ聞こえた。

彼女――マリアと約束を交わしてから一〇年あまりの月日が経過している。

あれからがむしゃらに生きてきた。
貪欲に、やれるだけの努力も積み重ねてきた。
どれだけの犠牲を支払おうとも、たとえそれが夢のまま終わろうとも、何もかもを背負うことを覚悟した上で、レトはマリアをこの世界に引き戻すと決めた。
そのためならば他人の命さえ顧みない。
そして、その非道さならば手に入れた。
しかし、結局はどうすることもできなかった。
レトの中でマリアを『仮定領域の世界』から、こちら側の世界に『救済するための理論』はとっくに出来上がっていたはずなのに、少しでも繋がりのある試行実験ならば片っ端から実行に移したはずなのに、どれもこれも失敗に散り、有益な情報すら絞り取れなかった。
手のひらは赤く染まるばかりで、目の前には死体が重なるばかりで、まだマリアを『元の人間』に戻してやる糸口さえ見出せていない。
（それでも……）
台座上で浅い呼吸を繰り返している少女を、まるで聖母に祈りを捧げる信徒のような瞳で見下ろし、レトは思う。
それでも、マリアはまだあの約束を信じて待っていてくれているのだろうか。
身も心も良識なんて枠から外れてしまう前の自分と交わした、あの約束を。
そんな衝動にも似た言葉を喉の奥で押し留める。
そんな甘えを口にするには、レトは余りにも非力だった。
（……マリア、きっとお前の『対象救済（アカシックレコード）』で救われた自殺者――異能力者はたくさんいる。オレと同様、第二の人生をお前のために使っている奴は絶対にいる）
こちらの世界の自殺者を、あちらの『仮定領域の世界』に救い上げ、そこに咲く花を手渡すことで対象者に異能力を提供する。

それがマリアの異能力『対象救済（アカシックレコード）』だった。

では、マリア自身がこちらの世界に帰還し、マリア自身が救われる日は一体いつになったら訪れるというのだろう？

『仮定領域の世界』でならば『常しえに朽ちることない魂』を『人の概念から度外視された異形の体』に詰め込まれたマリアは、やはり比喩ではなく言葉通り、人類が滅亡しない限り半永久的に自殺者を救済し続ける。

つまり、マリアの『対象救済（アカシックレコード）』こそ、約一五〇年前に人類が初めて発掘した異能力だった。

『仮定領域の世界』に幽閉される前まで――

いいや、彼女の『対象救済（アカシックレコード）』に目が眩んだ人間たちの洗脳によって感情を抜き取られ、体の良い『異能力者生産機』に果てる前まで、マリアは異能力を有するだけの、こちらの世界で生きる人間の少女だったのだ。

反動は甚大だった。

マリアの脳を勝手に弄くり倒し、非人道的なコントロール方法で『対象救済（アカシックレコード）』を発動した負担は『暴走』という形で爆発し、世界中に動物たちさえ寄せつけない廃止（ウェイストランド）された街を穿った。

そして、マリア自身はこちらの世界からブラックアウトし、次元を超越したパラレルワールドへと墜ちたのだ。

以来、マリアはこちらの世界で自殺を意図して実行した人間を『対象救済（アカシックレコード）』によってランダムで選び出し、異能の力を咲かせる花を贈呈しては見送っている。

ただし、マリアは自身を救済することが叶わない。

マリアはその境遇を、自身の感情色を、孤独という言葉で示唆していた。

孤独はつらい。

独りはつらい、と。

シンプルに言えば、レトはその心に共感してしまったのだ。

〈ラビット・ランス〉の根城となる前、あの地下施設はネルフィー

ユ国政府直属のマッドサイエンティストたちが巣食う最低最悪の人体実験場だった。

当時一〇歳のレトは、戦争の孤児としてそこへ『強制搬送されたモルモット』だったのだ。

衛生という言葉から隔遠され、活発的な鼠が堂々往来する牢獄の中、何時この身にわけの分からない極太の管を通され、人体に有害としか思えない黄土色の液体を注ぎ込まれ、麻酔もされないまま皮膚を引き裂かれるのか怯えながら、あるいは政府が黙認する狂った科学者たちに選別された隣人たちの断末魔を鼓膜に刷り込まれながら、レトは耳を塞ぎ、瞳を閉ざし、膝を抱え、隣の牢獄で行われている残酷なモノを目撃しないように部屋の隅でただただ震えていた。

そこでレトは恐怖と孤独を知った。

頼るモノなどあるはずもなく、衰弱していったのは体よりも、むしろ精神の方が早かった。

与えられる食事が死なない程度には栄養を含んでいるだろうという微かな希望も、得体の知れない緑色の塊が出た時点で放棄していた。

様々な負の感情が相まって心と体がおかしくなった。

この先、生きていても自身の命に見込みがないことを悟ったレトは、廃人寸前の顔を無数の虫たちが蠢く天井に向けつつ――

その日、ついに決意した。

牢獄生活が始まり通算一九人目の断末魔が牢獄内に反響しているのを聞き流しながら、レトは自らの舌を噛み千切った。

久しぶりに咀嚼した肉の味は鉄まみれで最低だった。

血が足りなくなったのか、やがて視界が暗転し、魂を死神にでも吸い取られているかのように意識はゆっくりとブラックアウトした。

体が湯に溶けるような心地を覚え、五感という五感が世界を廃棄し、本当に何もかもが真っ暗になった。

まるで死後の世界のようだと思った。

誰かにそう言われても全然疑う気にはなれなかった。

地に足が着かないまま闇の中をフワフワと浮遊する意識で、レトがそんな漠然とした感想を描いた――

まさに、その時だ。

レトがマリアに出会ったのは。

どこまでもひたすらに続く、太陽も月も見当たらない星空の下。

地平線のように彼方まで眺望できる花畑の中心。

連続性のない広大な宇宙に放置された花のごとく、マリアはそこで一人、レトを待っていてくれた。

『やあ、少年。「仮定領域の世界」へ、ようこそ』

マリアは自身を幽閉するあの世界のことを『仮定領域の世界』と呼んでいた。

その語源は、『レトたちの生きる世界で異能力を酷使すると、法則同士の軋轢によって上手く発動しない』ため、そこに生じる矛盾を『仮定や前提といった概念で処理する』という、暫定的な思考から抜粋したものらしい。

『異能力を行使する理論』が、こちらの世界の物理的法則や質量保存の法則といった『自然界の常識を縛る法則』などと連結していないため、『双方の法則を違える矛盾を解消するために「仮定領域の世界」を利用してしまおう』というわけだ。

要するに、こちらの世界の法則に反して異能力が当然のように発動する根拠は、『仮定領域の世界』に矛盾という名の負担を全て送り込んでいるからだ。

『しかし、良いことばかりではないけれどね』

レトはマリアが言及していた言葉を頭の中で反芻する。

『そちらの世界を連鎖させている法則と、この花で咲かせた異能力の法則は異なる。だから、そちらの世界で異能力を発動することはパラドックスに値する。けれど、その矛盾はこちらの世界に一切合切雪崩れ込んでいるんだよ。結果的に、そちらで生じる世界の亀裂や負担、ストレスといったものは全てこの「仮定領域の世界」が背負い込んでいるというわけだね』

あの時。

こちらの世界で彼女が人間として生きていた頃の姿――体を『少女』という形で顕現していたマリアは、呪縛のような紋様が刻まれている白くて細い肩をすくめ、自身を皮肉るような調子で言っていた。

『分かるかい？　簡潔に言えばね、この世界だっていつかは重圧に耐え切れなくなってパンクしてしまうわけだよ。どの世界にも共通している概念は、つまり「有限」だ。何モノも時間を経ては朽ちていくし、行使すれば底が見えてしまうからね』

――そう。このボクを除いては、ね。

花弁のような微苦笑を思い出す。

『そうなった場合、死なない魂を持つボクがどうなるのか見当もつかないよ。この「仮定領域の世界」が死んでしまったら、本当にボクはどうなるんだろうね？　どうせなら死なせてくれるとありがたいな。できればボクも人並みに生きて、そして人並みに死んでみたかったけれど』

ギリギリッ、と。

一〇年も前に耳にしたマリアの言葉を一字一句間違うことなく想起する、レトの奥歯が激しく鳴った。

出会ってから別れるまでの間、マリアは一度たりとも『寂しい』と言わなかった。

あんな状況にいるべき人間こそ言葉にして良いはずの、『助けて』という音すら口にしなかった。

だから、もう。

そろそろ良いのではないだろうか。

何の罪もなければ受けるべき罰も持たないマリアが、あんな救われない風に当たり続けるのは、もう十分ではないか。

マリアが心の奥底で真に何を望んでいるのかは知らない。

人並みの生か、人並みの死か。

それなら、たとえ言葉や口調、声音に願望の破片が滲み出ていな

かったとしてもあんな辛そうな瞳の色をしているのなら、どうして神様は彼女も救ってやらないのだろう。

なぜ、彼女だけがあんなに苦しい思いをしなければならないのだろう。

多くの自殺者を救済して感謝されるべき人間は、ならばいつまで孤独の不死を演じなければならないというのか。

「だからこそ、オレは不在する神などに祈りはしない。今ここで、自らの手で、神さえ救うことのなかったマリアを救ってみせる」

転じて、レトの顔から悲痛の色が消えた。

無心にも近い表情で先の短くなったタバコの火から、その右手に三センチ程度の『炎のメス』を精製する。

レトは数時間ほど前にも『炎のメス』を形成し、目下の少女の手元に当てていた。

その時は少女の体表面上に『情報結界（アクセスフィールド）』が展開していたため、メスは不可視の防壁によって彼女の皮膚の一ミリほど手前で抑止されたが、そのシールドは完璧な素材ではない。

そのまま『炎のメス』を押し込み続けると耐久にダメージが蓄積し、やがてアイソトープ比率に比例する結界の耐久力は零に帰した。

少女の『情報処理体（オプション）』から青髪の少年や金髪ツインテールの少女、さらには〈ブラックアウト〉の本部にまで、現在地を伝達する信号が発信するのを懸念しての行動だった。

特にあの二人のブラックアウトが所持している『情報処理体（オプション）』と直結し、独自のローカルネットワークを介している場合は、公共の周波数とは異なるため本部との連絡路を遮断することは可能でも、そちらの妨害はこんな設備もないところでは困難を極める。

『情報結界（アクセスフィールド）』を無効化しただけでは、『情報処理体（オプション）』そのものは停止できないのだ。

よって、マリアをサルベージするための試行実験に一寸も手出しされたくないレトは、少女が左手首に装着していた機械をある程度まで解体するために――と言っても、中の構造が複雑かつ硬質過ぎ

てＳＯＩカードまでは辿り着けなかったのだが――真っ先に情報の結界を崩壊して何とか通信機能を滞らせたのである。
本来なら他人の腕の一本や二本焼き落とすことに躊躇いなどないが、実験前にこの少女の生身には傷の一つもつけたくなかったため、レトはその作業に全神経を注いだ。
その気苦労の甲斐もあり、今は情報によって結ばれる忌々しいシールドは働いておらず、純白な少女はレトの願った通り無傷のままだ。
（この実験に異能力的側面から観測した見解理論などない。言うなれば、単なる当て推量だ。根拠など皆無）
レトは少女の雪のように白い顔を見下ろしながら、これからの行為に対する逡巡の余地など見せない。
仮にあったとしても、この少女が絶命することにではなく、この実験の結果が『実に繋がらないこと』を杞憂してしまうからなのだろう。
（さて、先に壊れるのは精神の方だろう）
『炎のメス』を少女の細い喉元に近づける。
レトの第一試行実験が実証される。
（人間の体とは意外にも丈夫にできているからな）
患者を手術する医師のような動作で、レトは炎の刃を傾ける。
どんな硬い細胞さえも簡単に溶かしてしまいそうな、そんな赤い刃が少女の白い肌に突き刺さる。

∞　∞　∞

悲愁、だろうか。
目の前の情景を視覚化するだけで目の奥が酷い乾きを訴えていた。
その度に嫌厭の情がとぐろを巻く。
嫌忌する心が濁流するかのようにわたしの精神は、いよいよ体と摩擦するまで磨り減った。

腐敗した世界から自身を効率良く脱却させてあげる術を知らなかったわたしは、だから心を斜に構えて眼前の現実と距離を置くことにより、己の情緒を安定させていた。

それでも、当時幼かったわたしが精神を保護するために編み出し、張り巡らせたバリケードは至極脆かった。

それこそ肘で小突かれたくらいで地盤が緩むほど甘く、摩耗し切った穴だらけの壁だったのだ。

わたしは、わたしと金を天秤にかけて、わたしが上に持ち上がり、金が地に着いた了見を政府に持参した両親（あいつら）のいる、この世界が嫌いだ。

わたしは、血と肉と骨を貪り侵す人間臭い泥水と、本能と理性を豪遊する愚昧な生が無数に群がる、この世界が嫌いだ。

しかし。

わたしが何よりも誰よりも嫌悪感を抱いている対象は、『もう一人の自分』に仇視している世界を押しつけている、このわたし自身だ。

――二重人格――

愚かしいことにわたしは呼吸しているだけで反吐の出るこの世界から離脱するため、『もう一人の自分』を形成することに明け暮れた。

死ぬのは恐ろしかったのだ。

死ねば楽になる？

そんなこと誰が知っている。

死体がそう語るのなら信じる他ないだろう。

だが、生憎わたしはリビングデッドなどに興味をそそられたりはしなかった。

親に必要とされない、わたしが嫌だった。

無条件で誰からも愛してもらえない、わたしが嫌いだった。

そうしてわたしは拒絶を続けた。

他人を拒絶した。

温もりを拒絶した。
呼吸を拒絶した。
空気を拒絶した。
言葉を拒絶した。
同情を拒絶した。
愛情を拒絶した。
感情を拒絶した。
体を拒絶した。
精神を拒絶した。
過去を拒絶した。
現在を拒絶した。
未来を拒絶した。
生を拒絶した。
死を拒絶した。
見えるモノ全てを拒絶した。
拒絶した拒絶した拒絶した

わたしが殻の中に引き籠っている間――長い時には一週間、わたしの代わりにずっとずっと世界の汚れた空気に触れ続けてくれた。
素直に感謝した。
これでわたしの心は崩壊せず、生きていける。
両親（あいつら）の気持ちの悪い顔を思い出し、吐き気を催すことも少なくなる。
わたしの心は、ようやく救われたのだ。
と、心にも考えられる余裕ができたのだろう。
生きることが嫌だったわけではなく、死ぬことが恐かっただけのわたしは、〈ブラックアウト〉として戦闘時には彼女に力を貸すこともあった。
彼女はここぞという場面では力不足だったのだ。
そんな時には彼女と死の宣告（カウントダウン）を取って人格を交代する。
合図のようなものだ。わたしはそれなりに人を殺すことに長けているらしかった。
それは他人の命に対して躊躇いがないからだろう。
そして、引き金を引いて名前も知らない標的の心臓を撃ち抜く。
造作もないことだ。
条件としては何も悪くない。
この状況はわたし自身が望んでいた境遇なのだから。
そう、わたしが望んだこと。
それなのに――どうしてこうも満たされないのだろう？
『簡単なことだよ♪』
彼女の言った言葉の意味がピンとこなかった。
『あたしたちが試してないことがあるんだよ♪　あたしはそれに気がついたから、次はあなたが気づく番！』
一体何に気がつけと言うのだろう。
こんな粘土のように固まり切った思考回路で。
『ヒントは「あたしとあなたが他人じゃない」ってこと♪』
当たり前だ。

わたしと、もう一人のわたしは表と裏で表裏一体のようなものだ。
そこに連続性がないわけじゃない。
『だったら話は早いよね？　あたしたちは一人じゃないんだから♪』
――果たして、わたしの願望とは何だったのだろうか。
結局、わたしは何をどうしたかったのだろう。
それすら思い出せない領域まで至ってしまったということなのだろうか。
人間は強欲だ。
幸せの形を手にした途端、次の幸せに目が移る。
わたしは遅まきながらそれを知った。
気がつかないフリをしていた、というわけではない。
生きたかったのだ、きっと。
しかし、それはどうしてだろう。
死にたくないからという理由ではなく、わたしはどうして生きていたいのだろう。
――ああ、そうか。だからか。
瞬時の納得は違和感も齟齬も摩擦もなく、まるであるべき場所に回帰したかのようにすんなりと受け入れることができた。
違ったのだ。
そうではなかったのだ。
確かにわたしはこの世界が嫌いだ。
憎悪する。
その所思がどれだけ幼稚で魯鈍で甚だしいことなのかも承知の上でなお、わたしは言い切る。
人間の悪意がこびりついた、この世界が大嫌いだと。
けれど。
これだけ歪んでしまったわたしが、世界を愛する日は二度とこないかもしれないけれど。
それでも、彼の側にならいても良いかもしれない。
彼の隣になら背中を預けても良いかもしれない。

どうしようもなく冷え切ったわたしの心に、彼だけが――
ナキ＝エクイルドだけが凍死せずに、見捨てずに、温かい手を差し伸べてくれた。
こんな死の瀬戸際になって気がついた自分を愚かしくも思い、同時に褒めてもやりたかった。
わたしの錆びついた心は『まだ死にたくなどない』と涙ながらに叫んでいた。
わたしの願いは、『表となりつつある彼女』の願いでもある。
だからこそ。
だからこそ、こうして声は届く。

――わたしたちは、ここにいる。

∞　∞　∞

「……どうして、ここが分かった」
その一歩手前のことだった。
『対象元素（ブラックイコライズ）』で作り上げたレトのメスが、少女の声帯を奪い去る直前。
「『情報処理体（オプション）』のパルス機能を失い、腹に穴まで開けているお前が、あの地点からここまでくる時間をどうやって短縮させた？　応援が呼べたわけではないのだろう――ブラックアウト」
静止していたレト＝イジャスは、しかし驚きもせずに振り返る。
そこに立っていたのは間違いなく〈ブラックアウト〉。
体中をボロボロにした青髪の少年だった。

14

pm　19：03

「灯台もと暗しってか？　俺たちの情報網なめんなよ、『対象元素（ブラックイコライズ）』の異能力者」

少年はいやに達観的な態度だった。

「あれか、お前の目は節穴か？　俺のどこに風穴が開いてるって？」

ひょいっと、スーツの上着とインナーのシャツを捲り上げて横っ腹を晒す少年。

レトは我が目を疑った。

確かにそこには、おびただしい量の乾いた血が付着し、思わず視線を逸らしたくなるほどの痕跡が残っている。

だが、それだけだった。

槍で貫いたはずの穴が見事に塞がっているのだ。

（どういうことだ？）

レトは眉をひそめ、黙考する。

世界最先端の情報科学技術を独占する『理想郷（マリアリア）』の医療レベルならば、あの程度の損傷を完治させるくらい造作もないことだろう。

リビングデッドを再現するのは不可能だとしても、生きてさえいれば顔を色一つ変えないまま何でも治すようなところが『理想郷（マリアリア）』だ。

しかし、少年のその圧倒的な治癒力をそのまま当て嵌めるのは的外れだろう。

流石の『理想郷（マリアリア）』でもたったの数時間であれだけ深い傷を跡かたもなく帳消しにすることはできないはずだ。

ならば、とレトは『まさか』の方向に思考を寄せる。

（オレは知っている。あらゆる傷をなかったことにし、対象者を健

康体そのままにシフトさせる異能力を）

そうだ。

「お前――」

マリアの『対象救済（アカシックレコード）』は、

「――逢ったのか？」

自殺者の身体的な傷を全て治癒させた上で、元の世界に帰還させる能力ではなかったか。

青髪の少年は微笑を浮かべた。

それが答えだった。

彼は今、『情報処理体（オプション）』の機能を失った〈ブラックアウト〉の人間ではない。

レトと同じ領域に足を踏み入れたばかりの『異能力者』だ。

「なぜだ。どうしてお前がマリアに救済されている？」

声音こそ穏やかなものだったが、そこに込めた思いは度し難い。

いつでも他人を客観視してきた表情も、今は酷く歪んでいる。

明らかに冷静さが欠如していた。

まるで積年の恨みを晴らす復讐者のような顔でレトは睨み続ける。

対して、少年は意味ありげな微笑を口元に張りつけたまま、肩すかしを食らったかのような顔をして、

「要するにこういうことらしい。あのままじゃ俺はあんたに勝てなかった。それは紛れもない事実だろ？　実際あの場で俺は負けたわけだしな。仲間の増援もなし。あんたの力の在り方も理解できなかった。まさに大ピンチだったってわけだ。万事休す」

にも拘わらず、と少年はさらに口角を上げる。

「俺は果敢にもあんたに挑んでいった。仲間のためなら身を呈してでも、という覚悟くらいなら俺にもあったわけだ。その時だよ、気まぐれな『対象救済（アカシックレコード）』の検索に引っかかったのは。あんたに横っ腹刺された瞬間、俺――ナキ＝エクイルドは自殺者に認定されたんだ。『新米ブラックアウトが仲間のために己の命すら顧みず、異能力者レト＝イジャスに立ち向かうのは自殺行為だ』という詭弁だらけの

理由でな」

思考は空白になり、レトは絶句する。

おそらくこの少年――ナキ＝エクイルドの視界は、レトが背後から彼の腹部に『炎の槍』を突き刺したあの時あの場所で塞閉し、しばらくの間は重力から解放された空間に魂だけが漂っていたはずだ。

曖昧な形のまま生温かい心地良さに無心で浸かっていると、急に足の裏に質量を感じる。

気がつくと着地していた。

突然失ったはずの体が形成し、魂は元の箱に固定する。

そして驚きと共に新鮮な感覚を噛みしめながら、ゆっくりと瞼を開く。

すると、そこに広がった世界は――

「ああ、見事な花畑だったよ。上は夜空なのに、地上は昼間かと思うくらい明るい。どこを見ても太陽も月もねェし、呼吸の動作はできるが、酸素があるのかどうかも怪しい。だが、俺は首を捻ることはしなかった。幽体離脱みてェな体験をしたってのに、俺はその奇怪な事象に一切の疑問を抱かなかった。まるで手から林檎を落とせば重力に従ってそれが落下することのように、光に身を晒せば足元に影が生じることのように、その出来事を当然のように受け入れた」

ナキは苦笑混じりの声でつらつらと言葉を続ける。

「信じざるを得なかったよ、説明不可能な異能の力を。自分が使えたんだからな。まあ目覚めた時は強烈な違和感に蝕まれて、俺の頭はとうとうイカれちまったのかと本気で疑った。何せ『あっちの世界で過ごした一時間』が、『こっちの世界で過ごすコンマ一秒』にも満たねェんだからよ？　最初も思うように発動してくれなかったが、ここに到達するまでの間にかなり要領を得た」

こちらの世界と『仮定領域の世界』の時間軸の間に大きな隔たりがあることは知っている。

レト自身も、この世界の時間軸で換算すると、あの世界で一ヶ月以上も過ごしていたことになる。

そして、こちらの世界に帰還した時点では、レトが舌を噛み切ってからまだ一分も経過していなかった。
マッドサイエンティストたちの実験台にされていたモルモット仲間の絶叫が変わらず鳴り響いていたから。
「お前は……」
ふいに、レトの唇からヒビ割れた音が漏れた。
「お前は……何も感じなかったのか。『仮定領域の世界』で彼女と……マリアと一時間近く過ごしたのだろう？」
一点に定まらないままフラフラと空中を彷徨うレトの視線。
ああ、と少年から虚しいだけの首肯が届くと、
「ならば、どうしてお前は冷静でいられる」
無意識の内にレトは奥歯を噛みしめていた。
マリアは自殺者を救済する。
もう一度、この世界で自殺しない生き方を見つけてもらうために。
もう二度と、そんな最悪な終焉を歩ませないために。
課せられた役目など関係なしに、ただ自殺者が幸せになってもらうことを願って。
――ふざけるなと言いたかった。
レトは怒りに身を委ねるように、胸につっかえていた何かが瓦解していく音を聞いた。
「自身があんな籠に放り込まれたことは棚に上げ、それでもマリアはこんな腐った世界も捨てたものではないと言ったんだ。では、どうすれば彼女自身が救われると言うのだ。オレはマリアの『対象救済（アカシックレコード）』によって救われた。もう一度、生きる目的を持つことができた。それが――」
「それが、マリアをこの世界に帰還させることなんだろ？」
ナキの憐れみに言葉を先回りされ、それがレトの心の奥底にずっと潜ませておいた脆い感情を遠慮なくえぐった。
そうだ。
分かっている。

これは全てたった一人の本懐に過ぎない。
傲慢で、相手の意向を無視した、自己満足のための願望。
そこには良心の呵責など介入していないのかもしれない。
しかし、それを踏まえた上での決意だ。
それこそ誰を敵に回しても構わない信念があると自負している。
本末転倒かもしれないが、たとえ、その敵が救済対象であるマリアであったとしても。
「あんたの計画はこうだ。まず異能力を一層高めるために世界三大反政府組織の〈レイジス・コア〉に所属する。別に〈マター〉や〈ゲリアル〉でも良かったんだろうが、手っ取り早く契約をこぎつけられたのが〈レイジス・コア〉だった。その目的はつまり、マリアを救済した時のための保険だ」
ピクリ、とレトの眉根が動じる。
「大きな組織にマリアを匿ってもらうため、あんたは自ら〈レイジス・コア〉の重役を狙いにいった。おおよそ自分を駒として使役する代わりに、マリアを救った時は他組織から保護しろ、か？　結果は見事に成功。マリアを救済するための下準備は整ったわけだ」
だが、
「肝心の救済ルートを確保することができなかった。試した実験はどれも失敗。蓄えておいた理論や手段も底が見え始めていた頃……」
ナキの視線がレトの背後、木目の台座で横になっている少女に移る。
「マリアの容姿と酷似するレビィに出会った。あんたはそこで即席の実験を思いついたんだ。そして全知識をフル稼働し、レビィの体を通じてマリアをこの世界に帰還させようとした」
正解だった。
たんに灰色の髪の少女がマリアに似ていたから。
ただそれだけの薄い希望的観測のためだけに、この少女は死んだ方がマシだと思えるくらい酷い実験をされる。
数え切れないほどの人間たち（モルモット）が流した血を吸い込

んだ、この手によって。
しかし、だ。
しかし――何故お前がそのことを知っている？
「ボクが教えたからだよ」
刹那、レトの体感時間は凍ったに等しかった。
衣擦れする微細な音を連れ添い、背後で何者かが立ち上がる気配を感じた。
「ボクがナキに異能力を咲かせ、渡すついでに色々と教えたんだ。君が語ってくれた計画の内容を」
胸が締め上がり、呼吸することさえ忘れてしまうほど、それはとても懐かしい声だった。
「良いかい、レト。ボクはいつでも君のことを見守っていたんだ。だからね、きっと寂しくはないんだよ。何故ならボクはいつでも君の側にいるようなものだからね」
レトは振り返ることができなかった。
一〇年の間も焦がれ、求めていた存在がそこにあるかもしれないのに、この目で直視した直後、夢のように消えてしまうような気がして、どうしても踵を返せなかった。
それほど、あれはレトにとって儚い存在だから。
「君は君の幸せのために生きなければならないよ。いつまでもボクという七曲がりも八曲がりもした紆余曲折の存在に捕らわれていてはいけない。ボクはどうあっても君の幸せになれはしないんだからね」
それは間違いなくマリアの言葉だった。
冷たく突き放すようでいて、実はその裏側に潜ませる確かな温もりを敢行する少女のそれを、あれだけ待ち望んでいたレトが聴き間違えるはずがなかった。
それだけで心が濡れ、頬を垂れた。
視界が滲む。
こんな惨めな顔を見られたくなくて、俯く。

「けれど、ありがとう」
塞ぎかかっていた耳の中に、湿りけのある彼女の声音が深く、深く響き渡った。
「こんなボクのために生きてくれて。こんなボクのことを忘れないまま、必死にそちらの世界に連れ出そうとしてくれて。それだけでボクは十分に救われた気分だよ、レト」
レトは嗚咽をかみ殺し切れず、
「マリア！！」
振り返る。
そこには――
そこには、夜の優しい光に包まれながら台座に寝かされている少女の姿しかなかった。
やはり夢は夢で、幻想は幻想でしか触れることが許されていないのだろうか。
それとも、もう少し早く勇気を出して振り向いていれば、彼女の姿を目にすることができたのだろうか。
「あんた、何故この場所が分かったかって訊いたよな？　答えは簡単だ。マリアが教えてくれたからだ。ここは、マリアの『対象救済（アカシックレコード）』が咲いた場所なんだろ？　同時に、暴走した場所でもある。あんたはここを原点とし、レビィの体を媒介にマリアをサルベージしようとしたんだ。……もしかしたら、今その試行実験が奇跡的にこっちの世界と『仮定領域の世界』を繋いだのかもしれねェな」
後方から慰めにもならない言葉がかかった。
レトは頭を垂れたまま覚束ない足取りでナキに体を向ける。
「お前は……お前はマリアを見て、助けたいとは思わなかったのか？　可能か不可能かではなく感情論で、お前はマリアを何とかして元の人間に戻してやりたいとは思わなかったのか？　――その能力を殺してやりたいと」
異能力者の亀裂の走る声にナキはこう応じる。
「ハッ、言っただろうが。俺は善人じゃねェんだよ。困ってる奴ら

全員に手ェ出してフラグを立てちまうほどの度胸も覚悟もねェんだからよ」

だからこそ、この少年は守ると決めた者だけは何が何でも守り通す。

ならば話は早かった。

「そうか。そうだったな」

それは、レトとて同じことなのだから。

「ならば、お前はこれからオレの八つ当たりに遭遇するだけだ」

「……殺し合う前に一つだけ、お前に最後の希望を提示してやる」

「希望だと？」

「マリアの永遠を殺す思考法。マリアの無限性を否定する論法。その可能性だ」

「たった今、異能者になったばかりのお前が、どんな戯言をのたまうつもりだ」

「……やってみろ」

「お前が求めている命題の真は『マリアの有限性』だ。『マリアが永遠、異世界の囚われの身ではない』ことを証明したい。そいつを背理法で否定するわけだから、『マリアの命は永遠だ』と仮定することになる。『マリアは永久的に異世界で生きなければならない』。だがよ、マリアは人間なんだろ？」

「それが、どうした」

「始まりがあるもんには、終わりがある。本当にマリアが永遠なら、過去に対しても永遠でなくちゃならねェんだよ」

分かるか？　とナキは言った。

「無限ってのは、過去に未来にも永遠に続いてなくちゃ、意味ねェだろ？　どっちかに有限があるなら、そいつはもう無限じゃねェ。有限だ。そして、マリアには始まりがある。過去に有限を持っている」

以上の矛盾によって、『マリアは永久的に異世界で生きなければならない』という仮説は否定される。
「なるほど、面白い考えだ」
レトはくだらなそうに、
「で、言いたいことは終わりか？」
「ああ、あとは俺たちが殺し合えばおしまいだぜ」

ナキ＝エクイルドの『対象変換（エナジーエフェクト）』。
レト＝イジャスの『対象元素（ブラックイコライズ）』。
マリアから花を託された二人の異能力者は、近似していながらも決して交わることのない動機を胸に添え、平行線のまま衝突する。
「分かりやすく言えば、『水資源あるところに生命は息づく』という方法論だ」
レトは一瞬にして、暗澹たる影を伸ばす教会聖堂内に軍勢を敷いた。
「オレの構築した手持ちの理論では、まだ水素を爆物に変換させるまでの根拠も整えていないからな。『酸素と水素で構築した水分を奴隷人形にする』くらいのことしかできない」
ナキの目分量だが一二〇前後と言ったところか。
安易な人海戦術でも図るつもりなのかどうかは知らないが、言うまでもなくそいつらは人ではない。
武器も防具も兵器すら装備していない、まるで形骸化した人型スライムのようだった。
それがナキを取り巻くようにして形成しているのである。
その行程は水の滴が空中分解する映像を逆再生するかのようで、彼らはすぐさま人の形を固定する。
そうして、意思を持たない水素材の人形たちが聖堂にところ狭しと並んだ。
あるのかどうかも分からない瞳の矛先は、中央に佇むたった一人

の少年に向いている。
「踊れ」
主の言葉を引き金に、水の下僕たちは人形のように一斉に舞う。
一〇〇以上の群れをなし、洪水さながらの凄まじさで目標へ肉薄する。
だが、これだけの奇妙な現象と圧倒的な数を前にしても、ナキの膝が笑うことはなかった。
むしろ、その双眸に些細な動揺が走った理由は、まさしくナキさえも予期していなかった状況の変化に対してだった。
ガシャン、という耳をつんざく炸裂音が聖堂内に木霊した。
埃まみれのグズグズになりながらも懸命に月明かりを吸い込んでいた教会のステンドグラスが派手に割れ、細切れになった破片が雨のよう降り注ぐ。
その中でメイド服を着た何者が、まるで特殊部隊のワイヤーアクションのように手慣れた様子で教会内に侵入してきた。
「カレン様より二、三ほど伝言がございますゆえに」
謎のメイドは細い両腕にガトリングガンにしか見えない黒い銃器を携えつつ、〈ブラックアウト〉よろしく綺麗なフォームでナキの背後に着地すると、
「あんなふざけた芝居をこなす器用さがありながらの不器用さは何なのよむかつくわ死んだら殺すから覚えておきなさい死ね死ね死ねとのことでございますゆえに」
「コ、ココア！？」
ダダダダダダダダダダダダダダダダッ、と。
半眼の瞳に一心不乱な色を織り混ぜながら、ココア＝アロイストローネはスライム兵士たちの集団に鉛の豪雨を次々と撃ち込む。
弾丸が直撃する度に水が爆ぜる轟音が生じ、水資源の人型は破裂して床へと溶ける。
「お前、何でここに！？」
「大体の事情はカレン様より聞きました。しかし、今は互いの詮索

をしている暇はございませんゆえに。行って下さい、ナキ様」
「いや、だけど」
「おや、もうお忘れになりましたかナキ様。わたくしはただのメイドではございませんゆえに」
ココアは乱射する弾の行く先から数ミリ単位で顔を逸らし、ナキを見つめて、
「――私は〈ブラックアウト〉仕様の戦闘訓練を受けたプロのメイドよ、ナキ＝エクイルド。機械には不可能な『主人のために闘う』という役割を演じるための存在。単なる盾では終わらない。だからあなたも守って見せなさい。大切な人が、もうそこにいるんでしょう？」
はにかむような表情を、ほんの一瞬だけ見せてくれた。
「――バックアップはわたくしにお任せを」
二秒後には、いつもの無表情無着色の仮面を被り直したメイド。
ナキがキョトンとしたのは、ほんの僅かな時間だ。
後は、ココアの言葉に背を押されるようにして、
「悪い」
瞬の迷いを拭い取り、前へと足を踏み出す。
疾走。
青く蠢く軍勢のど真ん中を掻き分けるように走る。
その先に赤いスーツに身を包んだ異能力者、レト＝イジャスがいる。
ただし、ナキの意識自体はその少し奥で瞳を閉じたままの少女にある。
「ナキ＝エクイルド。お前の体に補完された異能の力を見せてみろ」
レトがその手に『炎の大剣』を精製し、ナキに対敵した。
剣を象る炎が嵐の日の大海原のように強く波を打ち、その火力の大きさを強く物語っている。
だが、そのインパクトに騙されてはいけない。
あの炎はレトが刀身を知覚するための飾りだ。

獲物に属性を持たせるための外装。
芯に存在する『窒素』の周囲を燃やし、剣やランスに見立てているに過ぎない。
対するナキは武器の一つも持たず、それどころか情報の結界も情報パルスも回流していない生身の体でひたすら洪水の中を駆けた。
ドバンッ、と海の上で巨大な生き物が跳ね返るような音が何度も何度も木霊する。
脇見も触れないのは信頼によるものだった。
ナキに襲いかかろうとして迫る水の兵士たちが、飛来する弾丸によって片っ端から消去されている。
ココアの援護射撃は完璧だった。
（ああ、八つ当たりだろうが何だろうが構わねェよ）
水人形の蒸発する絶叫と、ガトリング砲から放射される轟音が教会内で入り乱れる。
（俺はそれをマリアから頼まれたんだからな！！）
二人の咆哮が重なった。
双方の距離は、もう三メートルもない。
互いの影は躊躇いを捨てて、やがて交差する。
石のように硬く握りしめたナキの拳が、レトを射程内に捕らえる。
業火を持て余すように燃え盛るレトの炎の刃が、ナキの首筋に触れる。
ほぼ同時のことだったが、僅かにレトの方が早い。
コンマ数秒も過ぎればナキの頭は胴体から自立する。
――そのはずだった。
「ッ！？」
勝敗は、本当はこの時点ですでに決まっていたのかもしれない。
ズズッ……、と。
何か質量のあるものを砂利の上で引きずるような音が聞こえた。
その不可解な音源はナキの首元から、つまり『炎の大剣』の切っ先から流れている。

そして、レトが振るった『炎の大剣』は突然、その形状を維持できなくなった。
大剣を象る猛炎はナキの首根に触れるか触れないかの直前、まるで何かの引力が働いて吸収されるかのように不規則に渦を巻き、果てには独りでに霧散したのだ。
本当に今までの非日常が嘘だったかのように、あっさりと。
目を大きく剥き、自身の手のひらを見つめるレト＝イジャス。
顔を上げ、ナキを睥睨する異能力者。
しかし、体を硬直させたままの、『仮定領域の世界』からマリアを救済することに第二の人生全てを懸けた、人間。
その間隙を突く。
ナキの拳が爆発的に加速する。
一刹那の空白で彼は思う。
こいつだけには絶対に同情してはいけない。
指の隙間から砂のように抜け落ちた手応えのなさに対し、驚きの声を上げさせる暇など与えてはいけない、と。
こうして一秒にも満たない、その後。
正義でも何でもなく単に『絆を守りたい』という信念が隅々まで染み込んだナキの拳が、レトの積み重ねてきた願いごと、その頬を打ち砕いてしまった。

この夜。
一人の願望はここに届き、もう一人の願望はそこで閉ざされた。
それは傍から見ていて、まるで天秤のようだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6132z/

【キセキ＝シリーズ】

2011年12月24日02時11分発行